兵庫県文化財調査報告　第200冊

三田市

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ

下西山遺跡

２０００年

兵庫県教育委員会

三田市

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ

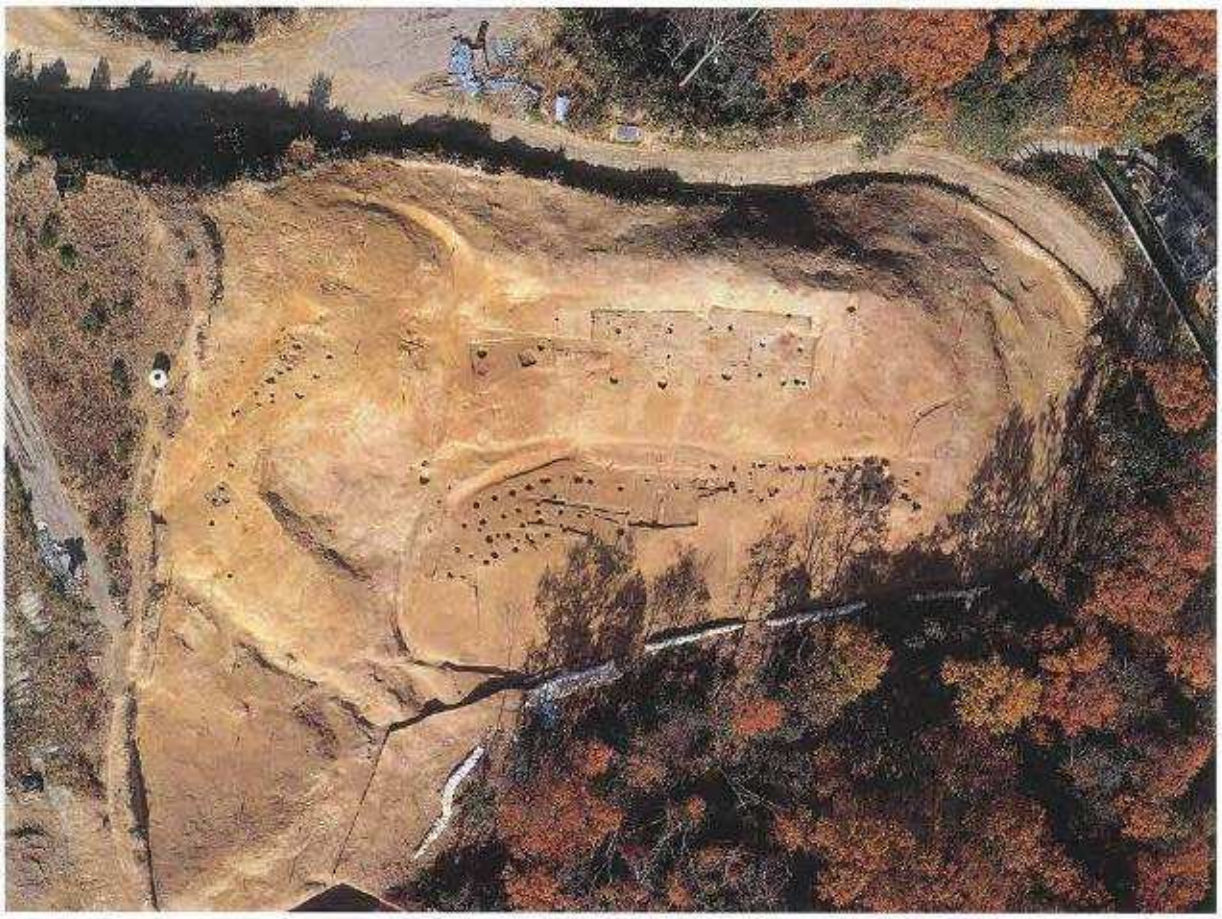
下西山（しもにしやま）遺跡

２０００年

兵庫県教育委員会

1．ウッディタウンと下西山遺跡

2．下西山遺跡全景



3．北地区全景

4．北地区SD2

5．北地区SK 2

6．北地区SK 2 出土土器

7．北地区SX３

8．北地区SK４

例　　言

1．本書は三田市けやき台に所在する下西山遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）が開発する北摂地区新住宅市街地開発事業（中央地区）に伴う調査である。

3．本調査は、兵庫県教育委員会が都市基盤整備公団（旧住宅・都市整備公団）からの依頼を受けて、昭和63年以前は社会教育文化財課が、平成元年以降は埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅳ系）の座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした海抜高度である。

5．本書の編集は柏原の補助を得て、篠宮がおこない、第５章第１～３節の他は篠宮が執筆した。

6．自然科学分野については、

第５章第１節は広岡公夫氏・石塚　聡氏（富山大学理学部地球科学教室）が執筆した。

第５章第２節は肥塚隆保氏（奈良国立文化財研究所）の指導のもと岡本が、第３節は高妻洋成氏（奈良国立文化財研究所）と岡本が共同執筆した。

7．現地調査および報告書作成において、石塚　聡・片山一道・川村慎也・高妻洋成・肥塚隆保・寒川　旭・高島信之・田中賢人・中井秀樹・菱田哲郎・広岡公夫・深澤芳樹・望月精司・毛利光俊彦・山崎敏昭の各氏に御世話になった。

8．発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管・管理している。

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ

下西山遺跡

巻頭図版
例言

目次

第1章　調査に至る契機と経過 …… 1
第1節　調査に至る契機 …… 1
第2節　北摂ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財の対応 …… 2
第3節　中央地区の調査経過 …… 3
第4節　出土品整理の経過 …… 5
第5節　下西山遺跡の調査経過 …… 6

第2章　遺跡をとりまく環境 …… 9
第1節　地理的環境 …… 9
第2節　歴史的環境 …… 9

第3章　発掘調査の成果 …… 12
第1節　調査の方法と地区の設定 …… 12
第2節　基本層序 …… 12
第3節　南地区の調査 …… 13
第4節　北地区の調査 …… 14

第4章　出土遺物 …… 24
第1節　出土遺物の概要 …… 24
第2節　土器類 …… 24
第3節　金属器類 …… 31
第4節　石器 …… 34

第5章　自然科学的調査の成果 …… 35
第1節　下西山遺跡の考古地磁気学的研究 …… 35
第2節　下西山遺跡出土の銅製品の分析 …… 48
第3節　下西山遺跡火葬墓内の炭化物の樹種同定 …… 50
第4節　小結 …… 52

第6章　まとめ …… 53
第1節　下西山遺跡の検討 …… 53
第2節　北摂ニュータウン中央地区内の遺跡の検討 …… 66

別表
報告書抄録
図版
写真図版

巻　頭　図　版

巻頭図版１　１．ウッディタウンと下西山遺跡／２．下西山遺跡全景
巻頭図版２　３．北地区全景／４．北地区SD２
巻頭図版３　５．北地区SK２／６．北地区SK２出土土器
巻頭図版４　７．北地区SX３／８．北地区SK４

図　　版

遺構

図版１　１．兵庫県の位置／２．三田市の位置
図版２　３．遺跡の位置（1/200,000）「京都及大阪」／４．遺跡の位置（1/50,000）「三田」
図版３　５．周辺の主要遺跡（1/50,000）「三田」
図版４　６．事業地周辺の変化　明治19年（1/25,000）「三田」「古市村」
　　７．事業地周辺の変化　昭和47年（1/25,000）
図版５　８．事業地周辺の変化　昭和63年（1/25,000）「三田」「古市」
　　９．事業地周辺の変化　平成８年（1/25,000）「三田」「古市」
図版６　10．事業地内の遺跡（1/10,000）
図版７　11．旧地形と調査区位置（1/2,500）
図版８　12．確認調査と全面調査位置（1/600）
図版９　13．遺構全体（1/600）
図版10　14．平坦面Ａ、SD１（1/150）／15．平坦面Ａ立体土層
図版11　16．17．18．平坦面Ａ土層断面（1/80）／19．SD１土層断面（1/80）
図版12　20．平坦面Ｂ上層地形（1/200）／21．平坦面Ｂ下層地形（1/200）
図版13　22．23．平坦面Ｂ土層断面（1/100）
図版14　24．斜面③遺構配置（1/200）／25．SK１平面・土層断面（1/80）
　　26．SK９平面・断面（1/80）
図版15　27．SH１平面・断面（1/80）／28．SK10平面・断面（1/30）
図版16　29．北地区遺構全体（1/300）
図版17　30．31．32．33．北地区断面（1/300）
図版18　34．35．北地区断面（1/300）
図版19　36．37．SD２土層断面（1/50）／38．SD２・SX７土層断面（1/50）
図版20　39．SD２平面・断面（1/50）／40．SD4土層断面（1/40）
　　41．SK７平面・土層断面（1/20）
図版21　42．SK11平面・土層断面（1/80）／43．SH８平面・土層断面（1/80）
　　44．SK３平面・土層断面（1/40）
図版22　45．SK２土器出土状況（1/15）
図版23　46．SK２土器出土位置
図版24　47．SH５平面・断面（1/80）／48．SH５竈平面・土層断面（1/40）
図版25　49．SH３平面・断面（1/80）
図版26　50．SH４平面・断面（1/80）
図版27　51．SH６平面・断面（1/80）／52．SH４竈平面・土層断面（1/40）
　　53．SH３竈平面・土層断面（1/40）
図版28　54．SX３平面・断面（1/10）／55．SK４平面・土層断面（1/20）
図版29　56．SB１平面・断面（1/80）
図版30　57．SB２平面・断面（1/80）／58．SH13平面・断面（1/80）
図版31　59．SH９平面・断面（1/80）／60．SH９竈平面・土層断面（1/40）
図版32　61．SH11平面・断面（1/80）／62．SH14竈平面・土層断面（1/40）
　　63．SH10竈平面・土層断面（1/40）／64．SH10中央焼土平面・土層断面（1/40）
図版33　65．SH14・SH10平面・断面（1/80）

図版34　66．SH12平面・断面（1/80）／67．SH12竈平面・土層断面（1/40）
図版35　68．SK12平面・土層断面（1/30）／69．SK13平面・土層断面（1/20）
　　70．SK８平面・土層断面（1/40）
図版36　71．SX４平面・断面（1/40）

遺物

図版37　斜面③地区出土土器（１～22）
図版38　SD１・５・２・４出土土器（23～56）
図版39　SK２出土土器（57～114）
図版40　平坦面C・斜面④出土土器（115～138）
図版41　平坦面D地区・SH12出土土器（139～171）
図版42　平坦面D出土土器（172～203）
図版43　平坦面D・E、斜面⑦出土土器（204～208）
図版44　平坦面E地区出土土器（209～235）
図版45　平坦面E出土土器（236～265）
図版46　平坦面E出土土器（266～299）
図版47　平坦面E・斜面⑧出土土器（300～332）
図版48　斜面⑧出土土器（333～354）
図版49　金属器１（401～417）
図版50　金属器２（418～437）
図版51　鉄滓（438～451）
図版52　石器１（501～510）
図版53　石器２（511～516）

写　真　図　版

遺　構

〔下西山遺跡〕

写真図版１　１．遠景（南東上から）／２．調査前全景（東上から）
写真図版２　３．調査地全景（東上から）／４．調査地全景（西上から）

〔南地区〕

写真図版３　５．全景（東上から）／６．斜面③全景（北東上から）
写真図版４　７．平坦面A調査前（東から）／８．平坦面A（西から）／９．平坦面A（西から）
写真図版５　10．平坦面B調査前（西から）／11．平坦面B（西から）／12．平坦面B（南西から）
写真図版６　13．斜面③（南西から）／14．斜面③（北から）／15．斜面③（北東から）

〔北地区〕

写真図版７　16．全景（南東上から）／17．全景（東上から）
写真図版８　18．下層全景（南上から）／19．下層全景（上から）
写真図版９　20．SD２（南から）／21．SD２・SX７土層断面（南から）
写真図版10　22．SD２（南から）／23．SD２細部（南から）／24．SD２細部（南から）
写真図版11　25．SD５（東から）／26．SD４（南東から）／27．SD４土層断面（南東から）
写真図版12　28．平坦面C（南から）／29．平坦面C・斜面⑤（南東から）／30．SX７（南東から）
写真図版13　31．SK11（南から）／32．SK３（南西から）／33．SK７土層断面（南から）
写真図版14　34．SK２（北から）／35．SK２土器出土状況（東から）
　　36．SK２土器出土状況（北から）
写真図版15　37．平坦面D・E（西から）／38．平坦面D・E（南西から）
　　39．平坦面C・D・E（東から）
写真図版16　40．平坦面D（西から）／41．SH５（東から）／42．SH５竈（東から）
写真図版17　43．SH３（東から）／44．SH３遺物出土状況（東から）／45．SH３竈（東から）
写真図版18　46．SH４（西から）／47．SH４（東から）／48．SH４（南から）
写真図版19　49．SH６（東から）／50．SH６（南から）／51．SH６北東主柱穴（東から）

写真図版20　52．SX３検出状況（南から）／53．SX３断面（南から）／54．SX３完掘（南から）
写真図版21　55．SK４上層（北西から）／56．SK４中層（西から）／57．SK４下層（東から）
写真図版22　58．SH９・10・14（南西から）／59．SH11（南東から）／60．SH11竈（南から）
写真図版23　61．SH10・14（南から）／62．SH10竈（南西から）／63．SH10中央焼土（西から）
写真図版24　64．SH９・10・14（南から）／65．SH９（南から）／66．SH９竈（南から）
写真図版25　67．SB１・２（北から）／68．SB１・２（東から）／69．SB１（南東から）
写真図版26　70．SK12（南から）／71．SK13（東から）／72．SK８断面（東から）
写真図版27　73．SX４（北から）／74．SX４（西から）／75．SX４断面（北から）

遺　物

写真図版28　土器１　斜面③
写真図版29　土器２　斜面③
写真図版30　土器３　SD１・５、斜面②・③
写真図版31　土器４　SD５
写真図版32　土器５　SD４、斜面⑥
写真図版33　土器６　SK２坏G蓋
写真図版34　土器７　SK２坏G蓋
写真図版35　土器８　SK２坏G蓋
写真図版36　土器９　SK２坏G蓋内面
写真図版37　土器10　SK２
写真図版38　土器11　平坦面C、斜面④
写真図版39　土器12　SD２、平坦面C
写真図版40　土器13　平坦面C
写真図版41　土器14　SH５・６、SK４、SX３
写真図版42　土器15　SH４・３、平坦面D
写真図版43　土器16　平坦面D、斜面⑦
写真図版44　土器17　平坦面D、斜面⑦
写真図版45　土器18　SH13・14
写真図版46　土器19　SH９・10・12、SK５
写真図版47　土器20　平坦面E、斜面⑧
写真図版48　土器21　SX７、平坦面D・E、斜面⑧
写真図版49　土器22　平坦面E、斜面⑧
写真図版50　土器23　平坦面E、斜面⑧
写真図版51　土器24　平坦面E、斜面⑦・⑧
写真図版52　土器25　平坦面E、斜面⑦・⑧
写真図版53　金属器１
写真図版54　金属器２
写真図版55　鉄滓
写真図版56　石器１
写真図版57　石器２
写真図版58　人骨

挿　図　目　次

第１図　下西山遺跡の焼土の考古地磁気測定結果と西南日本版考古地磁気永年変化曲線 ……47
第２図　銅製品全体像と測定個所 ……48
第３図　蛍光X線定性分析スペクトル ……49
第４図　SX３出土木炭の顕微鏡写真 ……51
第５図　平方窯・下西山遺跡　坏H・坏G口径 ……54
第６図　下西山遺跡出土須恵器坏の変遷および下西山遺跡・平方遺跡の遺構変遷 ……56

第７図　火葬墓ＳＸ３の遺地 ……60
第８図　北地区　地形と遺構 ……63
第９図　北地区　地形復原 ……64

表　目　次

第１表　下西山遺跡の考古地磁気試料番号 ……36
第２表　下西山遺跡SH５竈のNRMの磁化測定結果 ……38
第３表　下西山遺跡SH５竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……38
第４表　下西山遺跡SH５竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……38
第５表　下西山遺跡SK４のNRMの磁化測定結果 ……38
第６表　下西山遺跡SK４の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……38
第７表　下西山遺跡SK４の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……38
第８表　下西山遺跡SH３竈のNRMの磁化測定結果 ……39
第９表　下西山遺跡SH３竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……39
第10表　下西山遺跡SH３竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……39
第11表　下西山遺跡SH４竈のNRMの磁化測定結果 ……39
第12表　下西山遺跡SH４竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……39
第13表　下西山遺跡SH４竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……39
第14表　下西山遺跡SH６床面焼土のNRMの磁化測定結果 ……40
第15表　下西山遺跡SH６床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……40
第16表　下西山遺跡SH６床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……40
第17表　下西山遺跡SH12竈のNRMの磁化測定結果 ……40
第18表　下西山遺跡SH12竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……40
第19表　下西山遺跡SH12竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……40
第20表　下西山遺跡SH10竈のNRMの磁化測定結果 ……41
第21表　下西山遺跡SH10竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……41
第22表　下西山遺跡SH10竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……41
第23表　下西山遺跡SH10床面焼土のNRMの磁化測定結果 ……41
第24表　下西山遺跡SH10床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……41
第25表　下西山遺跡SH10床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……41
第26表　下西山遺跡SH９竈のNRMの磁化測定結果 ……42
第27表　下西山遺跡SH９竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……42
第28表　下西山遺跡SH９竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……42
第29表　下西山遺跡SH13床面焼土のNRMの磁化測定結果 ……42
第30表　下西山遺跡SH13床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……42
第31表　下西山遺跡SH13床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……42
第32表　下西山遺跡SH11竈のNRMの磁化測定結果 ……43
第33表　下西山遺跡SH11竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……43
第34表　下西山遺跡SH11竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……43
第35表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土のNRMの磁化測定結果 ……43
第36表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果 ……43
第37表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果 ……43
第38表　下西山遺跡の考古地磁気測定結果 ……44

別 表 目 次

別表１　北摂ニュータウン中央地区遺跡一覧(1)
別表２　北摂ニュータウン中央地区遺跡一覧(2)
別表３　下西山遺跡遺物一覧(1)
別表４　下西山遺跡遺物一覧(2)
別表５　下西山遺跡遺物一覧(3)
別表６　下西山遺跡遺物一覧(4)
別表７　下西山遺跡遺物一覧(5)
別表８　下西山遺跡遺物一覧(6)
別表９　下西山遺跡遺物一覧(7)

第1章　調査に至る契機と経過

第1節　調査に至る契機

北摂ニュータウン（現在、北摂地区新住宅市街地開発事業）は、六甲山系北方に広がる三田盆地西北部の丘陵上に昭和44年に計画された。

大阪、神戸を中心とする周辺地域の宅地化はほぼ終わりに近づき、もう一つ外側へと開発の手が伸びてきている。近畿圏整備計画に定められた近畿圏の基本課題は、人口と産業の適正配分による都市の過密化の防止と地域格差の是正であり、これを通じて近畿圏経済の均衡ある発展を図るとともに、西日本経済の中枢地域としての経済基礎を強化することである。このような方針からみると、阪神近郊については、臨海部の再開発に呼応して、臨海部から分散する産業・人口を適確に受け入れる態勢作りをし、計画的な都市開発、産業開発を促進する必要がある。そのための拠点として、住宅、工場、農場、商業施設などを総合的に結合したニュータウンを北摂・北神地区に造成し、神戸・大阪に対する地方開発拠点都市を建設することが求められた。その一環として北摂ニュータウンが計画された。

北摂ニュータウンは、住宅市街地の南地区（のちに愛称フラワータウン）、中央地区（のちに愛称ウッディタウン）、西地区（のちに愛称カルチャータウン）と工業団地の北地区（のちに愛称テクノパーク）の4地区を合わせた総称である。施工主体は南地区と西地区が兵庫県、中央地区と北地区が日本住宅公団（のち住宅・都市整備公団、現在都市基盤整備公団）である。開発面積は南地区が339ha、中央地区が603ha、西地区が159ha、北地区が143haの合計1,244haに及ぶ。

開発方式は住宅市街地1,101ha（西・中央・南地区）は「新住宅市街地開発法」に基づく新住宅市街地開発事業として、また工業団地（北地区）は「近畿圏の近郊整備区域および都市開発に関する法律」に基づく工業団地造成事業として実施した。

当初の事業規模は全体の計画人口が128,000人であり、そのうち中央地区の計画人口は70,000人（後、変更計画人口48,000人）である。

当初の事業計画は昭和44年度より用地買収に着手し、昭和55年度に宅地造成工事を完了する予定であった。しかし、日本の経済状況の変化から、事業が遅れ、平成11年現在でも造成・販売が続けられている。

中国自動車道拡幅と神戸三田インターチェンジの設置、舞鶴自動車道の開通に伴う三田西インターチェンジの設置などの自動車交通網の整備や国鉄（ＪＲ）福知山線の新三田駅の設置や複線電化、神戸電鉄都市公園線の敷設などの公共交通の整備なども進み、近年人口が増え続けており、人口増加率は日本有数である。

ウッディタウンは昭和61年度から居住が始まり、平成11年1月1日現在、7,932世帯、25,516人を数え、北摂ニュータウン全体では15,981世帯、51,859人を数える。

第2節　北摂ニュータウン建設に伴う埋蔵文化財の対応

北摂ニュータウン建設の事業計画のなかの土地利用計画の基本方針で都市機能と施設の充実、「住みやすさの確保」、「周辺地域との調和」、「安全で快適な街」、と共に「開発区域は、三田盆地のなかの未開発の丘陵地である。この自然を保持するため、できるかぎり造成を少なくし**埋蔵文化財や自然植生の保存をはかった公園緑地**を多く計画する。」と自然環境の保持をうたっており、埋蔵文化財について配慮した計画を立てている。

これに先立ち、昭和43年度には『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表第3集』がまとめられ、中央地区部分でNo72・No107・No160・No162の4箇所が登録されていた。

北摂ニュータウン建設の計画に伴い昭和44・45年度の2箇年にわたって詳細な埋蔵文化財分布調査が行われ、中央地区部分での39箇所をはじめとし、北摂ニュータウン建設事業地内で85箇所の包蔵地が発見された。

これを基本に、中央地区では造成計画が進められ、埋蔵文化財包蔵地の確認調査を実施し、遺跡の有無や範囲などを確認し、遺跡を発見した地点は全面調査を進めていった。

この造成計画に並行し、中央地区では小鼻古墳群（No201～No208）、五良谷古墳群の一部（No211・No224）、奈良山古墳群の一部（No1004・No245・No246）、中西山古墳群の一部（No241～No305）、などが周辺緑地として現状保存された。また、奈良山古墳群の一部（No245・No246・No1004・No1007～No1011）は中央公園に取り込まれて保存され、有鼻古墳群（No243地点外）、風呂ケ谷城（No160）はけやき台公園に取り込まれて保存された。さらに奈良山古墳群の一部（No248・No1000）は調査したうえ、整備され中央公園に取り込まれて保存された。このように保存に対して一定の成果を得た一方、計画が進行し、後に発見されたような遺跡については、重要な遺跡であっても保存する事ができなかった。

その後、中央地区内では遺跡の発掘調査を進めながら、埋蔵文化財の発見されなかった地点については並行して造成工事が進められていった。このため、遺跡調査が必要とされた地点以外を残して造成が進められていった。昭和62年夏の調査で、予定された全面調査地点以外の残されていたほぼ全域で遺物を採集した。そのため現在残されている部分について再度分布調査を実施した。この結果、新たに散布地や古墳を発見した。その後発掘調査した結果、これらの地点のほとんどが遺跡である事が分かった。さらに、これらの遺跡の分布状況と旧地形図を重ね合わせると、すでに工事で削平された部分の多くの地点が遺跡であった可能性が高い事も判明した。

北摂ニュータウン建設に伴い、河川・給水・道路・鉄道などの施設整備事業もあわせて計画された。北摂ニュータウン中央地区以外の調査で主要なものを紹介する。

河川整備は武庫川の改修に伴い、川除・藤ノ木遺跡の調査が行われた。給水整備は青野ダム建設に伴い、末窯跡群をはじめとする28箇所の全面調査が行われた。道路整備は、中国縦貫道や近畿自動車道に伴う調査、国道176号拡幅に伴う墓山古墳の調査や三田幹線建設に伴う対中遺跡などの調査が行われた。鉄道整備は国鉄福知山線の複線電化に伴う桑原遺跡などの調査が行われた。

北摂ニュータウン南地区建設では、下深田大山遺跡などの調査が行われた。北摂ニュータウン北地区建設では、溝口遺跡などの調査が行われた。

このように、北摂ニュータウン建設に伴い、関連事業も含めて多くの遺跡の調査が行われ、新たな事実も多数明らかになった。

第３節　中央地区の調査経過

北摂ニュータウン中央地区の埋蔵文化財の調査は、開発計画にあわせて昭和51年度から開始した。当初は、三田市教育委員会が主体になり調査団を組織して調査を実施した。

昭和51年度は、№1000地点・№217地点・№239地点・№1001地点の６地点の確認調査を実施した。№1000地点（奈良山７号墳）・№1001地点（西山１号墳）では古墳を確認し、№239地点（西山遺跡）では遺跡が見つかった。№217地点は古墳ではない事が明らかになった。

昭和52年度は奈良山７号墳と奈良山12号墳（№248地点）、西山古墳群（１号墳～８号墳）の全面調査と西山古墳群周辺の確認調査を実施した。

昭和53年度は西山５号墳・６号墳・７号墳の補足調査と西山古墳群の下層の西山遺跡の全面調査を実施した。

昭和53年度以降は、兵庫県教育委員会が主体になり発掘調査を実施した。

昭和53年度は釜屋城跡（№162地点）が再度、確認されたため、釜屋城跡の全面調査を実施すると共に範囲の確認調査を行った。この結果、下層の広い範囲に弥生時代中期の大規模な集落遺跡（奈カリ与遺跡）が存在することが判明し、あわせて南尾根区と北斜面区を中心に全面調査を実施した。

このほかに、昭和53年度は、№107・№218・№223・№236地点の確認調査と№72・№226地点の全面調査を実施した。№107地点（梶下ヶ谷遺跡）は奈良時代の掘立柱建物を検出し全面調査が必要となった。№218・№223・№236地点の３地点は古墳あるいは窯跡ではない事が明らかになった。№72地点（五良谷11号墳）は全面調査を行い、円墳を検出した。№226は古墳状の隆起が認められたため、全面調査を行ったが、自然隆起であることが判明した。

昭和54年度は釜屋城跡と奈カリ与遺跡の調査を行った。釜屋城跡は土塁を除去し、下層の奈カリ与遺跡の調査を行った。奈カリ与遺跡は主に東谷区と南斜面区を中心に調査を行った。

昭和55年度は奈カリ与遺跡と奈良山遺跡群の調査を実施した。奈カリ与遺跡は南尾根地区と東谷区全面調査を行い、新たに発見した奈カリ与古墳の調査も行った。昭和53年度から実施してきた奈カリ与遺跡群の調査が終了した。奈良山遺跡群は確認調査と、この確認調査の結果、新たに発見された、奈良山５号墳と奈良山遺跡の全面調査の一部を行った。

昭和56年度は、№240地点・№306地点の確認調査と奈良山遺跡と中西山遺跡群の全面調査を実施した。№240地点（平方遺跡）は炭化物層や弥生土器が出土し、第２次確認調査の必要性が考えられた。№306地点（中西山遺跡）は弥生時代の集落遺跡と中世の城跡を確認した。このため引き続き、東半部分にあたる約2,575㎡の全面調査を行った。また、調査途中で新たに２基の古墳（中西山３・４号墳）を発見した。奈良山遺跡の全面調査は約150㎡の調査を行ったのみで、翌年度以降に繰り越すことになった。

昭和57年度は、前年度に引き続き、奈良山遺跡群の全面調査を実施した。

昭和59年度は、昭和57年度に引き続き、奈良山遺跡群の全面調査を実施した。

昭和62年度前半は、中西山遺跡・平方遺跡・梶下ケ谷遺跡の調査を行った。中西山遺跡は西半部の全面調査を行い、弥生時代中期の集落が明らかになった。また、中西山城跡関係の広がりを把むため、確認調査を実施したが、新たな遺構は確認できなかった。平方遺跡は再び確認調査を行い、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を調査区のほぼ全域から検出した。梶下ケ谷遺跡は再び確認調査を行い、平安時代の遺構・遺物および縄文時代の遺物を検出した。

昭和62年度後半は、平方遺跡群、梶下ケ谷遺跡、西山古墳群の全面調査と、No.532地点、No.509地点、No.503地点外、No.501・No.502地点の確認調査を実施した。

平方遺跡は、弥生時代中期の集落、古墳時代後期の集落、横穴式木室墳、須恵器窯跡、中世の山城を調査した。遺物は弥生時代中期後半の住居跡から小銅鐸の鋳型一対、銅鐸の石製舌などが出土したため、遺構・遺物共に重要であるという観点にたち、公団に対して遺跡の保存を訴えていくことになった。そのため調査を途中で中断して協議を重ねていくことにした。

梶下ケ谷遺跡は、縄文時代の落とし穴や奈良時代の掘立柱建物跡や竪穴住居跡を検出し、調査した。西山古墳群は、古墳時代後期の古墳12基と住居跡が見つかり、下層からは弥生時代と考えられる木棺墓群が見つかった。

No.532地点（平方西遺跡）、No.503地点外（西山西遺跡）、No.509地点（西山遺跡）、No.501・No.502地点（下西山遺跡）の各地点で何らかの遺構、遺物が見つかり、遺跡であることが判明した。この結果全面調査が必要であることがわかった。また、梶下ケ谷遺跡は範囲が広がることが判明した。

昭和63年度は、前年度に引き続き、梶下ヶ谷遺跡の全面調査を実施した。

平成元年度は、昭和62年度に確認調査を実施した平方西遺跡の全面調査を行い、古墳時代の竪穴住居を検出した。

平成２年度は、平方遺跡群と下西山遺跡の調査を実施した。平方遺跡群は昭和62年度に全面調査を実施し、保存協議を行っていたが、保存できなくなったための補足調査である。下西山遺跡は第２次確認調査を行い、広い範囲で全面調査が必要であると認められた。

平成３年度は、西山遺跡群と西山西遺跡群の調査を実施した。西山遺跡群は昭和62年度に全面調査を実施した古墳群の補足調査と昭和62年度に全面調査を実施した西山遺跡の周辺部分の全面調査である。西山西遺跡群は全面調査を実施し、集落と３基の古墳を検出した。

平成５年度は、下西山遺跡の調査を実施した。下西山遺跡は6,017㎡の全面調査を行い、弥生時代から平安時代の遺構を検出した。

平成６年度は、No.533地点～No.537地点とNo.243地点の確認調査を行った。No.533地点～No.537地点（有鼻遺跡）は昭和62年度の分布調査で発見した遺跡で確認調査を実施し、広い範囲で全面調査が必要であると認められた。No.243地点（有鼻古墳）は２基の円墳を確認した。

平成７年度は、平成６年度に確認調査を実施した有鼻遺跡の全面調査と東半分の確認調査を行った。39,209㎡を調査し、縄文時代から中世の遺構を検出したが、中心は弥生時代中期後半である。

平成９年度は、有鼻遺跡と風呂ケ谷城の調査を行った。平成９年度に調査を行った有鼻遺跡の続きであり、計画変更に伴う調査である。

平成９年度で北摂地区新住宅市街地開発事業中央地区の開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は終了した。

第4節　出土品整理の経過

北摂ニュータウン中央地区に係わる出土品整理は、昭和52年度までの調査分は三田市教育委員会が主体になり実施した。昭和57年度に奈良山古墳群と西山古墳群をまとめ、『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』を刊行した。

昭和53年度からはじまった奈カリ与遺跡などの調査では大規模であったため、調査現場でまとめた内容を『三田市・北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』として公表した。

その後、釜屋城跡・奈カリ与遺跡・奈カリ与古墳・五良谷11号墳の報告書作成のため、昭和53年度から昭和55年度にかけては調査現場などで整理を実施した。昭和56年度と昭和57年度は魚住分館などで出土品整理を実施し、『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』を刊行した。

平成２年度は、中西山遺跡群と奈良山遺跡群と平方遺跡群と梶下ケ谷遺跡と西山遺跡群の整理を実施した。中西山遺跡群と奈良山遺跡群は水洗い・ネーミング・接合・補強を行った。平方遺跡群と梶下ケ谷遺跡と西山遺跡群はネーミング・接合・補強を行った。

平成３年度は、中西山遺跡群・奈良山遺跡群・平方遺跡群・梶下ケ谷遺跡・平方西遺跡の整理を実施した。中西山遺跡群は実測・拓本・復原・写真撮影・金属器の保存処理・トレースを行った。奈良山遺跡群は実測・拓本・復原・写真撮影・金属器の保存処理を行った。平方遺跡群はネーミング・接合・補強・実測・拓本・復原・写真撮影・金属器の保存処理を行った。梶下ケ谷遺跡は実測・拓本・復原・写真撮影を行った。平方西遺跡は遺物の水洗い・ネーミング・接合・補強・実測・拓本・復原・写真撮影・金属器の保存処理を行った。

平成４年度は、中西山遺跡群・奈良山遺跡群・平方遺跡群・平方西遺跡の整理を実施した。中西山遺跡群はレイアウト・原稿執筆を行い、奈良山遺跡群・平方遺跡群・平方西遺跡はトレース・レイアウト・原稿執筆を行い４遺跡群を合わせて『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』を刊行した。

平成８年度は有鼻遺跡の整理を実施した。内容は接合・補強・実測・拓本を行った。

平成９年度は有鼻遺跡の整理を実施した。内容は実測・拓本・復原・写真撮影・トレースを行った。

平成10年度は西山遺跡群・西山西遺跡群・梶下ケ谷遺跡・有鼻遺跡・風呂ケ谷城跡・下西山遺跡の整理を実施した。有鼻遺跡(1)はレイアウト・原稿執筆を行い『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ』を刊行した。西山遺跡群は実測・拓本・復原・写真撮影・トレース・レイアウト・原稿執筆を行い、西山西遺跡群は接合・補強・実測・拓本・復原・写真撮影・トレース・レイアウト・原稿執筆を行い２遺跡群を合わせて『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ』を刊行した。梶下ケ谷遺跡はトレースを行った。下西山遺跡はネーミング・接合・補強を行った。有鼻遺跡(2)・風呂ケ谷城跡は接合・補強・実測・拓本・復原・写真撮影・トレースを行った。

平成11年度は梶下ケ谷遺跡・有鼻遺跡・風呂ケ谷城跡・下西山遺跡の整理を実施した。

梶下ケ谷遺跡はレイアウト・原稿執筆を行い『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ』を刊行した。下西山遺跡は実測・拓本・復原・写真撮影・トレース・レイアウト・原稿執筆を行い『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ』を刊行した。有鼻遺跡(2)・風呂ケ谷城跡はレイアウト・原稿執筆を行い『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅷ』を刊行した。

以上、平成11年度で北摂ニュータウン中央地区に係わる事業は完了した。

第５節　下西山遺跡の調査経過

１．下西山遺跡の発見

下西山遺跡は昭和62年度の夏の平方遺跡の調査において、隣接する地点の削平された崖面で遺物を採集した他、武庫川に面した斜面において複数の平坦地を確認したため、小字名をとって下西山遺跡とした。

２．確認調査

(1) 昭和62年度―第１次確認調査―

下西山遺跡（№501・№502）の確認調査は、平方遺跡（№240）、梶下ケ谷遺跡（№107）、西山古墳群（№197）の全面調査と、平方西遺跡（№532）、西山遺跡（№239）、西山西遺跡（№509）の確認調査をあわせて実施した。確認調査は、昭和63年１月13日～昭和63年３月８日にかけて実施した。

下西山遺跡の確認調査は、削平された崖に面した部分と尾根上の平坦面の部分を中心に行った。調査方法は、幅２ｍのトレンチを７箇所設定し、合計301㎡を掘削した。

調査の結果、弥生時代から平安時代にかけての遺構、遺物が見つかり、遺跡であることが判明した。この結果全面調査が必要であると判断した。

(2) 平成２年度―第２次確認調査―

下西山の第２次確認調査は昭和62年度に実施し、保存協議を行っていた平方遺跡の補足調査とあわせて実施した。確認調査は、平成２年７月２日～平成２年９月18日にかけて実施した。調査方法は、幅１ｍのトレンチを８箇所設定し、合計126㎡掘削した。

下西山遺跡の第２次確認調査は、範囲と深さを目的に前回調査していない部分を中心に実施した。その結果、特に飛鳥時代の遺物を多量に採集し、斜面に６か所の平坦面が造成されていることも判明した。

３．全面調査―平成５年度―

平成５年度の調査は、過去２回の確認調査の成果を受けて6,017㎡の全面調査を実施した。調査は平成５年５月20日から12月６日にかけて、実働134日間実施した。

下西山遺跡は本来、今回の調査地の東西にも大きく広がっているが、西側は既に工事で削られているため調査不能であった。東側は周辺緑地として残るため、標高196ｍ前後から上の工事部分のみの調査を実施した。

調査は、地形により、調査区を北地区（2,911㎡）と南地区（3,106㎡）の２つに分け南地区、北地区の順に調査を行った。調査の記録は最初に空中写真測量により調査前の地形測量を行った。発掘調査は、機械により切り株や無遺物層を除去したあと人力によって遺構を検出し、遺構内の調査を行った。また、必要に応じて平面図や断面図、遺物出土状況図などの図面による記録と写真による記録をとった。また、調査後に遺構全体図を空中写真測量により図化した。

さらに遺構の年代を調べるため、富山大学理学部地球科学教室の広岡公夫氏に依頼して竈や焼土部分の熱残留磁気測定を行った。遺跡の年代を遺物から検討することと遺跡の評価をしていただくために、京都府立大学の菱田哲郎氏に来て頂き、指導を得た。また北地区の地滑り跡について通産省工業技術院

地質調査所の寒川旭氏に来て頂き、指導を得た。

埋蔵文化財について県民の方々により一層の理解をしていただくために、平成５年10月15日には三田市立すずかけ台小学校の家庭教育学級として遺跡見学会を、平成５年11月３日と４日の両日には三田市立あかしあ台小学校の６年生の児童約140名による遺跡見学会を実施した。平成５年11月９日に報道機関に調査結果の記者発表を行い、平成５年11月13日には現地説明会が行われる予定であったが、雨のために中止となった。しかし、雨にもかかわらず現場に来られた方々には、現場事務所の中でパネルと遺物を展示し簡単な説明会を行った。

４．下西山遺跡の出土品整理

出土品の整理事業は平成10年度と平成11年度の２年間にわたり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。なお平成５年度の現場事務所において出土遺物の水洗は既に行っていた。

整理作業は、出土遺物の①水洗→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復原→⑥写真撮影の順に実施した。さらに、遺物実測図と遺構図と共に⑦トレース→⑧レイアウトを行い原稿執筆→編集→印刷を経て報告書刊行となる。

なお金属器については劣化を防ぎ、元の形状を復原するため保存処理を行った。保存処理作業は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③Ｘ線透過写真撮影→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑦欠損部分を補填→⑧密封乾燥保管の工程で行った。

(1) 平成10年度

平成10年度の整理作業は出土遺物の②ネーミング→③接合・補強→④実測を行った。

金属器は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③Ｘ線透過写真撮影→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑦欠損部分の補填を行った。

(2) 平成11年度

平成11年度は④実測・拓本→⑤復原→⑥写真撮影の順に実施した。さらに、遺物実測図・遺構図と共に⑦トレース→⑧レイアウトを行い原稿執筆→編集→印刷を経て報告書刊行を行った。

金属器は写真撮影の後、⑧密封乾燥保管を行った。

あわせて、下西山遺跡から出土した遺物など遺跡を理解するために、火葬墓SX３出土人骨の鑑定を京都大学霊長類研究所片山一道氏に依頼し所見を得た。青銅器の蛍光Ｘ線分析を奈良国立文化財研究所の肥塚隆保氏に、火葬墓SX３被覆の炭化材樹種同定を奈良国立文化財研究所の高妻洋成氏のご指導・協力のもと岡本が実施した。

5．下西山遺跡の担当

(1) 発掘調査

1）昭和62年度

兵庫県教育委員会　社会教育文化財課

深井明比古・岸本一宏・篠宮　正

2）平成2年度

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

久保弘幸・篠宮　正

3）平成5年度

兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

輔老拓治・岡崎正雄・篠宮　正・岡本一秀

なお、現場補助員として、田中　騰・八木健太郎・中北敦子・進藤眞己子・大岡由起子・作田文子の参加を得た。

(2) 出土品整理

発掘調査を担当した職員のほかに、以下の嘱託員が行った。

1）平成10年度

兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

実　　測：柏原美音・大前篤子

接合・補強：香川フジ子・早川亜紀子・中田明美・前田千栄子・吉田優子・喜多山好子・島村順子・中西睦子・八木富美子・松末妙子・西岡敬子

保存処理：栗山美奈・和田寿佐子・前川悦子・藤川紀子

2）平成11年度

兵庫県教育委員会　埋蔵文化財調査事務所

実測・製図：柏原美音・高瀬敬子・大前篤子・溝上くみ

復　　原：吉田優子・木村淑子・横山キクエ・竹内泰子・加藤裕美・三好綾子・芦田英美・佐々木誓子

保存処理：栗山美奈・和田寿佐子・前川悦子・藤川紀子

第2章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境（図版1・2）

兵庫県三田市は兵庫県の東南部に位置し、北に篠山市、東に川辺郡猪名川町・宝塚市、南に神戸市北区・美嚢郡吉川町、西に加東郡東条町・社町と接している。

三田市は六甲山の北側の内陸部に位置し神戸より北へ22km、大阪より西北へ34kmに位置する。市の中央部を流れる武庫川は丹波高地の白髪岳（標高741m）付近を源としており、約66kmで大阪湾に至っており、ちょうど中央部にあたり、盆地を形成している。広義の三田盆地は旧有馬郡の武庫川・有馬川・有野川・八多川・長尾川流域の平野部をさすが、現在三田盆地と呼ぶ場合は狭義の三田市の武庫川流域の平野部をさす。

三田盆地の北部は火山成の流紋岩で構成される険しい山地となっている。南部は六甲山系の隆起が起因の湖水成の神戸層群を主体としており、標高200m～230mの低丘陵地帯が広がっている。これらの丘陵地帯から武庫川に向かって河川の浸食が進み、開析谷が発達しており、三田盆地を特徴付けている。

遺跡の多くは武庫川沿いの微高地上や武庫川に面した丘陵上や斜面、開析谷に多く立地しており、遺跡の時代や性格によって立地が異なっている。

下西山遺跡はJR新三田駅の西800mに位置し、武庫川右岸の丘陵斜面に立地する。

第2節　歴史的環境（図版3）

下西山遺跡は、弥生時代中期と古墳時代から奈良時代を中心とした遺跡である。そこで三田盆地あるいは旧有馬郡域について、近世まで時代をおって概略する。

1．旧石器時代

旧石器時代後期は溝口遺跡で大規模な調査が行われ、まとまった遺物が出土している。また、原位置を遊離した状態で溝向遺跡・溝ノ尾遺跡・乾遺跡よりナイフ形石器が出土している。

2．縄文時代

縄文時代草創期から早期の石器は、下西山遺跡・平方遺跡・北台遺跡・川端遺跡・北器荘園遺跡から原位置を遊離した状態で有舌尖頭器などが出土しており、行動の様子の一端がうかがえる。

縄文時代は弘遺跡で早期、桑原遺跡で中期、北台遺跡・下井沢遺跡・福島長町遺跡・神戸市下宅原遺跡で後期、対中遺跡・三輪遺跡群・神戸市塩田遺跡で晩期の土器が出土しているが、明確な生活の痕跡は明らかになっていない。縄文時代の遺構は、梶下ヶ谷遺跡・平方西遺跡や有鼻遺跡で落とし穴と考えられる土坑が調査されているのみである。

3．弥生時代

弥生時代前期は貴志遺跡で溝などが調査されているほか、対中遺跡では水田と矢板を打ち込んだ水路が調査されている。このほか北台遺跡では前期甕が出土している。

弥生時代中期前半は三輪遺跡群が出現し、弥生時代のほぼ全時期に継続する拠点集落である。弥生時代中期中頃は丘陵上の天神遺跡、低地部の貴志遺跡・福島長町遺跡・加茂六地蔵遺跡などが出現する。

弥生時代中期後半は奈カリ与遺跡・平方遺跡・中西山遺跡・有鼻遺跡など武庫川右岸の丘陵上に集中して出現し、後期には継続しない。長尾川流域では神戸市北神ニュータウンNo.4遺跡が丘陵上に出現し、後期初頭まで続く。

弥生時代後期の集落は川除藤ノ木遺跡や神戸市宅原遺跡群など低地に立地し、古墳時代まで継続する。

弥生時代中期の三輪遺跡群と神戸市塩田遺跡では石製穂摘具を製作しており、その製品が他地域まで分布している。

弥生時代前期の墓は、未だ調査されていない。弥生時代中期の墓は西山遺跡と三田城遺跡で方形周溝墓が、弥生時代後期の墓は福島平唐山遺跡で方形周溝墓、中西山遺跡で木棺墓、神戸市北神ニュータウンNo.4遺跡で台状墓が調査されており、いずれも丘陵上である。

三田盆地では、平方遺跡の小銅鐸の鋳型や石製舌の出土があるものの、まだ銅鐸は出土していないが、平方遺跡の状況から考えると今後出土する可能性は高い。

4．古墳時代

古墳時代初頭の墓は、川除藤ノ木遺跡や定塚古墳で調査されている。川除藤ノ木遺跡は低地の円墳であり、定塚古墳は丘陵上の方墳である。古墳時代前期の古墳は奈良山1・2号墳が調査されているのみで少ない。

古墳時代後期になると古墳の数は増し、丘陵上に古墳群を形成する。

木棺直葬墳の古墳群は武庫川左岸の川除古墳群・大原古墳群、武庫川右岸の奈良山古墳群・西山古墳群・五良谷古墳群と両岸に存在している。木棺直葬墳・横穴式石室墳の古墳群は武庫川左岸の宮脇古墳群・福島古墳群・萬代古墳群、武庫川右岸の中西山古墳群と両岸に存在している。

横穴式石室墳のみで構成される古墳群は加茂古墳群・青野ダム内古墳群・辻之浦古墳群・富士山古墳群と武庫川左岸のみで右岸には存在していない。

神戸市北神ニュータウンNo.3古墳では、横穴式石室を埋葬施設とする前方後円墳が存在する。古墳時代後期後半の古墳には東仲古墳の棚付の横穴式石室を埋葬施設とする古墳や、奈カリ与古墳・奈良山12号墳・西山7号墳などの凝灰質砂岩の板材を用いた石棺を埋葬施設とする古墳、青龍寺裏山古墳群の様な複数の石室を持つ古墳、陶棺を内蔵する宮脇古墳群中の博地谷古墳、平方古墳群や西山2・13・18号墳などの横穴式木室墳など特徴ある古墳が現れる。

古墳時代前期の集落は弥生時代後期から引き続いて川除藤ノ木遺跡で調査されている。

古墳時代後期の集落は、下西山遺跡・平方遺跡・平方西遺跡・西山遺跡など北摂ニュータウン内や平井遺跡・川端遺跡・溝ノ尾遺跡・岡ノ谷遺跡など青野ダム内や神戸市宅原遺跡群などで竪穴住居が調査されており、また、桑原遺跡で掘立柱建物が見つかっている。このように古墳時代後期になると遺跡数が増加しており、古墳の増加と連動している。

下所遺跡と桑原遺跡では製塩土器が見つかっている。海岸部との流通を考える上で重要である。古墳時代の須恵器生産は5世紀末の郡塚窯跡、6世紀末の平方窯跡群で3基見つかっている。

5．古代

古代の下西山遺跡周辺は『和名類聚抄』に記載されている摂津国有馬郡五郷のうち大神郷に比定されている。

有馬郡内唯一の古代寺院は金心寺廃寺で7世紀末の創建が考えられている。周辺には西山遺跡群などの集落遺跡が存在している。古代の集落は神戸市宅原遺跡で「評」や「五十戸」の墨書土器や儀楽面が出土しており、有馬評衙の候補の一つとして推定されている。

奈良時代から平安時代にかけては対中遺跡、西山遺跡や梶下ヶ谷遺跡・溝ノ尾遺跡で掘立柱建物跡を調査している。

古代の貴志・下所遺跡は集落から「満」を刻んだ銅印や製塩土器が出土している。また、対中遺跡からは銅製丸鞆が出土している。

7世紀から古代にかけての鍛冶遺構が下西山遺跡・奈良山遺跡・梶下ヶ谷遺跡など武庫川右岸で継続的に見つかっている。また須恵器の生産は落合窯・貝谷窯・井ノ方窯・みどろ池窯・地福窯・川端窯・乾窯など末窯跡群で奈良時代から平安時代半ばまで継続している。平安時代後半は木戸窯・古城窯・西谷池窯・中池ノ内窯・向上古城窯・寄合谷窯・萩ノ尾窯など相野窯跡群で操業するなど、窯業生産地帯となっている。

古代には三田盆地に条里地割が施工されている。狭義の三田盆地の条里遺構はN18°Wを基準とする加茂地域と、N25°Wを基準とする貴志地域と、N17°Eを基準とする三輪地域の三地域に分けられる。

古代の火葬墓は、下西山遺跡の他に奈カリ与遺跡と神戸市北神ニュータウンNo.4で調査がされている。平安時代の火葬墓や集石墓が有鼻遺跡で見つかっている。

6．中世以降

平安時代後半から鎌倉時代にかけては遺跡数が増大し、川除藤ノ木遺跡・対中遺跡や平井遺跡・南台遺跡・溝ノ尾遺跡・井ノ方遺跡・伊勢貝遺跡などの青野ダム内で掘立柱建物が調査されている。

南台遺跡では、集落内から須恵器甕内に埋納された約6,500枚の埋納銭が出土している。

鎌倉時代から室町時代になると貴志・下所遺跡で集落と木棺墓、鍛冶炉、水田などが調査されている。墓は、他に対中遺跡で木棺墓、八木ノ谷遺跡で土師器鍋を蔵骨器とした火葬墓が調査されている。有鼻遺跡では土壙墓・火葬墓など総数130基以上の墓地を調査している。

山城は北摂ニュータウン中央地区内においては釜屋城・風呂ヶ谷城・中西山城・平方城が調査されている。中尾城は室町時代末のもので、生活感のある遺物が出土している。

室町時代以降、有馬郡は国人有馬氏に支配され、居城である三田城が築かれた。16世紀末には荒木氏が有馬郡を支配し、三田城および城下町を整備した。のち山崎氏が入り、瓦葺き建物が築かれた。

寛永10年には三田藩に九鬼氏が入封し、三田城の南側に陣屋が置かれ、城下町が整備さた。

江戸時代の窯業は相野地区で近世丹波焼が焼かれ、全長約50mの下相野窯跡の物原が調査されており、主として擂鉢が焼かれている。後期には三田青磁・古三田焼が三輪明神窯で開窯され近代まで続いた。

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法と地区の設定（図版９）

発掘前の地形は、雑木林の丘陵斜面であった。東に張り出した２本の尾根と谷が存在していた。南区の谷に緩傾斜の平坦面があり、南区の尾根に２箇所の緩傾斜の平坦面があるが、東下方の１箇所は調査区外である。北区の尾根の南斜面に２段の緩傾斜の平坦面がある。

調査範囲は造成で削平される、標高196ｍより上部であり、標高196ｍより下部は周辺緑地として保存されるため、調査区外の斜面下に土砂を流出させないため、土留め板を設置して調査を行った。

調査に先立ち、立木の伐木・伐開を行った後、地形測量を行った。調査は表土をバックホーを用い掘削し、包含層掘削・遺構検出・遺構掘削は人力によって行った。なお、遺構面以下の盛土層も地形を復原するため基盤層まで掘削した。掘削排土は調査区西側の場外まで搬出した。

調査は面積が広く、期間も長いため、中央部の谷（８ライン）より南側を南地区、それより北側を北地区と呼称して、南地区から先に実施した。

遺構図の作成や遺物の取上げのため、調査区を設定した。調査区は国土座標Ⅳ系を基準に、10ｍ方眼の基準線を設定した。調査区の北西隅にＡ－１の原点（Ｘ＝-120,820・Ｙ＝79,350）を設け、西から東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ、北から南に向かって１・２・３と記号番号を与えた。地区名は北西隅の点の記号番号で表すものとした。

記録方法は写真および図面で行った。写真は４×５判のカラーポジ・モノクロネガ、35㎜判のカラーポジ・カラーネガ・モノクロネガの各種フィルムで撮影を行った。またヘリコプターによる空中写真撮影も実施した。

図面は調査前の地形図を空中写真測量（1/250・50㎝コンタ）で実施した。遺構図および地形図を空中写真測量（1/250・50㎝コンタ）で実施し、遺構密度の濃い北地区は空中写真測量（1/50・10㎝コンタ）をあらためて実施した。個別の遺構平面図や断面図は、1/10もしくは1/20の作図を行い、遺物出土状況図などは1/5を基本として行った。

測量の基準は、住宅・都市整備公団が事業実施にあたって設置した基準点を利用した。

第２節　基本層序

調査地は丘陵斜面であり、調査前まで広葉樹を中心とした林であった。このため、第１層の表土は山林土壌であり、基盤層は神戸層群の砂礫の軟岩である。

丘陵のため、尾根部分や急傾斜地では堆積層は浅く、逆に谷部分や緩傾斜地では堆積層は深くなっている。

また、丘陵は堆積が少なく、近年の地形の改変もないため、旧地形が、地下の遺構を反映している場合が多い。

第３節　南地区の調査（図版９）

南地区は南東向きの斜面①、東向きの斜面②、北東向きの斜面③と平坦面Ａ・平坦面Ｂの５箇所に大きく分けられる。

１．斜面①

斜面①は13ライン以南の南東向の斜面である。標高は195ｍ～208ｍで、斜面最下部で平坦面Ａを検出した。

遺物は石鏃・刀子が出土した。

２．平坦面Ａ（図版10・11）

平坦面Ａは斜面①の最下部のＦ・Ｇ－13・14区に位置し、調査区外に延びている。基盤層を大きく削平・造成して平坦面を造っている。調査前の地形観察でも平坦面が予測できた。東西17ｍ、南北10ｍの範囲で平坦面を造っている。標高は194ｍ～196ｍを測る。平坦面Ａからは溝ＳＤ１とピット３本を検出したのみである。

遺物は埋土内より須恵器皿・蓋、土師器坏などが出土した。

(1) 溝ＳＤ１（図版10・11）

溝ＳＤ１は平坦面Ａの中央部で検出した。北から南に向かって傾斜しており、幅最大３ｍ、深さ最大0.5ｍ、長さ９ｍを測る。埋土は中礫から大礫が混じる暗褐色の極細砂が堆積していた。

遺物は須恵器坏Ｂ蓋が出土した。

３．斜面②

斜面②は11ラインから13ラインの間に位置する東向き斜面である。ほぼ中央部から平坦面Ｂを検出した。

４．平坦面Ｂ（図版12・13）

平坦面Ｂは斜面②の標高200ｍ～205ｍにかけて、東西20ｍ、南北20ｍの範囲で盛土を行い、平坦面を造っている。盛土の厚さは最大1.1ｍである。平坦面は東西15ｍ、南北18ｍで標高203ｍ～204.5ｍを測る。盛土は場所によって異なるが、８層程度認められ、細砂からシルト質極細砂の非常に細かい土である。なお、斜面下のＧ－12区で焼土を検出した。

遺物は平坦面では出土していない。斜面下で須恵器坏Ａが出土した。

５．斜面③（図版14）

斜面③は８ラインから11ラインの間に位置する北東向き斜面である。標高は196ｍ～209ｍを測り、斜面上部からは竪穴建物１棟と土坑３基を検出した。遺構内および遺構周辺の斜面からは弥生土器広口壺・高坏・甕、石鏃が出土した。いずれも時期は弥生時代中期後半である。

(1) 土坑ＳＫ１（図版14）

ＳＫ１はＳＨ１・ＳＫ９の南側の斜面に位置する土坑である。平面形は方形の可能性が高く、規模は

長径4.3m以上、短径3.5m以上、深さ最大1.8mである。斜面に立地しているため北側は流出している。周囲に溝が存在するため、竪穴建物の可能性もある。埋土はシルト質細砂で、礫や炭が混じっていた。

遺物は少量で、弥生土器広口壺・無頸壺・脚が出土した。

(2) 土坑ＳＫ９（図版14）

ＳＫ９はＳＨ１とＳＫ１の間の斜面に位置する土坑である。平面形は不整形で、規模は長径5.5m、短径3.3m、深さ1.5 mである。斜面に立地しているため北側は流出している。

遺物は弥生土器壺底部と高坏が出土した。

(3) 土坑ＳＫ10（図版15）

ＳＫ10は竪穴建物ＳＨ１の中央部に位置する土坑である。竪穴建物ＳＨ１が埋まった後に作られた土坑である。平面形は楕円形で、規模は長径2.4m、短径1.3m、深さ最大0.5mである。

遺物は弥生土器無頸壺が出土した。

(4) 竪穴建物ＳＨ１（図版15）

ＳＨ１は斜面③のＣ－９区に位置する竪穴建物である。土坑ＳＫ10に切られている。平面形は円形を呈し、直径約８mを測る。山側は基盤層を削り、谷側は盛土により造成しており、盛土はほとんど流出している。床面の標高は202.9mを測る。壁の高さは南西側で最高1.3mを測る。屋内施設は南壁際で壁溝を検出した。幅0.5m、深さ0.1mを測る。ピットや中央土坑は検出できなかった。

遺物は弥生土器甕が出土した。

第４節　北地区の調査（図版16～18）

北地区は、南地区との間の谷地区と北側の尾根には道路ＳＤ２の西側の最も高い平坦面Ｃと周囲の斜面④・斜面⑤・斜面⑥、東側に尾根状に張り出した上下２段の平坦面（平坦面Ｄ・平坦面Ｅ）と斜面（斜面⑦・斜面⑧）、東向きの斜面（斜面⑩）と平坦面（平坦面Ｇ）、北向きの斜面（斜面⑨）からなっている。

１．斜面④

斜面④は北地区の南西部に位置する南東向きの傾斜である。標高は195m～205mである。ここからは溝２本（ＳＤ５・ＳＤ４）を検出した。

遺物は弥生土器壺、須恵器坏Ｂ蓋・壺Ｋ・皿Ａ、土師器甕が出土した。

(1) 溝ＳＤ５

ＳＤ５は北地区の斜面④と南地区の斜面③との間の谷に位置する溝である。人工的な溝ではなく、水が流れた痕跡はあるが自然の流れであると判断した。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｉ・皿Ｃ・椀・壺Ｎ・壺Ｋ・甕、砥石が出土した。

(2) 溝ＳＤ４（図版20）

ＳＤ４は平坦面Ｃより下の斜面④と斜面⑤との間に位置する溝である。斜面に直行し、北から48°西に傾いている。幅約2.0m、深さ約0.35mを測る。埋土は極細砂である。

遺物は須恵器坏Ａ・皿・椀、土馬が出土した。

２．平坦面Ｃ

平坦面Ｃは東に延びた尾根の南東斜面を切盛して造成した平坦面で、道路跡ＳＤ２の西側に位置する。

南北19.0m、東西7.0mで面積は133㎡である。標高206.5m～208m前後である。南東部の一部は地滑（ＳＸ７）により流失している。

検出した遺構は、地滑跡、竪穴建物跡１棟、土坑３基である。

(1) 土坑ＳＫ11（図版21）

ＳＫ11はＳＨ８の北側に位置する土坑である。東側は地滑ＳＸ７で流出している。平面形は隅丸方形で、規模は東西0.6m、南北2.7m、深さ0.2mである。埋土は小礫を含む細砂～極細砂である。

遺物は少量出土している。

(2) 竪穴建物ＳＨ８（図版21）

竪穴建物ＳＨ８は平坦面ＣのＢ－４区で検出した。溝ＳＤ４に切られ、地滑ＳＸ７で一部流失している。平面形は北西隅を検出したことから、隅丸方形を呈すると考えられる。東西約2.0m以上×南北6.5mを測る。山側は基盤層を削り、谷側は盛土により造成しており、盛土はほとんど流出している。床面の標高は204.9mを測る。壁の高さは西側で最高0.32mを測る。屋内施設はピットを１本検出した。

遺物は弥生土器壺・脚が出土した。

(3) 土坑ＳＫ３（図版21）

ＳＫ３はＡ・Ｂ－４区のに位置する土坑である。平面形は方形で、規模は東西1.8m、南北1.6m、深さ0.26mを測る。土坑内には３箇所のピットが存在するが、後のものである。埋土には多量の炭が混じっていた。

遺物は少量出土した。また鉄粒が認められた。

(4) 土坑ＳＫ２（図版22・23）

ＳＫ２は平坦面Ｃ北端のＢ－３区に位置する土坑である。東西2.0m、南北2.2mの範囲で須恵器の完形品が約58個体出土した。深さは0.5mで、直接関係あるのかは不明であるがピットが存在している。
周辺は基盤層が軟岩であり、凹凸が激しかったが、竪穴建物の可能性も残されている。ただし壁溝や竈は存在していない。もし竪穴建物であれば、東西4.0m以上、南北4.4mの方形で、主柱穴は４本である。

遺物は須恵器坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ｉを中心に坏Ｈ蓋・坏Ｅ・高坏・壺Ｋ・平瓶などが出土し、土師器は出土していない。この状況からこれらの土器は何らかの目的でまとめて置かれていたものが、上からの土砂崩れにより埋まったものであると考えられる。

３．斜面⑤

斜面⑤は平坦面Ｃの東側で溝ＳＤ４と道路ＳＤ２との間に位置する東向き斜面である。ほぼ中央部で平坦面Ｃの一部もかかる地滑痕跡ＳＸ７が存在する。

遺物は須恵器甕が出土した。

(1) 地滑ＳＸ７（図版16・19）

平坦面Ｃの東側、道路ＳＤ２との間に位置する斜面⑤のほぼ中央部が、幅13m、長さ12m、高さ８mに渡って平坦面Ｅ方向に崩落している。崩落土量は100㎥程度である。崩落土は道路ＳＤ２から東下平坦面に堆積している。道路ＳＤ２は、地滑時までには約0.65m堆積し、平坦化しており、その上に地滑土が堆積していた。地滑土直下は土壌化した層が認められた。このため、ＳＤ２が掘削されてから地滑が起きるまではかなりの時間が経過していることが判明した。

遺物は、須恵器坏Ｇ蓋・坏Ｉなどが出土しており、この土器の時期以降に地滑が起きたと考えられる。

４．斜面⑥

斜面⑥は平坦面Ｃの北側に位置する北東向き斜面である。標高208ｍ～211.5ｍの比較的緩斜面の自然地形であるが、道路ＳＤ２以外の遺構は検出できなかった。

遺物は土馬が出土した。

５．道路ＳＤ２（図版19・20）

ＳＤ２は北地区の斜面⑤・⑥、平坦面Ｆと平坦面Ｄ・Ｅ、斜面⑦・⑧・⑨との間に位置する道路跡である。調査前の地形測量でも一部、その痕跡が確認できた。

西側の斜面⑤と東側の平坦面Ｄ・Ｅとの間に、深いところで１ｍ以上基盤層を削って溝状の道が作られており、各平坦面に通じている。また、平坦面Ｅの西側部分では階段状に成形されたような痕跡も認められた。段の比高差は0.2ｍ前後を測る。

平坦面Ｅの西側部分は溝が埋まった後、斜面⑤からの地滑で大きく埋まっていた。

遺物は須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ｂ蓋・椀・高坏・平瓶・横瓶・甕、弥生土器器台・土製円盤が出土した。

６．平坦面Ｄ

平坦面ＤはＳＤ２の東に延びた尾根の南向斜面を切盛して造成した平坦面２段のうちの上段である。北側は斜面⑨が存在し、尾根の最高所が残っている。南は斜面⑦、東は斜面⑩が存在している。東西32.4ｍ、南北最大8.0ｍで面積は250㎡である。標高は203ｍ前後のやや南に傾斜した平坦地である。

検出した遺構は、竪穴建物跡４棟、土坑１基、火葬墓１基である。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ａ・高坏・椀・壺Ｃ・皿Ａ・鉢Ｅ・瓶・円面硯、土師器皿、鉄釘・鉄鏃・刀子・鎌・鋤鍬先が出土した。

(1) 竪穴建物ＳＨ５（図版24）

ＳＨ５は平坦面Ｄの西端のＣ・Ｄ－３区に位置する方形の竪穴建物跡である。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は真北を向く。

南北5.3ｍ、東西6.7ｍの東西方向にやや長い長方形で床面積は35.51㎡である。床面の標高は203.1ｍを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.35ｍを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・柱穴がある。

竈は西壁の中央やや北寄りに位置する。造り付け竈で、盛土によって築いている。竈は1.18ｍ×1.85ｍの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、直径0.8ｍ、床面下0.2ｍに赤変が見られる。周壁溝は東壁にしか存在していない。幅0.15ｍ、深さ0.1ｍである。

主柱穴は４本検出した。柱掘形は直径0.3ｍ～0.7ｍで、柱痕跡は直径0.1ｍを測る。深さは0.1ｍ～0.3ｍである。柱間距離は北側5.0ｍ、南側5.2ｍ、西側3.3ｍ、東側3.2ｍで、南東の柱穴が若干北側に寄っている。

遺物は須恵器坏Ｈ身と土師器甕が竈北側から出土した他、鉄釘・刀子、砥石が出土した。

(2) 竪穴建物ＳＨ３（図版25・27）

ＳＨ３はＤ・Ｅ－３区、ＳＨ５の東約３ｍに位置する方形の竪穴建物跡である。北から南に向かって

やや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から3°東に傾いている。床面には竈以外に赤変している場所が5箇所ある。

南北7.1m、東西8.5mの東西方向にやや長い長方形で床面積は60.35㎡である。床面の標高は202.9mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.4mを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・柱穴がある。

竈は西壁の中央やや北寄りに位置する。造り付け竈で、盛土によって築いている。竈は0.7m×1.4mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。

周壁溝は壁面が残っている部分しか存在していないが元は全周していたと考えられる。幅0.2m、深さ0.1mである。

主柱穴は4本検出した。柱掘形は直径0.4m～0.8mで、柱痕跡は直径0.2m～0.3mを測る。深さは0.3m～0.4mである。柱間距離は北側4.2m、南側3.8m、西側3.8m、東側4.3mで、南東の柱穴が若干北側に寄っている。

遺物は竈北側の床面から須恵器坏H蓋・坏G身・坏G蓋・高坏が出土し、他に坏Ⅰ・瓶が出土した。

(3) 竪穴建物ＳＨ４（図版26・27）

ＳＨ４はＥ・Ｆ－３区に位置する方形の竪穴建物跡である。竪穴建物跡３の東に接し、火葬墓ＳＸ３に重複して切られ、竪穴建物跡ＳＨ６と重複して切っている。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南半分は残りが悪く、壁・壁溝は検出できなかった。南北方向の中軸線は北から9°東に傾いている。床面には竈以外に被熱赤変している場所が3箇所ある。

南北7.2m、東西8.5mの東西方向にやや長い長方形で床面積は61.2㎡である。床面の標高は202.4mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.4mを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・主柱穴・壁柱穴がある。

竈は西壁の北端から1/3部分に位置する。竈は1.7m×1.2mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、長径2.7m、短径1.1mの範囲の床面下0.07mに赤変が見られる。

周壁溝は壁面が残っている部分しか存在していないが元は全周していたと考えられる。幅0.2m、深さ0.1m程度である。

主柱穴は4本検出した。柱掘形は直径0.6m～0.8mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは0.1m～0.2mである。柱痕跡は柱掘形より0.1m程度下がっている。柱間距離は北側5.0m、南側4.9m、西側4.0m、東側4.1mである。

壁柱穴は北壁で4本検出した。直径0.25m～0.4mで、壁面をわずかに掘り込んでいる。柱間距離は西コーナーから1.6m・1.4m・1.9m・1.5m・1.6mである。深さは東端の1本が0.2mの他は、周壁溝がわずかに窪む程度である。

遺物は須恵器坏H蓋・坏G身・坏G蓋、刀子、鉄滓が出土した。

(4) 竪穴建物ＳＨ６（図版27）

ＳＨ６はＦ－３区に位置する方形の竪穴建物跡である。平坦面Ｄの東端にあり、竪穴建物跡ＳＨ４の東部の下層に存在している。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から8°東に傾いている。床面には竈以外に被熱赤変している場所がある。

南北5.0m、東西5.35m、の東西方向にやや長い長方形で床面積は26.75㎡である。床面の標高は202.5mを測り、南側は削平されている。壁の高さは東側で最高0.3m、北側と西側で最高0.2mを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・柱穴がある。

竈は北壁の中央に位置する。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、東西1.3m、南北1.2mの範囲の床面下0.1mに赤変が見られる。壁外にも被熱赤変部分が0.2m延びており、煙道と思われる。

周壁溝は東壁にしか存在していない。幅0.1m、深さ0.05mである。

主柱穴は４本検出した。柱掘形は直径0.4m～0.6mで、柱痕跡は直径0.16mを測る。深さは0.18m～0.28mである。柱間距離は北側3.2m、南側3.2m、西側2.6m、東側2.6mで、南東の柱穴が若干北側に寄っている。

遺物は北東主柱穴（P.601）掘形上面の床面から須恵器坏G蓋が、竈焚口東側から須恵器脚付壺が出土し、他に土師器甑、鉄滓が出土した。

(5) 土坑ＳＫ４（図版28）

ＳＫ４はＣ－３区の中央部に位置する土坑である。竪穴建物跡ＳＨ５が埋まった後に作られた土坑でＳＨ５の床面を掘り抜いている。平面形は方形で、規模は東西1.28m、南北1.27m、深さは検出面から0.32mである。軸は北から西に14°傾いている。底の標高は202.8mである。周囲は被熱により赤変が認められ、埋土上層には中礫・大礫や炭が混じっていた。

遺物は少量で、須恵器坏Ｂ蓋・壺・甕、製塩土器が出土した。また鉄粒が認められた。

(6) 火葬墓ＳＸ３（図版28）

ＳＸ３は平坦面ＤのＦ－３区に位置する火葬墓である。竪穴建物跡ＳＨ４が埋まった後に作られ、表土直下で火葬墓を検出した。東西0.62m、南北0.63mの方形掘形の中心部に蔵骨器を据えている。南北方向の中軸線は北から17°東に傾いている。掘形の深さは検出面から0.19mであり、それ以上は後世の影響で削平されていた。掘形の底の標高は202.25mである。掘形内は木炭で充満していた。木炭の中からは骨片は検出できなかった。蔵骨器は土師器甕であり、体部下半以下が残り、口縁部の一部は内部に落ち込んでいた。体部上半は検出できなかった。また別個体の小形の土師器甕の頸部の一部も中から出土したが、蓋と考えられる土器は検出できなかった。蔵骨器の内部には火葬した骨が充満しており、隙間に土が流入していた。土器の形から奈良時代前半に埋葬されたものと思われる。

ＳＸ３の蔵骨器の中から出土した骨は全て焼けている。ヒビ、横割れ、はじけ、縮小、ねじれがあることから、肉が付いた状態で焼かれた火葬骨である。しかも歯のエナメル質がなくなっていることから800°Ｃ以上の高温で焼かれていることが判る。

細片ながらほぼ全身の骨があり、少なくとも重複する部分がないことから、複数個体あるとは思えない。

１個体分であるとしたら性別は、①右側頸骨の乳様突起が、頑丈であるが大きくはなく、②大腿骨の骨頭高が頑丈で大きく、立派であることから男性である可能性が高い。ただし、第２頸椎は小さい。

年齢は大腿骨や椎骨の骨端線がくっついていることから、成人であることはまちがいがないが、骨の状況からこれ以上の詳細は不明である。

７．斜面⑦

斜面⑦は平坦面Ｄと平坦面Ｅの間に位置する南向き斜面である。平坦面Ｄの南半部の斜面の上部は盛土であり、北側の生活面から廃棄された灰・炭・焼土が堆積していた。また、これらの土層からは北側

の生活面から廃棄あるいは流失したと考えられる遺物が出土した。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｉ・坏Ａ・坏Ｂ身・高坏・皿Ａ・壺Ｋ・甕・甑、土師器甑、鉄釘・刀子・鉇・鑿子状鉄製品、鉄滓、砥石が出土した。

８．平坦面Ｅ

東に延びた尾根の南斜面を切盛して造成した平坦面２段のうちの下段である。西側に道路ＳＤ２、北側に斜面⑦、南側に斜面⑧、東側に斜面⑩がある。東西40m、西13m、東５ｍで面積は360㎡ある。

検出した遺構は、掘立柱建物跡２棟、溝１条、竪穴建物跡６棟、土坑３基である。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ａ・坏Ｂ身・坏Ｂ蓋・椀Ｃ・高坏・鉢・壺Ｃ・壺Ｋ・甕、土師器甕・甑、弥生土器甕蓋、鉄釘・鉄鏃・刀子、鉄滓、有茎尖頭器・磨製石鏃・砥石が出土した。

(1) 掘立柱建物ＳＢ１（図版29）

ＳＢ１は平坦面ＥのＣ・Ｄ－４区に位置する掘立柱建物である。桁行５間×梁行４間の掘立柱建物で、北の山側には溝ＳＤ７を伴っている。建物の規模は桁行6.1m、梁行4.2m～4.4mで、柱間寸法は、桁行1.4m～1.7m、梁行1.4mである。梁行方向は北から15°西に傾いている。柱掘形の形状は円形で、直径0.5m、深さ0.4～0.8mで、良く揃っている。柱痕跡は直径0.1m～0.3mで、柱痕底は、柱掘形より0.15m程度沈んでいるものもある。柱穴の重複関係からＳＨ９より古い。

建物に伴う溝ＳＤ７は西側がＳＤ２と並行し6.0m、130°で東側に屈折し、90°で南側へ屈折している。

遺物は須恵器坏・甕、青銅製品などが出土した。

(2) 掘立柱建物ＳＢ２（図版30）

ＳＢ２はＣ・Ｄ４区のＳＢ１の西に位置する。桁行４間×梁行３間の掘立柱建物である。規模は桁行4.3m、梁行4.3mで、柱間寸法は、桁行1.2m～1.6m、梁行2.1m～2.3mである。梁行方向は北から20°東に傾いている。柱掘形の形状は円形で、直径0.3m、深さ0.2mで、良く揃っている。柱痕跡は直径0.11m～0.13mで、柱掘形より0.1m程度沈んでいるものもある。

ＳＢ２に確実に伴う遺物はない。

(3) 竪穴建物ＳＨ13（図版30）

Ｄ－４区の中央部に位置する方形の竪穴建物跡である。平坦面Ｅに位置し、東側は竪穴建物跡ＳＨ９に切られている。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から６°東に傾いている。床面には竈以外に被熱赤変している場所がある。

南北4.3m、東西3.6m残っており、推定5.6mの東西方向にやや長い長方形で床面積は24㎡である。

床面の標高は198.0mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.15m、西側で最高0.1mを測る。

屋内施設には竈・柱穴がある。

竈は北壁の中央に位置する。造り付け竈で、0.55m×0.4mの範囲が赤変しており、焚口付近と思われる。

主柱穴は３本検出した。柱掘形は直径0.32m～0.54mで、柱痕跡は直径0.16mを測る。深さは0.3m～0.5mである。柱間距離は北側2.9m、西側2.45mである。

遺物は須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・高坏蓋、土師器甑が出土した。

(4) 竪穴建物ＳＨ９（図版31）

ＳＨ９はＤ・Ｅ－４区に位置する方形の竪穴建物跡である。西側は竪穴建物跡ＳＨ13を切り東側はＳＨ14を切っている。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南偶は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から19°東に傾いている。

南北6.0m、東西6.5m、の東西方向にやや長い長方形で床面積は39.0㎡である。床面の標高は196.1mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.4mを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・柱穴がある。

竈は北壁の中央やや東寄りに位置する。造り付け竈で、盛土によって築いている。竈は1.8m×1.15mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、長径1.4m、短径0.65m、床面下0.04mに赤変が見られる。竈西側の壁には、煙出し状の掘り込みがある。

主柱穴は４本検出した。柱掘形は直径0.45m～0.7mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは0.3mである。柱間距離は南側3.5m、西側3.3mで、南東の柱穴が若干北側に寄っている。

遺物は須恵器坏Ｈ蓋・高坏・壺Ｃ・甕、羽口、石鏃、竈内から須恵器鉢Ｅ、青銅製品が出土した。

(5) 竪穴建物ＳＨ11（図版32）

ＳＨ11はＤ－４・５区に位置する方形の竪穴建物跡である。ＳＢ１を切り、ＳＨ13の南側に隣接している。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から５°東に傾いている。床面には竈以外に被熱赤変している場所がある。

南北5.0m、東西5.1m、の東西方向にやや長い長方形で床面積は25.5㎡である。床面の標高は198.5mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.43mを測る。

屋内施設には竈・周壁溝・柱穴がある。

竈は北壁中央に位置する。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、東西2.56m、南北1.2mに赤変が見られる。北壁中央に幅0.3m、長さ0.5mの掘り込みがあり、煙道と考えられる。

周壁溝は検出できなかった。

主柱穴は４本検出した。柱掘形は直径0.3m～0.4mで、柱痕跡は直径0.12mを測る。深さは0.2m～0.3mである。柱間距離は北側3.3m、西側3.9mである。

遺物は須恵器坏Ｈ蓋、鉄滓が出土した。

(6) 竪穴建物ＳＨ10（図版32・33）

ＳＨ10はＥ－４区に位置する方形の竪穴建物跡である。竪穴建物跡ＳＨ14を切り重複している。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地しているのと確認トレンチのため、建物跡の南偶および西側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から２°東に傾いている。

南北3.9m、東西推定3.6m、の南北方向にやや長い長方形で床面積は14.04㎡である。床面の標高は198.5mを測り、南側は削平されている。壁の高さは東側で最高0.4mを測る。

屋内施設には竈・炉・柱穴がある。

竈は北東コーナーに位置する。造り付け竈で、盛土によって築いている。竈は1.0m×0.8mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。

床面中央部には焼土が存在する。直径1.2mの円形で中央の直径0.8mの部分は炭を含む焼土が存在する。

主柱穴は２本検出した。いずれも南東コーナー近くに位置している。柱掘形は直径0.5～0.6mで、柱痕跡は直径0.2mを測る。深さは0.08mである。柱間距離は東側1.3mで、南東の柱穴が若干北側に寄ってい

る。位置と深さから主柱穴になるかどうかは不明である。

遺物は須恵器坏H身・坏H蓋・甕・壺、土師器壺・坏、鉄鏃、鉄滓が出土した。

(7) 竪穴建物ＳＨ14（図版32・33）

ＳＨ14はＥ－４区に位置する方形の竪穴建物跡である。東側は竪穴建物跡ＳＨ10に、西側はＳＨ９に切られている。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から12°東に傾いている。

南北5.0m、東西4.9mのほぼ正方形で床面積は24.5㎡である。床面の標高は198.6mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.3mを測る。

屋内施設には竈・柱穴がある。

竈は北壁の中央やや西寄りに位置する。竈は1.0m×0.9mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。竈の前面の焚口と想定できる部分が特に良く焼けており、長径1.0m、短径0.5mに赤変が見られる。

主柱穴は３本検出した。柱掘形は直径0.44m～0.76mで、柱痕跡は直径0.24mを測る。深さは0.12m～0.2mである。柱間距離は北側2.6m、西側3.5mで、南北が長い。

遺物は須恵器坏H身、鉄滓が出土した。

(8) 竪穴建物ＳＨ12（図版34）

ＳＨ12はＧ－４区に位置する方形の竪穴建物跡である。平坦面Ｅの東端に存在している。北から南に向かってやや傾斜している場所に立地している為、建物跡の南側は残りが悪い。南北方向の中軸線は北から５°東に傾いている。

南北5.2m、東西3.4m、の南北方向にやや長い長方形で床面積は17.68㎡である。床面の標高は198.35mを測り、南側は削平されている。壁の高さは北側で最高0.4mを測る。

屋内施設には竈・柱穴がある。

竈は東壁の中央に位置する。造り付け竈で、盛土によって築かれている。竈は1.3m×1.0mの範囲に暗褐色・赤色に焼けた粘土を含む焼土が残っている。

周壁溝は存在していない。

主柱穴は２本検出した。柱掘形は直径0.45m～0.85mで、柱痕跡は直径0.2m～0.3mを測る。深さは0.2m～0.4mである。柱間距離は東側2.8mで、南東の柱穴が若干北側に寄っている。

遺物は竈北側の壁際の床面から須恵器坏Ｂ蓋が出土し、他に須恵器坏Ｂ身、土師器、鉄滓が出土した。

(9) 土坑ＳＫ12（図版35）

ＳＫ12はＤ－４区に位置する土坑である。竪穴建物跡ＳＨ11が埋まった後に作られた土坑である。平面形は不整方形で、規模は南北2.2m、東西1.95m、深さ0.3mである。周囲は被熱により赤変硬化が認められ、埋土は極細砂で、焼土や炭が混じっていた。

遺物は少量で、須恵器皿・甕の小片が散乱して出土している。また羽口、椀形滓と多量の鉄粒が認められた。

(10) 土坑ＳＫ13（図版35）

ＳＫ13はＳＫ12の西側、Ｃ－４区に位置する土坑である。平面形は楕円形で、規模は南北1.15m、東西0.7m、深さ2.5mである。埋土は細砂から極細砂で、炭が混じっていた。

９．斜面⑧

斜面⑧は平坦面Ｅの南側に位置する南向き斜面である。平坦面Ｅの南半部の斜面の上部は盛土であり、北側の生活面から廃棄された灰・炭・焼土が堆積していた。また、これらの土層からは北側の生活面から廃棄あるいは流失したと考えられる遺物が出土した。斜面西端で土坑ＳＫ８を検出した。

遺物は須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ｅ・坏Ｂ蓋・高坏・椀・皿・壺Ｃ・壺Ｃ蓋・壺Ｋ・甕・甑、土師器甕・甑、弥生土器器台、砥石が出土した。

(1) 土坑ＳＫ８（図版35）

ＳＫ８はＣ－５区の斜面⑧に位置する土坑である。平面形は東西3.0m、南北1.6mの長方形を呈し、深さは0.5mである。南側は斜面のため流出している。埋土は基盤層のブロック混じりの土が充満していた。

遺物は少量で、土師器の甕の小片が出土した。

10．平坦面Ｆ

平坦面ＦはＳＤ４とＳＤ２と斜面⑤に囲まれた区域で調査区外に延びている。標高は196m前後である。平坦面Ｆからは溝状の落ち込みＳＤ８と土坑ＳＫ７、ピットを検出した。

遺物は須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｂ蓋・瓶類、土師器把手が出土した。

(1) 溝ＳＤ８

ＳＤ８はＣ－５・６区の平坦面Ｆに位置する溝である。幅最大4.0m、長さ5.3m以上で調査区外に延びている。

(2) 土坑ＳＫ７（図版20）

ＳＫ７はＣ－５区の平坦面Ｆに位置する土坑である。平面形は直径0.75mの円形を呈し、深さは0.25mである。埋土は炭混じりの細砂であり、下層からは椀形滓が出土した。

11．斜面⑨

斜面⑨は平坦面Ｄの北側の尾根上に位置し、大部分は北向きの斜面にあたる。西側には道路跡ＳＤ２がある。この部分は自然地形を残している。北斜面からは集石遺構ＳＸ４が見つかった。

(1) 集石遺構ＳＸ４（図版36）

ＳＸ４は斜面⑨の東端で、ＳＨ４の北側２mに位置する集石遺構である。北向き斜面の４m×3.5mの不定形の範囲で集石を検出した。礫は拳大の河原石で、厚さ最大0.4mを測る。周辺の堆積層には拳大の河原石は存在していないため、何らかの目的で人為的に集積されたものと思われる。礫を除去した下層からは、土坑などの遺構は検出できなかった。

遺物は礫の下層から須恵器片が少量出土した。

12．斜面⑩

斜面⑩は平坦面Ｄと平坦面Ｇとの間に位置する東向き斜面である。南端の平坦面Ｅに接した場所で溝ＳＤ３を検出した。

(1) 溝ＳＤ３

ＳＤ３は斜面⑩南端で平坦面Ｅに接するＧ－３・４区に位置する溝である。尾根に直交して弧を描い

ている。幅0.6m、深さ最大0.2mである。形状から古墳の周溝の可能性があるが明瞭な盛土や埋葬施設は検出できなかった。

遺物は出土していない。

13. 平坦面G

平坦面Gは斜面⑩の東側に位置する調査区の最東端である。南北27m、東西6mの平坦面で東側の調査区外に続いている。標高は195.0m前後を測る。

調査前の地形測量で、古墳状の隆起が認められたため慎重に調査を進めた。ところが比較的新しい盛土であることが判明した。したがって平坦面Gでは遺構は検出できなかった。また遺物の出土量も少ない。

第４章　出土遺物

第１節　出土遺物の概要

遺物は、調査区の全域から出土したが、その中で北地区からの出土量が多く全体の９割に達する。遺物の種類には、土器の他に鉄製品・銅製品などの金属器、鉄滓、羽口や石製品がある。以下、土器、金属器、石器の順に記述する。

なお、出土位置や法量などについては、別表３～８に掲げている。

第２節　土器類

１．南地区

(1) ＳＤ１（24）

ＳＤ１には須恵器坏Ｂ蓋24がある。つまみを欠く。天井部は丁寧なヘラケズリを行っており、別個体の坏Ｂの高台の一部が融着している。

(2) 斜面②（23）

斜面②にはＧ－11区から出土した須恵器坏Ａ23がある。底部はヘラキリ未調整である。

(3) ＳＫ１（１・５・６・12・19）

ＳＫ１には弥生土器広口壺・無頸壺・脚が出土し、遺構内からの５・６・12と検出時の１・19とがある。広口壺１は口頸部が外反し端部は上下に拡張する。端面には３条の凹線文が巡る。広口壺５は口頸部がやや外反しながら直立する。頸部には３条の凹線文が二単位巡る。無頸壺６は口縁部が内湾する精製土器で２条の凹線文が巡る。脚12は端部が拡張し、裾部に小円孔を多数穿つ。壺底部19は内面がヘラケズリ、外面がハケ調整である。

(4) ＳＫ９（10・11・20）

ＳＫ９には高坏10・11と壺底部20がある。高坏10・11は皿状の坏部で、10は口縁端部が拡張し、直下に凹線文が巡る。11は口縁部が外方にのび、シャープに仕上げている。壺底部20は大形の壺の底部で内面はハケ調整している。

(5) ＳＫ10（７・８）

ＳＫ10には弥生土器無頸壺７・８がある。内傾する口縁部の端部を僅かに拡張している。７は凹線文が２条巡るのみで無文である。８は凹線文２条のほかに櫛描波状文で飾っている。

(6) ＳＨ１（18）

ＳＨ１には弥生土器甕18がある。大形で球形の体部から口縁部にかけての破片で、「く」字状に屈曲する口頸部が付く。端部は拡張していない。

(7) 斜面③（２～４・９・13～17・21・22）

斜面③には弥生土器広口壺・高坏・甕がある。

広口壺２・３は口頸部が大きく外反し、口縁端部を上下に拡張する。２は頸部に５条、３は１条以上の凹線文が巡る。２は口縁端部に４条の凹線文が巡り、円形浮文が付く。広口壺４は口頸部が直線的に

外方に開く。頸部に1条、口縁部には2条の凹線文が巡る。高坏9は皿状の坏部で、口縁端部を拡張し、直下に凹線文が巡る。脚13・14は端部が拡張し、13は裾部に小円孔を多数穿つ。壺15は球形の体部から口縁部にかけての破片で、「く」字状に屈曲する短い口頸部が付く。口縁端部は拡張し、17は2条の凹線文が巡る。甕16・17は大形で球形の体部から口縁部にかけての破片で、「く」字状に屈曲する口頸部が付く。16は端部がやや拡張し、17は1条の凹線文が巡る。21・22は壺の底部である。

2．北地区

(1) 斜面④（118～122・134・135）

斜面④には弥生土器壺、須恵器坏B蓋・壺K・皿A・皿C、韓式系土器甕がある。

弥生土器壺118・119は広口壺（118）と直口壺（119）とである。118は垂下する口縁外面に櫛描の斜格子文を描き、円形浮文を付けている。内面には綾杉の列点文を刻んでいる。119は口縁部直下に5条の凹線文を巡らしている。坏B蓋120は大形で天井部に沈線が巡る。壺K121は体部の破片で最大径部に2条の沈線を引き列点文で埋めている。皿A122は底部をヘラケズリで仕上げているが一部ケズリ残しがある。皿C134の底部はヘラキリ後、撫でて全体に火襷の痕跡が残る。土師器甕135は体部の破片で格子タタキで成形している。類例は、隣接する西山遺跡で完形品が出土している。

(2) ＳＤ5（25～37・355）

ＳＤ5には須恵器坏H身・坏H蓋・坏Ⅰ・皿C・椀B・椀C・壺N・壺K・甕がある。

坏H身26・27の底部はヘラケズリを行っており、26は底部が厚い。立ち上がりは内弯気味に直立するもの（26）と屈折するもの（27）とがある。坏H蓋25は天井部がヘラキリ未調整である。坏Ⅰ28・皿29の底部はヘラキリ未調整である。椀30は口縁部の破片である。椀B31は貼付高台をもつ。椀C32は体部に貼付突帯を巡らす。壺の底部33は切離しの後未調整である。体部に沈線が巡る。壺N34は肩部の破片で環状の耳が付く。胎土は白く良質で外面にはガラス質の淡緑色の釉がかかる。壺K35は肩部に自然釉がかかる。甕36・37は口縁部が外反し、36は口縁端部を上方に拡張している。37は端部を丸く収め、体部はタタキ後カキメ調整をしている。355は近世の丹波焼壺の口縁部である。

(3) ＳＤ4（51～56）

ＳＤ4には須恵器坏A・皿C・皿D・椀B、土馬がある。

坏A51はやや外方に開く坏である。皿C52の底部はヘラキリ未調整である。皿D53は口縁が浅く外方に開く。椀B54・55は高台付の椀で、54は口縁部で端部は外反している。55は底部で外方に開く高台が付く。土馬56は体部と脚の一部が残り、表面の残りは良くない。体部は中空で脚を嵌め込んでいる。鞍などの表現がかすかに残り、飾り馬であったことが判る。

(4) 平坦面C（123～130・132・133・136）

平坦面Cには須恵器坏G身・坏G蓋・坏Ⅰ・提瓶・甕、土師器甕・羽釜がある。

須恵器坏G身127～129は平底のもの（127）と丸底気味のもの（128・129）とがある。いずれもヘラキリ未調整である。坏G蓋125・126は口縁部先端を丸くするもの（125）と口縁部先端を屈曲させるもの（126）とがある。坏Ⅰ130は丸底気味の底部に外反する口縁部をもつ。提瓶133は丸みを持った体部に山形の環状把手が付く。表面には6条の沈線が巡る。瓶類の口縁部132は短い口頸部に2条の沈線が巡る。甕136は体部外面を並行タタキで仕上げている。口縁端部直下に突帯を巡らしている。土師器甕123は口頸部が「く」字状に外反する。土師器羽釜124は甕の体部上半部に幅3cm程度の鍔を巡らしている。

(5) ＳＫ２（57～114・131）

ＳＫ２には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ｅ・椀・高坏・壺Ｋ・平瓶がある。

須恵器坏Ｈ蓋80は天井部を丸く仕上げている。坏Ｇ身81～95の底部はいずれもヘラキリ未調整で、口縁端部が直立気味のもの（81・82・84～89）と外反気味のもの（83・90～95）とがある。坏Ｇ蓋57～79は器高が低く扁平なもの（57～60）、天井部を丸く仕上げているもの（61・62・72）、器高が高いもの（63・74・78）、口縁部が屈曲して、屈曲した部分の内側に身受けのかえりが付くもの（64）、口縁部と天井部の間が屈曲するもの（65・66・70・73）、口縁端部が屈折するもの（68・69）、身受けのかえりが垂下するもの（67・71）、天井部が平坦なもの（76）、身受けのかえりが短いもの（77）などがある。67・73・77が宝珠形のつまみが付く他は乳頭状のつまみである。なお、62・63・68・71・73は濃緑色の自然釉が付着しており、62・63・68・73は別個体の蓋の融着が見られる。坏Ｉ96～107は小振りのもの（96）、底部が平底で口縁端部が外反するもの（97～99・107）、口縁部が内弯気味のもの（100・101）、平底のもの（102）、丸底気味のもの（103・104）とがある。坏Ｅ111は口縁端部に内傾する面をもつ。椀108・109・112は底部が平底のもの（108）と丸底のもの（109）と小形のもの（112）がある。112は底部に「×」のヘラ記号がある。高坏110はやや小振りの坏Ｇ身に脚を付けたものである。高坏131は坏部・脚部に沈線を巡らしている。平瓶114はやや脹らみをもつ体部に傾斜する口頸部が付く。

(6) ＳＨ８（115～117）

ＳＨ８には弥生土器壺・脚がある。壺115は口頸部が直線的に外方に開き、頸部には４条の凹線文が巡る。壺116は丸底気味の底部である。脚117は端部が僅かに拡張し、裾部に小円孔を多数穿つ。

(7) 斜面⑤（137）

斜面⑤には須恵器甕137がある。口頸部が外傾し、口縁端部が上下に拡張している。頸部は３条の沈線を巡らし間をヘラ描き沈線で埋めている。

(8) 斜面⑥（138）

斜面⑥には土馬138がある。脚部の先端のみである。

(9) ＳＤ２（38～50・207）

ＳＤ２には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ｂ蓋・高坏・椀・横瓶・平瓶・甕、弥生土器器台・土製円盤がある。

坏Ｈ蓋43はやや開き気味の口縁部をもつ。坏Ｇ蓋38～40は身受けのかえりが天井部内面から垂下するもの（38）と身受けのかえりを口縁端部から折り返すもの（39・40）とがある。坏Ｉ41は厚めの底部である。坏Ｂ蓋45・46は口縁部の破片である。高坏44は坏Ｈ蓋を反転させ脚部を付けたもので、脚部を欠く。椀42は直立する口縁部をもつ。横瓶207は平坦面Ｄ・Ｅ、斜面⑦からも破片が出土している。口縁部を欠き、内面は同心円当て具、外面はタタキ後カキメ調整をしている。平瓶47は体部上面の破片で、ボタン状の貼り付けをしている。甕48は外反し、内弯気味に口縁端部が立ち上がる。弥生土器器台50は脚部の破片で胴部に８条以上の凹線文が巡る。土製円盤49は弥生土器甕体部の破片を加工したもので、内面に煤が付着している。

(10) 平坦面Ｄ（172～174・176～188・190～195・246・249・274・289・311・312・320・326・336）

平坦面Ｄには須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・壺Ｃ・壺・坏Ａ・皿Ａ・鉢Ｅ・鉢・高坏・椀・円面硯・瓶、土師器皿がある。

坏Ｈ身183～185は小振りで底部がヘラキリ未調整のもの（183～184）と大振りで底部がヘラケズリの

もの（185）とがある。坏H身186は受部が短く、ほとんど立ち上がりがみられず、底部から口縁部にかけて丸味をもたせて成形した特異形態である。坏H蓋179～182・274は天井部がヘラキリ未調整のもの（179～182）と荒いヘラケズリのもの（274）とがある。181・182は口縁端部が内弯している。274は天井部に「×」のヘラ記号がある。坏G身173・187の底部はいずれもヘラキリ未調整である。坏G蓋172・320は身受け端部が口縁端部より内側に入るもの（172）と下方に突出するもの（320）とがある。坏I 249・289・311・312は丸底気味の底部に外反する口縁部が付く。壺Cは大形のもの（176）、中形のもの（336）、小形のもの（191）がある。176・336は肩部に沈線が巡っている。191は底部がヘラキリで一部失敗しており、歪んでいる。壺326は肩の張った体部に外方に開く口頸部をもつ。頸部にヘラによる波状沈線を施す。底部はヘラキリ後未調整で高台も付かない。坏A174は直線的に外傾する口縁部をもつ。皿A 177 は大振りで、ヘラケズリの底部から斜め上方に立ち上がる口縁部をもつ。鉢E178は底部にヘラによる刺突があり、内面・底部とも良く使用されている。鉢193は体部中央に3条の沈線が巡る。高坏190・246は、脚部のみで中央部に2条の沈線が巡るもの（190）と坏H蓋を逆転させ、低い1条の沈線を巡らす脚部を付けているもの（246）とがある。椀188は底部ヘラケズリである。円面硯194は低脚で五箇所の横位の長方形透かしがあり、内面は面取りしている。瓶192は外傾する口頸部の中央に沈線が巡る。土師器皿195は残りが悪く、底部に黒斑が存在する。

(11) ＳＨ５（139・140）

ＳＨ５には須恵器坏H身139・140がある。いずれも口径が小さく、立ち上がりは受け部より僅かに出ている。

(12) ＳＨ４（141～144）

ＳＨ４には須恵器坏H蓋・坏G身・坏G蓋・大形坏蓋がある。

坏H蓋143は小振りで天井部はヘラキリ未調整である。坏G身142の底部はヘラキリ未調整である。坏G蓋141は宝珠状のつまみを付けている。大形坏蓋144は身受けのかえりをもち、丸みのある天井部はヘラケズリを行っている。

(13) ＳＨ３（145～152）

ＳＨ３には須恵器坏H蓋・坏G身・坏G蓋・坏I・高坏・瓶がある。

坏H蓋148・149は小振りで天井部はヘラキリ未調整である。坏G身150は底部がヘラケズリである。坏G蓋145～147はやや器高の高いもの（146）と低いもの（145・147）がある。145の身受けのかえりはシャープさがない。高坏151は坏G身に沈線を巡らす脚を付けている。瓶152はやや内弯気味の口頸部である。

(14) ＳＨ６（153～155）

ＳＨ６には須恵器坏G蓋・脚付壺、土師器甑がある。

坏G蓋154は身受けのかえりが口縁部より下に突出している。壺蓋の可能性もある。脚付壺155は軟らかい焼で残りは良くない。球形の体部の最大径部に沈線と列点による施文を行い、三方向の透かしの脚が付く。土師器甑153は外方に直線的に開く口縁部をもつ。底部は存在しない。

(15) ＳＫ４（156～159）

ＳＫ４には須恵器坏B蓋・壺・甕、製塩土器がある。

坏B蓋156は歪みが大きい。壺158は体部の破片で、肩部に双耳が付く。体部下半はカキメで仕上げている。甕159は口頸部が外傾し、口縁端部が上下に拡張している。頸部は3条の沈線と波状文で施文して

いる。製塩土器157は口縁部の一部と底部を欠く。推定では丸底で外方に口縁部が延びる。外面は被熱のため剥離が著しい。内面は縦方向の強いナデ調整をしている。

(16) ＳＸ３（160）

ＳＸ３からは蔵骨器として使われた土師器甕のみである。口縁部が中に落ち込み削平されていたため、体部上半が欠けている。底部が丸底の長胴形である。口縁部は外反し、口縁端部は面を作っている。調整は内面が横方向のハケ調整、外面が縦方向のハケ調整で、ヨコナデを施している。体部下半から底部にかけては内面は僅かに同心円が残る当て具痕跡、外面は縦方向のハケ調整を施している。体側面には黒斑がある。

(17) 斜面⑦（189・196～198・206・208・261・262・268・280・281・290・316・318・321・323）

斜面⑦には須恵器坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ⅰ・坏Ａ・坏Ｂ身・高坏・皿Ａ・壺Ｋ・甕・甑、土師器甑がある。

坏Ｈ身197・280・318は大振りのもの（280）と小振りのもの（197・318）とがある。280は底部ヘラケズリで褐色を呈し、平方２号窯の製品である。197は底部ヘラキリの後、指で撫でている。318の底部は手持ちヘラケズリである。坏Ｈ蓋196は天井部ヘラキリ未調整である。坏Ⅰ189・198・321は丸底状の底部でヘラキリ未調整のもの（189・198）とケズリ状の切離しのもの（321）とがある。坏Ａ290はやや膨らんだヘラキリ未調整の底部に外方に延びる口縁部が付く。坏Ｂ身323は底部ヘラケズリの後、高台を貼り付けている。高坏281は脚部のみで坏部は残っていない。皿Ａ316は大形で丸底気味の底部はヘラケズリを行っているが、一部ケズリ残している。口縁端部は内傾した面を持っている。壺Ｋ261・268は肩の張った体部にやや外傾する口頸部と高台が付く。体部は沈線と列点による施文を行っている。口頸部は沈線が巡り、高台部は不均等な四孔を穿つ。甕262は球形の体部に外傾する短い口頸部が付く。体部外面はタタキ後カキメを行っている。甑206は底部に半月形の双窓をあけ、底部側面に小孔を穿っている。体部中央には把手を付けるための沈線を巡らしているが、把手部分は存在していない。土師器甑208は底部の側面に小孔を穿っている。

(18) 平坦面Ｅ（214・239～245・247・248・250～260・263～267・269・271～273・275～279・283～288・291～310・313～315・317・319・322・324・327）

平坦面Ｅには坏Ｈ身・坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｇ蓋・坏Ⅰ・坏Ａ・坏Ｂ身・坏Ｂ蓋・椀Ｃ・高坏・鉢・壺Ｃ・壺・壺Ｋ・甕、土師器甕・甑、弥生土器甕蓋がある。

坏Ｈ身264・245・275～279・305・306・319は立ち上がりが高く直立する古いもの（264）と立ち上がりが短く傾斜するもの（245・275～279・305・306・319）とがある。後者は底部がヘラケズリのもの（276）とヘラキリ未調整のもの（275・277～279・305・306・319）とがある。305は底部にヘラ記号が認められる。坏Ｈ蓋240・242～244・271～273・296・300～304は天井部が平らでヘラキリ未調整のもの（240・271・301～304）と天井部が丸くヘラキリ未調整のもの（242・272・273・296・300）と天井部がヘラケズリのもの（243・244）とがある。244は平方２号窯の製品である。坏Ｇ身は214・250・297はいずれも底部ヘラキリ未調整である。坏Ｇ蓋248・284～286・308 は身受けのかえりが口縁端部より下方に突するもの（284）、ほぼ等しいもの（248・285・308）、内側に入るもの（286）がある。坏Ⅰ239・287・288・309・310はいずれも底部はヘラキリ未調整である。坏Ａ251・252・324の底部はいずれもヘラキリ未調整であり、大振りのもの（251・252）と小振りのもの（324）とがある。坏Ｂ身257～259はいずれも踏ん張った高台を底部に貼り付けている。底部がヘラケズリのもの（258）とヘラキリのもの（259）とがある。坏Ｂ蓋254～256・298・313～315・322は内面に身受けのかえりをもつもの（298・313）と垂下

する口縁端部をもつもの（254～256・314・315・322）とがある。つまみが残るものはやや扁平な宝珠形である。椀C253は丸底に踏ん張った高台が付く。口縁端部は面を作っている。高坏247・283・317は、坏H身を反転して脚を付けたもの（247）と三方向に二段透かしをもつ脚部のもの（283）と低脚の三方透かしをもつもの（317）とがある。鉢260は丸底で荒いヘラケズリを行っている。内面には接合の痕跡が残る雑な作りである。壺C266は扁平な体部に短い口頸部が付く。褐色を呈している。壺267はやや肩が張った球形の体部に拡張した口縁端部をもつ短い口頸部が付く。体部最大径部は二本の沈線の間をヘラ描きの斜格子文で埋めている。壺K327は口縁部を欠く。頸部中央部に2条の沈線が巡る。土師器甕263・293は口縁端部をやや上方につまみ上げる。土師器甑291・294は底部で半月状の双窓があき、底部側面に小孔を穿つもの（291）と口縁部の破片（294）とがある。294は外面はタテハケ、内面は口縁部ヨコハケで中央部はヘラケズリを行っている。土師器把手241・295・299は舌状の把手（241・299）と角状の把手（295）とがある。弥生土器甕蓋265は天井部が平らな傘状である。

(19) ＳＨ13（209～213・215～219）

ＳＨ13には須恵器坏H身・坏H蓋・高坏蓋・壺、土師器甑がある。

坏H身211～213は立ち上がりが屈折するもの（211）と屈折せずに立ち上がるもの（212・213）とに分けられる。212は口縁部に使用による細かい欠けがあり、213は受け部に別個体の蓋の融着がある。坏H蓋209・210は天井部にヘラケズリを行っている。209は平方2号窯の製品である。210は天井部内面は良く使用され、磨かれており、口縁端部は使用による細かい欠けがある。高坏蓋215～217は坏H蓋に扁平なつまみを付けている。217は天井部に降灰による高坏脚部の痕跡が認められる。壺218は球形の体部に直立する短い口頸部が付く。体部外面はタタキの後カキメで仕上げている。内面は同心円の当て具痕跡が残る。土師器甑219は把手部と底部の破片で、把手は角状で、底部は平底で半月形の双窓があく。体部外面は縦方向のハケ調整を施す。

(20) ＳＨ９（220～225）

ＳＨ９には須恵器坏H蓋・高坏・壺C・鉢E・甕、土製羽口がある。

坏H蓋220は天井部外面ヘラキリ未調整、内面仕上げナデを行っている。高坏222は無蓋で脚部を欠く。壺C221は底部を欠き、扁平な体部に短い口頸部が付く。鉢E223は底部に細い一孔を穿つ。甕224は球形の体部に外反する口頸部が付く。体部外面はタタキの後丁寧なカキメで仕上げている。内面は同心円当て具が一部撫で消されている。

(21) ＳＨ10（226～229・231～234）

ＳＨ10には須恵器坏H身・坏H蓋・鼈・壺、土師器壺・坏がある。

坏H身227～229は小振りで体部上半部に屈曲があり、底部がヘラキリ未調整である。坏H蓋226は天井部が平らで、ヘラキリ未調整である。鼈232は口縁部の破片で縦方向の櫛による条線が施されている。壺231は直立する短い口頸部をもつ。土師器壺233は底部の破片である。土師器坏234は外方に内弯気味に立ち上がる口縁部である。

(22) ＳＨ11（235）

ＳＨ11には須恵器坏H蓋がある。235は天井部外面ヘラケズリ、内面仕上げナデを施す。平方2号窯の製品である。

(23) ＳＨ12（164～167）

ＳＨ12には須恵器坏B身・坏B蓋、土師器がある。

坏Ｂ身166は底部ヘラケズリの後、踏ん張った高台を貼り付けている。坏Ｂ蓋165は小振りで器高が高い。宝珠形のつまみが付く。坏Ａ167は底部ヘラキリ後丁寧なナデをしている。土師器164は残りが悪く、丁寧な調整をしていない。

(24) ＳＨ14（230）

ＳＨ14には坏Ｈ身がある。230は大振りで立ち上がり部内面に屈曲がみられず底部にヘラケズリを行っている。

(25) ピット（168～170）

ピット16には須恵器坏Ｂ身がある。168は底部ヘラケズリの後、高台を貼り付けている。

ピット17には須恵器坏Ｇ身がある。169は底部ヘラキリ未調整である。

ピット７には須恵器瓶がある。170は口縁部の破片で、内弯する口縁端部である。

ピット14には須恵器椀Ｄがある。171は体部に沈線が巡り、外面は濃緑色の自然釉が付着している。

(26) ＳＫ12（161～163）

ＳＫ12には須恵器皿Ｃ・甕、土製羽口がある。

須恵器皿Ｃ161の底部はヘラキリ後ナデで仕上げている。須恵器甕162は口縁部が外反し、端部が肥厚する。

(27) 斜面⑧（328～335・337～354）

斜面⑧には須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ蓋・坏Ｉ・坏Ｅ・坏Ｂ蓋・高坏・椀・皿Ａ・壺Ｃ・壺Ｃ蓋・壺Ｋ・甕Ａ・甕Ｄ・甑、土師器甕・甑、弥生土器器台がある。

坏Ｈ蓋337・338は天井部をヘラケズリしている。338は歪みが大きく器壁が厚く、やや褐色を呈しており、平方２号窯の製品である。坏Ｇ蓋341は乳頭状のつまみが付く。坏Ｉ343は底部がヘラキリ未調整である。坏Ｅ339・348は口縁端部に面をもつ。坏Ｂ蓋は344～347は内面に身受けのかえりをもつ344と、端部が垂下する345～347とがある。345は小振りである。高坏350は坏Ｈ蓋を逆転させて脚部を付けたもので、脚中央部に２条の沈線が巡る。椀340・342は大振りの340と小振りの342とがある。皿Ａ349は底部をヘラケズリし、口縁部は内傾する面を作っている。壺Ｃ344・345は底部はヘラケズリで球形の344と扁平な345とがある。壺Ｃ蓋は333は小振りで、天井部はヘラケズリしている。壺Ｋ328は下半分のみで、体部は屈曲し、高台が付く。甕Ａ352・353は口頸部が「く」字状に外反し、端部が拡張する。甕Ｄ351は外傾する口縁端部に面を作っている。354は球形の体部で外面はタタキで、内面は同心円当て具の痕跡が残る。当て具の痕跡は下半部と上半部により異なり、下半部は直径８cm程度で刻み幅0.4cm、上半部は直径４cm程度で刻み幅0.2cmの当て具を使用しており、分割成形を行っている事を示している。甑329は把手部分の破片で２条の沈線を巡らし、舌状の把手を嵌め込んでいる。土師器甕330は口縁部が外反する大形品である。土師器甑331は底部全体をあけ、底部側面に直径３㎜の小孔を穿っている。弥生土器器台332は脚裾部の破片で７条の凹線文が巡っている。

(28) 平坦面Ｆ（296～299・357）

平坦面Ｆには須恵器坏Ｈ蓋・坏Ｇ身・坏Ｂ蓋・瓶類、土師器把手がある。

坏Ｈ蓋296の天井部はヘラキリ未調整である。坏Ｇ身297は底部をヘラケズリしている。坏Ｂ蓋298は大振りで内面にかえりが付く。瓶類357は内面に濃緑色の自然釉がかかっており、外面は坏Ｇ蓋を始めとする３個体が融着している。土師器把手299は舌状の把手である。

第３節　金属器類

下西山遺跡から出土した金属器類には、鉄製品・銅製品・鉄滓・羽口がある。この内、鉄製品と鉄滓が多い。

１．鉄製品

鉄製品は釘・鏃・刀子・斧・鉇・鍬先・鑵子・鍛造途中品・不明品が存在する。

(1) 斜面①（435）

斜面①からは刀子が出土した。435は両端部を欠損している。全長8.1cmで、刃はかなり研減りしている。両関で、関幅1.6cm、茎幅0.8cmを測る。

(2) 斜面④（434）

斜面④からは斧が出土した。434は片刃有肩式の袋状鉄斧である。全長7.7cm、刃幅3.8cm袋部の長径3.2cm、短径1.6cmを測る。

(3) 平坦面Ｄ（402・404・408・409・411・415）

平坦面Ｄからは釘・鏃・刀子・鍬鍬先が出土した。

釘（402・404）は頭部および先端部を欠き、細めである。鏃（409）は有茎の方頭鏃であるが、茎は欠損しており、鏃身は折れ曲がっている。刀子（408・411）は２点あり408は刃部のほとんどと茎部の一部を欠損している。全長3.8cm、両関で、関幅1.4cmを測る。411は片関で、関幅2.0cmを測る。刃部は外反している。鍬鍬先（415）はＵ字形の刃先で台を受ける溝が存在する。

(4) ＳＤ２（437）

ＳＤ２からは銭が出土した。437は直径2.5cm、中央に一辺0.6cmの方形の孔が開く。

(5) ＳＨ５（405・410）

ＳＨ５からは刀子が出土した。

刀子は２点あり、405は両端部を欠損している。全長8.0cmで、刃はかなり研減りしている。無関で、関幅1.0cm、茎長3.0cmを測る。410は断面が茎部の一部と考えられる。

(6) ＳＨ４（407・413）

ＳＨ４からは刀子・不明品が出土した。

刀子（407）は刃部が彎曲している。不明品（413）は断面が長方形で片側が屈曲している。

(7) 斜面⑦（401・406・412・414・416・417）

斜面⑦からは釘・刀子・鉇・鑵子が出土した。

釘（401・416・417）は完全に残っているものはない。断面形は正方形で、401は一辺0.9cm、416は一辺0.5cm、417は一辺0.3cmを測る。刀子（406）は全長6.7cmで刃部の一部は欠損しており、刃はかなり研減りしている。両関で、関幅1.2cm、茎長4.9cmを測る。鉇（412）は全長9.5cm、復原長10.4を測る。刃部は内反りし、鏑をもつ。推定長３cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。茎部は平造りで茎部長7.9cm、幅1.2cm、厚さ0.5mを測り、木質が付着している。鑵子（414）は頭部の一部である。

(8) 平坦面Ｅ（403・418・419・421・422・424・429・430・432）

平坦面Ｅからは釘・鏃・刀子・不明品が出土した。

釘（403・418・419・421・422）は完全に残っているものはない。このうち418・419・421・422は頭部が残存しており、先端を薄く叩き延ばして頭部を造っている。鏃（424）は有茎の方頭鏃である。刀子（429・430）はいずれも刃部の一部である。不明品（432）は長さ6.1cm以上、幅4.1cmの薄い鉄片である。

(9) ＳＨ10（423）

ＳＨ10からは鏃（423）が出土した。柳葉形の鏃身で、断面は片丸鏑で表面に鏑がある。茎は欠損している。

(10) 斜面⑧（420・425～428・431）

斜面⑧からは釘・鏃・刀子・鍛造途中品が出土した。

釘（420）は頭部を欠く。鏃（425・426）は茎の一部で425は関部に棘篦被が存在する。刀子（427・428）は２点ある。427 は全長11.6cm、刃長6.8cmのほぼ完形品である。刃部はわずかに研減りしている。両関で、関幅1.3cm、茎長4.8cmを測る。428は全長6.5cmで刃部の一部は欠損しており、刃はかなり研減りしている。両関で、関幅1.6cm、茎長5.2cmを測る。鍛造途中品（431）と考えられる資料は折り返しにより重ねており、厚さ1.0cmを測る。

２．銅製品

銅製品は銭・不明製品が存在する。

(1) 斜面①（436）

斜面①からは銭が出土した。436は直径2.4cm、中央に一辺0.6cmの方形の孔が開く。貨銘は読み取れない。

(2) ＳＨ９（433）

ＳＨ９からは蓋などのつまみあるいは棒状の製品の先端と考えられる銅製品が出土した。433は現在の高さ1.8cmで下方を欠損している。宝珠形の頭部から0.5cm下に直径1.8cmの鍔が付くが一部を残して欠損している。下部内面は空洞になっている。異物が付着している。

３．鉄滓（図版51）

鉄滓は椀形鍛冶滓と粒状滓が出土した。椀形鍛冶滓は14点、粒状滓は99.1ｇある。粒状滓については、椀形鍛冶滓・焼土や炭が存在した遺構を中心に部分的にサンプルを採取し、磁石により選別した。特に定量を決めていないため、ここに示した出土数量では多い少ないは論じられない。

(1) 平坦面Ｃ（438）

平坦面Ｃからは椀形鍛冶滓１点が出土した。小形の不整円形である。表面は黒色ガラス質滓が付着している。内部は層状になっている。

(2) ＳＫ３

ＳＫ３からは粒状滓が出土した。粒状滓は25.4g出土した。

(3) ＳＨ４（439・440）

ＳＨ４からは椀形鍛冶滓が２点出土した。いずれも小形の不整四角形である。

(4) ＳＨ６（441）

ＳＨ６からは椀形鍛冶滓と粒状滓が出土した。椀形鍛冶滓は１点出土した。表面には白色礫が混じる黒色ガラス質滓が付着しており、裏面は気泡がめだつ。粒状滓は0.9g出土した。

(5) ＳＫ４

ＳＫ４からは粒状滓が出土した。粒状滓は10.5g出土した。

(6) 斜面⑦（442）

斜面⑦からは椀形鍛冶滓１点が出土した。小形の不整円形である。表裏とも気泡および小石の混入はみられない。

(7) 平坦面Ｅ（446・448・449・451）

平坦面Ｅからは椀形鍛冶滓４点が出土した。446は小形の不整円形である。表面は平坦、裏面は緩やかな弯曲をなす。裏面には気泡がめだつ。448は不整楕円形を呈する。表面中央部は窪み、周辺端部に向かって裏面は緩やかに立ち上がる。出土品中最も大きく、重い。表面には白色礫が付着している。449はほぼ円形を呈する。表面は平坦、裏面は緩やかな弯曲をなす。451は不整楕円形で表面には黒色ガラス質滓が付着している。

(8) ＳＨ10（447）

ＳＨ10からは椀形鍛冶滓と粒状滓が出土した。椀形鍛冶滓は１点出土した。表面には白色礫混じりの黒色ガラス質滓が付着している。気泡は少ない。粒状滓は6.7g出土した。

(9) ＳＨ11（445）

ＳＨ11からは椀形鍛冶滓１点が出土した。不整五角形で、表面は気泡および気孔が目立つ。

(10) ＳＨ12（450）

ＳＨ12からは椀形鍛冶滓１点が出土した。不整五角形で、裏面は土が厚く付着している。粒状滓はサンプルを採取し、磁石により選別したが、検出できなかった。

(11) ＳＫ12（443・444）

ＳＫ12からは椀形鍛冶滓と粒状滓が出土した。椀形鍛冶滓は２点あり、いずれも不正楕円形である。443は上面が窪んでいる。裏面および側面は気泡がめだつ。444は厚みがある。粒状滓は55.6g出土した。

(12) ＳＫ13

ＳＫ13からは粒状滓が出土した。粒状滓は0.8g出土した。

４．鞴羽口（163・225）

鞴羽口は２点出土した。いずれも細片であり、全形はわからない。163は先端部分の破片で先端に向かってすぼまっている。外面に煤が付着している。外径5.6cmで、孔径3.4cmを測る。ＳＫ12出土。225は中央部分の破片で「ハ」字形に開く。ＳＨ９出土。

第4節　石器

下西山遺跡から出土した石器類は縄文時代草創期から古代にかけてのもので、弥生時代中期と古墳時代後期から飛鳥時代にかけてのものが中心である。種類は有舌尖頭器・石鏃・楔形石器・穂摘具・石錐・砥石がある。

1．打製石器（図版52）

(1) 有舌尖頭器（501）

器表面は、押圧剥離による丁寧な調整を行っている。返しの部分は顕著につくり出さず、滑らかにした部に至っている。平坦面E出土。

(2) 石鏃（502～504）

石鏃はいずれもサヌカイト製で、凸基式（502）と平基無茎式（503）と凹基無茎式（504）がある。502の裏面の一部には調整剥離を施さない素材剥離面を残す部分もある。503・504は調整剥離によって器面が精緻に調整されている。

(3) 楔形石器（506～508）

楔形石器は相対する2辺に二次加工を施している。

(4) 穂摘具（510）

紅簾片石製で両端は折れている。刃部は鋭くないが、磨滅が著しい。斜面④出土。

2．磨製石器（図版52）

(1) 石鏃（505）

磨製石鏃は1点出土している。平基無茎式で表面の先端部分と裏面の基部部分に未研磨部分を残す。平坦面E出土。

(2) 穂摘具（509）

磨製の穂摘具は1点出土している。紐穴部分を欠く破片で、全体の形状は扁平な半月形が想定できる。全体に良く研磨されており、刃部は片刃である。平坦面D出土。

3．砥石（図版53）

使用した面を認める個体は6点ある。511は凝灰岩製の荒砥で長軸方向は欠損している。表裏に最大幅0.4cm、深さ0.2cmの溝がある。縄文時代草創期の有溝砥石の可能性もある。ＳＤ５から出土。512は厚みの薄い小形の砥石である。平坦面E出土。513は緻密な粘板岩製で仕上げ砥。本来、幅3.1cm、厚さ1.5cm、長さ8.5cmで作られ、両端は切離し時の擦り切り溝と切断痕跡が未調整のまま残る。使用面は4面で研ぎ減りしており、軽い弯曲をもつ。ＳＨ５から出土。514は幅1.4cm、厚さ1.2cm、長さ5.4cmの小形の提砥で、上端に直径0.4cmの孔を穿っている。使用面は4面で細かい研ぎ傷がある。斜面⑧から出土。515は砂岩製の粗砥。使用面は4面であるが、うち1面はほとんど研ぎ減りしていない。斜面⑦出土。516は凝灰質砂岩製の粗砥。使用面は3面で研ぎ減りしており、弯曲をもつ。1面には条痕のみが残る。斜面⑧出土。

第５章　自然科学的調査の成果

第１節　下西山遺跡の考古地磁気学的研究

１．はじめに

岩石や土には、鉄の酸化物の磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3、ベンガラ）が１－３％程度含まれている。これらは磁石になることができる磁性鉱物である。実際には、磁鉄鉱や赤鉄鉱の鉄原子が少量のチタン原子に置き代わってできたチタン磁鉄鉱（$(Fe,Ti)_3O_4$）や、チタン赤鉄鉱（$(Fe,Ti)_2O_3$）であることが多い。これらの磁性鉱物は加熱されて高温になり、ある温度に達すると、磁石になる性質（磁性）を失い、それ以上の高温では非磁性の状態となる。この温度はキュリー点（Curie point）と呼ばれており、それぞれの鉱物できまっている。この反応は可逆的で磁性を失った高温の状態から冷えて、キュリー点まで温度が下がった瞬間に再び磁性を取り戻し、磁石になる。磁鉄鉱のキュリー点は578℃、赤鉄鉱のそれは670℃、チタン磁鉄鉱やチタン赤鉄鉱のキュリー点はチタンの含有量が増えるにしたがって低くなる。通常のチタン磁鉄鉱は、560℃程度のものが多い。

このような‘加熱－冷却’の過程が、地球磁場が存在している地球上の地点で行なわれると、磁性鉱物は冷却中にその時のその場所での地球磁場の方向と同じ向きに磁化される。こうして獲得された磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略してＴＲＭ）という。これらの鉄（およびチタン）の酸化物の熱残留磁化は、常温では磁気的に非常に安定なものが多く、何百万年経っても残留磁化の方向や強さは変わらずに保持され続ける。このため、過去のある時期に焼かれた焼土は、その当時の、その場所の地磁気の方向を、熱残留磁化の形で現在まで記憶していることになる。このように焼土が保有しているＴＲＭは、いわば、過去の地磁気を記録している眼に見えない‘地磁気の化石’といえるものである。

考古学的な遺跡に残されている炉跡や窯跡、焼土坑などの焼土遺構から測定試料を採取して、このような‘地磁気の化石（ＴＲＭ）’を測定し、考古学が扱う過去の時代の地磁気の変動の様子を明らかにする研究を考古地磁気学（Archeomagnetism）という。

２．地磁気永年変化

地球磁場は、地球上の地点ごとに少しずつ違っている。磁石の針が指す北（磁北）の方位は、地理学的な北（真北）から東または西に少しずれている。このずれの角度を偏角（declination）という。また、磁気コンパスの磁針は水平面内で廻るように針の重心から少しずれたところで支えているので水平に向いているが、実際の地球磁場は相当大きく水平から傾斜した方向に傾いている。この傾斜角は伏角（inclination）と呼ばれており、緯度が高くなるほど大きくなる。このように地球磁場は３次元のベクトルであるため、通常、偏角と伏角と磁場強度（全磁力、total force という）で表わすことになっている。現在、日本では偏角は鹿児島の5.5°西偏から稚内の10°西偏まで、また、伏角は鹿児島の44°から稚内の59°まで変化しており、三田市付近では偏角は西偏6.5°、伏角は48°程度である。

地球磁場の方向は、このように場所ごとに異なっているとともに、非常にゆっくりとではあるが時間的にも変化している。したがって、時代が異なれば地球磁場方向も違ったものになっている。このよう

な地磁気の変化を地磁気永年変化（geomagnetic secular variation）と呼ぶ。

地磁気を直接観測して地球磁場の方向（偏角と伏角）が求められたのは、英国のロンドンで16世紀の後半に始められた継続的観測が最古の記録となるが、それにも明らかに地磁気の永年変化は見られる。しかし、それ以来400年以上の観測結果をもってしても、地磁気永年変化の周期はわかっていないので、もっと長いものであるらしい。

日本では、北陸・東海地方から九州北部に至る西南日本の各地に分布する遺跡から焼土試料が採集され、考古地磁気測定が行なわれた結果、過去2,000年間については相当詳しい考古地磁気永年変化曲線が得られている（Hirooka、1971; 広岡、1977）。

この永年変化曲線によると、西暦１世紀頃は偏角（declination）が西偏し、伏角（inclination）は比較的浅い値を示す。３～４世紀には著しい東偏の偏角と深い伏角となり、６世紀は著しい西偏偏角、７世紀は西偏偏角で深い伏角が特徴的である。８世紀から10世紀にかけては、偏角は西偏のままで時代が下るにしたがって伏角が浅くなり、その後、13・14世紀には東偏偏角、深い伏角となる。15～16世紀にかけては伏角が時代とともに急激に浅くなるのが特徴である。17世紀には東偏偏角と浅い伏角であったのが、20世紀にかけて偏角の東偏は減じて西偏に転じ、伏角は少し深くなり現在に至っている。このように地磁気の方向は時代ごとにその特徴が変わる。焼成年代が不詳の焼土の残留磁化方向を測定して、上記の永年変化と照合することによって、考古地磁気学的に年代を推定することができる。これが考古地磁気年代推定法である。

３．測定試料の採取

三田市では、相野窯跡群（広岡ほか、1992）、平方遺跡（広岡ほか、1993）などで考古地磁気測定の例がある。今回は、下西山遺跡の住居跡の竈や焼土面の試料を採取し、考古地磁気測定を行なったので、その結果を報告する。

ＳＨ３・４・５・９・10・11・12の竈、ＳＨ６・10・13の床面の焼土、ＳＫ４と平坦面Ｅ西端の焼土の計12の遺構から試料を採取した。試料を採取した遺構名と試料個数、試料番号は第１表にまとめられている。

考古地磁気測定によって焼土の磁化方向を精度よく求めるためには、試料として採取した焼土が遺構中でどのような方位をとっていたかを詳しく測っておかなければならない。このときの方位測定の正確さが、測定結果の精度を左右する。また、焼土の磁化そのものが採取部位によって少しずつ異なっているので、統計的に処理できる個数が必要である。試料個数は多いほど統計的精度は向上するが、余り数が多いとサンプリングにも磁化測定にも時間を要し、多くの遺構について考古地磁気データを得るには実用的でない。そのため、私たちの研究グループでは、遺跡現場での試料の方位測定の精度がよくて、しかも、余り長い時間を要しないサンプリング法として、次に述べるような石膏を用いる方法を採用している。

第１表　下西山遺跡の考古地磁気試料番号

遺構名	個数	試料番号
ＳＨ５竈	12	ＡＨ　1～ 12
ＳＫ４	12	ＡＨ　21～ 32
ＳＨ３竈	10	ＡＨ　41～ 50
ＳＨ４竈	15	ＡＨ　61～ 75
ＳＨ６床面焼土	13	ＡＨ　81～ 93
ＳＨ12竈	13	ＡＨ　101～113
ＳＨ10竈	12	ＡＨ　121～132
ＳＨ10床面焼土	12	ＡＨ　141～152
ＳＨ９竈	12	ＡＨ　161～172
ＳＨ13床面焼土	14	ＡＨ　181～194
ＳＨ11竈	12	ＡＨ　201～211
平坦面Ｅ西端焼土	12	ＡＨ　221～232

Latitude（緯度）　：　34° 54' 22. 70" N
Longitude（経度）：135° 12' 05. 93" E
Dp = -6.78°

試料採取の手順は次のように行なう。

1）まず、焼土面のよく焼けている部分を選んで、試料として採取する焼土（こぶし大）の周りに深さ数cmの溝を掘る。このとき、焼土が動かないように、根の部分が遺構につながったままの状態が保たれるように気を付ける。溝が掘り上がったら、土片や土埃をきれいに取り除いておくことが肝要である。

2）次いで、多めの水で溶いた石膏をその部分にかけ、全体がくずれないようにする。その後、濃いめに溶いた石膏を焼土の表面にのせ、数cm角のアルミ板を押し付けて石膏の上面に平面をつくる。

3）石膏が固まった後に、アルミ板をはがして、石膏平面の最大傾斜線の方位（これをpitchという）とその傾斜角（dip）を考古地磁気用の特製クリノメーターで測り、野帳に記録する。石膏平面には、その面の走向（strike）と傾斜方向を示す3点と試料の番号を油性マーカーで記す。

4）1本刃の手鍬を用いて石膏で固めた試料を遺構から掘り起こす。

5）試料の裏面にも石膏をかけて補強した後、1個ずつ壊れないように紙で包む。

通常、遺構の大きさにかかわらず、1遺構当りこのような試料を10～15個採取して、研究室に持ち帰る。

試料の方位（pitch）の測定はクリノメーターの磁針を用いているので、測った値は磁北が真北からずれている分だけ、すなわち、遺跡現場の現在の偏角の分だけずれた値となっている。これを補正するためには遺跡現場でのこのずれの角度を知らなければならない。そのために、トランシットを用いて太陽の方位観測を行なった。観測点の緯度・経度と観測時刻がわかれば、理科年表に記載されているその日の太陽の天球上の位置（赤経・赤緯）を用いて計算することによって、その時刻の太陽の方位角を求めることができる。この方位角は真北を基準にした方位角である。一方、遺跡現場では、トランシットの磁針を用いて磁北を基準にとり、太陽の方位を観測する。観測から得られた方位角と計算によって求まった方位角の差が遺跡現場の磁針のずれの角（現在の偏角）を与えることになる。

今回は、下西山遺跡の現場で太陽の方位観測を行ない、現在の偏角値（Dp）として西偏6.78°を得た。個々の試料の磁化測定の結果については、全てこの値を用いて補正を行なった。

4．残留磁化の測定およびその結果

残留磁化の測定には、夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM-85型）を使用した。測定は6回置直し法で行なった。

測定試料に含まれる磁性鉱物は色々な種類のものから構成されており、中には磁気的な安定性に劣るものも含まれている場合が多い。特に、十分な高温にまで熱せられていない場合には不安定成分が多くなる傾向がみられる。これらの不安定な磁化成分の中には、最終焼成が行なわれて熱残留磁化を獲得した時以来、現在に至るまで常に地球磁場に曝され続けているため、後世の地球磁場の影響を受けて磁化方向を変えるものがでてくる。このような磁化成分は焼成時の地磁気の化石とはいえないものになっているので、それらを消去し、最終焼成当時の地磁気の方向を忠実に記録している安定な磁化成分のみを選び出すことが必要となる。

不安定な磁化成分を効果的に消去する実験的手段として、試料を交番磁場の中に置いて磁気的に揺するという交流消磁実験が考案されており、今回の試料についても交流消磁実験を行なった。遺構から採取してきた試料が持っている残留磁化（これを自然残留磁化、natural remanent magnetization、略してNR

第2表　下西山遺跡ＳＨ５竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ	1	-68.7	-22.1	0.450
＊	2	-39.6	25.8	0.146
	3	-81.1	73.5	0.166
＊	4	152.1	47.8	0.228
＊	5	114.1	49.4	0.173
＊	6	-8.0	12.9	0.175
＊	7	-36.5	27.0	0.176
＊	8	-140.3	43.2	0.346
	9	17.8	68.8	0.364
	10	-28.1	59.0	0.292
	11	-24.3	65.6	0.343
	12	-28.5	75.1	0.313

＊：統計計算の際に除外したもの。

第3表　下西山遺跡ＳＨ５竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ	1	-51.4	-12.8	0.388
＊	2	3.0	31.3	0.141
	3	-18.1	55.0	0.151
＊	4	129.9	50.0	0.102
＊	5	146.7	62.9	0.0731
＊	6	-32.4	0.5	0.146
＊	7	-57.4	-6.5	0.0717
＊	8	-137.3	38.3	0.228
	9	0.5	54.2	0.235
	10	-12.0	57.8	0.189
	11	-18.5	45.6	0.225
	12	-23.4	53.0	0.206

＊：統計計算の際に除外したもの。

第4表　下西山遺跡ＳＨ５竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ	1	-52.9	-21.7	0.339
＊	2	6.7	21.3	0.101
	3	-17.0	50.9	0.100
＊	4	124.3	25.5	0.0856
＊	5	95.2	68.2	0.0376
＊	6	-37.5	-3.2	0.110
＊	7	-56.4	-18.8	0.0522
＊	8	-135.7	28.3	0.208
	9	6.0	52.6	0.181
	10	2.2	54.3	0.150
	11	-18.3	45.0	0.170
	12	-15.0	50.3	0.169

＊：統計計算の際に除外したもの。

第5表　下西山遺跡ＳＫ４のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ	21	21.7	74.0	0.457
	22	6.8	57.9	2.18
＊	23	-147.4	74.7	0.348
	24	-13.7	61.0	0.620
	25	16.5	51.8	0.516
	26	-4.8	70.6	0.316
＊	27	-133.2	-46.3	0.416
＊	28	-131.8	65.8	0.501
＊	29	158.1	53.1	0.199
	31	-10.1	59.7	0.580
	32	-7.0	67.1	0.380

＊：統計計算の際に除外したもの。

第6表　下西山遺跡ＳＫ４の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ	21	-12.8	65.6	0.334
	22	-1.3	54.2	1.80
＊	23	-113.2	64.0	0.263
	24	-10.5	52.5	0.488
	25	6.9	49.1	0.471
	26	-4.3	59.8	0.249
＊	27	-126.6	-66.2	0.456
＊	28	-132.2	62.0	0.352
＊	29	143.0	34.1	0.0968
	31	-5.6	61.8	0.382
	32	-7.4	48.0	0.301

＊：統計計算の際に除外したもの。

第7表　下西山遺跡ＳＫ４の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ	21	-8.8	64.2	0.227
	22	3.6	53.4	1.56
＊	23	-109.6	64.0	0.223
	24	-6.9	48.8	0.414
	25	9.4	47.2	0.413
	26	-7.2	56.6	0.204
＊	27	-142.0	-70.3	0.480
＊	28	-132.7	56.9	0.284
＊	29	137.8	32.3	0.0753
	31	-11.0	60.2	0.310
	32	-1.1	47.7	0.262

＊：統計計算の際に除外したもの。

第８表　下西山遺跡ＳＨ３竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊	AH 41	44.1	52.8	2.31
	42	-4.2	76.2	4.69
	43	22.7	65.5	0.786
	44	-23.6	74.3	0.670
	45	-1.9	64.8	0.680
	48	-16.7	55.2	0.619
＊	49	7.1	32.5	0.450
	50	-5.9	60.2	0.169

＊：統計計算の際に除外したもの。

第９表　下西山遺跡ＳＨ３竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊	AH 41	45.9	56.0	1.79
	42	15.7	59.8	4.04
	43	-12.2	51.1	0.432
	44	-11.1	50.9	0.425
	45	-16.0	61.2	0.419
	48	3.6	46.8	0.384
＊	49	28.9	4.7	0.360
	50	-17.7	56.8	0.112

＊：統計計算の際に除外したもの。

第10表　下西山遺跡ＳＨ３竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊	AH 41	53.5	54.7	1.59
	42	13.7	59.0	3.51
	43	-15.1	45.4	0.326
	44	-13.0	52.6	0.340
	45	-16.4	64.2	0.324
	48	3.1	47.2	0.265
＊	49	27.2	1.3	0.334
	50	-0.3	53.8	0.0923

＊：統計計算の際に除外したもの。

第11表　下西山遺跡ＳＨ４竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
	AH 61	54.7	50.0	0.259
	62	60.0	48.8	0.294
	63	36.1	49.4	0.316
＊	64	76.3	31.0	0.587
＊	65	73.5	54.4	0.270
	66	68.4	37.0	0.527
＊	67	38.0	34.4	0.347
	68	55.7	38.4	0.392
＊	69	54.4	19.7	0.607
	70	56.8	27.4	0.531
＊	71	42.7	6.8	0.286
＊	72	51.8	40.2	0.382
	73	48.3	40.1	0.411
	74	59.3	32.6	0.552
	75	55.1	35.5	0.426

＊：統計計算の際に除外したもの。

第12表　下西山遺跡ＳＨ４竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
	AH 61	12.1	49.9	0.171
	62	22.9	53.0	0.178
＊	63	9.1	58.8	0.167
＊	64	57.9	37.4	0.240
＊	65	26.5	57.5	0.149
	66	16.4	50.4	0.241
＊	67	-4.8	36.6	0.211
	68	7.7	44.6	0.191
＊	69	12.2	26.8	0.205
	70	20.9	45.5	0.267
＊	71	25.3	3.6	0.158
	72	9.8	47.9	0.211
	73	5.0	50.8	0.227
	74	16.9	46.3	0.256
	75	15.9	44.1	0.242

＊：統計計算の際に除外したもの。

第13表　下西山遺跡ＳＨ４竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
	AH 61	4.5	52.1	0.145
	62	4.8	52.1	0.159
	63	-2.9	54.5	0.147
＊	64	49.9	40.2	0.175
＊	65	21.1	61.5	0.136
	66	-2.5	49.7	0.197
＊	67	-11.0	30.3	0.189
	68	0.2	46.8	0.155
＊	69	0.0	30.7	0.160
	70	-2.1	47.7	0.216
＊	71	10.5	29.9	0.0953
	72	-9.3	43.1	0.190
	73	-3.2	51.8	0.201
	74	0.8	48.1	0.221
	75	2.2	46.2	0.205

＊：統計計算の際に除外したもの。

第14表　下西山遺跡ＳＨ６床面焼土のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 81	6.3	63.3	0.624
82	-19.3	58.0	0.918
83	-5.0	65.0	1.84
84	-7.3	58.1	0.670
85	1.7	63.3	0.968
＊ 86	33.0	44.4	0.309
88	-15.9	61.5	1.48
＊ 90	15.6	41.2	0.103
＊ 91	20.3	30.6	0.0766
＊ 92	6.5	44.3	0.0904

＊：統計計算の際に除外したもの。

第15表　下西山遺跡ＳＨ６床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 81	-12.8	69.2	0.434
82	-15.9	58.6	0.548
83	-14.8	60.3	1.41
84	-7.7	60.6	0.519
85	-0.2	61.2	0.574
＊ 86	55.0	-31.2	0.147
88	-15.3	63.4	1.07
＊ 90	-2.1	48.1	0.0757
＊ 91	62.7	68.5	0.0531
＊ 92	0.0	51.1	0.0555

＊：統計計算の際に除外したもの。

第16表　下西山遺跡ＳＨ６床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 81	-19.0	63.4	0.301
82	-16.5	58.4	0.332
83	-15.6	60.6	1.05
84	-9.3	58.9	0.428
85	-4.8	61.7	0.410
＊ 86	64.5	-44.4	0.179
88	-15.6	61.7	0.793
＊ 90	0.9	54.3	0.0659
＊ 91	121.1	51.9	0.0470
＊ 92	-2.5	46.7	0.0457

＊：統計計算の際に除外したもの。

第17表　下西山遺跡ＳＨ12竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 101	-7.4	41.9	0.158
＊ 102	-20.2	32.1	0.160
103	-1.4	45.0	0.227
104	-2.5	41.8	0.260
105	4.3	42.3	0.252
＊ 106	20.5	63.3	0.342
＊ 107	6.2	-0.8	0.525
＊ 108	-175.4	57.1	0.208
＊ 111	-27.2	-46.1	0.613
＊ 112	-19.6	50.9	0.192
113	-4.5	46.9	0.353

＊：統計計算の際に除外したもの。

第18表　下西山遺跡ＳＨ12竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 101	-0.9	42.2	0.152
102	5.4	30.7	0.145
103	8.4	55.1	0.185
104	5.6	43.5	0.235
105	6.9	43.5	0.251
106	4.7	53.7	0.261
＊ 107	12.8	7.2	0.486
＊ 108	167.5	41.4	0.182
＊ 111	-21.2	-47.1	0.479
112	-17.0	50.0	0.155
113	0.7	42.7	0.255

＊：統計計算の際に除外したもの。

第19表　下西山遺跡ＳＨ12竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 101	-6.8	41.7	0.130
102	-15.9	14.0	0.111
103	3.6	49.8	0.149
104	8.7	42.2	0.185
105	10.8	40.8	0.215
106	6.5	48.2	0.213
＊ 107	10.3	1.1	0.399
＊ 108	161.1	41.0	0.166
＊ 111	-24.4	-47.5	0.379
＊ 112	-22.0	50.1	0.127
113	0.7	46.1	0.203

＊：統計計算の際に除外したもの。

第20表　下西山遺跡ＳＨ10竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊ＡＨ 121	109.8	51.4	1.36
122	-7.4	66.9	1.61
123	1.4	74.8	2.35
＊ 124	53.3	58.5	0.482
＊ 126	-49.1	64.2	2.54
＊ 127	-155.8	52.1	1.47
128	0.0	53.8	2.44
129	-14.6	51.0	0.883
130	-8.6	69.0	11.8
131	-3.6	61.0	6.22
＊ 132	-33.7	59.1	2.50

＊：統計計算の際に除外したもの。

第21表　下西山遺跡ＳＨ10竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊ＡＨ 121	110.9	47.8	0.979
122	-15.9	66.0	1.36
123	-2.1	69.8	2.01
＊ 124	54.6	49.3	0.336
＊ 126	-54.8	63.1	2.44
＊ 127	-143.0	64.4	1.44
128	-7.5	56.7	2.44
129	-22.6	58.2	0.849
130	-9.5	67.0	11.7
131	-7.5	58.3	6.17
132	-26.6	58.5	2.39

＊：統計計算の際に除外したもの。

第22表　下西山遺跡ＳＨ10竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊ＡＨ 121	112.4	45.5	0.771
122	-18.0	64.1	1.13
123	-11.7	69.3	1.70
＊ 124	52.0	49.1	0.262
＊ 126	-55.5	62.0	2.04
＊ 127	-141.8	62.2	1.17
128	-3.7	57.8	2.32
129	-26.0	58.3	0.686
130	-12.3	68.1	10.3
131	-5.8	59.6	5.31
132	-34.8	65.6	1.71

＊：統計計算の際に除外したもの。

第23表　下西山遺跡ＳＨ10床面焼土のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 141	-11.1	53.7	0.394
＊ 142	16.2	8.7	0.962
＊ 143	-64.9	44.3	0.270
144	-23.9	46.5	0.664
145	-25.2	60.5	0.507
＊ 146	-145.6	78.6	0.625
147	-21.1	40.8	1.02
148	-7.4	51.9	0.403
＊ 149	-164.7	38.2	1.53
＊ 150	33.9	65.1	0.622
＊ 151	37.3	57.8	0.204
152	-7.8	43.7	0.172

＊：統計計算の際に除外したもの。

第24表　下西山遺跡ＳＨ10床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 141	-3.5	52.3	0.229
＊ 142	16.5	3.0	0.924
＊ 143	-62.9	47.3	0.217
144	-24.4	45.0	0.642
145	-31.1	55.9	0.411
＊ 146	-165.2	73.9	0.539
147	-21.1	42.0	0.903
148	-0.6	49.9	0.316
＊ 149	-170.6	33.2	1.38
150	10.3	59.2	0.426
151	-3.6	48.4	0.142
152	-4.2	38.9	0.136

＊：統計計算の際に除外したもの。

第25表　下西山遺跡ＳＨ10床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 141	-6.5	49.6	0.170
＊ 142	14.4	2.7	0.791
＊ 143	-63.1	43.3	0.166
144	-24.9	46.1	0.556
145	-31.7	58.5	0.318
＊ 146	-153.5	68.6	0.461
147	-18.9	42.2	0.694
148	8.0	51.9	0.222
＊ 149	-168.5	33.2	1.21
150	13.8	61.5	0.302
151	-18.6	43.5	0.111
152	-5.5	45.2	0.107

＊：統計計算の際に除外したもの。

第26表　下西山遺跡ＳＨ９竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ 161	-82.7	30.7	0.174
162	-19.0	59.2	1.28
163	-23.4	46.8	0.471
164	3.9	57.1	1.11
165	-21.9	62.8	11.5
167	15.8	50.9	0.153
168	-34.1	47.9	8.90
＊ 169	-44.1	-59.4	5.66
＊ 170	-150.9	-18.4	1.04
＊ 171	123.7	49.1	0.421

＊：統計計算の際に除外したもの。

第27表　下西山遺跡ＳＨ９竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ 161	-86.9	0.8	0.142
162	-19.4	54.9	1.07
163	-17.5	52.5	0.324
164	2.1	57.0	0.834
165	-21.8	64.6	11.3
167	5.1	59.4	0.132
168	-20.0	52.0	8.65
＊ 169	-40.8	-60.0	5.51
＊ 170	-156.2	-23.1	1.08
＊ 171	126.8	33.2	0.302

＊：統計計算の際に除外したもの。

第28表　下西山遺跡ＳＨ９竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
＊ＡＨ 161	-97.2	-5.9	0.149
162	-17.9	57.5	0.931
163	-9.8	52.3	0.245
164	5.4	55.1	0.646
165	-20.4	65.9	10.5
167	2.2	57.9	0.0979
168	-21.0	52.1	7.81
＊ 169	-43.5	-60.6	5.04
＊ 170	-154.2	-30.4	1.05
＊ 171	129.8	30.7	0.273

＊：統計計算の際に除外したもの。

第29表　下西山遺跡ＳＨ13床面焼土のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ 181	-22.0	70.6	1.68
＊ 182	-83.2	68.6	0.508
183	-0.4	63.5	5.34
184	-11.8	59.2	4.52
185	-15.1	62.2	0.415
186	-17.3	71.4	0.318
＊ 187	-53.7	74.6	0.409
188	0.0	55.6	0.532
＊ 189	97.0	9.4	2.87
＊ 190	81.1	61.9	0.435
191	-36.7	66.4	0.359
＊ 192	22.5	51.5	0.0198
＊ 193	62.7	63.1	0.0111

＊：統計計算の際に除外したもの。

第30表　下西山遺跡ＳＨ13床面焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ 181	0.5	72.0	1.47
＊ 182	-72.0	70.0	0.42
183	0.9	61.8	5.08
184	-11.3	59.7	4.26
185	-19.0	63.8	0.295
186	-22.2	76.1	0.209
＊ 187	-55.9	87.0	0.271
188	2.8	53.5	0.485
＊ 190	48.3	63.7	0.219
＊ 192	18.5	47.4	0.0150
＊ 193	76.5	61.9	0.00800

＊：統計計算の際に除外したもの。

第31表　下西山遺跡ＳＨ13床面焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10^{-4} Am^2／kg）
ＡＨ 181	0.5	72.1	1.17
＊ 182	-85.7	65.5	0.340
183	-5.5	62.3	4.37
184	-9.9	59.6	3.50
185	-18.4	64.5	0.228
186	-6.8	79.1	0.157
＊ 187	-149.6	84.6	0.212
188	0.9	53.0	0.442
190	40.8	65.0	0.121
192	20.2	48.6	0.0129
＊ 193	86.5	54.4	0.00716

＊：統計計算の際に除外したもの。

第32表　下西山遺跡ＳＨ11竈のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 201	-4.0	56.6	0.725
* 202	-69.9	19.9	0.795
203	-24.3	57.0	0.981
* 204	-75.8	85.1	2.48
* 205	-90.0	49.9	0.633
206	2.8	45.3	0.293
207	-26.6	70.0	2.04
* 208	-23.9	-14.5	0.400
* 209	16.2	22.9	0.727
* 210	-1.0	5.9	0.377
* 211	15.6	82.4	1.12

＊：統計計算の際に除外したもの。

第33表　下西山遺跡ＳＨ11竈の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 201	11.9	63.8	0.528
203	-20.6	61.9	0.812
* 204	-65.6	85.2	2.23
* 205	-107.2	50.4	0.531
206	7.8	50.0	0.239
207	-21.0	70.8	1.73
* 208	-32.7	-6.1	0.325
209	16.9	39.2	0.550
* 210	-2.1	5.9	0.292
* 211	83.7	86.4	0.955

＊：統計計算の際に除外したもの。

第34表　下西山遺跡ＳＨ11竈の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 201	9.3	58.0	0.367
203	-27.1	60.0	0.668
* 204	-80.8	85.2	1.93
* 205	-121.7	43.9	0.445
206	13.0	48.8	0.203
207	-17.9	69.9	1.42
* 208	-31.4	-20.9	0.278
209	18.4	36.6	0.438
* 210	-2.3	-21.6	0.196
* 211	139.6	83.8	0.755

＊：統計計算の際に除外したもの。

第35表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
ＡＨ 221	1.4	56.7	0.233
223	6.7	63.5	0.255
224	1.9	57.6	0.523
225	-7.5	49.6	0.150
* 226	-22.3	76.8	0.148
227	18.3	51.6	0.556
* 228	-35.3	64.2	5.29
230	-8.0	60.7	0.422
231	16.3	70.4	0.159
232	20.2	62.4	0.396

＊：統計計算の際に除外したもの。

第36表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊ＡＨ 221	-20.6	49.7	0.159
223	-2.8	63.6	0.192
224	-10.8	55.6	0.369
225	-13.1	56.2	0.0935
226	-4.7	69.4	0.0938
227	-0.5	61.7	0.440
228	-25.2	66.5	4.95
230	-21.8	62.1	0.378
231	-4.6	55.6	0.118
* 232	14.1	58.3	0.237

＊：統計計算の際に除外したもの。

第37表　下西山遺跡平坦面Ｅ西端焼土の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²／kg）
＊ＡＨ 221	-26.4	50.0	0.116
223	-4.2	62.3	0.167
224	-2.4	55.4	0.297
225	-7.9	51.4	0.0780
226	-14.3	65.2	0.0819
227	4.2	60.9	0.344
* 228	-28.5	66.6	4.12
230	-4.1	61.0	0.237
231	-7.4	57.6	0.100
232	-11.1	61.7	0.152

＊：統計計算の際に除外したもの。

第38表　下西山遺跡の考古地磁気測定結果

遺構名		消磁段階	n／N	D（°E）	I（°）	α_{95}（°）	K	平均磁化強度（$\times 10^{-4}$ Am²／kg）	
ＳＨ５竈									
		ＮＲＭ	5／12	-26.0	70.8	12.44	38.8	0.296	
	【	2.5mT	5／12	-14.5	53.4	6.75	129.4	0.201	】
		5.0mT	5／12	-9.0	51.1	7.64	101.2	0.154	
ＳＫ４竈									
		ＮＲＭ	7／11	1.2	63.7	7.36	68.2	0.721	
	【	2.5mT	7／11	-4.5	56.0	5.71	112.8	0.575	】
		5.0mT	7／11	-2.4	54.2	5.94	104.3	0.484	
ＳＨ３竈									
		ＮＲＭ	6／8	-4.8	66.7	8.49	63.2	2.31	
	【	2.5mT	6／8	-6.3	55.0	7.69	76.8	0.969	】
		5.0mT	6／8	-4.7	54.2	8.22	67.4	0.810	
ＳＨ４竈									
		ＮＲＭ	9／15	55.4	40.2	6.59	61.9	0.412	
		2.5mT	9／15	14.2	48.2	3.20	259.5	0.220	
	【	5.0mT	9／15	0.2	49.9	2.21	541.5	0.183	】
ＳＨ６床面焼土・竈									
		ＮＲＭ	6／10	-7.1	61.8	4.58	214.9	1.08	
		2.5mT	6／10	-11.1	62.3	3.93	291.6	0.759	
	【	5.0mT	6／10	-13.4	60.9	2.63	648.2	0.552	】
ＳＨ12竈									
	【	ＮＲＭ	5／11	-2.3	43.6	3.69	431.9	0.250	】
		2.5mT	8／11	1.9	45.4	6.56	72.3	0.205	
		5.0mT	6／11	4.0	45.0	4.93	185.6	0.183	
ＳＨ10竈									
		ＮＲＭ	6／11	-6.1	62.9	8.00	71.1	4.22	
	【	2.5mT	7／11	-13.7	62.3	5.06	143.3	3.85	】
		5.0mT	7／11	-15.7	63.6	5.17	137.2	3.31	
ＳＨ10床面焼土									
	【	ＮＲＭ	6／12	-15.9	49.7	7.44	82.1	0.527	】
		2.5mT	8／12	-10.2	49.6	7.69	52.8	0.401	
		5.0mT	8／12	-11.3	50.6	8.17	46.9	0.310	
ＳＨ９竈									
		ＮＲＭ	6／10	-13.5	55.4	10.85	39.1	3.90	
	【	2.5mT	6／10	-12.1	57.2	6.68	101.7	3.72	】
		5.0mT	6／10	-10.0	57.2	6.73	100.0	3.37	
ＳＨ13床面焼土									
	【	ＮＲＭ	7／13	-13.3	64.6	5.98	102.7	1.88	】
		2.5mT	6／13	-6.7	64.8	7.81	74.5	1.97	
		5.0mT	8／12	3.8	64.1	8.90	39.7	1.25	
ＳＨ11竈									
	【	ＮＲＭ	4／11	-10.5	57.9	14.61	40.5	1.01	】
		2.5mT	5／11	2.7	58.1	14.95	27.2	0.772	
		5.0mT	5／11	3.3	56.0	16.14	23.4	0.619	
平坦面Ｅ西端焼土									
		ＮＲＭ	8／10	5.4	59.5	6.08	84.1	0.337	
		2.5mT	8／10	-10.3	61.6	4.57	147.8	0.829	
	【	5.0mT	8／10	-5.8	59.5	3.56	243.5	0.182	】

n／N：採択試料個数／採取試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、
α_{95}：フィッシャーの信頼角、K：フィッシャーの精度係数。
【 】：考古地磁気データとして採用したもの。

Mという）を測定した後、段階的に交番磁場強度を上げていく段階交流消磁が一般的である。

交流消磁には夏原技研製の交流消磁装置（DEM-8601C型）を用い、消磁磁場強度2.5mTと5.0mTの２段階で消磁を行なった。段階ごとに、消磁実験が終わると残留磁化を測定し、磁化方向のばらつき具合や磁化強度の減少度を検討し、最も効果的に不安定な残留磁化成分を消去できた段階（最適消磁段階）を判定した。

十分な高温（キュリー点以上の）にまで加熱されていると磁化強度は強くなり、10^{-4}～10^{-3}（Am^2/kg）の値となる。また、磁化方向のまとまりもよくなる。

今回の試料のＮＲＭおよび各消磁段階の残留磁化の測定結果は、通常のよく焼けた窯跡の場合と比べると、磁化方向のまとまりはあまりよくなく、大きく外れている試料がいくつかあった。また、磁化強度も弱いものが多かった。温度が十分に上がらなかったものが含まれているためであろう。

各段階の磁化測定の結果は第２～37表にまとめられている。表中に＊印が付されている試料は、まとまった磁化方向から大きく磁化が外れているものであることを示し、平均磁化方向を求める統計計算の際にはこれらの試料は除外した。

平均磁化方向を求める統計処理には、フィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いた。各段階ごとに、平均偏角（Ｄ）、平均伏角（Ｉ）、フィッシャーの信頼角（α_{95}）、フィッシャーの精度係数（Ｋ）、平均磁化強度を計算する。段階ごとに統計計算に用いた試料の個数（ｎ）と採取試料数（Ｎ）も加えて、その結果が第38表に示されている。

α_{95}は測定データから考えられる真の磁化方向が95％の確率で存在する範囲を示すもので、その範囲は、計算によって得られた平均磁化方向を中心にその周り±α_{95}の角度内であることを意味している。この角度は小さいほどまとまりがよいことを示し、よく焼けて磁化方向のまとまりがよい古窯の場合には、α_{95}の値は３°より小さくなる。Ｋは個々の試料の磁化のばらつきの程度を表わすパラメータで、値が大きいほど磁化方向のばらつきが少ないことを表し、古窯の場合には、通常500以上の値となる。各消磁段階で、磁化強度、磁化方向などを考慮して過去の地磁気の記録ではないと思われる試料を除外して、Ｄ、Ｉ、α_{95}、Ｋを計算し、α_{95}が最も小さく、Ｋが最も大きくなる段階を最適消磁段階として、そのときの測定結果を考古地磁気データとして採用する。

最適消磁段階でみても、40～600代の値をとっており、磁化方向のまとまりがあまりよくないことを示している。第38表中で、【　】でくくってあるのが最適消磁段階のものである。

第38表の最適消磁段階の結果を見ると、ＳＨ11竈は個々の試料の磁化方向のばらつきが大きく（α_{95}＝14.61°）、偏角の変動幅が35°、伏角のそれが25°の永年変化では、年代の推定は難しい。

５．考古地磁気年代の推定

西南日本の考古地磁気学的測定から得られた過去2,000年間の考古地磁気永年変化曲線（Hirooka、1971; 広岡、1977）に、今回得られた下西山遺跡の焼土の測定結果（第38表）をプロットすると、第１図のようになる。

第１図では黒丸が各遺構の平均磁化方向を表し、α_{95}（フィッシャーの95％レベルの信頼角）は黒丸を囲む円として示されている。永年変化曲線が三田市付近の過去の地磁気変動を正しく表しているとすると、黒丸に最も近い永年変化曲線の部分の年代が、考古地磁気学的に推定される遺構の年代となる。また、この推定年代の年代幅（誤差）はα_{95}の円に覆われる曲線の線分の長さで示される。図に明らか

なように、今回得られた下西山遺跡の各焼土の考古地磁気測定結果は、焼土ごとに相当大きく磁化方向が違っていることがわかる。永年変化曲線の最も近い部分の年代から考古地磁気年代の推定をする。

上記のようにして第１図から考古地磁気年代を推定すると、推定年代値は次のようになろう。

ＳＫ４	：A.D. 1150 ± 80年	又は	A.D. 720 ± 70年
		又は	A.D. 130 ± 30年
ＳＨ３竈	：A.D. 720 ＋ 80年	又は	A.D. 1120 ±100年
	－ 170年	又は	A.D. 120 ± 50年
ＳＨ４竈	：A.D. 105 ± 20年	又は	A.D. 1830 ± 40年
		又は	A.D. 1110 ± 60年
ＳＨ５竈	：A.D. 580 ± 70年	又は	A.D. 700 ±100年
ＳＨ６床面焼土	：A.D. 660 ± 30年		
ＳＨ９竈	：A.D. 700 ＋ 80年		
	－ 140年		
ＳＨ10竈	：A.D. 660 ± 40年		
ＳＨ10床面焼土	：A.D. 560 ± 60年	又は	A.D. 800 ＋300年
			－ 90年
		又は	A.D. 50 ± 30年
ＳＨ11竈	： －		
ＳＨ12竈	：A.D. 460 ± 40年		
ＳＨ13床面焼土	：A.D. 660 ± 40年		
平坦面Ｅ西端	：A.D. 680 ± 30年		

推定年代値が複数あるものは、先に挙げた年代値の方が考古地磁気学的には可能性が高い。

引用文献

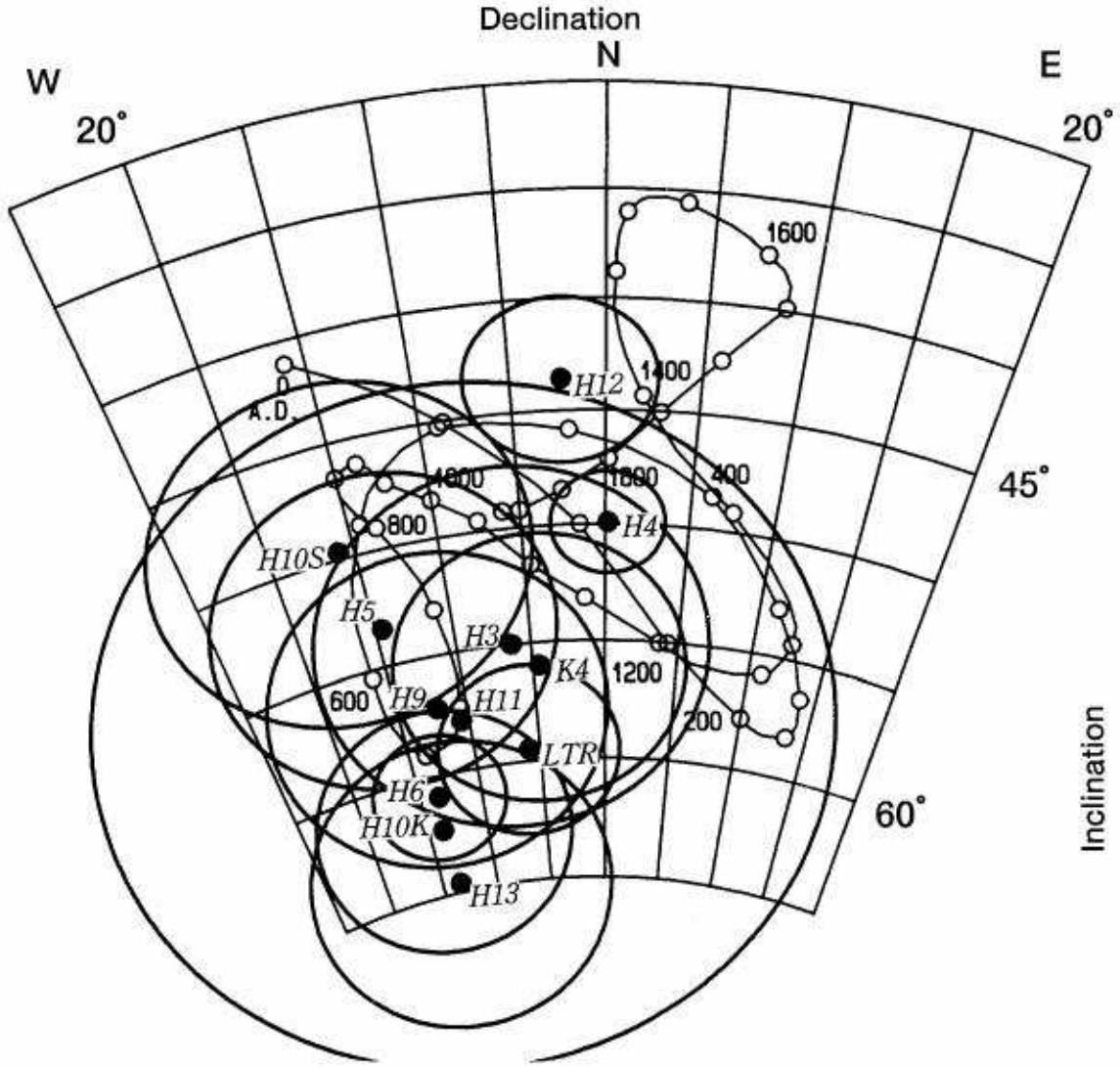
Fisher, R. A.（1953）"Dispersion on a sphere", Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol. 217, 295-305.

Hirooka, K.（1971）"Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan", Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., ser. Geol. &Mineral., vol. 38, 167-207.

広岡公夫（1977）「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」『第四紀研究』vol. 15, 200-203.

広岡公夫・吉村勝之・森定　尚（1992）「三田市相野窯跡群の考古地磁気測定」『相野古窯跡群』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（ＸⅧ）（本文編）兵庫県文化財調査報告　第115冊　兵庫県教育委員会541-549.

広岡公夫・塩浜修一・森定　尚（1993）「三田市平方遺跡の考古地磁気測定」『三田市北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅲ 兵庫県文化財調査報告　第125冊　兵庫県教育委員会162-168.



Ｋ４：ＳＫ４　　Ｈ３：ＳＨ３竈　　Ｈ４：ＳＨ４竈　　Ｈ５：ＳＨ５竈　　Ｈ６：ＳＨ６床面焼土
Ｈ９：ＳＨ９竈　　Ｈ10Ｋ：ＳＨ10竈　　Ｈ10Ｓ：ＳＨ10床面焼土　　Ｈ11：ＳＨ11竈
Ｈ12：ＳＨ12竈　　Ｈ13：ＳＨ13床面焼土　　ＬＴＲ：平坦面Ｅ西端焼土

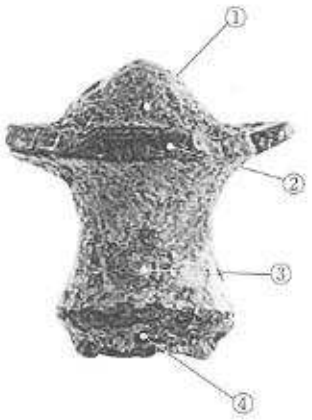
第１図　下西山遺跡の焼土の考古地磁気測定結果と西南日本版考古地磁気永年変化曲線（広岡、1977）

第２節　下西山遺跡出土の銅製品の分析

飛鳥時代の竪穴建物跡ＳＨ９より出土している銅製品は、その形状から何かの蓋のつまみ部分と考えられる。保存処理にあたって、事前に担当の岡本が奈良国立文化財研究所において、埋蔵文化財センター遺物処理研究室の肥塚隆保室長の指導と助言を得て蛍光Ｘ線分析による材質調査を行った。

１．試料調査の方法

調査は、奈良国立文化財研究所において行った。試料が小さく表面の風化が進みもろいため、エネルギー分散型微小点蛍光Ｘ線分析装置（株式会社テクノス社製ＴＲＥＸ650）を用いた非破壊による調査のみにとどめた。ターゲットはモリブデン（Mo）、管電圧45kv、管電流0.3mA、測定時間300sec、コリメーターは１mmφを使用し大気圧中で測定した。対象試料の全体的な表面の色調は、白色を帯びた淡緑色を呈し風化が進んでいると思われる。破損している断面は濃緑色を呈している。測定個所は、第２図の様に比較的風化の進んでいない表面の部分２ヶ所を選び、破断面は鍔状部分とつまみ基部の新しいなるべく平滑な部分２ヶ所を対象として下記の条件で実施した。破断面についても試料がもろかったため、研磨は行わず表面分析にとどめた。測定の結果は右頁に示した図の通りである。

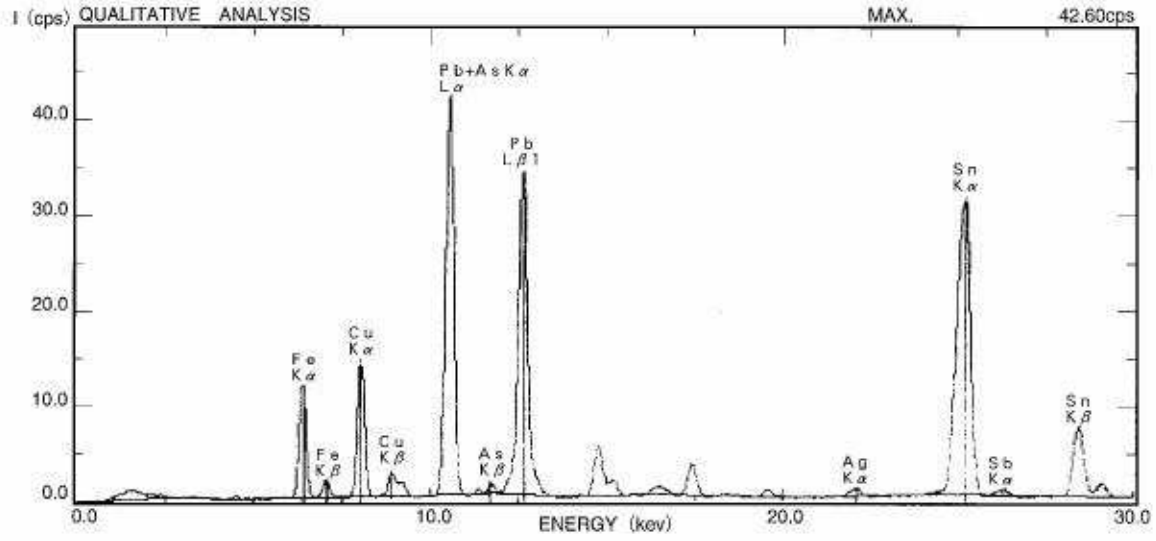


第２図　銅製品全体像と測定個所

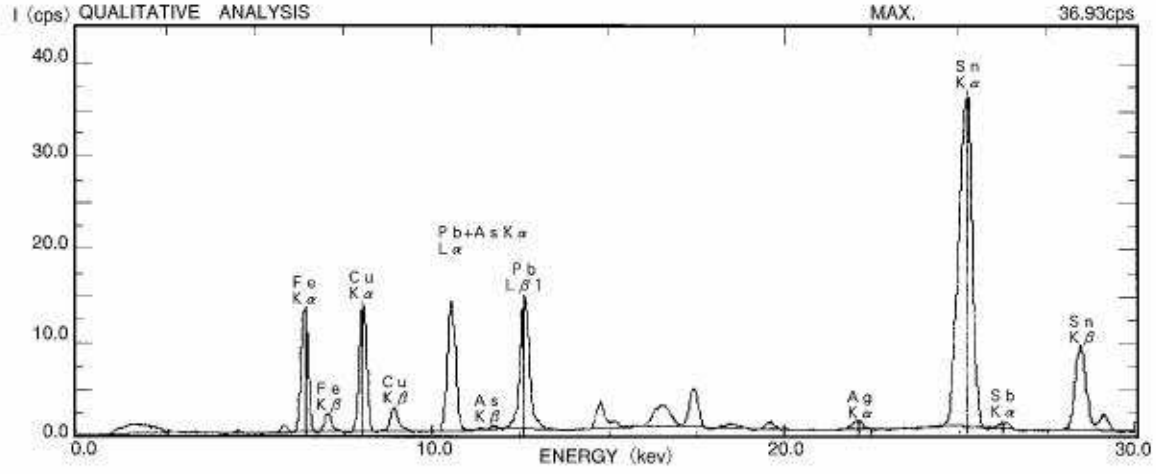
２．分析結果

蛍光Ｘ線分析は、特徴として試料の形状や表面状態が良好な場合には、再現性のよい定量的なデータを得ることが可能であるが、今回の試料のような表面が風化した状態のものからは、元素の定量分析までは行うことはできない。しかしながら試料の構成元素の傾向から試料の材質の特徴を得るための定性分析には効果的である。

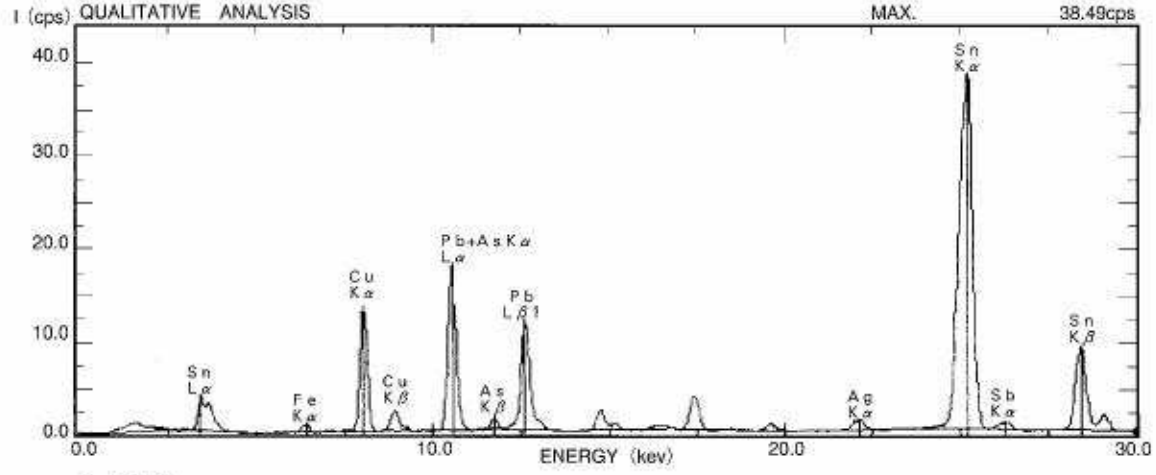
今回の分析の結果分析試料は、検出された元素から主に銅（Cu）と錫（Sn）を主成分とする青銅で、これに鉛（Pb）を含有していることがわかった。銅に比べて錫、鉛の分析値が高いのは風化に伴い酸化物となったときに銅より錫、鉛の酸化物の方が比較的残存しやすいためと考えられる。試料からは、その他に鉄（Fe）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ヒ素（As）もわずかに検出された。鉄については、試料が埋蔵されていた周囲の土の中に含まれていたものが試料中に取り込まれ検出されたものと考えられる。銀とヒ素は、今回の分析値を見る限りでは非常に微量であるため銅や鉛鉱石の不純物として混入したものと見られる。アンチモンは、最近、奈良の飛鳥池の富本銭や和同開珎に意図的に錫の代用として混入されていたとして注目されているが、今回の試料の場合は意図的なものではなく不純物として混入したものと思われる。



1．表面　淡緑色部



2．表面



3．断面部

第３図　蛍光Ｘ線定性分析スペクトル

第３節　下西山遺跡火葬墓内の炭化物の樹種同定

１．はじめに

遺跡より出土した木材に由来する遺物の樹種を調べることは、当時の人々の生活や環境を復元する上で重要である。下西山遺跡の火葬墓（ＳＸ３）の掘形内に充填されていた炭化物約1000点のうち、樹種が異なりそうな20点を肉眼で観察して抽出し実体顕微鏡で観察したところ、年輪幅に差があるもののすべて単列の放射性組織を持つ環孔材であり、同一の樹種であることがわかった。そこで最終的にどのような樹種であるか同定を行うためにプレパラートの調製を行った。

一般に木炭は、割裂により得られた３断面（木口面、板目面、柾目面）を走査型電子顕微鏡（ＳＥＭ）で観察することにより樹種の同定を行うことが可能である。しかしながら、極めて脆弱化した出土木炭の中には、割裂により粉状化するものもあり、観察が困難である場合がある。今回の出土木炭もこのような例であったため、樹種同定にあたっては、試料の木炭をブロック状に切り出したものをＳＥＭによって観察する方法と木炭片を材の３方向（木口面、板目面、柾目面）に分割したものを透明エポキシ樹脂に包埋後、研磨して薄切片プレパラートを作成する２つの方法で同定を試みた。試料は、複数の樹種があるのか確認するために樹種の異なりそうなものを無作為に選び出した。

２．プレパラートの調製

(1) 走査型電子顕微鏡（ＳＥＭ）観察用試料の調製

①ＳＥＭのチャンバー内に入る大きさにすると共に木口、板目、柾目の方向にあうように向きを調整したもの（５㎜立方ほどの大きさ）を試料台の上に導電性の炭素テープで固定した。

②これらの試料を金蒸着させたものを観察に用いた。

(2) 光学顕微鏡観察用プレパラートの調製

①試料を木口切片、板目切片、柾目切片の３つに分割する。

②アセトンで３倍に希釈したシアノアクリレート系瞬間接着剤（商品名：東亜合成化学、ボンドアロンアルファ）溶液の中に試料を浸けて１昼夜置く。

③直径12㎜の塩化ビニールチューブを長さ２㎝ほどに切ったものの片側の切り口をホットプレートで溶かして平坦にしたものを用意し、それらをタッパーウエアの蓋にセルロース系接着剤（商品名：セメダインＣ）で貼り付け、仮固定する。

④塩化ビニールチューブの中に試料をそれぞれの向きに定めて置き、アロンアルファで固定する。

⑤透明エポキシ樹脂（アイ・エヌ・テクニカルラボ製、主剤：硬化剤＝２：１）を十分に攪拌したものを真空デシケータ中で減圧し樹脂内の気泡を抜いた後に塩化ビニールのチューブの型枠に流し込む。

⑥⑤で作成した試料を真空デシケータに入れ１時間ほど脱気し、樹脂中の気泡を抜き去る。更に減圧下で１昼夜放置する。

⑦ダイヤモンドカッターで５㎜ほどの厚さに切断したものを⑤で使用した透明エポキシ樹脂でプレパラートに貼り付けた後、鉛の錘を乗せて確実に固定する。

⑧プレパラートに固定した試料を耐水サンドペーパー研磨する。800番から始めて2000番まで細かくしていき、切片の厚さが10μｍ以下になるまで研磨し、最終はラッピングフイルム（住友３Ｍ製）で仕上げる。

３．観察結果

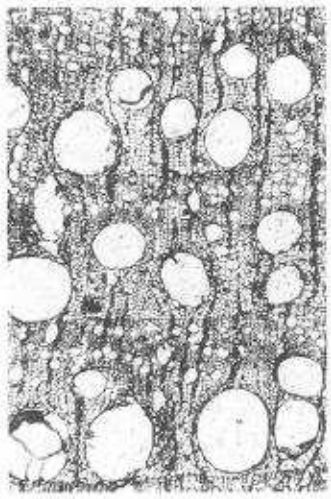
対象となる木炭は極めて脆弱なものであったため、今回の薄切片調製法では、木口面しか調製することができなかった。木口面の顕微鏡写真を第４図①に示す。また、割裂により得られた木口面、柾目面、および板目面のＳＥＭによる観察画像をそれぞれ第４図②～④に示す。残念ながら上述の理由により、割裂によっても良好な断面を得ることができなかった。

木口面（第４図①と②）の道管配列から、この木炭が環孔材であることがわかる。孔圏の道管は複合しておらず、多列を形成する傾向があり、径は500μｍ程度である。道管内にはチロースを認める。

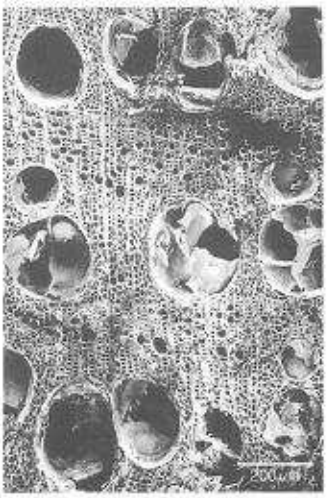
板目面（第４図④）において、放射組織が単列であることが明らかである。道管の穿孔は単穿孔であることが認められる。

柾目面（第４図③）については、道管穿孔が単穿孔であることがわかるのみで、道管と放射組織との間の壁孔についての情報を得ることができなかった。

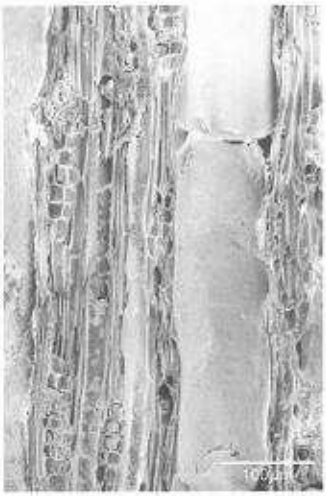
以上の観察結果から、樹種を特定することは困難であるが、広葉樹環孔材であることは間違いない。また、孔圏道管（径約500μｍ）が多列を形成する傾向があること、孔圏外道管の径が減少傾向にあること、チロースが存在すること、放射組織が単列であることなどを考えあわせると、クリ（Castaned crenata）の可能性が高いといえよう。



① 木口面



② 木口面



③ 柾目面

④ 板目面

第４図　ＳＸ３出土木炭の顕微鏡写真

第４節　小結

自然科学的分析は遺構について考古地磁気の年代測定を行い、遺物については銅製品の材質分析と炭化材の樹種同定を行い、大きな成果を得た。

考古地磁気の年代測定は竪穴建物跡の竈や土坑の被熱部分など12箇所について、富山大学理学部地球科学教室の広岡公夫氏に依頼し行った。ＳＨ９から出土した銅製品の材質分析を奈良国立文化財研究所肥塚隆保氏に、ＳＸ３被覆炭化材の樹種同定を奈良国立文化財研究所の高妻洋成氏に依頼し行った。

この他に、地滑りＳＸ７について通産省工業技術院地質調査所の寒川旭氏に現場において所見をいただいた。蔵骨器ＳＸ３出土の人骨は京都大学霊鳥類研究所片山一道氏に実見していただき、所見をいただいた。これらについては本文中に所見を参考に記述した。

１．考古地磁気における年代測定

考古地磁気における年代測定は、平方窯跡で実施したような良好な状況ではなく、磁化強度が弱いものが多い。考古学的な遺物から導き出される年代が考古地磁気学的に推定される年代の範囲内にあるものは、ＳＨ９竈・ＳＨ10竈・ＳＨ６床面・ＳＨ３竈・ＳＨ５竈・平坦面Ｅ西端・ＳＫ４である。ただし、７世紀前半の多くの遺構の考古学的年代は、考古地磁気学的推定年代の新しい方に偏っている。

考古学的な遺物から導き出される年代が考古地磁気学的に推定される年代の範囲内にないものは、ＳＨ４竈・ＳＨ12竈・ＳＨ10床面・ＳＨ13床面である。これらはＳＨ11竈で良好なデーターを得られなかったと同様に磁化データーが良好でなかったためと思われる。

今回、窯跡以外の遺構においても考古学的遺物の年代と考古地磁気年代との比較ができたことは大きな成果である。

２．銅製品の成分分析

ＳＨ９出土の銅製品は蛍光Ｘ線の定性分析によって行い、主に銅と錫を主成分とする、いわゆる青銅であることが判明した。資料の条件により、定量分析ができなかったため微量成分の詳細は不明であるが、７世紀前半における銅製品の材質分析を行った意義は大きい。また、下西山遺跡において青銅製品が出土したことは遺跡の性格を考えるうえで大きな意味をもつ。

３．蔵骨器被覆炭化材

ＳＸ３の蔵骨器被覆炭化材の樹種同定は採集した炭化材の一部を任意で抽出して行った。その結果、広葉樹環孔材でクリである可能性が高いことを確認した。ごく、一部の樹種同定のためすべてがクリであるかは不明である。クリは広葉樹であり、当時の近隣の森林に一般的に生えていた樹種の一種と考えられ、特別なものではなかったと思われる。

第６章　まとめ

第１節　下西山遺跡の検討

１．遺物の検討

出土遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、鉄製品、石製品などがある。

この中で、遺跡を検討する上で重要な弥生土器、飛鳥時代から奈良時代の土器、土製品、鉄製品などについて検討する。

(1) 弥生土器

弥生土器の出土量は少なく、完形のものはない。また丘陵上に立地しているため、土器の表面の遺存状態は悪い。出土した土器の器種は、広口壺・直口壺・無頸壺・甕・甕蓋・高坏・器台などがある。

これらの弥生土器のうち、広口壺（１～５）・直口壺（119）・無頸壺（６～８）・甕（15・17）・高坏（９・10）の口縁部、広口壺（２～５）の頸部、器台（50）の脚部には凹線文を多く用いている。櫛描文は無頸壺（８）の口縁部・体部の波状文、広口壺（118）口縁端部の斜格子文、広口壺（２・118）の口縁内部の列点文のみであり、少ない。円形浮文は広口壺（２・118）の口縁端部に間隔を広くあけて単体で貼りつけている。

以上のような特徴から、下西山遺跡出土の弥生土器は弥生時代中期後半（Ⅳ様式）の中頃から後半に位置づけられる。これは同一遺跡と考えられる平方遺跡と同様である。

(2) 飛鳥時代の土器

下西山遺跡は古墳時代後期から奈良時代にかけての時代、特に飛鳥時代が中心となる。この時期の土器を見てみると、土師器と須恵器が存在する。報告書で図示した遺物は一部であるが、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器と須恵器の出土量は、土師器７％、須恵器93％で須恵器の比率が非常に高いことが判る。しかも土師器の構成比率は、食器類15％・煮沸具80％・貯蔵具５％と煮沸具が圧倒的に多い。須恵器の構成比率は、食器類86％・煮沸具１％以下・貯蔵具13％と食器類が圧倒的に多い。この比率は出土遺物全体をみても大差ない。

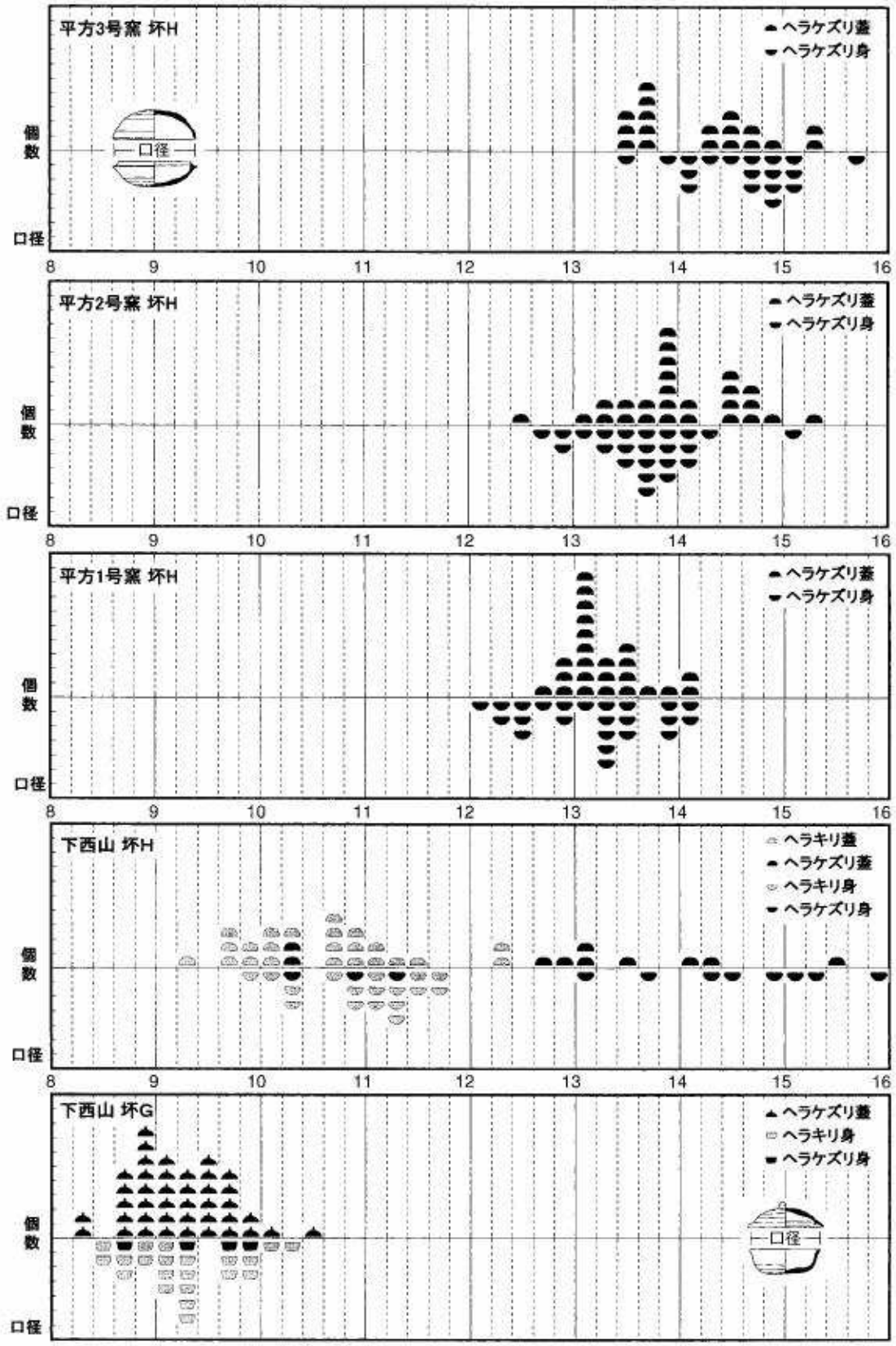
土師器と須恵器の構成比率は、氷上郡春日町七日市遺跡の分析で、丹波・播磨地域は須恵器の比率が高い事が指摘されており、摂津北部地域に位置する下西山遺跡も丹波・播磨地域と同様であることが指摘できる。

(3) 飛鳥時代の須恵器（第５図）

下西山遺跡の須恵器を考える上で隣接する平方窯跡群の資料が重要になってくるため、下西山遺跡と平方窯跡群出土の須恵器坏の口径や底部の調整を概観する。ここで言う口径とは坏Ｈ蓋については、従来の測点と同一であるが、坏Ｈ身は平方２号窯の窯詰め状況の組合せや下西山遺跡の身と蓋の融着状況から、受け部径と立ち上がり基部径との中間点を口径と呼称する。同じく坏Ｇ身は従来の測点と同一であるが、坏Ｇ蓋は端部と身受け基部径との中間点を口径と呼称する。

坏Ｈと坏Ｇは平方窯と下西山遺跡から出土した遺物で口径を基準に２mmごとの分布を積み重ねた図を作成した（第５図）。

平方３号窯は坏Ｈ蓋の口径が13.5cmから15.4cmで平均14.3cm、散在している。坏Ｈ身の口径は13.5cm



第5図　平方窯・下西山遺跡　坏H・坏G口径

から15.8cmで平均14.7cm、散在している。坏H全体の口径の平均は14.5cmである。天井部および底部はすべてヘラケズリを行っている。

平方2号窯は坏H蓋の口径は12.6cmから15.3cmで平均14.1cm、ピークは13.9cmから14.0cmである。坏H身の口径は12.8cmから14.4cmで平均13.7cm、ピークは13.7cmから13.8cmである。坏H全体の口径の平均は13.9cmであり、平方3号窯より口径が小さい。天井部および底部はすべてヘラケズリを行っている。

平方1号窯は坏H蓋の口径は12.7cmから14.1cmで平均13.3cm、ピークは13.1cmから13.2cmである。坏H身の口径は12.1cmから14.2cmで平均13.2cm、ピークは13.3cmから13.4cmである。坏H全体の口径の平均は13.2cmであり、平方2号窯より口径が小さい。天井部および底部はすべてヘラケズリを行っている。

下西山遺跡の坏Hの中で口径の残りの良いものが61点出土している。坏H蓋の口径は9.3cmから15.5cmで、幅広く分布している。口径が9.3cmから12.3cmの範囲に分布しているものは2点を除いて天井部にヘラケズリを行っておらず、口径が12.8cmから15.5cmの範囲に分布しているものはすべて天井部にヘラケズリを行っている。坏H身の口径は10.0cmから15.9cmで、幅広く分布している。口径が10.0cmから11.7cmの範囲に分布しているものは3点を除いて底部にヘラケズリを行っておらず、口径が13.2cmから15.9cmの範囲に分布しているものはすべて底部にヘラケズリを行っており、ほぼ平方3号窯から1号窯の分布範囲におさまる。

以上、口径の分析を行うと坏Hは平方3号窯→平方2号窯→平方1号窯と口径が小さくなり、下西山遺跡は平方3号窯・2号窯・1号窯全ての口径の領域と更に小さい口径の領域のものが存在している。口径の小さい領域のものはヘラケズリを行っておらず、新しい要素である。

下西山遺跡坏G蓋の口径は8.3cmから10.5cmで平均9.3cm、ピークは8.9cmから9.0cmである。坏G身の口径は8.6cmから10.2cmで平均9.3cm、ピークは9.3cmから9.4cmである。坏G全体の平均は9.3cmである。坏Gは下西山遺跡の坏Hのヘラケズリを行わない小さな一群より一回り小さな口径である。

坏Gが特に多く出土しているＳＫ2は蓋の口径が8.7cmから10.3cmで平均9.3cm、ピークは8.7cmから8.8cmである。身の口径は8.6cmから10.1cmで平均9.3cm、ピークは9.1cmから9.2cmである。坏G全体の平均は9.3cmである。

(4) 須恵器の変遷（第6図）

下西山遺跡で今回検出した遺構の時期および変遷を検討するうえで、最も普遍的な資料である土器を中心に編年を行う必要がある。ここでは最も多く出土している須恵器の坏を中心に考えて行く。先にも検討したように、遺物変遷の考え方は、口径の変化および底部あるいは天井部の調整技法と型式学的な変遷を考慮して下西山遺跡の6世紀末から7世紀初めにかけての飛鳥時代を7期に区分した。

Ⅰ期はＳＨ13と平方3号窯を基準とする時期である。

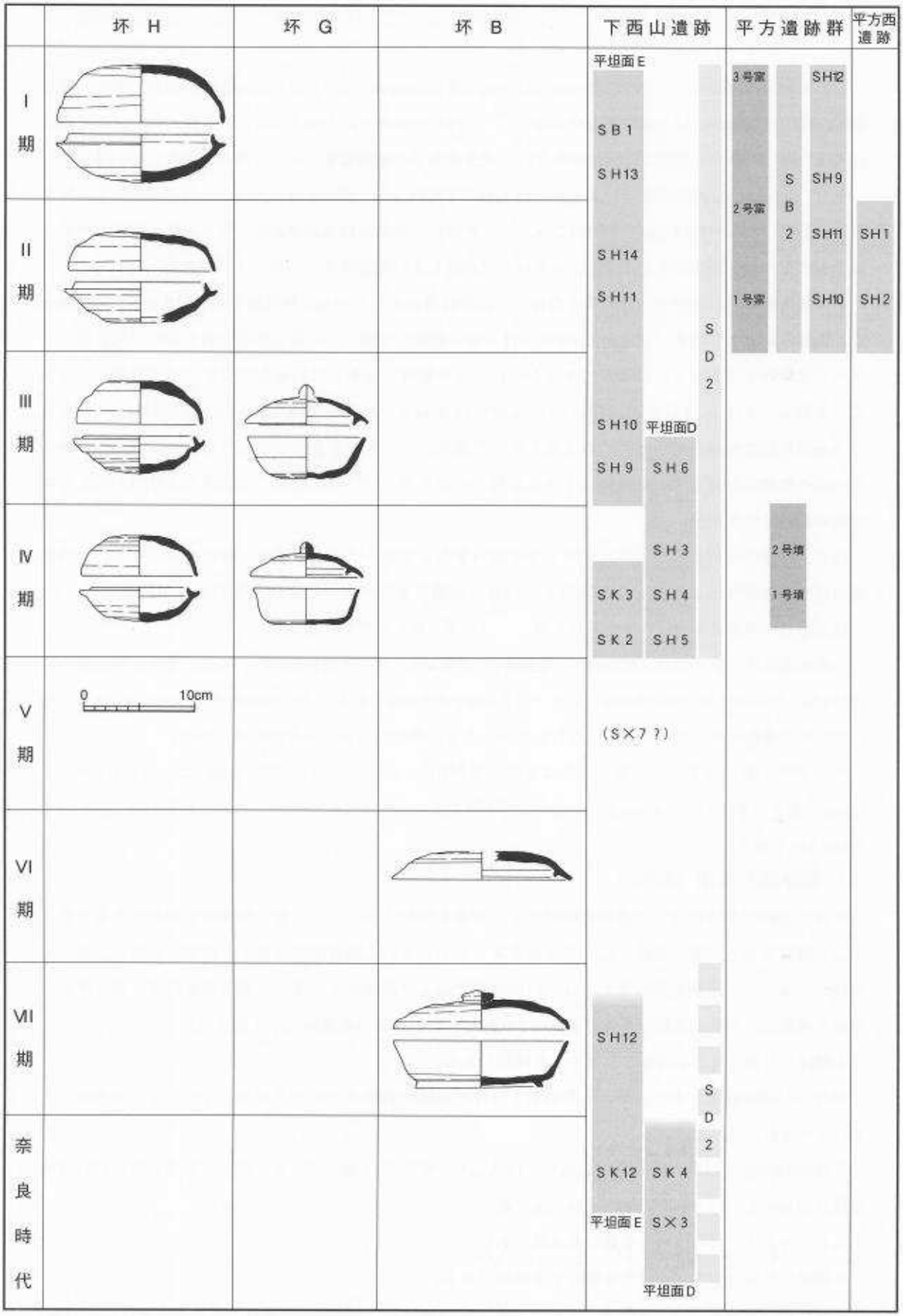
坏Hの口径が最大であり、蓋の天井部および身の底部の調整はヘラケズリを行っている。坏内面は仕上げナデを行っている。

ＳＨ13の坏Hの口径の範囲は13.5cmから15.9cmで、平均は14.9cmである。平方3号窯の坏Hの口径の範囲は13.0cmから15.8cmで、平均は14.5cmである。

なお、平方2号窯はⅠ期とⅡ期の過渡期である。

Ⅱ期はＳＨ11と平方1号窯を基準とする時期である。

ＳＨ11は坏H蓋が1点しか出土していないが口径13.0cmで、天井部の調整はヘラケズリを行っている。坏内面は仕上げナデを省略しているものが多い。坏H蓋は身受け部がやや上方を向き、立ち上がりが短



第6図　下西山遺跡出土須恵器坏の変遷および下西山遺跡・平方遺跡の遺構変遷

くなっている。平方１号窯出土の坏H蓋の口径の範囲は12.1cmから14.2cmで、平均は13.2cmである。

Ⅲ期はＳＨ10を基準とする時期である。坏Hの他に確実に坏Ｇが存在している。

ＳＨ10の坏Hの口径の範囲は11.1cmから11.7cmで、平均は11.5cmである。天井部および底部の調整はヘラケズリが省略されている。坏H身は身受け部が上方を向き、立ち上がりがさらに短くなっている。坏Ｇは蓋の口径が10.4cm、身の口径が9.6cmであり、Ⅳ期より口径が大きい。蓋は身受けのかえりが蓋本体より下に突出している。

Ⅳ期はＳＫ２とＳＨ３・ＳＨ４・ＳＨ５を基準とする時期である。

坏Hの口径が最小になる時期で、ＳＨ３・ＳＨ４・ＳＨ５の坏Hの口径の範囲は10.0cmから10.4cmで、平均は10.3cmである。天井部および底部の調整はヘラケズリが省略されている。坏H身は立ち上がりが内傾し、身受け端部との間が開いている。

坏Ｇの口径も最小になる時期で、口径の範囲は8.6cmから10.3cmで、平均は9.3cmである。

なお、ＳＫ２は坏H身は出土していない。坏H蓋としたものが一点のみであり、口径も大きいため、坏H蓋ではなく、身として使われた可能性が高い。

Ⅴ期は坏Hが無くなり、坏Ｇも無くなる可能性が高いが下西山遺跡では明瞭な資料は存在しない。

Ⅵ期は確実に坏Ｂが存在している。身受けのかえりのある蓋が出土している。資料が少ない。

Ⅶ期は坏Ｂが継続し、坏Ａも出土している。坏Ｂ蓋は身受けのかえりのないものである。

このように、下西山Ⅰ期からⅣ期は遺構・遺物が多く、平方窯跡の遺物と合わせると細かな変遷が考えられた。以上、下西山遺跡の遺物の変遷を見てきたが、当時の中心である飛鳥地域との対比をし、年代観を求めることとする。

下西山Ⅰ期は坏Hの口径の平均が14.5cmと小墾田宮ＳＤ050東区下層に口径値が類似し、飛鳥Ⅰ期の中でも古段階に位置付けられ、６世紀末から７世紀初頭に位置付けられる。

下西山Ⅱ期は坏Hの口径の平均が13.3cmと小墾田宮ＳＤ050東区下層と川原寺ＳＤ020などとの中間に位置付けられる。

下西山Ⅲ期は坏Hの口径の平均が11.5cmと飛鳥地域の川原寺ＳＤ020、山田寺ＳＤ619と整地土、甘橿丘東麓ＳＸ037、飛鳥池ＳＤ809に口径値が類似し、飛鳥Ⅰ期の中でも新段階に位置付けられる。ただし坏Ｇの詳細な伴出など問題となる点も多い。

下西山Ⅳ期は坏H・坏Ｇが存在し、坏Hの口径の平均が10.3cm、坏Ｇの口径の平均が9.3cmといずれも口径が最小になる。これは飛鳥Ⅱ期の坂田寺ＳＧ100の坏Hの口径の平均が10.35cmで最小口径であり、下西山Ⅳ期の口径10.3cmとほぼ同じである。また水落遺跡の坏Hの口径が9.4cmから10.4cm、坏Ｇの口径が7.8cmから9.4cmと下西山Ⅳ期の範疇に入る。７世紀中頃に位置付けられる。

下西山Ⅴ期は坏Hがなくなり、坏Ｇは継続すると思われるが、下西山遺跡には資料がない。飛鳥Ⅲ期に並行すると考えられる。

下西山Ⅵ期は坏Ｂが出現し、蓋は見受けのかえりのある蓋が中心になると考えられる。飛鳥Ⅳ期に並行すると考えられる。

下西山Ⅶ期は坏Ｂが継続し、蓋は見受けのかえりのない蓋が中心になると考えられる。飛鳥Ⅴ期に並行すると考えられ、７世紀末から８世紀初頭に位置付けられる。

(5) 土師器甕

ＳＸ３の蔵骨器に使用されていた土師器甕（160）の内面底部には当て具痕跡が存在する。

このような土師器甕の内面底部に当て具痕跡が存在する例は、下西山遺跡の隣接地の西山西遺跡、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡などがある。

甕ではないが、三木市法鑑遺跡出土の土師器窯から出土した甑の底部付近内面に当て具痕跡が残るものが存在する。

これらの時期は、西山遺跡が７世紀、丁・柳ヶ瀬遺跡と法鑑遺跡が７世紀後半から８世紀初頭と考えられている。

このような当て具痕跡を残す７・８世紀の甕の製作技法は土製や木製の当て具を使用した叩き技法もしくは型作り技法で作られたと考えられている。

特殊な叩き痕跡が残る甕（135）は、破片ではあるが外面が格子叩き痕であり、類似するものに、西山遺跡出土の甕がある。

西山遺跡出土の甕は外面格子叩き痕、内面は刻みのある当て具痕を残しており、須恵器の技法を用いている。一見、須恵器の生焼けの様にも見える。しかし、形態が長胴形であり、口縁形態も須恵器というより土師器に似通っている。時期は７世紀に位置付けられる。

下西山遺跡および西山遺跡出土の外面格子叩き痕の有る甕は、土師器を作る人と須恵器工人の交流あるいは朝鮮半島の韓式系土器との関連が考えられる。

(6) 円面硯

円面硯（194）は１点であるが、斜面⑤と平坦面Ｄから破片となって散乱していた。斜面⑤は平坦面Ｃの斜面であり、平坦面Ｄは下西山Ⅲ期から平坦面Ｃは下西山Ⅳ期からの造成であり、下西山Ⅳ期の位置付けができそうである。

三田市内では地福窯、南台遺跡、木器２号窯、西山遺跡群南ケ丘打上がり遺跡で陶硯が出土している。西山遺跡群南ケ丘打上がり遺跡は有馬郡衙などの官衙の性格が考えられており、地福窯・木器２号窯は須恵器窯である。

西山遺跡群南ケ丘打上がり遺跡出土の円面硯は下西山遺跡のものと形態などが極めて良く似ており、同一の窯の製品と考えられる。

(7) 土馬

土馬は２点出土しており、１点は脚のみ、１点は胴体のみであるが、胎土などから同一個体とは考えにくい。体部のみの１点（56）は飾馬で、中空である。残りは悪いが鞍などの表現をしている。

兵庫県の土馬は38遺跡、42例以上出土しており、そのうち確実に土師質で飾馬で時期が確定できるものは三木市田井野遺跡、明石市吉田南遺跡など７世紀から８世紀にかけてであり、下西山遺跡の例も確実な時期は確定できないが、７世紀代に位置付けられる。

(8) 鍛冶関連

鍛冶関連の遺物には椀形鍛冶滓・粒状滓・羽口・鉄製品・砥石などがある。

椀形鍛冶滓は平坦面Ｃ・ＳＨ４・ＳＨ６・斜面⑦・平坦面Ｅ・ＳＫ12・ＳＨ11・ＳＨ10・ＳＨ12から出土した。粒状滓はＳＫ３・ＳＫ４・ＳＫ７・ＳＨ６・ＳＨ10・ＳＫ13・ＳＫ12から出土した。羽口はＳＫ12・ＳＨ９から出土した。

鉄製品は斜面①・斜面④・平坦面Ｃ・平坦面Ｄ・ＳＨ５・ＳＨ４・斜面⑦・平坦面Ｄ・ＳＨ10・斜面

Eから出土している。鉄製品の種類は釘・鋤鍬先・鉈・斧・刀子などの農工具、鏃などの武器がある。また、鍛造途中品などの未成品や鏃でも折り曲げられたもの、器種不明の小破片など再利用品の可能性がある。

砥石は6点出土しており、粗砥石から仕上げ砥石まで各種揃っている。

出土遺物や内容から小鍛冶に関するものと考えられる。

2．遺構の検討

(1) 土坑

下西山遺跡の飛鳥時代から奈良時代の土坑はＳＫ2・ＳＫ3・ＳＫ4・ＳＫ12・ＳＫ13・ＳＫ8・ＳＫ7などがある。このうちＳＫ2はほとんど完形の須恵器5個体が出土しており、貯蔵用の土坑と考えられる。

そのほか、ＳＫ3・ＳＫ4・ＳＫ12・ＳＫ8は方形であり、ＳＫ13は楕円形、ＳＫ7は円形である。ＳＫ3の埋土は炭が多量に出土し、ＳＫ4とＳＫ12は炭・焼土が多量に出土した。ＳＫ12は椀形鍛冶滓、粒状滓および羽口が出土した。ＳＫ3とＳＫ4は、椀形鍛冶滓が出土しなかったものの、粒状滓が多量に出土した。ＳＫ3は焼土が見られなかったため廃棄土坑の可能性があるが、ＳＫ4とＳＫ12は鍛冶炉と考えられる。

ＳＫ13・ＳＫ7の埋土は炭がわずかに混じっている程度で焼土は認められなかった。わずかに粒状滓が出土しており、廃棄土坑と考えられる。

(2) 火葬墓（第7図）

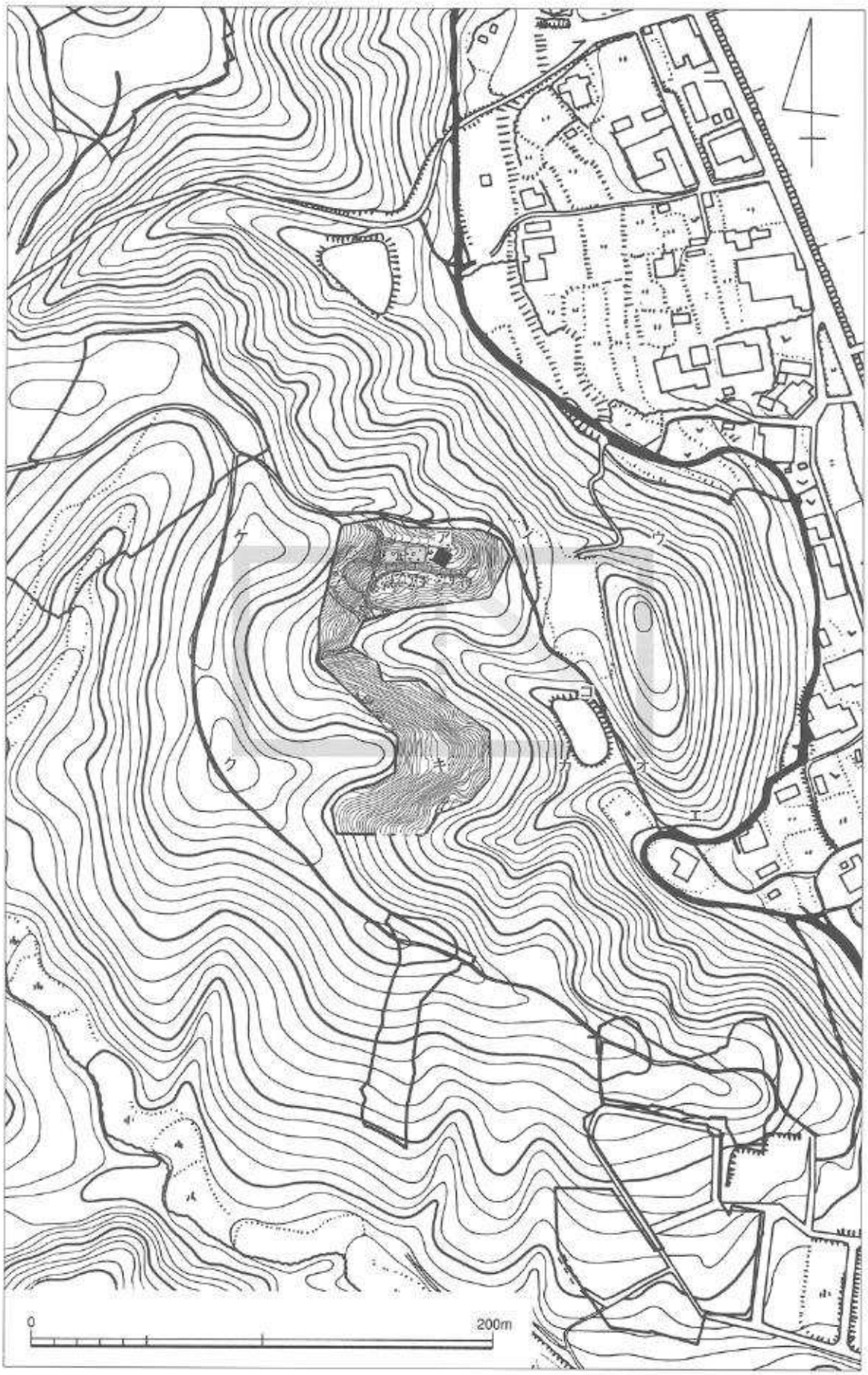
下西山遺跡の火葬墓ＳＸ3の選地は平坦面Ｄに位置している。

この場所の地形は、武庫川右岸の丘陵から開析する谷と尾根によって形成されている。火葬墓ＳＸ3（ア）は西から東に張り出た尾根（ケーイ）の先端に近い南向きの平坦地に位置し、南に向かって開けている。西側は丘陵の尾根（ケーク）が続き、東側は平野部に並行して南北に細長い独立丘（ウーエ）が存在している。南側にも離れたところに東に張り出した尾根（クーカ）が存在する。北辺（ケーウ）は約180 mの距離で、東西方向である。火葬墓ＳＸ3（ア）はその中点にあたる。西辺（ケーク）、東辺（ウーオ）は北辺の約1／2の距離の約90mである。これは、あたかも北・東・西の三方向を山に囲まれ、南に開けた東西180m、南北90mの墓域であり、その北辺（ウーケ）中央（ア）に火葬墓ＳＸ3は存在する。これは吉祥の立地を成しており、葬地に相応しい。

火葬墓ＳＸ3の方向は北から14°東に振っており、これは火葬墓ＳＸ3（ア）から南東方向に伸びる尾根（アーコ）を墓道として設置したため、やや振っていると考えられる。

なお、火葬墓ＳＸ3（ア）の南伸線と南辺との交点すなわち、南辺の中点（キ）の場所には人工的に手が加えられた平坦面Ｂが存在している。火葬墓ＳＸ3の標高は202.5m、平坦面Ｂの標高が約204mとほぼ同じである。平坦面Ｂは明瞭な遺構が存在せず、遺物が出土しなかったことから調査時点では不明な点が多かったが、今回の検討で火葬墓ＳＸ3に関連する遺構である可能性が高まった。

火葬墓ＳＸ3の構造は2尺四方の掘形に炭を敷き土師器甕の蔵骨器を正位で置いている。炭からは火葬骨片は2mm程度のもの数点が混入していたのみであることから火葬灰ではなく、別に用意した炭であると考えられる。蔵骨器の土師器甕は、二次焼成や炭化物付着の痕跡はなく、蔵骨器として用意されたものと考えられる。蓋は残っていない。



第7図　火葬墓ＳＸ３の選地

墓標や副葬品は存在していない。

選地や方形の掘形から古い様相が見られるものの、土師器の甕を蔵骨器に使い、副葬品がないことから地方的な様相がうかがえる。

下西山遺跡が所在する摂津国有馬郡内の古代火葬墓は三田市奈カリ与遺跡と神戸市北神ニュータウンNo.4地点の2例が調査されているが、選地や方形の掘形、炭を用いていることから、より丁寧な火葬墓と言えよう。下西山遺跡の火葬墓の被葬者は、周辺に7世紀中頃の単独墳が比較的多く存在していることから、在地の有力者が考えられる。

(3) 道路

道路ＳＤ２は武庫川の平野部から丘陵上の遺跡群を結ぶ道路である。形状は丘陵斜面に掘削されたＶ字状の溝であるが、地滑りＳＸ７で埋もれた部分で階段状の整形が認められたため道路とした。他に道路とした理由は平坦面Ｆ、平坦面Ｅ、平坦面Ｄ、平坦面Ｃへと続いているためであり、その先は丘陵頂上から北に進んで、平方遺跡群に続いている。下西山遺跡および平方遺跡群の開始時期は下西山Ⅰ期であり、道路ＳＤ２の開削と同じである。ともに一つの道路で結ばれた一つの遺跡群であると考えられる。その中でも平方遺跡群は須恵器生産を、下西山遺跡は小鍛冶の役割を担っていたと考えられる。

道路ＳＤ２の設置とともに下西山遺跡では平坦面Ｅの造成とＳＢ１の設置、平方遺跡群では3号窯の設置と脇の工房と考えられるＳＢ１とＳＨ12の大規模な造成が行われた様子がうかがえる。

集落内の道路遺構は、群馬県黒井峯遺跡で火山灰に埋もれた硬化した路面が調査されているほか、集落・生産地内の道路は京都府上人ヶ平遺跡などで調査されている。古墳の墓道は豊岡市北浦古墳群で調査されており、階段状遺構と呼ばれ、尾根上に溝を掘りステップを設けている点が下西山遺跡と同様である。

下西山遺跡の道路ＳＤ２は、集落・生産遺跡の中では掘削しステップを設け、集落造成を伴なっており、遺跡相互の関係をつかむ上でも重要である。

(4) 地滑り

地滑り痕跡ＳＸ７は平坦面Ｃの一部と斜面⑤の一部が崩壊し、道路ＳＤ２の一部と平坦面Ｅの西半分を埋めた。この地滑りは地震などが原因の自然災害、あるいは無理な造成が原因の人為的な災害などが考えられる。通産省工業技術院地質調査所の寒川旭氏に現地を見て頂いて、所見を得た。飛鳥時代後半から奈良時代にかかる地震は、綾部市青野西遺跡で観察される奈良時代前半で西暦701年（大宝元年）以降、744年（天平16年）までの地域的な地震の可能性もあるが、特定できない、とのことである。

規模が小さいことや、時代が下西山Ⅳ期以降、Ⅶ期以前（７世紀後半）であるため時期が合わない。またⅣ期は平坦面Ｃが造成され、ＳＫ２やＳＫ３が築かれた時期である。このため地震などの自然災害を考えるよりは、平坦面Ｃの土地条件を無視した無理な造成が原因であると考えた方がよさそうである。

(5) 鍛冶

下西山遺跡の竪穴建物跡と土坑の状況や出土遺物から鍛冶関連の遺構を抽出すると、Ⅱ期の竪穴建物ＳＨ11、Ⅲ期の竪穴建物ＳＨ10・ＳＨ９・ＳＨ６、Ⅳ期の竪穴建物ＳＨ４、Ⅶ期の竪穴建物ＳＨ12、奈良時代のＳＫ４・ＳＫ12の各遺構が存在する。

この状況をみると鍛冶はⅡ期から確実に始まっており、遺構が存在しない時期もあるが奈良時代まで継続している。ここで鍛冶の特色をみると、Ⅲ期からⅦ期の飛鳥時代は竪穴建物跡でそれぞれ特徴がある。ＳＨ10は竈の位置が北東コーナーにあり、中央部にも焼土が存在している。ＳＨ11・ＳＨ６・ＳＨ

４・ＳＨ３は竈の他に床面で火を受けて赤変した部分が存在するため、竪穴建物内で鍛冶作業を行った可能性がうかがえる。

奈良時代のＳＫ４とＳＫ12は方形の土坑である。土坑内は焼土や炭が多量にみられる。

以上のように、竪穴建物跡内の小鍛冶から土坑の小鍛冶に変化した様相が読み取れる。

(6) 下西山遺跡の造成（第８・９図）

下西山遺跡北地区の古墳時代後期から飛鳥時代にかけては、大規模な造成工事を行っている。第８図①の調査前の地形図を見ると、平坦面Ｃ・平坦面Ｄ・平坦面Ｅがわずかに平坦面を形成しており、地滑りＳＸ７の痕跡、道ＳＤ２、溝ＳＤ４の痕跡が見て取れる。

検出した遺構は第８図②のとおりであり、第８図①の調査前の地形図と比較すると古墳時代後期から飛鳥時代の地形様相をよく示している。

古墳時代後期から飛鳥時代の遺構面は地形を大きく改変しており、平坦面Ｃ・平坦面Ｄ・平坦面Ｅなど切土を行った部分とその土を利用して、盛土を行った斜面⑤・斜面⑦・斜面⑧などが存在する。また地滑りなどにより流失した部分も存在する。第９図③に示すとおりである。

これらの盛土を除去し、切土や流失土を考慮して、旧地形を復原すると第９図④に示すとおりであり、道ＳＤ２より西側は東向きの比較的急な傾斜であり、道ＳＤ２より東側は南向きの比較的傾斜の緩やかな斜面である。この傾斜変換地点に道路ＳＤ２を計画設定し、全体の遺構群を構築していったと考えられる。

３．遺構の変遷

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は検出していない。遺物は縄文時代草創期と考えられる有舌尖頭器が１点出土している。西側に隣接する平方遺跡でも、有舌尖頭器が１点出土している。

(2) 弥生時代

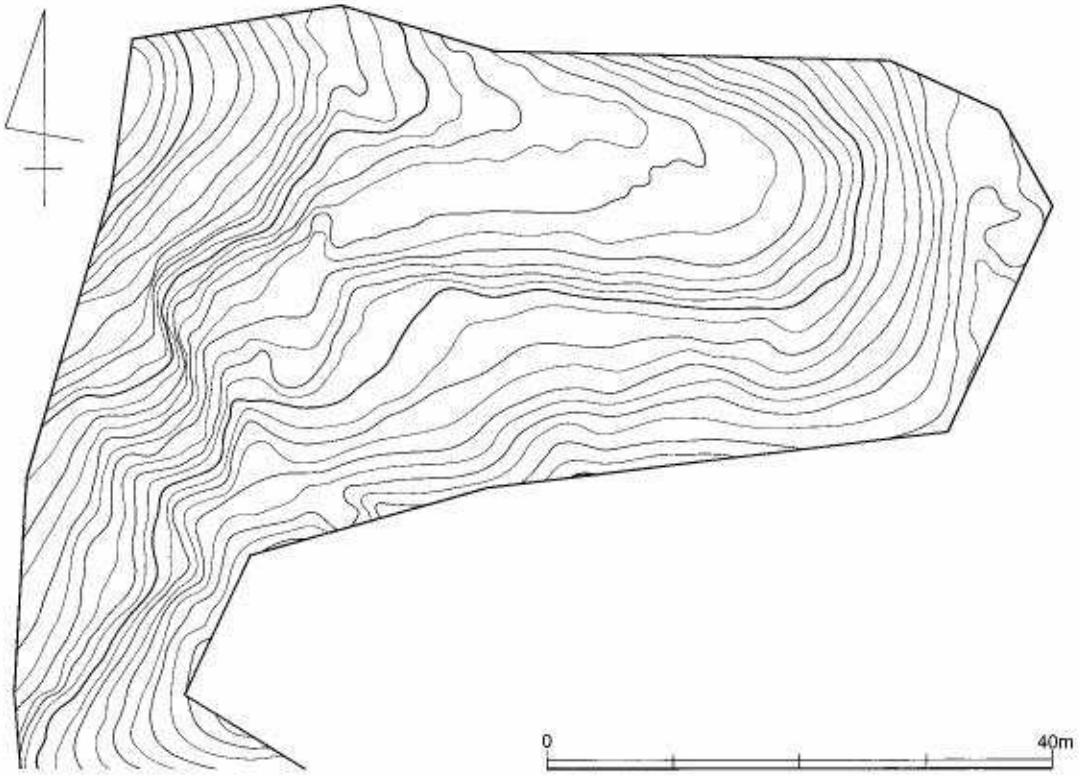
弥生時代の遺構は中期後半に限られている。遺跡の中心となる西側の丘陵平坦面は工事により既に削平されており、今回調査した地点は、東側の極一部である。今回調査した地点で遺構を検出した場所は、南地区北斜面の標高204m以上と北地区西平坦面の標高205m以上である。それ以外では遺物は出土したが、顕著な遺構は検出しなかった。

これは隣接する平方遺跡でも遺構が標高204m以上で検出し、そのうち竪穴住居跡は207m以上で検出した。中西山遺跡では丘陵頂付近の標高は213mである。

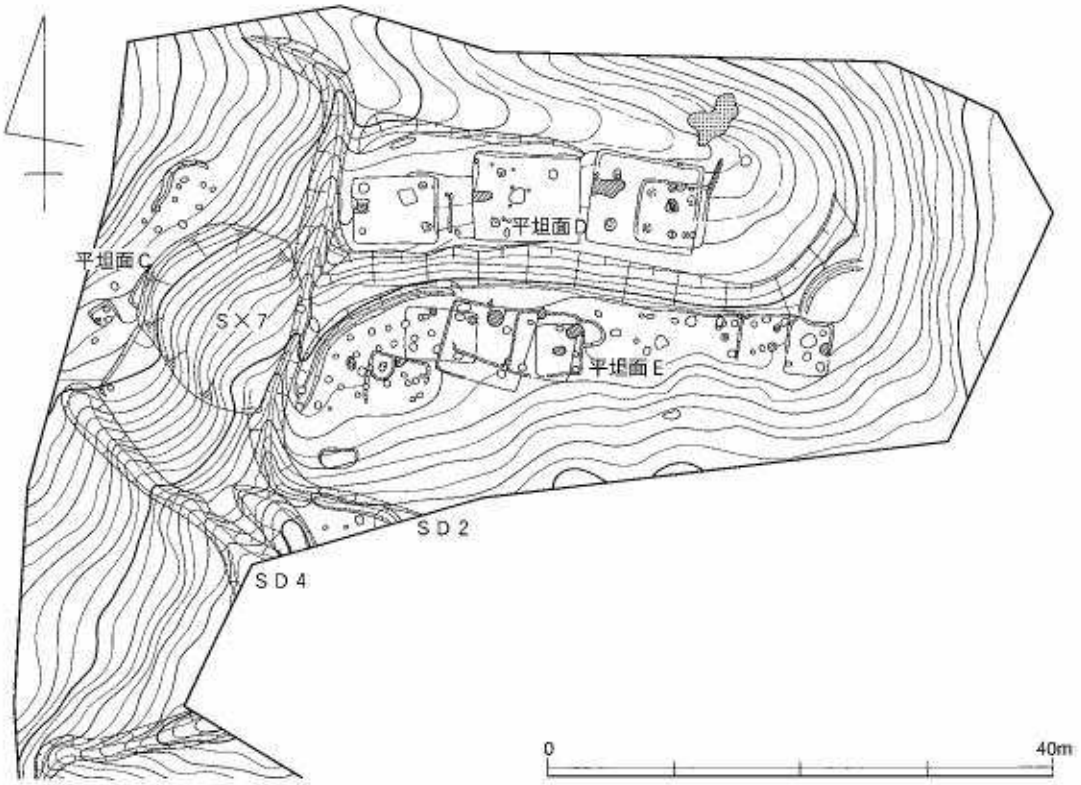
下西山遺跡は調査時点には、標高200m以上の一部は既に工事による削平を受けており、本来の下西山遺跡の一部を調査したのみである。開発以前の旧地形から判断すると、平方遺跡を中心として中西山遺跡、下西山遺跡が同一の遺跡群であると考えられる。しかも、弥生時代の遺跡の範囲は標高204mより高所に立地すると考えられる。したがって、今回調査を行った地点は弥生時代では末端に位置する。

(3) 古墳時代後期から飛鳥時代（第６図）

Ⅰ期は古墳時代後期から飛鳥時代の下西山遺跡が新たに始まった時期で、道路ＳＤ２が開かれ、平坦面Ｅが造成された時期である。道路ＳＤ２は平坦面Ｃ・平坦面Ｄ・平坦面Ｅが機能していたⅠ期から奈良時代まで存続していたと考えられる。ただし、地滑りＳＸ７により、埋もれた部分は機能していない。平坦面Ｅは道路ＳＤ２に続く部分に溝ＳＤ７を伴った掘立柱建物ＳＢ１・ＳＢ２が建てられ、引き続き

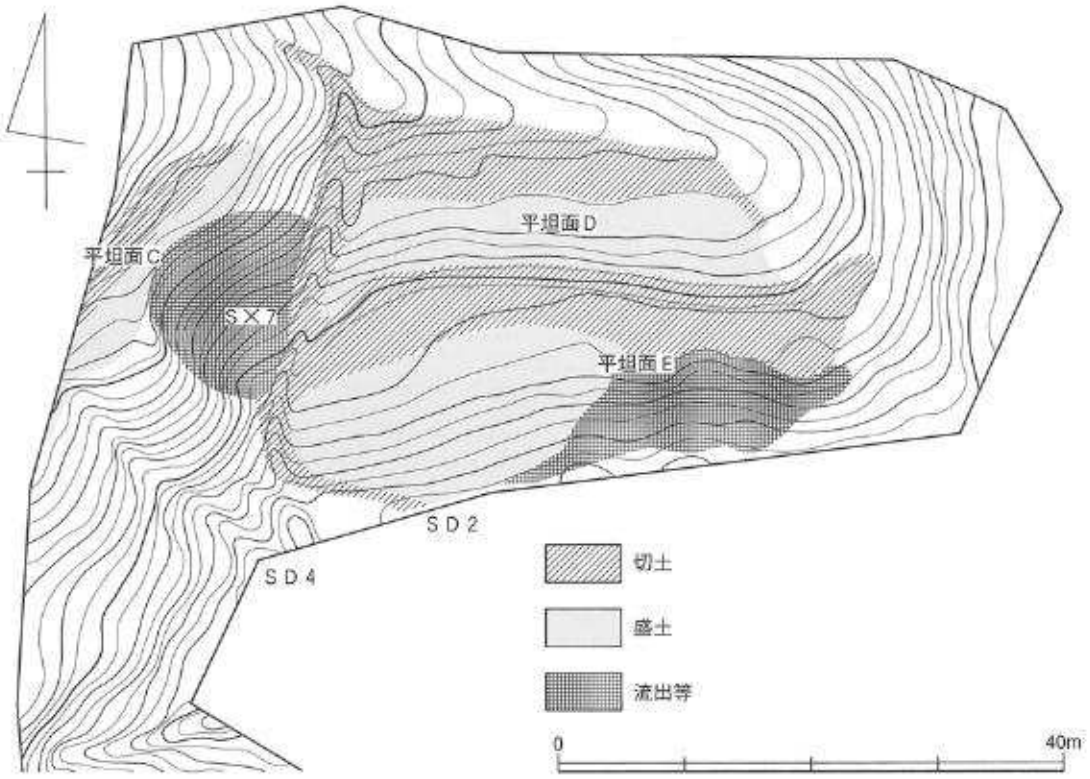


① 調査前地形

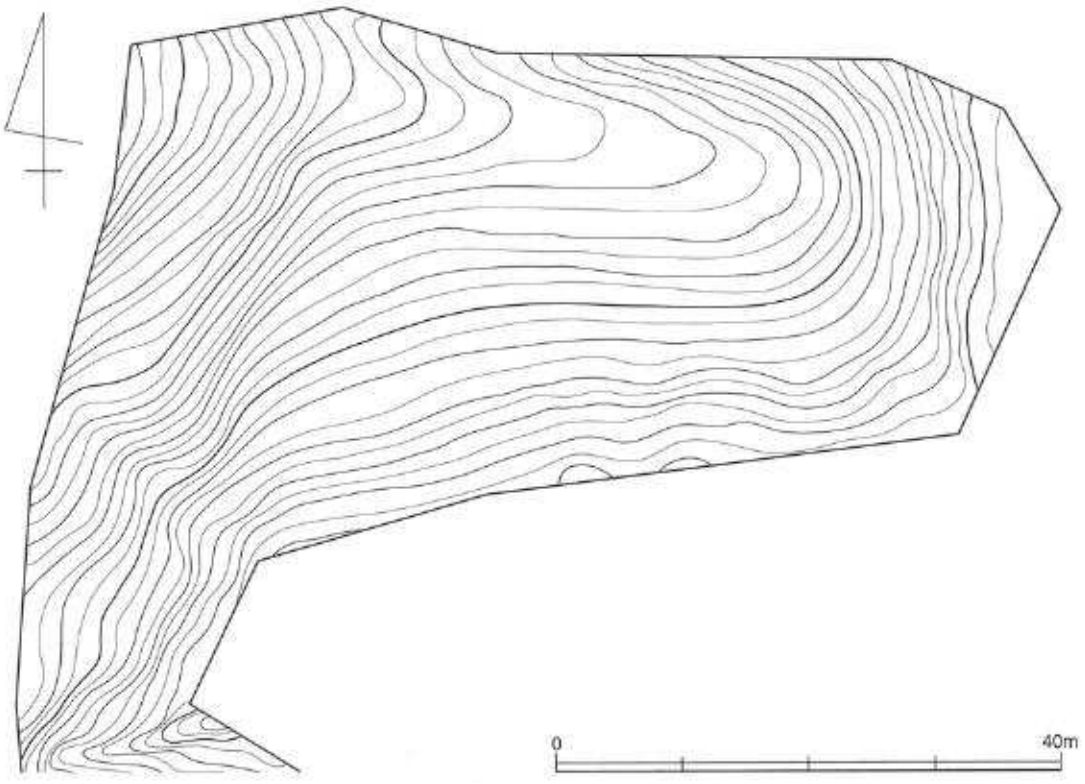


② 遺構地形

第８図　北地区　地形と遺構



③造成復原



④旧地形復原

第9図　北地区　地形復原

竪穴建物ＳＨ13が建てられている。一部重複しているためさらに細分できる可能性はある。

Ⅱ期は平坦面Ｅに竪穴建物ＳＨ14・ＳＨ11が建てられる。ほぼ方位も同一であり、離れているため同時期に建っていた可能性が高い。

Ⅲ期は新たに平坦面Ｄが造成され、平坦地が築きやすい尾根先端に竪穴建物ＳＨ６が建てられている。また、平坦面Ｅは竪穴建物ＳＨ９・ＳＨ10が建てられ、近接している事からＳＨ10からＳＨ９への変遷が考えられる。

Ⅳ期は新たに平坦面Ｃが造成され、土坑ＳＫ２・ＳＫ３を設置している。また平坦面Ｄは竪穴建物ＳＨ５・ＳＨ３・ＳＨ４が建てられている。ＳＨ３・ＳＨ４は近接しているが、ほぼ同時期と考えられる。建物の主軸もほぼ同一である。Ⅳ期の竈の位置は西壁になり、Ⅲ期までの山側である北壁からは一変している。同時に建物規模も大きくなっている。平坦面Ｅはピットなどから遺物が出土しているが、明瞭な建物は建たない。

Ⅴ期の遺構・遺物は認められない。Ⅳ期に平坦面Ｃを造成し、急斜面に無理な負担がかかったためか、この時期に地滑りＳＸ７が起きた可能性が高い。地滑りＳＸ７は道ＳＤ２の一部と平坦面Ｅの西端、１／３程度を埋没させている。

Ⅵ期の遺物は少量出土しているが、明らかにこの時期と考えられる遺構は存在しない。

Ⅶ期は平坦面Ｅの竪穴建物ＳＨ12が建てられる。平坦面Ｅの西端は地滑りＳＸ７で埋没しており、それを避けるように東端に位置している。

(4) 奈良時代

奈良時代は平坦面Ｄの土坑ＳＫ４と平坦面Ｅの土坑ＳＫ12があり、小鍛冶にかかわる遺構である。また、平坦面Ｄに火葬墓ＳＸ３がある。

(5) 平安時代以降

平安時代は南地区の平坦面Ａの溝ＳＤ１と北地区の溝ＳＤ４があるが密度が少なく、期間も短い。

4．下西山遺跡まとめ

以上、下西山遺跡は三田市の武庫川右岸に位置する丘陵上から丘陵斜面にかけての遺跡である。縄文時代から平安時代にかけて継続する遺跡で、特に弥生時代中期後半と古墳時代後期から飛鳥時代と奈良時代が中心である。

弥生時代中期後半の下西山遺跡は、平方遺跡と中西山遺跡と同一の武庫川右岸の高地性集落の遺跡群であり、その中心となる部分では無く、縁辺部にあたる。

古墳時代後期から飛鳥時代は北地区の斜面を計画的に造成した集落であり、小鍛冶を含む工房的な集落が想定できる。奈良時代は小鍛冶に関する遺構と火葬墓を調査した。

第2節　北摂ニュータウン中央地区内の遺跡の検討

1．各遺跡の調査概要

北摂ニュータウン中央地区内の遺跡の調査は、昭和51年度から平成9年度にかけて、保存不可能な13遺跡群の調査を行った。以下、調査を行った各遺跡の概要を簡単に記述する。

(1) 奈カリ与遺跡群

奈カリ与遺跡群は弥生時代中期後半、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、戦国時代の遺構・遺物を調査した。

弥生時代中期後半は高地性集落であり、竪穴住居跡29棟、方形住居状遺構1基、段状遺構19基、土器棺墓6基、井戸1基、溝、土坑を検出した。古墳時代後期は遺物のみ出土した。飛鳥時代は古墳1基を調査した。古墳は円墳で埋葬施設は横口式箱式石棺である。奈良時代は火葬墓を1基調査した。平安時代は遺物のみが出土している。戦国時代は釜屋城を調査した。釜屋城は丘陵頂部に立地し周囲に土塁を巡らしている。

(2) 五郎谷11号墳

五郎谷11号墳は古墳時代後期の円墳で、埋葬施設は木棺直葬である。

(3) 梶下ヶ谷遺跡

梶下ヶ谷遺跡は縄文時代、飛鳥時代、平安時代の遺構・遺物を調査した。

縄文時代は陥穴31基を調査した。周辺から出土した土器から中期と考えられる。飛鳥時代は鍛冶工房と考えられる竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、鍛冶炉1基、井戸1基、溝を検出した。竪穴建物跡からは椀形滓・鉄釘の塊が出土した。他に製塩土器が出土している。平安時代は掘立柱建物跡1棟を調査した。他に時期不明の木棺墓4基がある。

(4) 奈良山古墳群

奈良山古墳群は全14基のうち1号墳・5号墳・7号墳・12号墳・14号墳で調査を行った。

1号墳は古墳時代前期の円墳で埋葬施設は礫槨である。5号墳・7号墳・14号墳は古墳時代後期の円墳で埋葬施設は流失したものも含めて木棺直葬である。12号墳は飛鳥時代の円墳で埋葬施設は横口式石棺である。

(5) 奈良山遺跡

奈良山遺跡は飛鳥時代、奈良時代、中世、近世の遺構・遺物を調査した。

飛鳥時代は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑4基を調査した。奈良時代は掘立柱建物跡1基を検出した。中世は墓1基を検出した。近世は20基の墓を検出した。

(6) 西山遺跡群

西山遺跡群は弥生時代中期後半、古墳時代後期、飛鳥時代～平安時代、鎌倉時代の遺構・遺物を調査した。

弥生時代中期後半は方形周溝墓1基、土壙墓16基を検出した。古墳時代後期は古墳と竪穴住居跡を調査した。西山古墳群は前方後円墳1基、円墳19基で埋葬施設は横穴式木室3基の他はすべて木棺直葬である。竪穴住居跡は2棟調査した。飛鳥時代～平安時代は掘立柱建物跡14棟、土坑、溝を調査した。鎌倉時代は青磁椀が出土したのみである。

(7) 西山西遺跡群

西山西遺跡群は古墳時代後期、飛鳥時代の遺構・遺物を調査した。

古墳時代後期は方墳3基で埋葬施設は凝灰岩と木炭を使用した木棺である。飛鳥時代は掘立柱建物跡3棟を検出した。

(8) 下西山遺跡

下西山遺跡は縄文時代、弥生時代中期後半、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代、平安時代の遺構・遺物を検出した。

縄文時代は草創期の有舌尖頭器が出土した。弥生時代中期後半は竪穴住居跡2棟、土坑を調査した。古墳時代後期～飛鳥時代は竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、道跡1、土坑、溝を調査した。奈良時代は火葬墓1基、小鍛冶炉と考えられる土坑を調査した。平安時代は溝を調査した。

(9) 平方遺跡群

平方遺跡群は縄文時代、弥生時代中期後半、古墳時代後期、平安時代、戦国時代の遺構・遺物を検出した。

縄文時代は草創期の有舌尖頭器が出土した。弥生時代中期後半は高地性集落で、竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、方形住居状遺構1基、段状遺構1基、土坑を検出した。竪穴住居跡からは小銅鐸の鋳型が土坑から石舌が出土した。古墳時代後期は古墳、須恵器窯跡、集落を調査した。古墳は2基あり、いずれも埋葬施設は横穴式木室である。須恵器窯跡は3基調査した。3号窯の脇には工房が存在する。集落は工房と重なるが、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物跡1棟、土坑を調査した。平安時代は土器のみ出土した。戦国時代は平方城を調査した。

(10) 平方西遺跡

平方西遺跡は縄文時代、古墳時代後期、時期不明の遺構・遺物を検出した。

縄文時代は陥穴1基を検出した。古墳時代後期は竪穴住居跡2棟、土坑を検出した。時期不明の遺構は木棺墓で6基検出した。弥生時代の可能性が高い。

(11) 中西山遺跡群

中西山遺跡群は弥生時代中期後半、弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代、戦国時代の遺構・遺物を検出した。

弥生時代中期後半は高地性集落であり、竪穴住居跡1棟とサヌカイト集積を検出した。弥生時代後期は木棺墓2基を検出した。古墳時代後期は中西山古墳群4基のうち、3号墳・4号墳を調査した。3号墳は円墳で埋葬施設は横穴式石室、4号墳は円墳で埋葬施設は木棺直葬である。平安時代は土器が出土した。戦国時代は中西山城を調査した。

(12) 有鼻遺跡

有鼻遺跡は縄文時代、弥生時代中期後半、古墳時代後期、飛鳥時代、平安時代中期、鎌倉～戦国時代の遺構・遺物を調査した。

縄文時代は陥穴1基を検出した。弥生時代中期後半は高地性集落であり、竪穴住居跡75棟、方形住居状遺構1棟、掘立柱建物跡10棟、段状遺構88基、土器棺8基、溝、土坑を検出した。古墳時代後期は古墳の残欠と考えられる溝を検出した。飛鳥時代は段状遺構3基、土坑を検出した。平安時代中期は掘立柱建物跡2棟、墓13基、溝を検出した。鎌倉～戦国時代は墓および火葬場を153基検出した。

(13) 風呂ヶ谷城跡

風呂ヶ谷城は三箇所の曲輪と堀切、土塁で構成されている。調査は山城の裾の一部を実施し、堀切の一部を確認した。曲輪などの本体部分は調査していない。時期が判明する様な遺物は出土していないが、室町時代から戦国時代と考えられる。なお、調査を行った斜面から弥生土器中期後半の土器が出土しており、城の下層には弥生土器中期後半の有鼻遺跡が続いていると考えられる。

2．各時代の概要

ここでは、北摂ニュータウン中央地区内で調査された遺跡を時代ごとに概観していきたい。ただし、最近になって調査された遺跡の状況を見ていくと、当初の分布調査で確認した遺跡範囲が拡大したり、新たな遺跡が確認されたりしており、昭和62年度以前に造成工事がなされた地点にも多くの遺跡があったと想定できる。

(1) 縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴と考えられる土坑を調査したのみである。陥穴は梶下ヶ谷遺跡で31基、平方西遺跡で1基、有鼻遺跡で1基検出している。梶下ヶ谷遺跡では周辺から中期の土器が出土したのみで、ほかの遺跡は時期が明確にできる遺物は出土していない。梶下ヶ谷遺跡では脂肪酸分析を行い、イノシシやシカの脂肪酸を検出しており、土坑の機能は陥穴と考えられている。

このほかに草創期と考えられる有舌尖頭器が平方遺跡と下西山遺跡で出土しており、人間の活動が推定できる。

(2) 弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は中期後半は奈カリ与遺跡、西山遺跡、平方遺跡、下西山遺跡、中西山遺跡、有鼻遺跡で検出している。

奈カリ与遺跡では竪穴建物跡29棟、方形住居状遺構1基、段状遺構19基、土器棺墓5基、井戸1基、溝、土坑を検出した。

西山遺跡では方形周溝墓1基、土壙墓16基を検出した。

平方遺跡では竪穴建物跡7棟、掘立柱建物跡1棟、方形住居状遺構1基、段状遺構1基、土坑を検出した。竪穴建物跡内からは小銅鐸の鋳型が、土坑からは石舌が出土した。

下西山遺跡では竪穴建物跡2棟と土坑を調査した。

中西山遺跡では竪穴建物跡1棟とサヌカイト集積を検出した。

有鼻遺跡では竪穴建物跡75棟、方形住居状遺構1棟、掘立柱建物跡10棟、段状遺構88基、土器棺8基、溝、土坑を検出した。

弥生時代中期の墓は西山遺跡で方形周溝墓を検出し、周辺から16基の木棺墓群を検出した。方形周溝墓の立地は尾根の先端で、木棺墓は方形周溝墓周辺あるいは南向き斜面である。時期は弥生時代中期後半の凹線文出現期に近く、奈カリ与遺跡・平方遺跡群・有鼻遺跡などの集落遺跡よりやや先行している。副葬品は出土していない。

時期は不明であるが、平方西遺跡で6基の木棺墓群を検出した。土器棺は奈カリ与遺跡で5基、有鼻遺跡で8基を検出している。

以上、墓の調査は非常に少なく、竪穴建物跡の調査例の調査棟数と比べると極端に少ない。事業地内で調査できずに消滅した墓があるのかもしれない。

弥生時代後期は中西山遺跡で木棺墓２基を検出した。建物跡など集落遺跡はウッディタウン内で検出していないため、弥生時代後期の集落は武庫川周辺の低地に存在した可能性が高い。

(3) 古墳時代～飛鳥時代

五郎谷11号墳は６世紀の円墳で埋葬施設は木棺直葬である。

梶下ヶ谷遺跡は７世紀末の鍛冶工房と考えられる竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡９棟、鍛冶炉１基、井戸１基、溝を検出した。竪穴建物跡からは椀形滓・鉄釘の塊が出土した。他に製塩土器が出土している。

奈良山古墳群は全14基のうち１号墳・５号墳・７号墳・12号墳・14号墳で調査を行った。

奈良山古墳群のうち１号墳は古墳時代前期の円墳で埋葬施設は礫槨である。５号墳・７号墳・14号墳は古墳時代後期の円墳で埋葬施設は流失したものも含めて木棺直葬である。12号墳は７世紀の円墳で埋葬施設は横口式石棺である。

西山古墳群は６世紀から７世紀の古墳と７世紀の竪穴住居跡を調査した。西山古墳群は前方後円墳１基、円墳19基で埋葬施設は横穴式木室３基の他はすべて木棺直葬である。竪穴住居跡は２棟調査した。

西山西遺跡は７世紀の方墳３基と掘立柱建物跡３棟を調査した。古墳の埋葬施設は凝灰岩と木炭を使用した木棺である。

下西山遺跡は７世紀の竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡２棟、道路跡１、土坑、溝を調査した。

平方遺跡は７世紀の古墳、６世紀末の須恵器窯跡、集落を調査した。古墳は２基あり、いずれも埋葬施設は横穴式木室である。須恵器窯跡は３基調査した。３号窯の脇には工房が存在する。集落は工房と重なるが、竪穴住居跡４棟、掘立柱建物跡１棟、土坑を調査した。

平方西遺跡は古墳時代後期の竪穴住居跡２棟、土坑を調査した。

中西山古墳群は４基のうち、３号墳・４号墳を調査した。３号墳は円墳で埋葬施設は横穴式石室、４号墳は円墳で埋葬施設は木棺直葬である。いずれも７世紀初頭である。

有鼻遺跡は７世紀の段状遺構３基、土坑を検出した。

奈良山遺跡は７世紀中頃の竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡１棟、土坑４基を検出した。奈カリ与遺跡では７世紀の古墳１基を調査した。古墳は円墳で埋葬施設は横口式箱式石棺である。

(4) 古代

奈カリ与遺跡では奈良時代の火葬墓を１基を調査した。平安時代は遺物のみ出土している。

梶下ヶ谷遺跡の平安時代は掘立柱建物跡１棟を調査した。他に時期不明の木棺墓４基がある。

奈良山遺跡は８世紀の掘立柱建物跡１棟、神功開寶３枚、椀形鍛冶滓が出土した。

西山古墳群の飛鳥時代～平安時代は掘立柱建物跡14棟、土坑、溝を調査した。

下西山遺跡の奈良時代は火葬墓１基、小鍛冶炉と考えられる土坑を調査した。平安時代は溝を調査した。

平方遺跡と中西山遺跡の平安時代は土器が出土した。

有鼻遺跡の平安時代中期は掘立柱建物跡２棟、墓13基、溝を検出した。

(5) 中世

中世は釜屋城・平方城・中西山城・風呂ヶ谷城で山城を、奈良山遺跡、有鼻遺跡で墓および火葬場を調査した。西山遺跡は遺構は検出できず青磁椀が出土した。

奈カリ与遺跡では戦国時代の釜屋城を調査した。釜屋城は丘陵頂部に立地し周囲に土塁を巡らしている。

奈良山遺跡の中世は墓１基を検出し、近世は20基の墓を検出した。

西山古墳群の鎌倉時代は青磁椀が出土したのみである。

平方遺跡群で平方城を、中西山遺跡群で中西山城を調査した。

有鼻遺跡の鎌倉～戦国時代は墓および火葬場を153基検出した。

風呂ヶ谷城は三箇所の曲輪と堀切、土塁で構成されている。調査は山城の裾の一部を実施し、堀切の一部を確認した。曲輪などの本体部分は調査していない。時期が判明する様な遺物は出土していないが、室町時代から戦国時代と考えられる。

3．三田盆地における位置付け

(1) 弥生時代中期

弥生時代中期後半の集落は、低地との比高差50m以上のいわゆる高地性集落であり、丘陵を開析した谷を境に3群に分けられる。奈カリ与遺跡、平方（中西山・下西山）遺跡群、有鼻遺跡の3群である。奈カリ与遺跡と有鼻遺跡は遺跡の中心の多くを調査できたが、平方遺跡と下西山遺跡は工事による削平で遺跡全体を調査できていないため、単純な比較はできない。

このような中で、奈カリ与遺跡では竪穴住居の重複および拡張重複はわずかであり、平方遺跡群と有鼻遺跡は竪穴住居の重複および拡張重複が多く、特に拡張重複が多いという特徴がある。また平方遺跡群と有鼻遺跡は掘立柱建物を検出している。

同じ時期の低地の様相や武庫川左岸の状況が不明ではあるが、中期後半に武庫川右岸の丘陵上に突如として出現、展開し、弥生時代中期末までの短期間で消滅するという特徴的なあり方を見せる。このように武庫川右岸の遺跡の様相は、明石川流域の左岸の様相に似ている。

三田盆地では現在までに銅鐸の出土はないが、平方遺跡で舌が出土している他、小銅鐸の鋳型が出土していることから、中期後半の平方遺跡周辺で銅鐸が使われていた事は確実である。

(2) 古墳

古墳時代前期の古墳は奈良山1号墳で丘陵先端に立地している。円墳で埋葬施設は礫槨である。

その後、古墳の存在は認められず、6世紀前半になって西山6号墳の前方後円墳と五良谷11号墳が築かれる。埋葬施設は木棺直葬である。その後、西山古墳は7世紀前半まで、4号墳・5号墳・19号墳・8号墳・1号墳・10号墳・11号墳・14号墳などの木棺直葬の円墳が築かれ、墳丘内に木棺を追葬しているものもある。同様に中西山4号墳、奈良山5号墳・7号墳・14号墳などでも木棺直葬の円墳が築かれている。

この様な状況の中で、唯一中西山3号墳で横穴式石室の円墳を調査した。武庫川左岸や他地域では横穴式石室墳全盛時に武庫川右岸のこの地域では木棺直葬墳が築かれ続けているという特徴がある。

また、平方1号墳・2号墳、西山2号墳・7号墳・13号墳・18号墳は横穴式木室墳であり、集中して存在している。

西山古墳群などでは平方窯で焼かれた須恵器が供えられており、平方遺跡と西山古墳群に埋葬された集団との関係が指摘できる。

7世紀中頃には奈良山12号墳や奈カリ与古墳など埋葬施設は横口式石棺の単独の円墳が出現する。併せて石棺材として凝灰質砂岩を使用しているという特徴がある。三田盆地の古墳の最終末の様相の一端を示すものである。

(3) 古墳時代から古代の生産

古墳時代から古代の生産が行われており、ニュータウン内では須恵器生産の須恵器窯と鉄生産の鍛冶遺構を調査した。

須恵器窯は平方窯跡群で3基調査した。時期は6世紀末から7世紀前半である。窯に伴い3号窯の脇には平坦面の工房が存在し、掘立柱建物と竪穴建物が設けられている。その他、窯の周辺にも竪穴建物が存在しており、工房的な建物と考えられる。

鍛冶遺構は下西山遺跡・奈良山遺跡・梶下ヶ谷遺跡で調査した。

下西山遺跡は7世紀の竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、土坑を調査した。8世紀は土坑2基を調査した。鍛冶にかかわる遺物は椀形鍛冶滓・羽口・鉄製品・砥石などがある。

奈良山遺跡は7世紀中頃の竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑4基を検出した。鍛冶にかかわる遺物は椀形鍛冶滓・羽口・鉄製品・砥石などがある。8世紀は掘立柱建物跡1棟を調査し、椀形鍛冶滓・神功開寶が出土している。

梶下ヶ谷遺跡は7世紀末の鍛冶工房と考えられる竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡9棟、鍛冶炉1基、井戸1基、溝を検出した。竪穴建物跡からは椀形滓・鉄釘の塊が出土した。

梶下ヶ谷遺跡と下西山遺跡では製塩土器が出土している。

以上のようにウッディタウンの武庫川に面した丘陵上、丘陵斜面は6世紀末の飛鳥時代から奈良時代にかけて須恵器生産・鉄生産を中心とした手工業生産の集中地帯であることが判明した。須恵器生産は平方窯跡群で6世紀末から7世紀前半まで確実に行われており、それ以前およびそれ以後も行われている可能性が高い。

鉄生産は下西山遺跡で7世紀前半から開始し、7世紀中頃には奈良山遺跡で、8世紀初頭には梶下ヶ谷遺跡で開始している。8世紀には下西山遺跡と奈良山遺跡で行われている。

7世紀前半は竪穴建物跡内で小鍛冶を行っていた可能性が高く、以後7世紀後半まで下西山遺跡、梶下ヶ谷遺跡で行われていた。それ以後、奈良時代には独立した鍛冶炉で小鍛冶が行われていた。

このような須恵器生産や鉄製品の生産がまとまった地域で継続的に行われていることは、集落独自での簡単な生産ではなく、7世紀の初期律令体制における有馬評あるいは大神里の地方首長のもとで再編され、保護された工人組織の集落であると考えられる。

(4) 山城

山城は釜屋城・平方城・中西山城・風呂ヶ谷城で調査している。いずれも武庫川右岸の丘陵上の周囲の景観に配慮した場所に立地している。

釜屋城は丘陵頂部に立地し周囲に土塁を巡らし曲輪を設けている。土塁の3箇所が開口しており東側のものが虎口と考えられる。

平方城は丘陵先端の山側に堀切と土塁を設けて曲輪を形成し、小規模である。南東側に虎口がある。

中西山城は平方城の隣の丘陵先端の山側に堀切と土塁を設けて曲輪を形成している。小規模である。

風呂ヶ谷城は丘陵先端を三箇所の堀切で曲輪を設け、土塁を築いている。調査は山城の裾の一部を実施し、堀切の一部を確認した。曲輪などの本体部分は調査していない。時期が判明する様な遺物は出土していないが、室町時代から戦国時代と考えられる。風呂ヶ谷城の隣の有鼻遺跡の鎌倉～戦国時代は墓および火葬場を153基検出した。この墓は風呂ヶ谷城との関係で捉えられている。

釜屋城・平方城・中西山城・風呂ヶ谷城のウッディタウン内で調査した山城はいずれも弥生時代中期後半の高地性集落と重複していることから、その性格を考える上で重要な点であると考えている。

参考・引用文献

・井守徳男「畿内周縁部における古墳の展開と終末」『北山茂夫追悼日本史学論集』1986年
・岡崎正雄「兵庫県法鑑遺跡の紹介」『古代土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会　1997年
・海邉博史「畿内における古代墳墓の諸相」『古代文化』第51巻第11号　1999年
・小林義孝「灰を納めた土壙」『九斑』　1992年
・渡邉順子「土師器の当具について」『奈良国立文化財研究所年報1999-Ⅱ』奈良国立文化財研究所　1999年
・神戸市教育委員会「北神ニュータウン内遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　1987年
・神戸市『新修神戸市史歴史編Ⅰ』　1989年
・財團法人古代學協会『溝口遺跡』　1986年
・三田市教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』　1978年
・三田市教育委員会『兵庫県三田市文化財調査報告第５冊』　1988年
・三田市教育委員会『企画展パンフレット西山の歴史』　1998年
・奈良国立文化財研究所『川原寺発掘調査報告』　1960年
・奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告3』　1973年
・奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』　1978年
・奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告20』　1990年
・奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』　1995年
・奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告25』　1995年
・兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表』第３集　1969年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン計画地域内埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第１集　1970年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン計画地域内埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第２集　1971年
・兵庫県教育委員会『三田市・北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』－昭和53年度－　1974年
・兵庫県教育委員会『三田市・北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』－昭和54年度－　1975年
・兵庫県教育委員会『三田市・北摂ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査概報』－昭和55年度－　1976年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』　1978年
・兵庫県教育委員会『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書１』　1987年
・兵庫県教育委員会『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書２』　1988年
・兵庫県教育委員会『中尾城跡』　1989年
・兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』　1991年
・兵庫県教育委員会『七日市遺跡（Ⅰ）』　1991年
・兵庫県教育委員会『川徐・藤ノ木遺跡』　1992年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』　1993年
・兵庫県教育委員会『田井野遺跡』　1996年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ』　1999年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ』　1999年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅵ』　2000年
・兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅷ』　2000年

別　　表

別表１．北摂ニュータウン中央地区遺跡一覧（１）

地点番号	遺跡名	所在地	種別	時代	確認調査年度	全面調査年度	取扱い	備考	文献
201	小鼻１号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
202	小鼻２号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
203	小鼻３号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
204	小鼻４号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
205	小鼻５号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
206	小鼻６号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
207	小鼻７号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
208	小鼻８号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
211	五良谷１号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
217		貴志字五良谷	古墳	古墳	51		遺構・遺物無	五良谷２号墳	
223		貴志字五良谷	古墳	古墳	53		遺構・遺物無	五良谷３号墳	
224	五良谷４号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
225	五良谷５号墳	貴志字五良谷	古墳	古墳					
72	五良谷11号墳	すずかけ台１丁目	古墳	古墳	53	53	記録保存		『北摂Ⅱ』
218		貴志字五良谷1886	窯跡		53		遺構・遺物無	五良谷遺跡	
226		貴志字農山2024	古墳	古墳	53		遺構・遺物無	農山１号墳	
227		貴志字農山2024	古墳	古墳			再分布調査・遺跡無	農山２号墳	
228		貴志字農山2024	古墳	古墳			再分布調査・遺跡無	農山３号墳	
229		貴志字農山2024	古墳	古墳			再分布調査・遺跡無	農山４号墳	
236		貴志字農山2024	古墳	古墳	53		遺構・遺物無	農山５号墳	
249		貴志字農山2024	古墳	古墳			再分布調査・遺跡無	農山６号墳	
235		貴志字農山	土塁				再分布調査・遺跡無	農山遺跡	
230		貴志字美内1064	散布地				再分布調査・遺跡無	美内Ⅳ遺跡	
212		貴志字尾治ヶ尾18	古墳				再分布調査・遺跡無	尾治ヶ尾１号墳	
222	尾治ヶ尾２号墳	貴志字尾治ヶ尾	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
237		貴志字尾治ヶ尾	古墳	古墳			再分布調査・遺跡無	尾治ヶ尾３号墳	
231		貴志字尾治ヶ尾	散布地	弥生			再分布調査・遺跡無	尾治ヶ尾Ⅰ遺跡	
232		池尻字真谷口245	散布地	中世			再分布調査・遺跡無	真谷口Ⅰ遺跡	
233		貴志字庄ノ坂1671	散布地	中世			再分布調査・遺跡無	庄ノ坂Ⅰ遺跡	
234		貴志字出来谷1836	土塁状				再分布調査・遺跡無	出来谷遺跡	
162	釜屋城跡	すずかけ台２丁目	城跡	中世	53	53・54	記録保存	分布地図間違い	『北摂Ⅱ』
	赤カリ与遺跡	すずかけ台２丁目	集落	弥生	53	53～55	記録保存		『北摂Ⅱ』
309	赤カリ与古墳	すずかけ台２丁目	古墳	古墳		55	記録保存		『北摂Ⅱ』
244	奈良山１号墳	貴志字奈良山1996	古墳	古墳		49	調査保存	周辺緑地	
1004	奈良山２号墳	貴志字奈良山	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	『北摂Ⅲ』
245	奈良山３号墳	すずかけ台４丁目	古墳	古墳	55		現状保存	周辺緑地	『北摂Ⅲ』
246	奈良山４号墳	すずかけ台４丁目	古墳	古墳	55		現状保存	周辺緑地	『北摂Ⅲ』
1005	奈良山５号墳	貴志字奈良山	古墳	古墳	55	56・57	記録保存		『北摂Ⅲ』
1007	奈良山６号墳	けやき台2丁目	古墳	古墳			現状保存	中央公園	『北摂Ⅲ』
1000	奈良山７号墳	けやき台2丁目	古墳	古墳	51	52	整備保存	旧奈良山５号墳	『北摂Ⅰ』
1008	奈良山８号墳	貴志字奈良山	古墳	古墳			現状保存	中央公園	
1009	奈良山９号墳	けやき台2丁目	古墳	古墳			現状保存	中央公園	『北摂Ⅲ』
1010	奈良山10号墳	けやき台2丁目	古墳	古墳			現状保存	中央公園	
1011	奈良山11号墳	けやき台2丁目	古墳	古墳			現状保存	中央公園	
248	奈良山12号墳	貴志字奈良山	古墳			52		旧奈良山４号墳	『北摂Ⅰ』
540	奈良山13号墳	貴志字奈良山	古墳	古墳		56	現状保存	周辺緑地	『北摂Ⅲ』
541	奈良山14号墳	貴志字奈良山	古墳	古墳		56	記録保存		『北摂Ⅲ』
542	奈良山15号墳	貴志字奈良山	円墳？			62	発見	中央公園	
543	奈良山16号墳	貴志字奈良山	円墳？			62	発見	中央公園	
247		けやき台2丁目	土塁				再分布調査・遺跡無	奈良山遺跡	
1003	奈良山遺跡	けやき台2丁目			55	56・57 59	記録保存		『北摂Ⅲ』
531	奈良山中央公園遺跡	けやき台2丁目	集落	弥生		62	調査後保存	中央公園	『北摂Ⅲ』
107	堤下ケ谷遺跡	すずかけ台３丁目	散布地		53・62	62・63	記録保存	旧長楽寺跡	『北摂Ⅵ』

別表２．北摂ニュータウン中央地区遺跡一覧（２）

地点番号	遺跡名	所在地	種別	時代	確認調査年度	全面調査年度	取扱い	備考	文献
239	西山遺跡	けやき台３丁目	窯跡		51・52 62	52・53 62・3	記録保存		『北摂Ⅰ』 『北摂Ⅴ』
1001	西山１号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52	記録保存		『北摂Ⅰ』
1012	西山２号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52・3	記録保存		『北摂Ⅰ』 『北摂Ⅴ』
1013	西山３号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52	記録保存		『北摂Ⅰ』
1014	西山４号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52	記録保存		『北摂Ⅰ』
1015	西山５号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52・3	記録保存		『北摂Ⅰ』
1016	西山６号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52・3	記録保存		『北摂Ⅰ』
1017	西山７号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52・3	記録保存		『北摂Ⅰ』
	西山９号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52	記録保存		『北摂Ⅰ』
1018	西山８号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	51	52	記録保存		『北摂Ⅰ』
510	西山10号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
511	西山11号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
512	西山12号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
513	西山13号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
514	西山14号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
515	西山15号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
516	西山16号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
517	西山17号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
518	西山18号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
519	西山19号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
520	西山20号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳		62	記録保存		『北摂Ⅴ』
238		けやき台３丁目	散布地				再分布調査・遺跡無	平方Ⅰ遺跡	
510	西山西１号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	62	3	記録保存	旧平方古墳	『北摂Ⅴ』
511	西山西２号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	62	3	記録保存	旧平方古墳	『北摂Ⅴ』
512	西山西３号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	62	3	記録保存	旧平方古墳	『北摂Ⅴ』
509	西山西遺跡	けやき台３丁目	散布地	古墳	62	3	記録保存	旧平方東遺跡	『北摂Ⅴ』
501	下西山遺跡	けやき台３丁目	散布地	弥生～奈良	62・2	5	記録保存	一部周辺緑地	『北摂Ⅵ』
240	平方遺跡	けやき台３丁目	窯跡	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方１号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方２号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方１窯	けやき台３丁目	窯跡	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方２窯	けやき台３丁目	窯跡	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方３窯	けやき台３丁目	窯跡	古墳	56・62	62・2	記録保存		『北摂Ⅲ』
	平方城	けやき台３丁目	城跡	中世	62	62	記録保存		『北摂Ⅲ』
532	平方西遺跡	けやき台３丁目	散布地	古墳	62	元	記録保存		『北摂Ⅲ』
241	中西山１号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	56		現状保存	周辺緑地	
305	中西山２号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳			現状保存	周辺緑地	
307	中西山３号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	56	56	記録保存		『北摂Ⅲ』
308	中西山４号墳	けやき台３丁目	古墳	古墳	56	56	記録保存		『北摂Ⅲ』
306	中西山遺跡	けやき台３丁目			56・62	56・62	記録保存		『北摂Ⅲ』
	中西山城	けやき台３丁目	城跡	中世	56	56	記録保存		『北摂Ⅲ』
242	清水垣内１号墳	下井沢字清水垣内	古墳	古墳					
533	向垣内遺跡	けやき台６丁目	散布地	弥生	6	7	記録保存	有鼻遺跡	『北摂Ⅳ』
534	（西山）Ⅰ遺跡	けやき台６丁目	散布地	弥生・古墳	6	7	記録保存	有鼻遺跡	『北摂Ⅳ』
535	有鼻遺跡	けやき台６丁目	平坦地形		6	7・9	記録保存		『北摂Ⅳ』 『北摂補』
536	（西山）Ⅱ遺跡	けやき台６丁目	平坦地形		6	7	記録保存	有鼻遺跡	『北摂Ⅴ』
537	（西山）Ⅲ遺跡	けやき台６丁目	平坦地形		6・7			けやき台公園	
160	風呂ケ谷城	けやき台６丁目	城跡	中世		9	現状保存 一部記録保存	けやき台公園	『北摂Ⅴ』 『北摂補』
243	有鼻１号墳	けやき台６丁目	古墳	古墳	6		現状保存	旧風呂ケ谷古墳 けやき台公園	『北摂Ⅳ』
	有鼻２号墳	けやき台６丁目	古墳	古墳	6		現状保存	けやき台公園	
252		中内神字森上538	散布地	古墳			再分布調査・遺跡無	森上Ⅰ遺跡	
254		中内神字小田谷	散布地	古墳			再分布調査・遺跡無	小田谷Ⅱ遺跡	

別表３．下西山遺跡 遺物一覧（１）

No.	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構　等	口径	器高	底径	備考
1	37	28	弥生土器	広口壺	D－10	ＳＫ－1検出時	21.0	(6.7)		
2	37	28	弥生土器	広口壺	D－10	斜面③	22.9	(7.3)		
3	37	28	弥生土器	広口壺	D－10	斜面③	35.6	(11.9)		
4	37	29	弥生土器	壺	C－9	斜面③	(15.6)	(6.7)		
5	37	28	弥生土器	壺	D－10	ＳＫ－1	(16.4)	(11.3)		
6	37	28	弥生土器	無頸壺	D－10	ＳＫ－1	(16.3)	(3.0)		
7	37	29	弥生土器	無頸壺	C－9	ＳＫ－10	21.3	(5.1)		
8	37	29	弥生土器	無頸壺	C－9	ＳＫ－10	(19.8)	(6.5)		
9	37	29	弥生土器	高坏	D－11	斜面③	25.6	(3.9)		
10	37	－	弥生土器	高坏	C－10	ＳＸ－9	23.5	(4.1)		
11	37	29	弥生土器	高坏	C－10	ＳＸ－9	(31.7)	(4.6)		
12	37	28	弥生土器	脚	D－10	ＳＫ－1		(3.8)	(13.6)	
13	37	－	弥生土器	脚	D－11	斜面③		2.7	(15.0)	
14	37	29	弥生土器	脚	B－9	斜面③	10.0	(3.8)		
15	37	29	弥生土器	甕	C－9	斜面③	(21.9)	(9.2)		
16	37	28	弥生土器	甕	D－10	斜面③	(26.0)	(9.9)		
17	37	30	弥生土器	甕	D－11　E－10	斜面③	(27.6)	(16.8)		
18	37	29	弥生土器	甕	C－9	ＳＨ－1	(32.0)	(17.6)		
19	37	28	弥生土器	蓋	D－10	ＳＫ－1検出時		(4.0)	7.4	
20	37	29	弥生土器	蓋	C－10	ＳＸ－9		(6.2)	8.4	
21	37	30	弥生土器	蓋	D－10・11	斜面③		(6.2)	7.9	
22	37	30	弥生土器	甕	D－11	斜面③		(6.6)	8.5	
23	38	30	須恵器	坏Ａ	G－11	斜面②	10.7	3.5		
24	38	30	須恵器	坏Ｂ蓋	F－14	ＳＤ－1	17.4	(2.2)		
25	38	31	須恵器	坏Ｈ蓋	5トレンチ	ＳＤ－5	12.3	3.7		
26	38	－	須恵器	坏Ｈ身	A－7	ＳＤ－5	(11.6)	(3.6)	－	
27	38	31	須恵器	坏Ｈ身	B－7	ＳＤ－5	(12.5)	(3.2)	－	
28	38	31	須恵器	坏Ｉ	B－7	ＳＤ－5	(10.6)	3.2	－	
29	38	30	須恵器	皿Ｃ	5トレンチ	ＳＤ－5	14.0	2.0	10.8	
30	38	31	須恵器	椀	5トレンチ	ＳＤ－5	(14.6)	(3.9)		
31	38	31	須恵器	椀Ｂ	B－7	ＳＤ－5		(1.9)	7.5	
32	38	30	須恵器	椀	5トレンチ	ＳＤ－5	18.4	(4.7)		
33	38	31	須恵器	壺	A－7	ＳＤ－5		(8.1)	13.5	
34	38	31	須恵器	壺Ｎ	5トレンチ	ＳＤ－5		(5.0)		
35	38	－	須恵器	壺Ｋ	B－7	ＳＤ－5		(4.8)		
36	38	－	須恵器	甕Ｄ	B－7	ＳＤ－5	22.7	(2.9)		
37	38	－	須恵器	甕Ｂ	A・B－7	ＳＤ－5	(25.6)	(8.6)		
38	38	39	須恵器	坏Ｇ蓋	C－4	ＳＤ－2	10.2	3.2		
39	38	－	須恵器	坏Ｇ蓋	C－3	ＳＤ－2	(10.0)	3.2		
40	38	－	須恵器	坏Ｇ蓋	C－4	ＳＤ－2	10.8	(2.4)		
41	38	－	須恵器	坏Ｉ	C－5	ＳＤ－2	11.4	(3.9)		
42	38	39	須恵器	椀	D－5	ＳＤ－2	11.8	(4.2)		
43	38	39	須恵器	坏Ｈ蓋	C－4	ＳＤ－2	(14.3)	3.5		
44	38	39	須恵器	高坏	C－4	ＳＤ－2	14.8	4.1		
45	38	39	須恵器	坏Ｂ蓋	D－4	ＳＤ－2	14.9	2.4		
46	38	－	須恵器	坏Ｂ蓋	D－4	ＳＤ－2	(15.7)	(1.6)		
47	38	39	須恵器	平瓶	D－5	ＳＤ－2				
48	38	39	須恵器	甕	C・D－4	ＳＤ－2	18.4	(7.6)		
49	38	39	弥生土器	土製円盤	C－5	ＳＤ－2	4.8	4.7	厚0.7	甕を再利用
50	38	－	弥生土器	器台	C－6	ＳＤ－2		(12.3)	19.6	
51	38	32	須恵器	坏Ａ	C－6	ＳＤ－4	(12.9)	4.0	(8.2)	
52	38	32	須恵器	皿Ａ	C－6	ＳＤ－4	15.8	2.0		
53	38	32	須恵器	皿Ｄ	C－6	ＳＤ－4	(18.6)	(2.1)		
54	38	32	須恵器	椀Ｂ	C－6	ＳＤ－4	14.6	(3.8)		
55	38	32	須恵器	椀Ｂ	C－6	ＳＤ－4		(2.7)	7.7	
56	38	32	土製品	土馬	C－6	ＳＤ－4	長10.45	高6.8	厚7.1	
57	39	34・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.8	2.9		
58	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.8	2.8		
59	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.6	3.2		
60	39	34・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.2	3.2		
61	39	36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.7	3.7		
62	39	33・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.9	3.1		
63	39	33・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.3	3.8		
64	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.6	3.4		
65	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.9	3.3		
66	39	34・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.7	3.4		
67	39	36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.3	3.9		
68	39	33・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.2	3.7		
69	39	36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.5	(2.8)		
70	39	34・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.7	3.5		
71	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.1	3.2		
72	39	35・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	9.8	3.0		
73	39	33・36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.6	3.3		
74	39	36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.3	(3.1)		
75	39	36	須恵器	坏Ｇ蓋	B－3	ＳＫ－2	10.5	(2.5)		

別表４．下西山遺跡 遺物一覧（２）

No.	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構 等	口径	器高	底径	備考
76	39	36	須恵器	坏G蓋	B－3	ＳＫ－2	10.8	(2.5)		
77	39	35・36	須恵器	坏G蓋	B－3	ＳＫ－2	10.8	3.4		
78	39	--	須恵器	坏G蓋	B－3	ＳＫ－2	10.0	(2.7)		
79	39	—	須恵器	坏G蓋	B－3	ＳＫ－2	10.7	(1.9)		
80	39	37	須恵器	坏H蓋	B－3	ＳＫ－2	12.3	4.0		
81	39	37	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.8	3.5	—	
82	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.7	3.7	—	
83	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.2	3.6	—	
84	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.9	3.5	5.2	
85	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	8.6	3.5	—	
86	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.4	3.4	—	
87	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.3	3.7	—	
88	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.1	3.6	4.8	
89	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	8.6	3.5	—	
90	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.2	3.5	5.1	
91	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.4	3.1	6.1	
92	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.0	3.4	—	
93	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.0	3.7	6.1	
94	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	9.4	4.1	5.8	
95	39	—	須恵器	坏G身	B－3	ＳＫ－2	8.8	3.6	4.4	
96	39	--	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	9.2	3.4	4.3	
97	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.1	3.6	6.8	
98	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.3	3.5	5.5	
99	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.3	3.9	5.6	
100	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	9.8	3.6	5.4	
101	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.6	3.7	7.0	
102	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.2	3.0	5.1	
103	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	(10.9)	4.1	6.2	
104	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.1	3.6	—	
105	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2		(3.2)		
106	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2		(2.9)		
107	39	—	須恵器	坏I	B－3	ＳＫ－2	10.7	3.0	6.7	
108	39	37	須恵器	椀	B－3	ＳＫ－2	8.8	4.1	5.2	
109	39	37	須恵器	椀	B－3	ＳＫ－2	9.0	3.9	—	
110	39	37	須恵器	高坏	B－3	ＳＫ－2	9.2	(4.0)		
111	39	37	須恵器	坏E	B－3	ＳＫ－2	14.6	6.5	—	
112	39	37	須恵器	椀	B－3	ＳＫ－2	6.1	5.7	4.2	外面にヘラ記号
113	39	37	須恵器	壺K	B－3	ＳＫ－2	9.8	(12.5)		
114	39	—	須恵器	平瓶	B－3	ＳＫ－2	7.4	(9.6)		
115	40	38	弥生土器	壺	B－4	ＳＨ－8	16.2	(11.9)		
116	40	—	弥生土器	壺	B－4	ＳＨ－8床面		(3.9)	7.2	
117	40	38	弥生土器	脚	B－4	ＳＨ－8埋土		(2.5)	15.0	
118	40	38	弥生土器	広口壺	A－5	斜面④	16.9	(4.5)		
119	40	38	弥生土器	壺	A－6	斜面④	18.8	(8.6)		
120	40	—	須恵器	坏B蓋	A－6	斜面④	16.7	(2.6)		
121	40	—	須恵器	壺K	A－5・6	斜面④		(8.3)		
122	40	—	須恵器	皿A	A－6	斜面④	24.0	(3.2)		
123	40	38	土師器	甕	B－3	平坦面C	(19.8)	4.9		
124	40	38	土師器	羽釜	B－3	平坦面C	23.2	6.1		
125	40	40	須恵器	坏G蓋	B－3	平坦面C	10.2	3.1		
126	40	—	須恵器	坏G蓋	B－3　C－4	平坦面C	9.9	3.5		
127	40	40	須恵器	坏G身	B－3	平坦面C	9.3	3.3		
128	40	40	須恵器	椀	B－3	平坦面C	9.5	3.7	—	
129	40	—	須恵器	坏I	B－3	平坦面C	10.3	3.3		
130	40	40	須恵器	坏I	B－3	平坦面C	10.4	3.6	—	
131	40	40	須恵器	高坏	B・C－3　C・D－4	ＳＫ－2	9.5	8.3	8.4	
132	40	—	須恵器	瓶	B－3	平坦面C	10.8	4.0		
133	40	40	須恵器	提瓶	A－4　B－3	平坦面C		19.9	—	
134	40	—	須恵器	皿C	Lﾚﾝﾁ	斜面④	(15.4)	2.0	12.0	内外面に火だすき
135	40	38	土師器	甕	Lﾚﾝﾁ	斜面④		6.0		
136	40	39	須恵器	甕B	B・C－3	平坦面C	25.9	(10.6)		
137	40	—	須恵器	甕C	C－2　D・E－3	斜面⑤　平坦面D	(46.4)	(10.7)		
138	40	32	土製品	土鴨・調	C－2	斜面⑧		7.4	3.7	
139	41	41	須恵器	坏H身	D－3	ＳＨ－5	9.1	2.9		
140	41	41	須恵器	坏H身	D－3	ＳＨ－5	9.0	2.9		
141	41	42	須恵器	坏G蓋	E－3	ＳＨ－4	10.0	2.7		
142	41	—	須恵器	坏G身	F－3	ＳＨ－4	9.7	3.7	4.8	
143	41	--	須恵器	坏H蓋	F－3	ＳＨ－4	10.4	3.8		
144	41	—	須恵器	坏B蓋	F－3	ＳＨ－4	(21.7)	(3.3)		
145	41	42	須恵器	坏G蓋	D－3	ＳＨ－3	9.6	4.9		
146	41	—	須恵器	坏G蓋	D－3	ＳＨ－3	10.2	(2.5)		
147	41	42	須恵器	坏G蓋	D－3	ＳＨ－3	9.2	2.7		
148	41	42	須恵器	坏H蓋	D－3	ＳＨ－3	10.0	3.1		
149	41	—	須恵器	坏H蓋	D－3	ＳＨ－3	10.3	3.0		
150	41	42	須恵器	坏G身	D－3	ＳＨ－3	9.4	3.9		

別表５．下西山遺跡 遺物一覧（３）

No.	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構 等	口径	器高	底径	備考
151	41	42	須恵器	高坏	D－3	SH－3	9.4	8.5	7.2	
152	41	—	須恵器	瓶	D－3	SH－3	7.8	(4.8)		
153	41	—	土師器	甑	F－3	SH－6竈	22.2	(6.6)		
154	41	41	須恵器	坏G蓋	F－3	SH－6　pit501	8.1	2.4		
155	41	41	須恵器	脚付長頸壺	F－3	SH－6埋土		(15.0)	12.9	
156	41	—	須恵器	坏B蓋	D－3	SK－4	13.0	(1.4)		
157	41	41	土師器	製塩土器	D－3	SK－4	13.7	(13.9)		
158	41	—	須恵器	壺	D－3	SK－4		(16.1)		
159	41	41	須恵器	甕	D－3	SK－4	(46.0)	(5.1)		
160	41	41	土師器	甕	F－3	SX－3	24.8	(24.0)		骨蔵器に使用
161	41	46	須恵器	皿C	D－4	SK－12	15.1	2.0	11.3	
162	41	—	須恵器	甕	D－4	SK－12	20.6	(3.5)		
163	41	46	土製品	羽口	D－4	SK－12	5.5	(4.1)		
164	41	—	土師器	製塩土器	G－4	SH－12		5.7		
165	41	—	須恵器	坏B蓋	G－4	SH－12	13.4	3.7		
166	41	46	須恵器	坏B身	G－4	SH－12竈	(15.9)	4.1	10.3	
167	41	46	須恵器	坏A	G－4	SH－12	12.5	3.7		
168	41	—	須恵器	坏B身	F－4	pit16	16.2	3.9	11.5	
169	41	—	須恵器	坏G身	F－4	pit17	(10.2)	3.5		
170	41	—	須恵器	瓶	G－4	pit7	(13.1)	(2.1)		
171	41	—	須恵器	椀	G－4	pit14	10.2	(3.7)		
172	42	43	須恵器	坏G蓋	C－3	平坦面D	9.6	3.2		
173	42	43	須恵器	坏G身	C－3	平坦面D	9.2	3.1	5.9	
174	42	—	須恵器	坏A	C－3	平坦面D	(15.4)	3.4	11.0	
175	42	—	須恵器	坏B身	C－3	平坦面C	14.9	4.4	11.7	
176	42	—	須恵器	壺C	C－3	平坦面D	9.0	(5.2)		
177	42	—	須恵器	皿A	C－3	平坦面D	(27.8)	(4.7)		
178	42	44	須恵器	鉢E	C－3	平坦面D		(5.5)	7.8	
179	42	—	須恵器	坏H蓋	0トレンチ	平坦面D	9.3	2.9		
180	42	42	須恵器	坏H蓋	4トレンチ	平坦面D	10.3	3.1		
181	42	—	須恵器	坏H蓋	D－3	平坦面D	10.2	3.6		
182	42	43	須恵器	坏H蓋	D－3	平坦面D	10.9	3.9		
183	42	—	須恵器	坏H身	D－3	平坦面D	9.0	2.7	4.8	
184	42	42	須恵器	坏H身	1トレンチ	平坦面D	9.9	2.9	5.9	
185	42	—	須恵器	坏H身	D－3・4　E－3	平坦面D・E	13.6	4.4	5.7	
186	42	43	須恵器	坏I	D－3	平坦面D	9.3	2.9	—	
187	42	42	須恵器	坏G身	0トレンチ	平坦面D	8.8	3.3	—	
188	42	—	須恵器	椀	D－3	平坦面D	8.8	(3.6)		
189	42	43	須恵器	坏I	D－3	斜面⑦	10.3	3.2	—	
190	42	42	須恵器	高坏	1トレンチ	平坦面D		(7.4)	10.3	
191	42	44	須恵器	壺C	D－3	平坦面D	6.7	4.8		
192	42	—	須恵器	甕	D－3	平坦面D	13.5	(4.5)		
193	42	—	須恵器	鉢	D・E－3	平坦面D	(19.4)	(10.5)		
194	42	43	須恵器	円面硯	B－4　C－3　D・E－3	斜面⑤　平坦面D	14.3	3.8	19.2	
195	42	—	土師器	皿	D－3	平坦面D	22.0	2.6		
196	42	43	須恵器	坏H蓋	E－3	斜面⑦	10.2	3.7		
197	42	43	須恵器	坏H身	E－4	斜面⑦	8.5	3.1	—	
198	42	43	須恵器	坏I	E－4	斜面⑦	10.8	3.7	—	
199	42	43	須恵器	坏H蓋	F－4	平坦面D	9.9	3.4		
200	42	43	須恵器	坏H身	F－4	平坦面D	9.1	2.8	—	
201	42	—	須恵器	坏I	F－3	平坦面D	8.8	3.3	—	
202	42	43	須恵器	坏I	F－4	平坦面D	10.3	37.0		
203	42	—	須恵器	坏I	F－3	平坦面D	10.6	3.4	5.6	
204	43	44	須恵器	甕	D－3 C・E・F－4 0トレンチ	平坦面D・E　斜面⑦・⑧	29.0	(13.4)		
205	43	—	須恵器	甕	D・E・F－3・4　1トレンチ	平坦面D・E　斜面⑦	(15.9)	(40.7)		
206	43	44	須恵器	甑	C－4　E－4・5　0トレンチ	平坦面E　斜面⑦		(18.8)	12.4	
207	43	39	須恵器	横瓶	C－3　D－3・4　E－3・4・5	SD－2　平坦面D・E　斜面⑦		(20.5)		
208	43	44	土師器	甑	E－3	斜面⑦		(15.2)	(13.0)	
209	44	45	須恵器	坏H蓋	D－4	SH－13	13.5	3.8		
210	44	45	須恵器	坏H蓋	D－4	SH－13	15.5	4.4		
211	44	45	須恵器	坏H身	D－4	SH－13	12.6	4.1	—	内面にアテ具底
212	44	45	須恵器	坏H身	D－4	SH－13	14.6	(4.2)	—	
213	44	45	須恵器	坏H身	D－4	SH－13	14.4	3.9	—	
214	44	45	須恵器	坏G身	E－4	平坦面E	9.9	4.1	5.9	
215	44	45	須恵器	高坏蓋	C・F－4	SH－13	13.7	4.8		
216	44	45	須恵器	高坏蓋	D－4	SH－13竈床面	14.5	5.2		
217	44	45	須恵器	高坏蓋	D－4	SH－13	15.1	4.7		
218	44	45	須恵器	壺	D－4	SH－13床面	(19.3)	22.6	—	
219	44	—	土師器	甑	D－4	SH－13竈床面		(26.1)	(9.6)	
220	44	46	須恵器	坏H蓋	D・E－4	SH－9	10.8	3.8	—	
221	44	—	須恵器	壺C	D－4	SH－9	10.0	(3.8)		
222	44	—	須恵器	高坏	D－4	SH－9	12.9	3.8		
223	44	46	須恵器	鉢E	E－4	SH－9竈		(6.6)	8.8	
224	44	46	須恵器	甕	D・E－4	SH－9	16.5	(9.3)		
225	44	—	土製品	羽口	D－4	SH－9	4.5	(4.6)		

別表６．下西山遺跡 遺物一覧（４）

No.	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構　等	口径	器高	底径	備考
226	44	46	須恵器	坏H蓋	E－4	SH－10	11.2	3.4		
227	44	46	須恵器	坏H身	D・E－4	SH－10	9.7	3.4	－	
228	44	46	須恵器	坏H身	E－4	SH－10中央焼土	10.3	3.8		
229	44	－	須恵器	坏H身	E－4	SH－10	10.1	3.5	－	
230	44	－	須恵器	坏H身	E－4	SH－14	(13.0)	3.1		
231	44	－	須恵器	壺	E－4	SH－10竈	16.6	(6.3)		
232	44	－	須恵器	甑	E－4	SH－10	10.3	(3.2)		
233	44	－	土師器	甕	E－4	SH－10竈		(2.5)		
234	44	－	土師器	椀	E－4	SH－10竈	(15.3)	(3.6)		
235	44	45	須恵器	坏H蓋	D－4	SH－11	13.0	3.3		
236	45	48	須恵器	坏G蓋	B－4	SX－7	10.2	3.7		
237	45	－	須恵器	坏G蓋	B－4	SX－7	(10.8)	(2.7)		
238	45	48	須恵器	坏I	B－4	SX－7	9.8	3.2		
239	45	－	須恵器	坏I	B－4	平坦面E	(10.2)	3.0		
240	45	－	須恵器	坏H蓋	B－4	平坦面E	10.7	3.2		
241	45	－	土師器	把手	B－4	平坦面E		(5.8)		
242	45	－	須恵器	坏H蓋	C－4	平坦面E	11.0	4.0		
243	45	－	須恵器	坏H蓋	C－4	平坦面E	12.8	3.7		
244	45	47	須恵器	坏H蓋	C－4	平坦面E	13.2	4.5		
245	45	47	須恵器	坏H身	C－4	平坦面E	9.5	3.7	－	
246	45	52	須恵器	高坏	C－4	平坦面D	10.9	7.2	7.9	
247	45	－	須恵器	高坏	C－4	平坦面E	13.8	(4.0)		
248	45	－	須恵器	坏G蓋	C－4	平坦面E	9.4	2.9		
249	45	－	須恵器	坏I	C－4	平坦面D	(9.2)	3.1	－	
250	45	－	須恵器	坏G身	C－4	平坦面E	(8.7)	3.3	5.8	
251	45	－	須恵器	坏A	C－4	平坦面E	14.0	4.0	10.2	
252	45	－	須恵器	坏A	C－4	平坦面E	15.4	4.0	11.8	
253	45	49	須恵器	椀C	C－4	平坦面E	13.6	7.3	9.2	
254	45	－	須恵器	坏B蓋	C－4	平坦面E	13.8	(2.5)		
255	45	49	須恵器	坏B蓋	C－4	平坦面E	15.4	2.5		
256	45	－	須恵器	坏B蓋	C－4	平坦面E	16.0	(1.9)		
257	45	－	須恵器	坏B身	C－4	平坦面E	16.3	4.4	11.9	
258	45	49	須恵器	坏B身	C－4	平坦面E	15.4	4.3	11.2	
259	45	49	須恵器	坏B身	C－4	平坦面E	17.3	4.5	12.1	
260	45	49	須恵器	鉢	C－4	平坦面E	21.3	12.1		
261	45	51	須恵器	壺K	C－4	斜面⑦	7.5	23.5	10.5	
262	45	－	須恵器	甕	C－3・4　D－4	斜面⑦　平坦面E	18.4	(20.0)		
263	45	52	土師器	甕	C－4	平坦面E	22.8	(17.8)		
264	45	－	須恵器	坏H身	C－4	平坦面E	(10.0)	(3.4)		
265	45	－	弥生土器	甕	C－4	平坦面E	11.0	4.6		
266	46	－	須恵器	壺C	D－4	平坦面E	8.2	4.3	6.6	
267	46	50	須恵器	広口壺	D－4	平坦面E	8.0	10.6		
268	46	－	須恵器	壺K	D－4	斜面⑦		(3.3)	9.7	
269	46	51	須恵器	鉢	D－4	平坦面E		(10.2)	6.1	
270	46	51	須恵器	鉢	D－4・5　F－4	斜面⑧	13.6	14.4	－	
271	46	－	須恵器	坏H蓋	D－4	平坦面E	10.9	3.4		
272	46	－	須恵器	坏H蓋	D－4	平坦面E	9.8	3.3		
273	46	47	須恵器	坏H蓋	D－4	平坦面E	11.6	3.2		
274	46	－	須恵器	坏H蓋	D－3・4	平坦面D・E	11.3	3.0		外面にヘラ記号
275	46	－	須恵器	坏H身	D－4	平坦面E	9.3	3.1	4.9	内面に赤色顔料
276	46	49	須恵器	坏H身	D－4	平坦面E	9.3	2.6	－	
277	46	47	須恵器	坏H身	D－4	平坦面E	8.8	2.8	5.7	
278	46	－	須恵器	坏H身	B・D－4	平坦面E	10.0	3.0	－	
279	46	47	須恵器	坏H身	D・E－4	平坦面E	9.0	3.2	－	
280	46	－	須恵器	坏H身	D－4	斜面⑦	13.6	3.8	4.6	
281	46	－	須恵器	高坏	D－4	斜面⑦		(5.8)	7.0	
282	46	－	須恵器	高坏	D－4・5	斜面⑧		(7.4)	10.4	
283	46	－	須恵器	高坏	D－4	平坦面E		(7.9)	14.6	
284	46	－	須恵器	坏G蓋	D－4	平坦面E	7.2	(2.0)		
285	46	－	須恵器	坏G蓋	D－4	平坦面E	10.2	(2.2)		
286	46	48	須恵器	坏G蓋	D－4	平坦面E	10.7	3.8		
287	46	－	須恵器	坏I	D－4	平坦面E	9.6	4.1	－	
288	46	48	須恵器	坏I	D－4	平坦面E	9.9	3.1	－	
289	46	48	須恵器	坏I	D－3・4　E－4	平坦面D・E	11.6	3.6	4.1	
290	46	－	須恵器	坏A	D－4	斜面⑦	(12.4)	3.1	－	
291	46	－	土師器	鍋	D－4	平坦面E		(5.3)	13.4	
292	46	52	土師器	坏	D－4	平坦面E	9.6	(3.9)		
293	46	－	土師器	甕	D－4	平坦面E	(28.0)	(7.0)		
294	46	52	土師器	鉢か甑	C・D－4	平坦面E　斜面⑧	26.0	(13.0)		
295	46	52	土師器	把手	D－4	平坦面E		(10.0)		
296	46	－	須恵器	坏H蓋	C－6	平坦面F	10.7	3.5		
297	46	－	須恵器	坏G身	C－6	平坦面F	10.0	2.8	6.7	
298	46	－	須恵器	坏B蓋	C－6	平坦面F	15.8	(2.6)		
299	46	－	土師器	把手	C－6	平坦面F		(5.6)		
300	47	47	須恵器	坏H蓋	E－4	平坦面E	9.8	4.2		

別表７．下西山遺跡 遺物一覧（５）

No.	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構 等	口径	器高	底径	備考
301	47	47	須恵器	坏H蓋	E－3　F－4	平坦面E	9.8	3.4		
302	47	—	須恵器	坏H蓋	E－4	平坦面E	(10.7)	3.8		
303	47	—	須恵器	坏H蓋	E－4	平坦面E	10.1	4.1		
304	47	47	須恵器	坏H蓋	E－4	平坦面E	(11.1)	3.9		
305	47	—	須恵器	坏H身	E－4	平坦面E	8.5	3.1	—	外面にヘラ記号
306	47	47	須恵器	坏H身	E－4	平坦面E	9.6	3.0	—	
307	47	—	須恵器	椀	E－4	平坦面E	9.6	5.3	5.0	
308	47	48	須恵器	坏G蓋	E－4	平坦面E	9.8	3.0		
309	47	48	須恵器	坏I	E－4	平坦面E	9.5	4.0	—	
310	47	—	須恵器	坏I	E－4	平坦面E	10.3	3.8	—	
311	47	48	須恵器	坏I	E－3	平坦面D	9.8	3.6	—	
312	47	—	須恵器	坏I	E－3	平坦面D	9.9	3.7	—	
313	47	—	須恵器	坏B蓋	E－4	平坦面E		(3.3)		
314	47	—	須恵器	坏B蓋	E－4	平坦面E	15.7	(2.3)		
315	47	—	須恵器	坏B蓋	E－4	平坦面E	19.0	(1.6)		
316	47	49	須恵器	皿A	C－4　E－3	斜面⑦　平坦面E	21.0	4.9		
317	47	—	須恵器	高坏	E－4	平坦面E		(5.3)	8.7	
318	47	47	須恵器	坏H身	F－4	斜面⑦　平坦面E	10.0	3.1	3.9	
319	47	47	須恵器	坏H身	F－4	平坦面E	9.3	3.4	—	
320	47	—	須恵器	坏G蓋	G－3	平坦面D	11.0	(2.5)		
321	47	48	須恵器	坏I	D－3　F－4	斜面⑦　平坦面E	9.4	3.5	—	
322	47	49	須恵器	坏B蓋	F－4	平坦面E	17.3	3.9		
323	47	—	須恵器	坏H身	E・G－3　F－5	斜面⑦・⑧　平坦面E	14.3	3.8		
324	47	—	須恵器	坏A	F－4	平坦面E	11.4	3.2		
325	47	52	須恵器	高坏	E－4	斜面⑦	14.0	10.0	9.5	
326	47	50	須恵器	壺	F－4・5　G－3	平坦面D・E　斜面⑦・⑧	15.2	18.3		
327	47	51	須恵器	壺K	F－4　G－3	平坦面E　斜面⑧		(23.0)	8.9	
328	47	50	須恵器	壺K	E－5	斜面⑧		(11.4)	8.7	
329	47	52	須恵器	把手	D－5	斜面⑧		(8.9)		
330	47	—	土師器	甕	D－5	斜面⑧	(26.0)	(5.3)		
331	47	—	土師器	甑	C－5	斜面⑧		(5.6)	(8.6)	
332	47	—	弥生土器	器台	C・D－5	斜面⑨	(27.7)	(6.8)		
333	48	—	須恵器	壺C蓋	D－5	斜面⑨	6.7	2.7		
334	48	50	須恵器	壺C	E－5	斜面⑧	6.3	5.7	—	
335	48	50	須恵器	壺C	D－5	斜面⑧	8.6	4.5	—	
336	48	—	須恵器	壺C	D－3	平坦面D	9.2	(6.4)		
337	48	—	須恵器	坏H蓋	C－5	斜面⑧	13.1	3.9		
338	48	47	須恵器	坏H蓋	E－5	斜面⑧	14.2	(3.3)		
339	48	—	須恵器	坏E	C－5	斜面⑧	12.9	5.6		
340	48	—	須恵器	椀	D－5	斜面⑨	13.7	(4.4)		
341	48	48	須恵器	坏G蓋	C－5	斜面⑧	10.2	(3.3)		
342	48	—	須恵器	椀	C－5	斜面⑧	8.8	3.5		
343	48	—	須恵器	坏I	C－5	斜面⑧	10.6	3.5		
344	48	—	須恵器	坏B蓋	D－5	斜面⑧	16.4	(2.1)		
345	48	49	須恵器	坏B蓋	E－5	斜面⑧	13.6	2.6		
346	48	49	須恵器	坏B蓋	F－5	斜面⑧	18.6	3.1		
347	48	—	須恵器	坏B蓋	E－5	斜面⑧	19.7	1.8		
348	48	—	須恵器	坏E	D－6	斜面⑧	17.8	3.3		
349	48	—	須恵器	皿A	E－5	斜面⑧	23.0	3.1		
350	48	52	須恵器	高坏	D－5	斜面⑧	16.0	12.0	10.4	
351	48	—	須恵器	甕D	E－5	斜面⑧	27.9	(7.5)		
352	48	—	須恵器	甕A	C・D－5	斜面⑨	20.9	(8.0)		
353	48	—	須恵器	甕A	C・D－4・5	斜面⑧	20.5	(10.8)		
354	48	50	須恵器	甕	C－5	斜面⑧		(37.9)	—	
355	—	31	丹波焼	壺	5トレンチ	SD－5	(13.8)	(3.3)		
356	—	38	土師器	竈	A－5	斜面④				
357	—	39	須恵器	甕	C－6	平坦面F				

別表８．下西山遺跡 遺物一覧（６）

No	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構　等	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
401	49		鉄器	釘	D－3	斜面⑦	3.0	0.9	0.9		
402	49		鉄器	釘の基部	C－3	平坦面D	2.1	0.4	0.4		
403	49		鉄器	釘	E－4	平坦面E	4.5	0.9/0.7	0.6/0.2		
404	49		鉄器	釘	D－3	平坦面D	2.0	0.5	0.3		
405	49	53	鉄器	刀子	D－3	ＳＨ－5床面	8.0	0.9/0.9	0.3/0.2		
406	49	53	鉄器	刀子	Oトレンチ	斜面⑦	6.7	0.7/0.9	0.2/0.3		
407	49		鉄器	刀子	F－3	ＳＨ－4	5.6	1.0/0.4	0.2/0.1/0.1		
408	49		鉄器	刀子	D－3	平坦面D	3.8	1.4/0.9/0.8	0.3/0.3/0.4		
409	49	53	鉄器	鏃	E－3	平坦面D	5.5	2.4	0.4		
410	49		鉄器	刀子	D－3	ＳＨ－5	3.5	0.7	0.4		
411	49		鉄器	刀子	Oトレンチ	平坦面D	4.4	2.1	0.1		
412	49	54	鉄器	鎌	F－4	斜面⑦	9.5	1.4/1.2	0.3/0.1/0.5		
413	49		鉄器	不明鉄製品	F－3	ＳＨ－4	6.7	0.7/0.5	0.3/0.2		
414	49		鉄器	鏃子状鉄器	F－4	斜面⑦	2.2	0.8/0.7	0.2/0.1		
415	49	53	鉄器	鏃先	D－3	平坦面D	7.6	2.0	1.0		
416	49		鉄器	釘	E－3	斜面⑦	10.4	0.5	0.5		
417	49		鉄器	釘先端	E－3	斜面⑦	2.7	0.3	0.3		
418	50	53	鉄器	釘	C－4	平坦面E	6.4	0.6	0.6		
419	50		鉄器	釘	E－4	平坦面E	5.8	0.5	0.4		
420	50		鉄器	釘	E－5	斜面⑧	6.5	0.6	0.6		
421	50	53	鉄器	釘	G－4	平坦面E	4.2	0.6/0.4	0.6/0.4		
422	50	53	鉄器	釘	G－4	平坦面E	2.4	0.5	0.4		
423	50		鉄器	鏃	E－4	ＳＨ－10	4.8	3.3	0.6		
424	50	54	鉄器	鏃	E－4	平坦面E	8.4	2.5/1.6/0.5	0.3/0.5/0.6		
425	50	53	鉄器	鏃	D－5	斜面⑧	3.5	0.6	0.3		
426	50		鉄器	鏃の茎	E－5	斜面⑧	3.8	0.6	0.2		
427	50	53	鉄器	刀子	C－5	斜面⑧	11.6	1.0/1.2/0.8	0.2/0.3/0.2		
428	50	53	鉄器	刀子	D－5	斜面⑧	6.5	1.2/0.7	0.4/0.3		
429	50		鉄器	刀子	D－4	平坦面E	2.8	1.3	0.2		
430	50		鉄器	刀子	D－4	平坦面E	3.0	1.5	0.3		
431	50	54	鉄器	鍛造途中	D－5	斜面⑧	3.7	1.7	1.0		
432	50		鉄器	不明鉄製品	D－4	平坦面E	6.1	4.1	0.2		
433	50	54	青銅品		D－4	ＳＨ－9	1.8	1.8/0.1			
434	50	54	鉄器	斧	Lトレンチ	斜面④	7.7	3.2/1.6	0.7		
435	50	53	鉄器	刀子	Iトレンチ中央	斜面①	8.1	0.8/0.7/1.6	0.4/0.4		
436	50	54	青銅品	銭	D－14	斜面①	2.4	0.7			
437	50		鉄	銭	D－6	ＳＤ－2	2.5	0.9	0.2		
438	51	55	鉄	滓	B－3	平坦面C	4.9	3.5	1.4	26.5	
439	51	55	鉄	滓	D－3	ＳＨ－4	3.7	2.5/3.0	1.1	15.6	
440	51	55	鉄	滓	D－3	ＳＨ－4	2.2	2.0/2.8	2.3	8.7	
441	51	55	鉄	滓	F－3	ＳＨ－6	4.8	3.8	1.2	30.7	
442	51	55	鉄	滓	E－3	斜面⑦	2.7	3.1	1.3	14.2	
443	51	55	鉄	滓	D－4	ＳＫ－12	5.9	4.1	2.1	67.1	
444	51	55	鉄	滓	D－5	ＳＫ－12	4.2	3.2	3.0	40.8	
445	51	55	鉄	滓	D－4	ＳＨ－11竈横	4.8	4.4/4.4	2.5	62.2	
446	51	55	鉄	滓	D－5	平坦面E	3.3	3.8	0.9	15.5	
447	51	55	鉄	滓	E－4	ＳＨ－10	3.1	5.1	1.9	24.8	
448	51	55	鉄	滓	D－4	平坦面E	10.7	7.3	2.2	224.5	
449	51	55	鉄	滓	E－4	平坦面E	6.7	7.0/7.1	2.8	148.6	
450	51		鉄	滓	G－4	ＳＨ－12	4.2	3.9	5.9	16.9	
451	51	55	鉄	滓	C－4	平坦面E	4.6	4.1	1.6	36.3	

別表９．下西山遺跡 遺物一覧（７）

No	図版	写真図版	種別	器種	出土地区	遺構　等	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考
501	52	56	石器	有茎尖頭器	E－4	平坦面E	4.6	2.3	0.6	5.8	サヌカイト
502	52	56	石器	石鏃	D－4	ＳＨ－9	2.8	1.3	0.5	1.4	サヌカイト
503	52	56	石器	石鏃	8トレンチ	斜面①	3.2	3.4	0.6	3.6	サヌカイト
504	52	56	石器	石鏃	D－10	斜面③	2.6	2.0	0.2	1.6	サヌカイト
505	52	56	石器	磨製石鏃	F－4	平坦面E	4.1	2.1	0.4	3.3	スレート
506	52	56	石器	楔	D－11	斜面③	3.3	1.6	0.7	3.2	サヌカイト
507	52	56	石器	楔	C－5	斜面⑤	5.7	1.9	1.0	8.5	サヌカイト
508	52	56	石器	楔	B－5	斜面⑤	3.2	3.5	1.2	10.5	サヌカイト
509	52	56	石器	磨製穂摘具	E－3	平坦面D	6.5	4.8	0.7	25.8	スレート
510	52	57	石器	石錘	A－5	斜面④	4.8	5.3	0.6	18.6	紅簾片岩
511	53	57	石器	砥石	5トレンチ	ＳＤ－5	3.8	3.0	1.6	19.1	
512	53	57	石器	砥石	D－4	平坦面E	4.8	2.6	0.6	9.1	
513	53	57	石器	砥石	1トレンチ	ＳＨ－5	8.5	3.2	1.5	54.7	
514	53	57	石器	砥石	C－5	斜面⑧	5.4	1.4	1.2	14.2	
515	53	57	石器	砥石	D－4	斜面⑦	6.6	4.3	4.7	176.2	
516	53	57	石器	砥石	C－5	斜面⑧	13.7	8.4	4.9	552.5	

報告書抄録

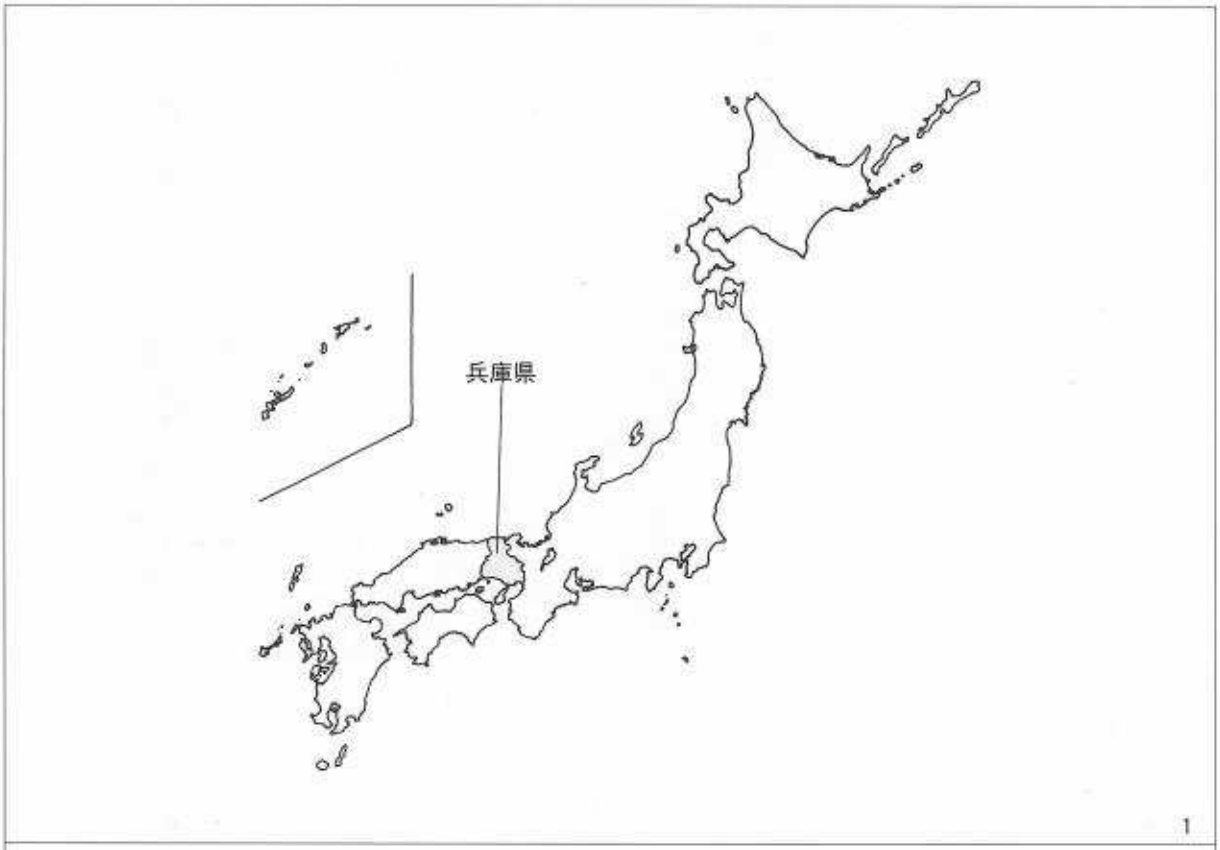
ふりがな	ほくせつにゅーたうんないいせきちょうさほうこくしょ　しもにしやまいせき
書名	北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅶ－下西山遺跡－
副書名	
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第200冊
編著者名	篠宮　正・岡本一秀・広岡公夫・石塚　聡・高妻洋成
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　ＴＥＬ.078-531-7011
発行年月日	西暦2000年（平成12年）３月31日

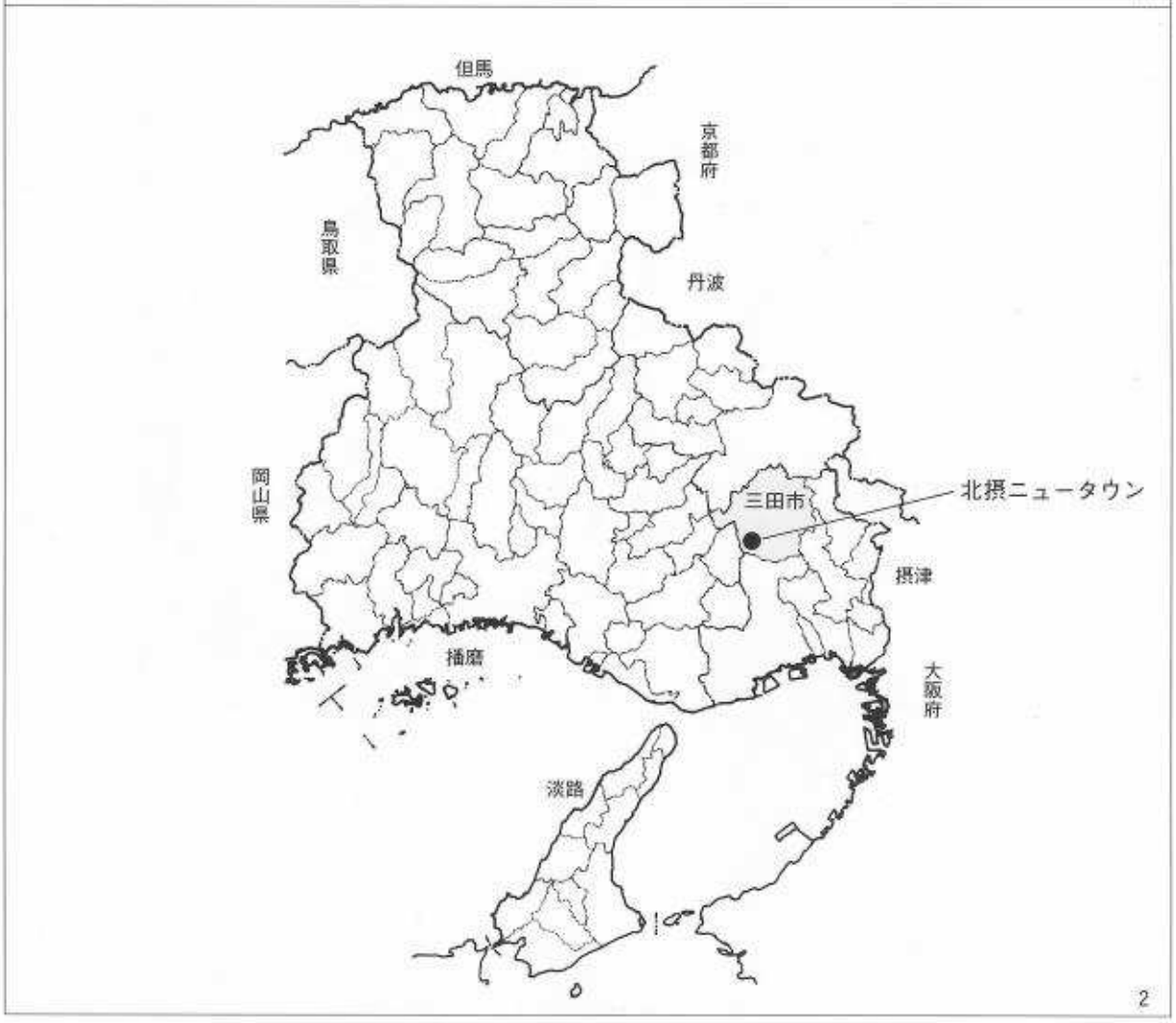
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しもにしやま	ひょうごけんさんだし					19880113		
下西山	兵庫県三田市	28219	870063	34度	135度	～	301㎡	北摂地区新住宅市街地開発事業（中央地区）
						19880308		
				54分	12分	19900702		
			900012			～	126㎡	
				24秒	7秒	19900918		
						19930520		
			930020			～	6,017㎡	
						19931206		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下西山遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡	弥生土器	
			土坑	石器	
			溝		
	集落跡	古墳時代	掘立柱建物跡	土師器	
	生産遺跡	～	竪穴建物跡	須恵器	
		飛鳥時代	土坑	円面硯	
			道路跡	土馬	
			溝	鉄器	
				鉄滓	
				青銅器	
				砥石	
	墓地	奈良時代	火葬墓	蔵骨器（土師器甕）	
	生産遺跡		土坑(鍛冶炉)	土師器	
			集石	須恵器	
			溝	鉄滓	

図　　版

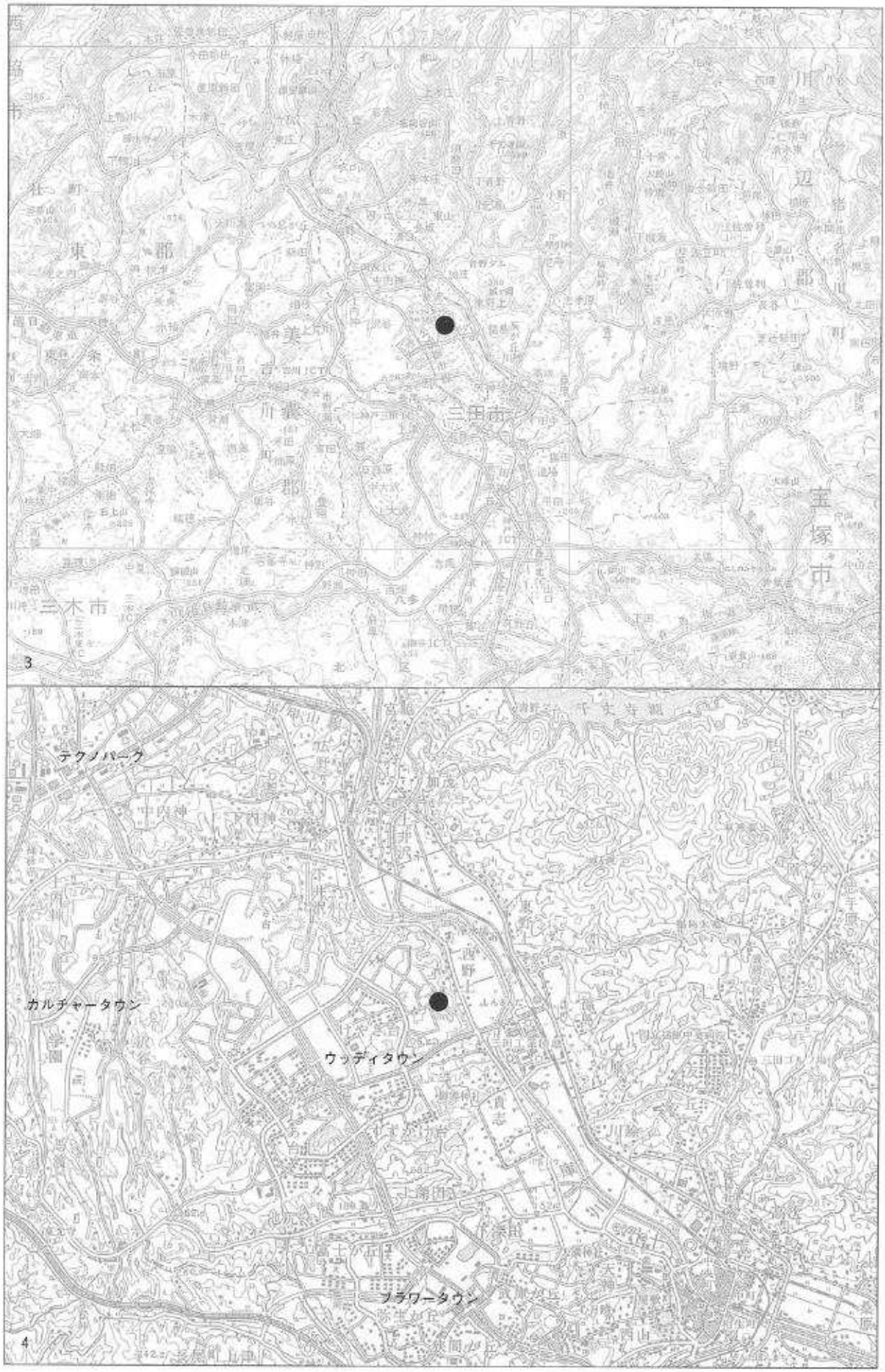
図版1



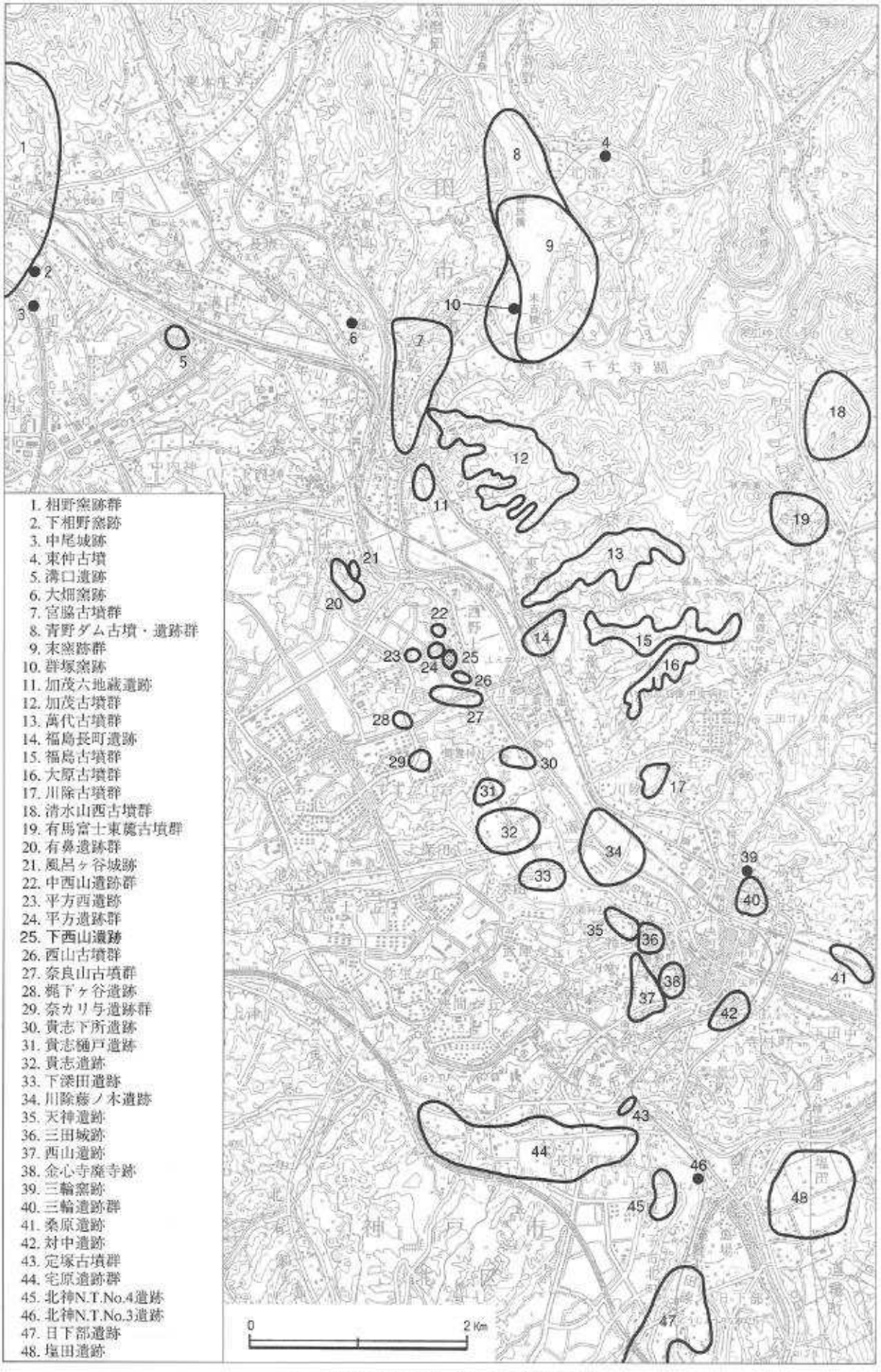


1．兵庫県の位置
2．三田市の位置

図版2

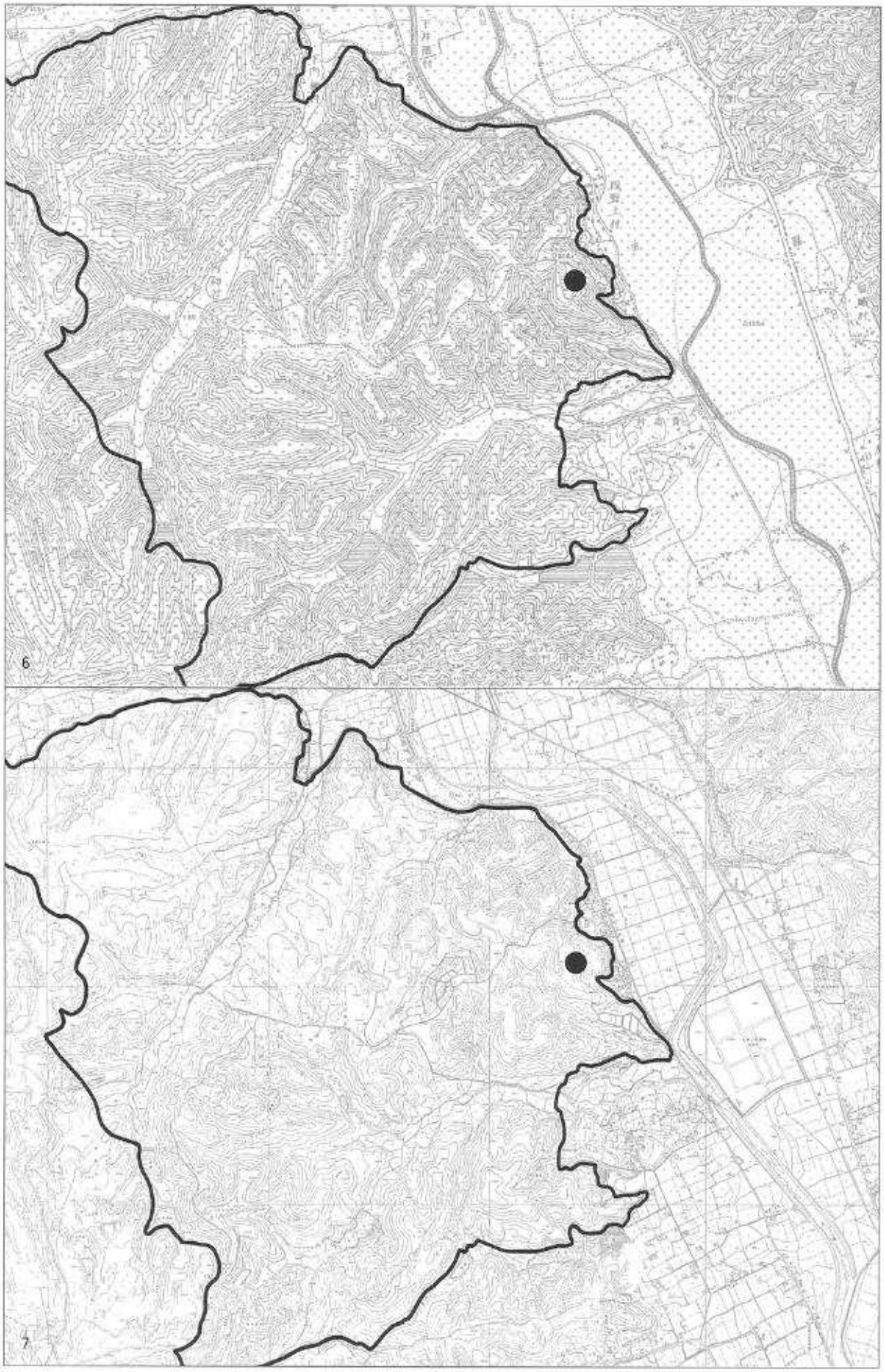


3．遺跡の位置（1/200,000）「京都及大阪」
4．遺跡の位置（1/50,000）「三田」

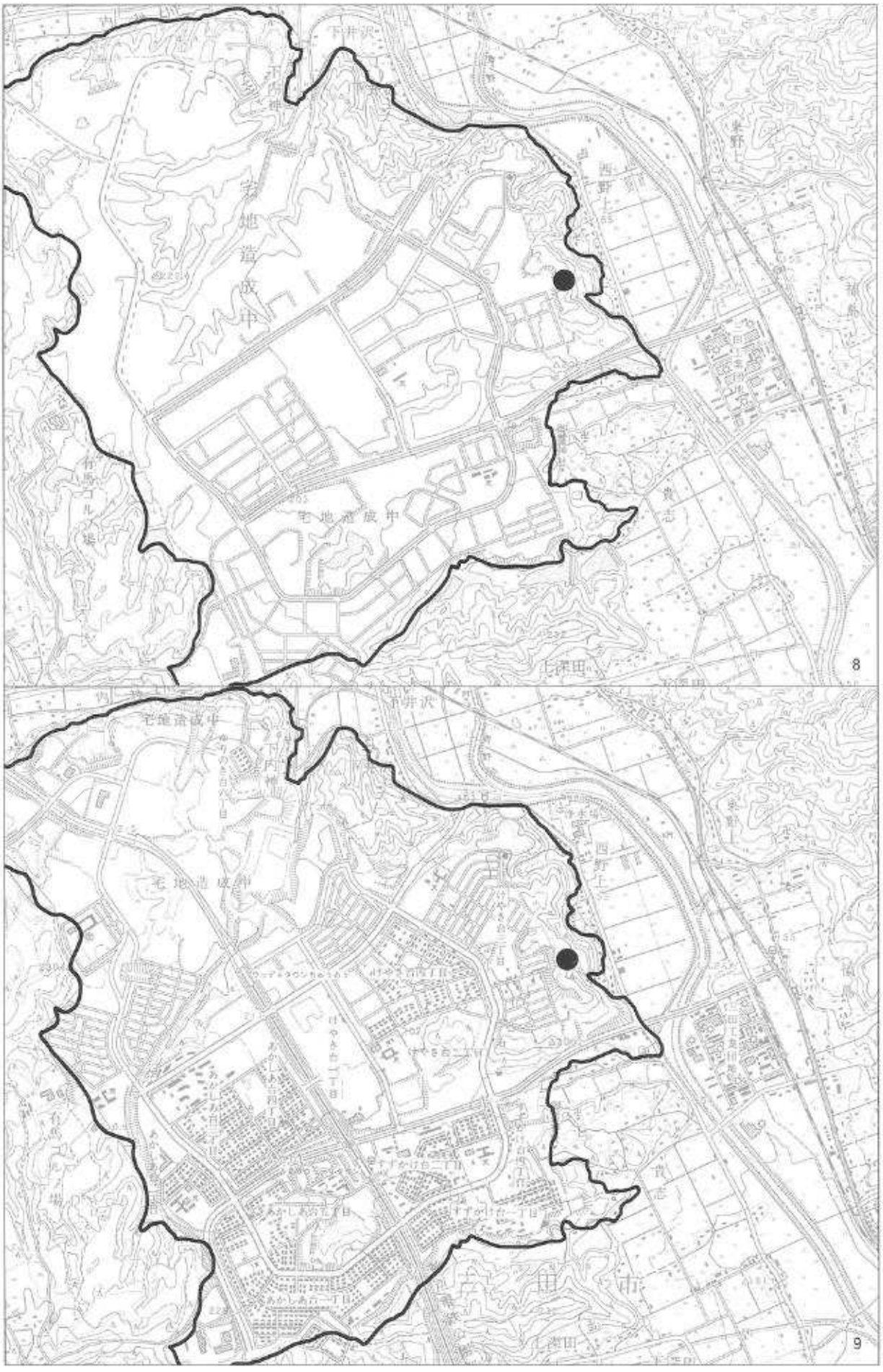


5．周辺の主要遺跡（1/50,000）「三田」

図版4

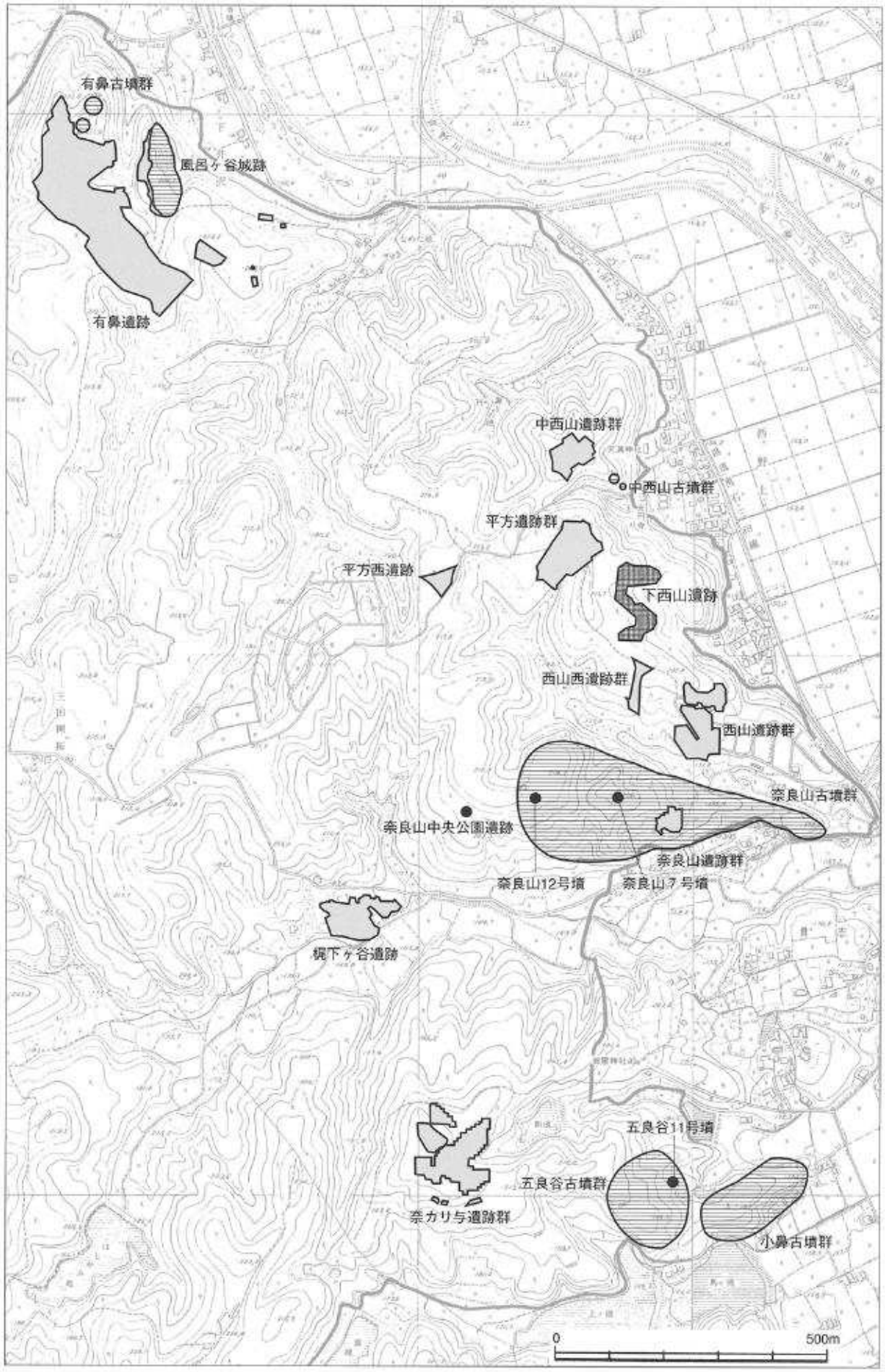


6．事業地周辺の変化　明治19年（1/25,000）「三田」「古市村」
7．事業地周辺の変化　昭和47年（1/25,000）



8．事業地周辺の変化　昭和63年（1/25,000）「三田」「古市」
9．事業地周辺の変化　平成８年（1/25,000）「三田」「古市」

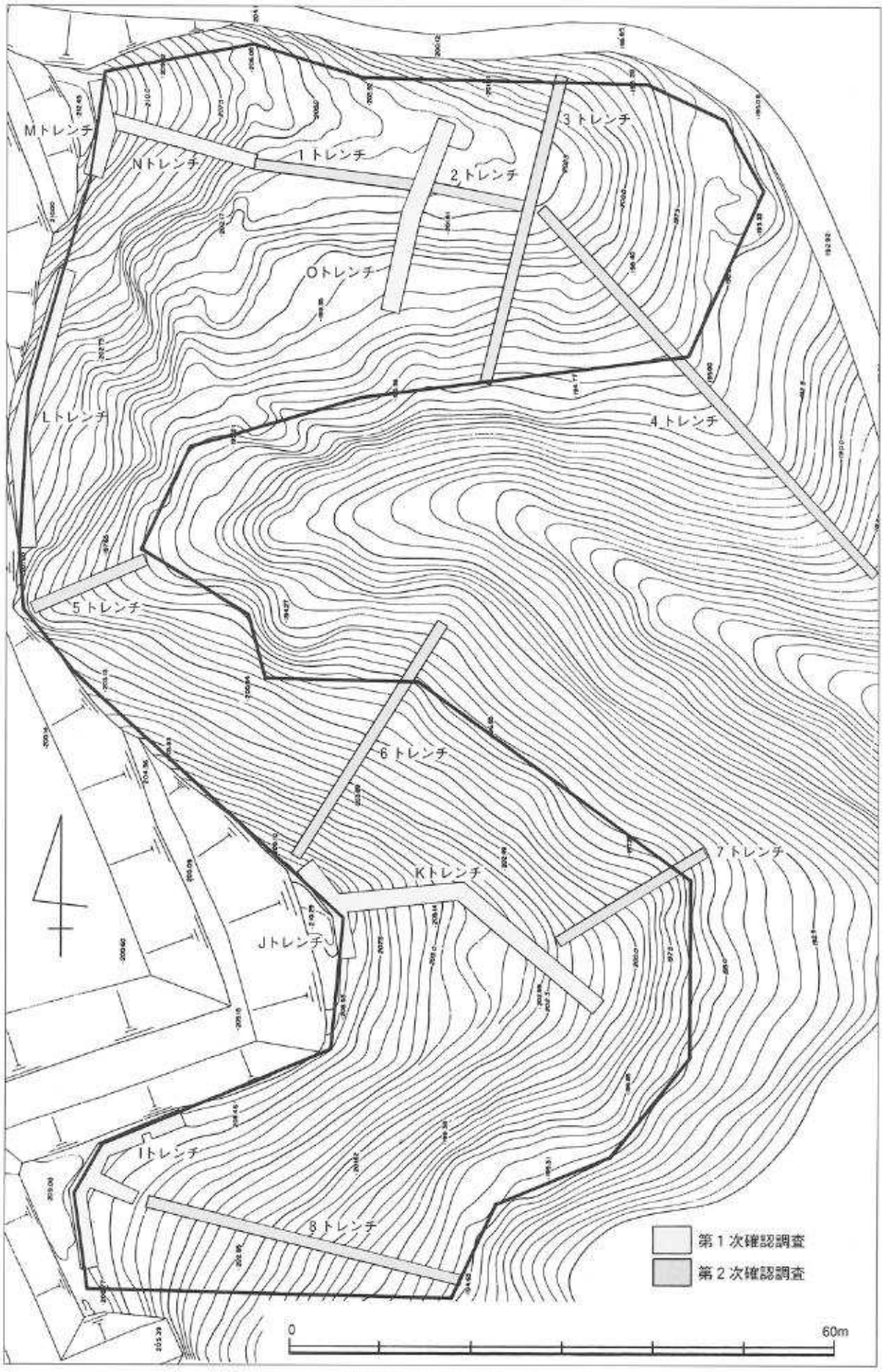
図版6



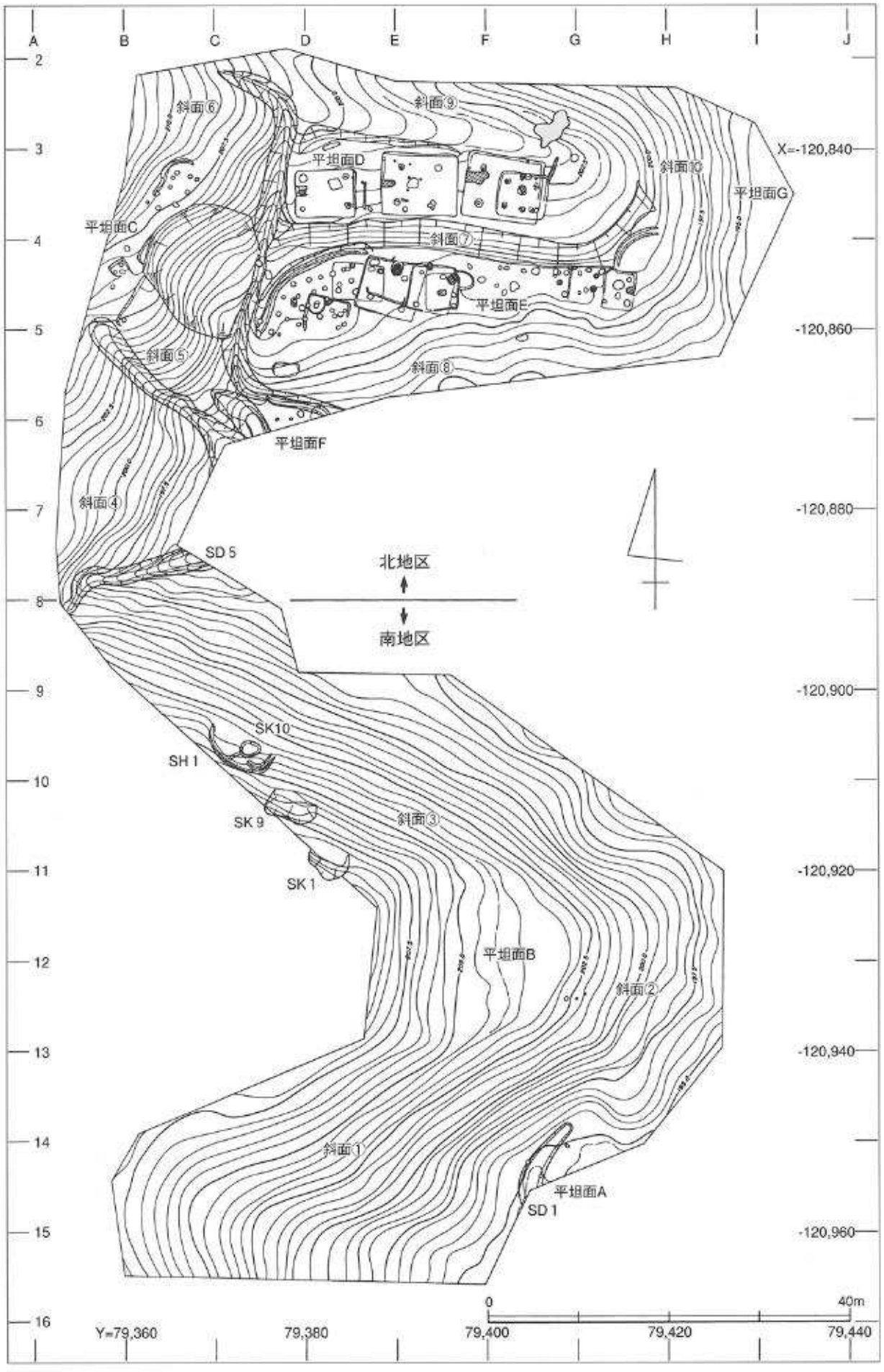
10. 事業地内の遺跡（1/10,000）

11. 旧地形と調査区位置（1/2,500）

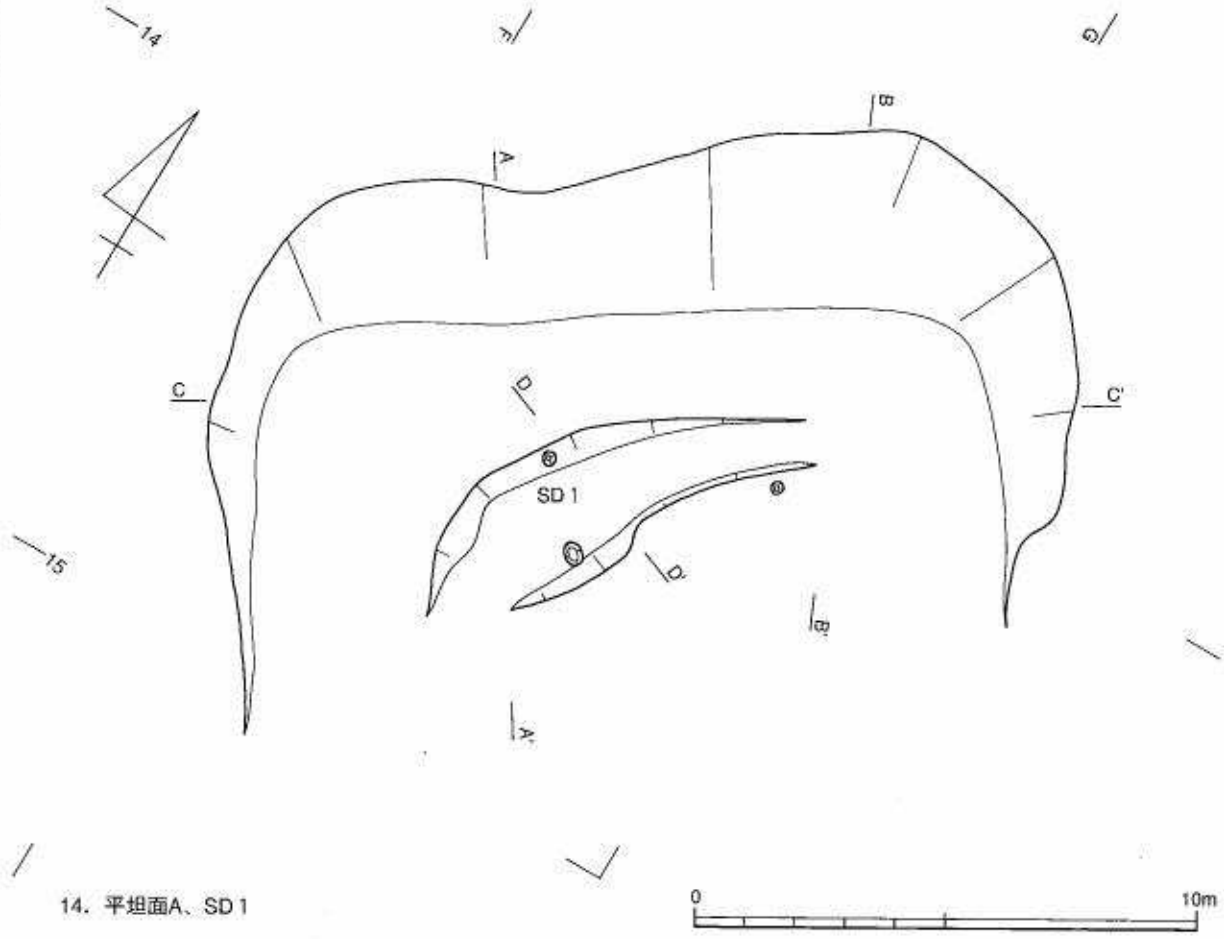
図版8



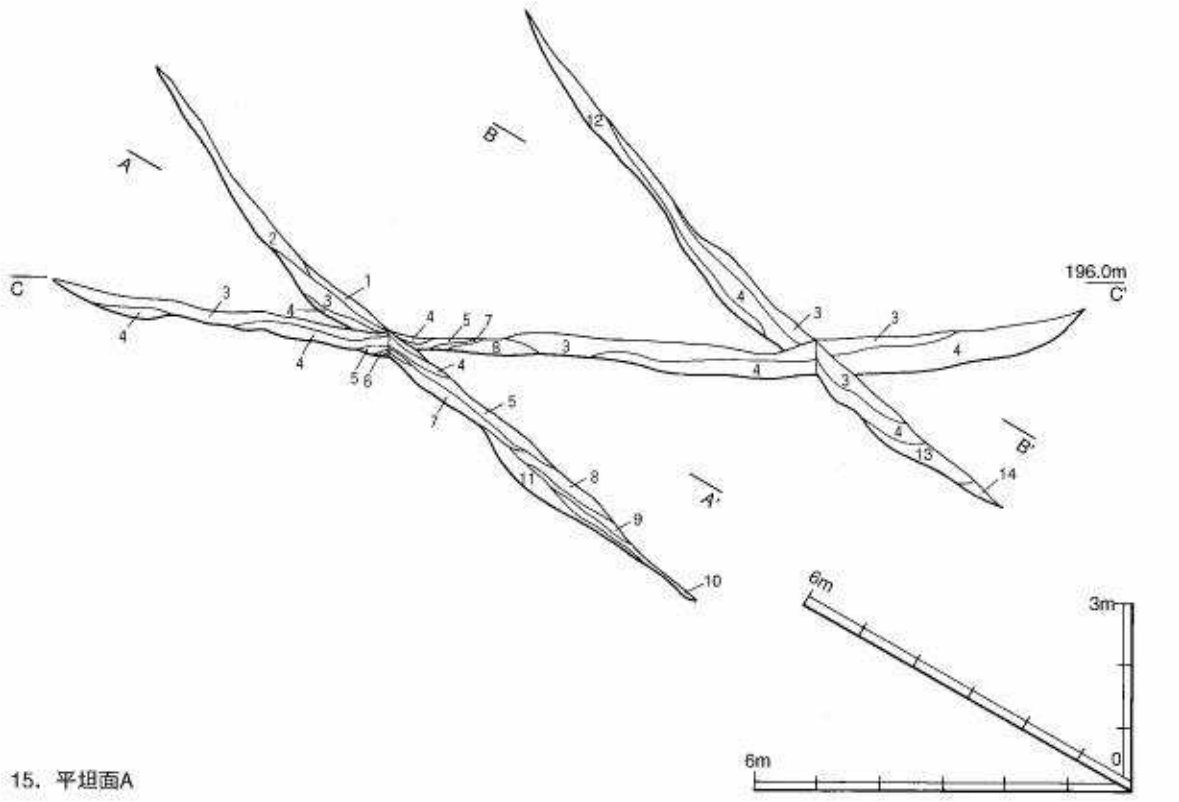
12. 確認調査と全面調査位置（1/600）


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
斜面⑥
斜面⑨
平坦面D
斜面⑩
平坦面G
平坦面C
斜面⑦
平坦面E
斜面⑤
斜面⑧
平坦面F
斜面④
SD 5
北地区
南地区
SK10
SH 1
SK 9
斜面③
SK 1
平坦面B
斜面②
斜面①
平坦面A
SD 1
X=-120,840
-120,860
-120,880
-120,900
-120,920
-120,940
-120,960
Y=79,360
79,380
79,400
79,420
79,440
0
40m

13. 遺構全体（1/600）

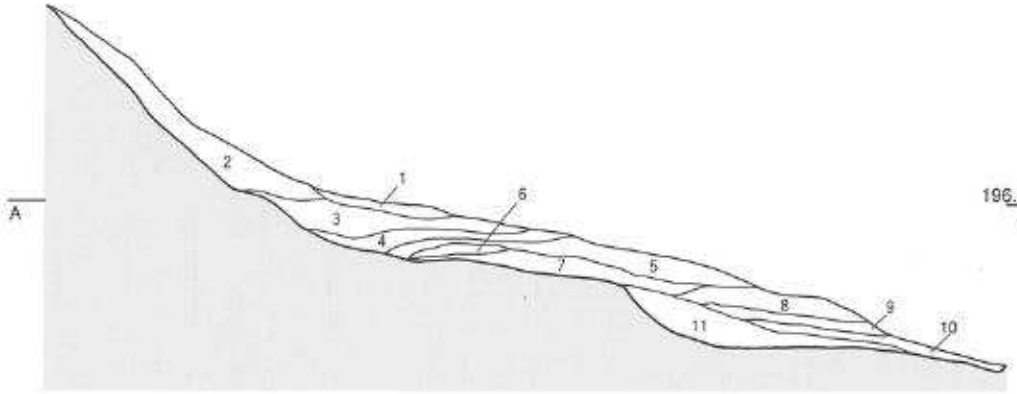


14. 平坦面A、SD 1

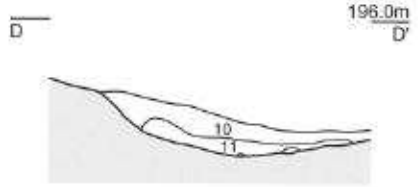


15. 平坦面A

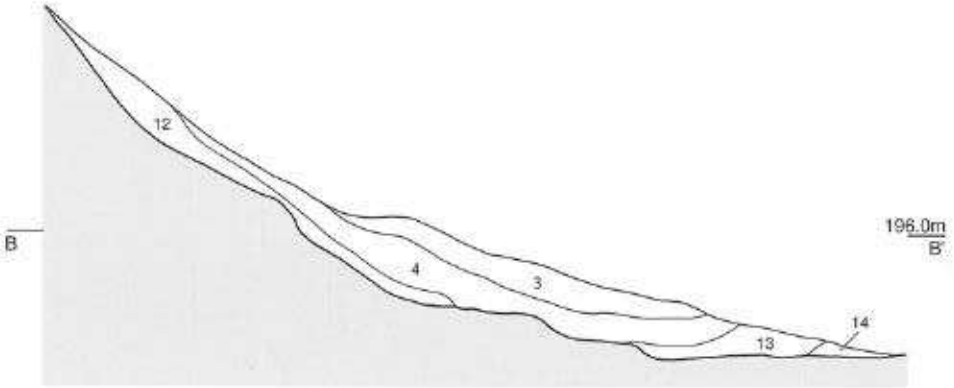
14. 平坦面A、SD 1 (1/150)
15. 平坦面A立体土層



16. 平坦面A

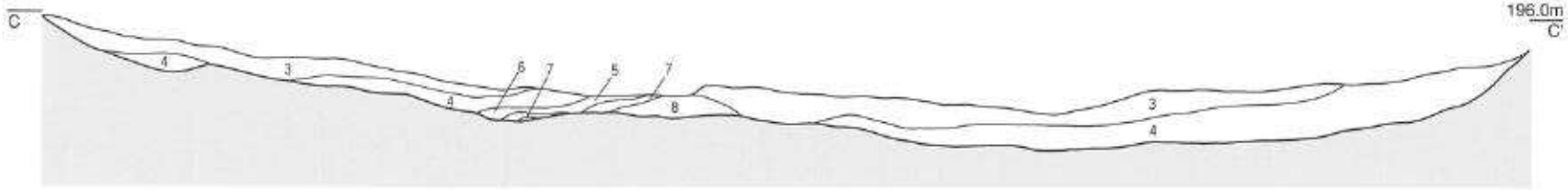


19. SD 1



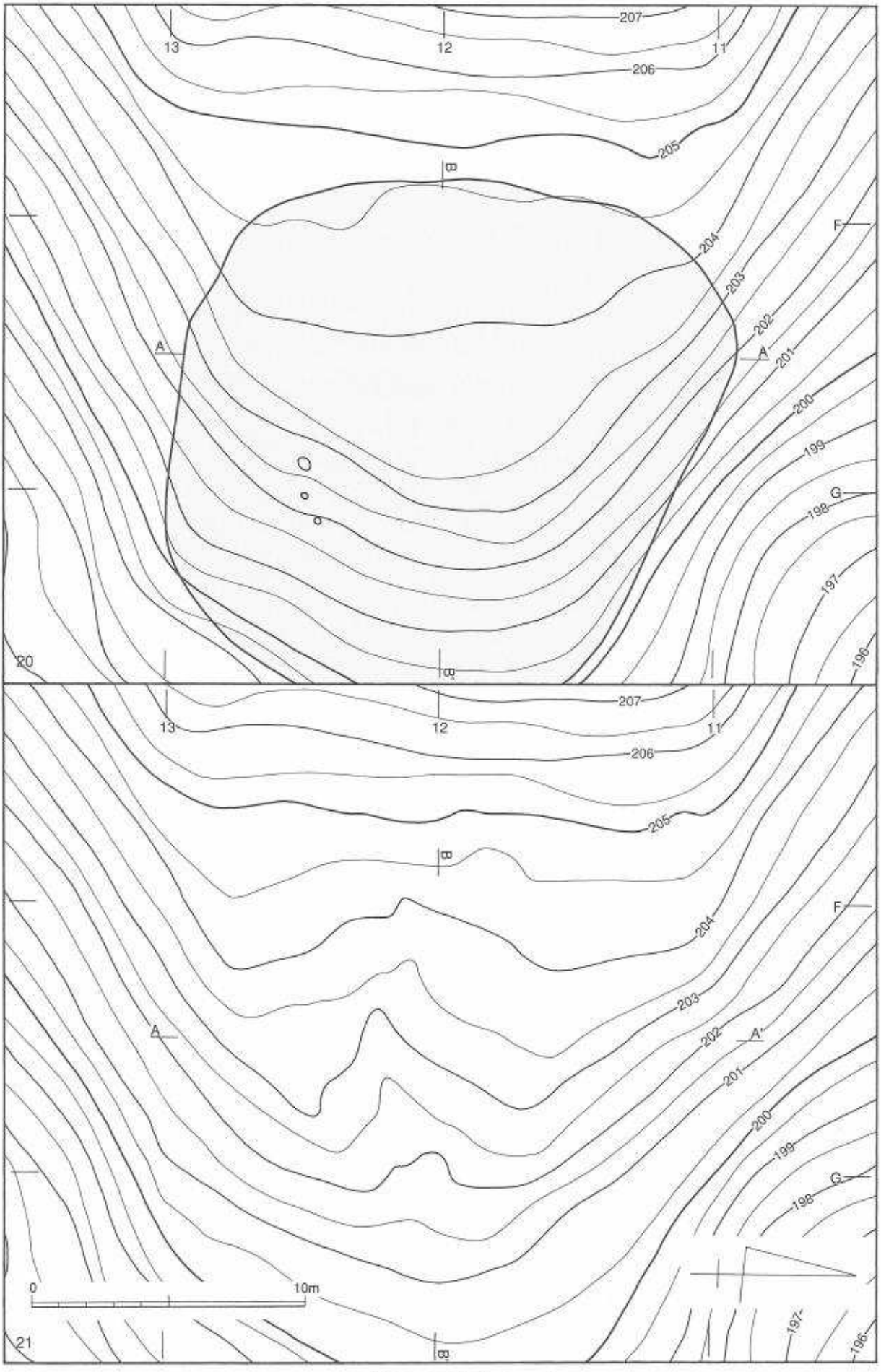
17. 平坦面A

1. にぶい黄褐色　細砂（小礫・炭含む）
2. 黄褐色　極細砂（小礫含む）
3. 褐色　極細砂（小礫含む）
4. にぶい褐色　極細砂（軟岩含む）
5. にぶい赤褐色　細砂
6. にぶい黄褐色　シルト質極細砂
7. にぶい赤褐色　細砂
8. にぶい黄褐色　細砂（小礫～中礫含む）
9. 黄褐色　細砂
10. にぶい黄褐色　細砂（小礫含む）
11. 暗褐色　極細砂（中礫～大礫含む）
12. にぶい黄褐色　細砂（小礫含む）
13. 褐色　極細砂
14. 明褐色　極細砂

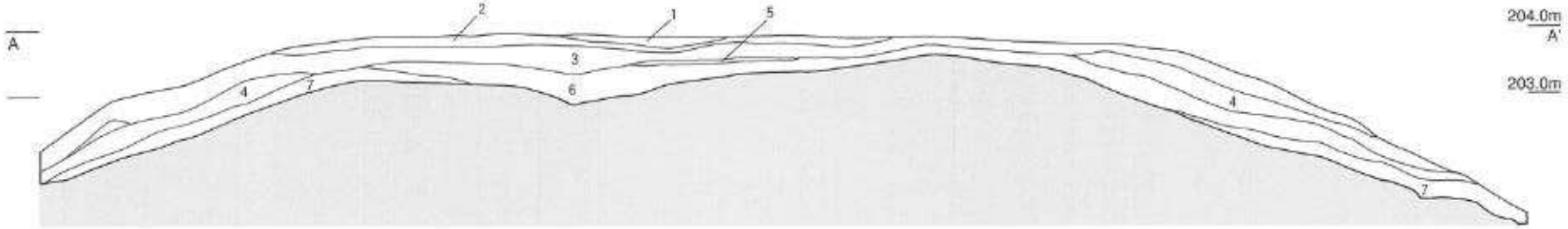


18. 平坦面A

16. 17. 18. 平坦面A土層断面（1/80）
19. SD 1 土層断面（1/80）

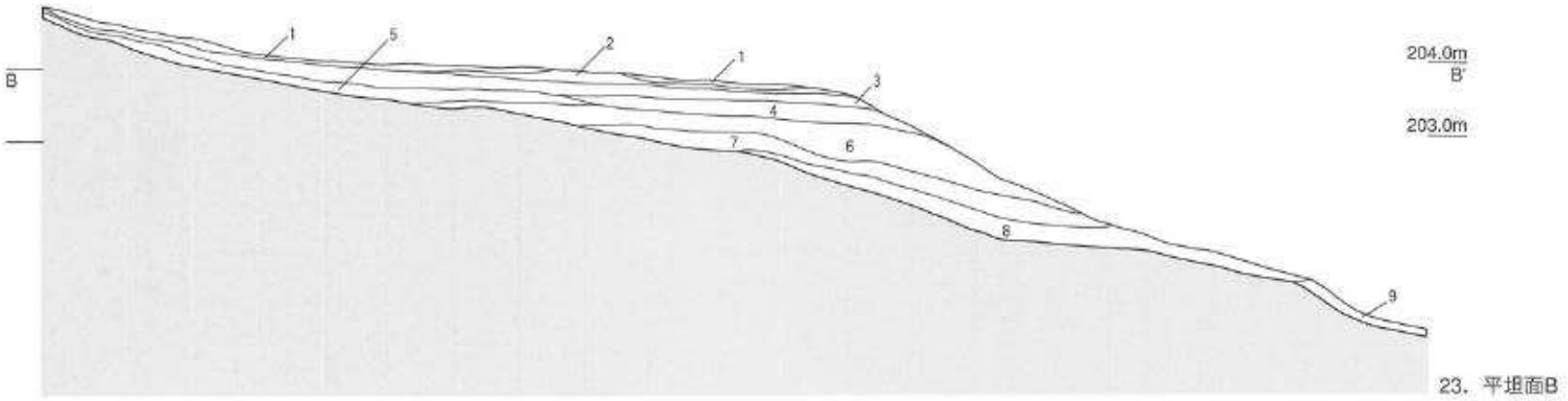


20. 平坦面B上層地形（1/200）
21. 平坦面B下層地形（1/200）



22. 平坦面B

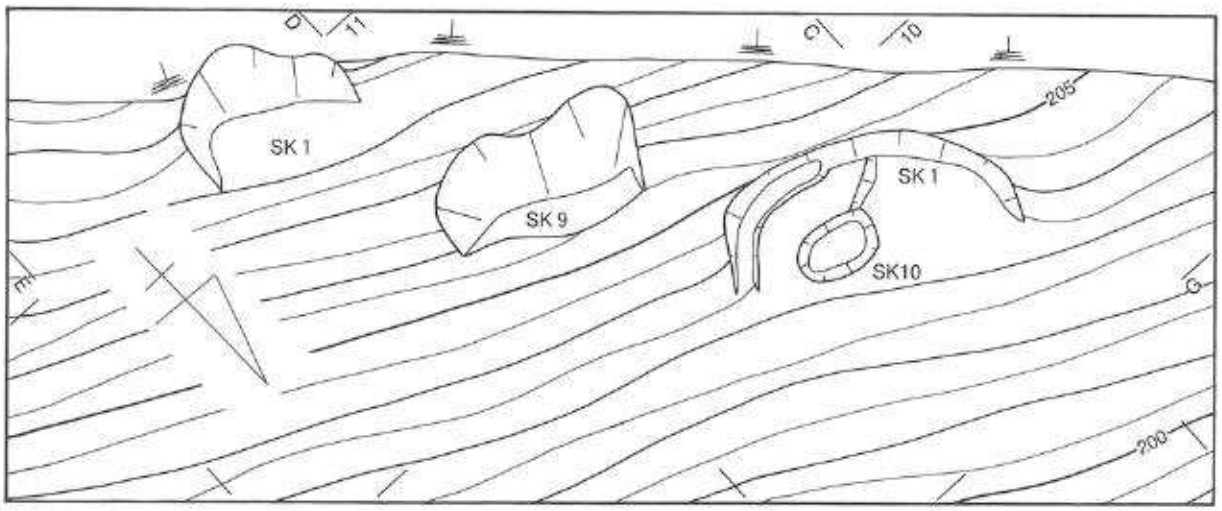
1. 明黄褐色　極細砂
2. 明褐色　細砂
3. 黄褐色　シルト質極細砂
4. 明黄褐色　シルト質極細砂
5. 明褐色　シルト質極細砂
6. 明黄褐色　極細砂
7. 橙色　シルト質極細砂（軟岩含む）
8. 橙色　シルト質極細砂
9. 粘土　（炭・焼土含む）



23. 平坦面B

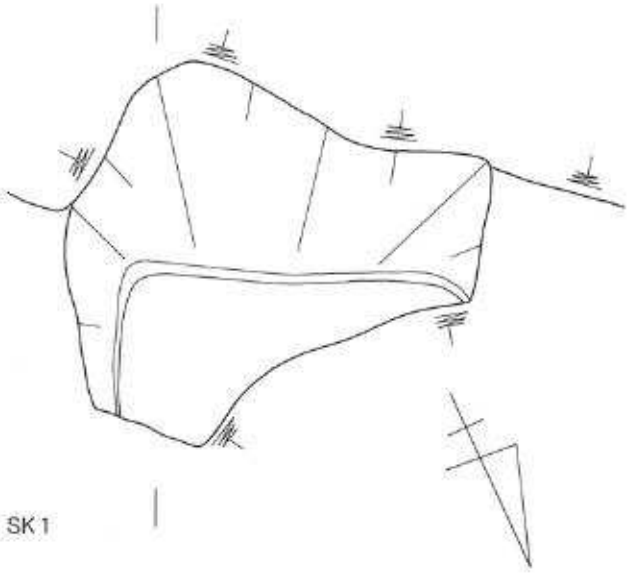
22. 23. 平坦面B土層断面（1/100）

図版13　断面図

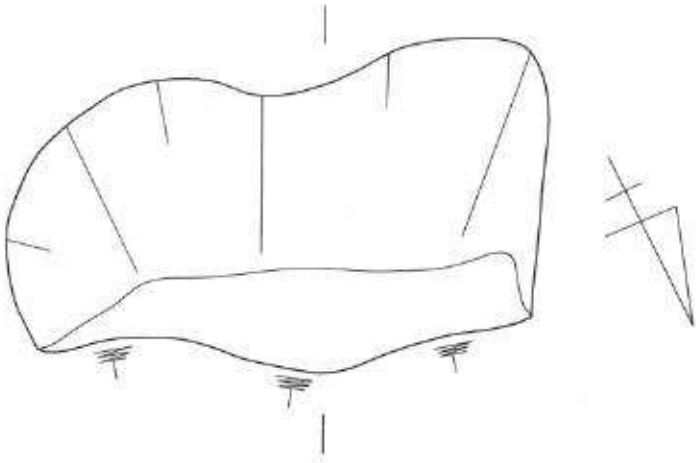


24. 斜面③

0 10m

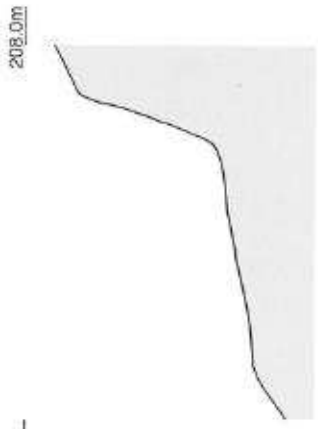


25. SK 1

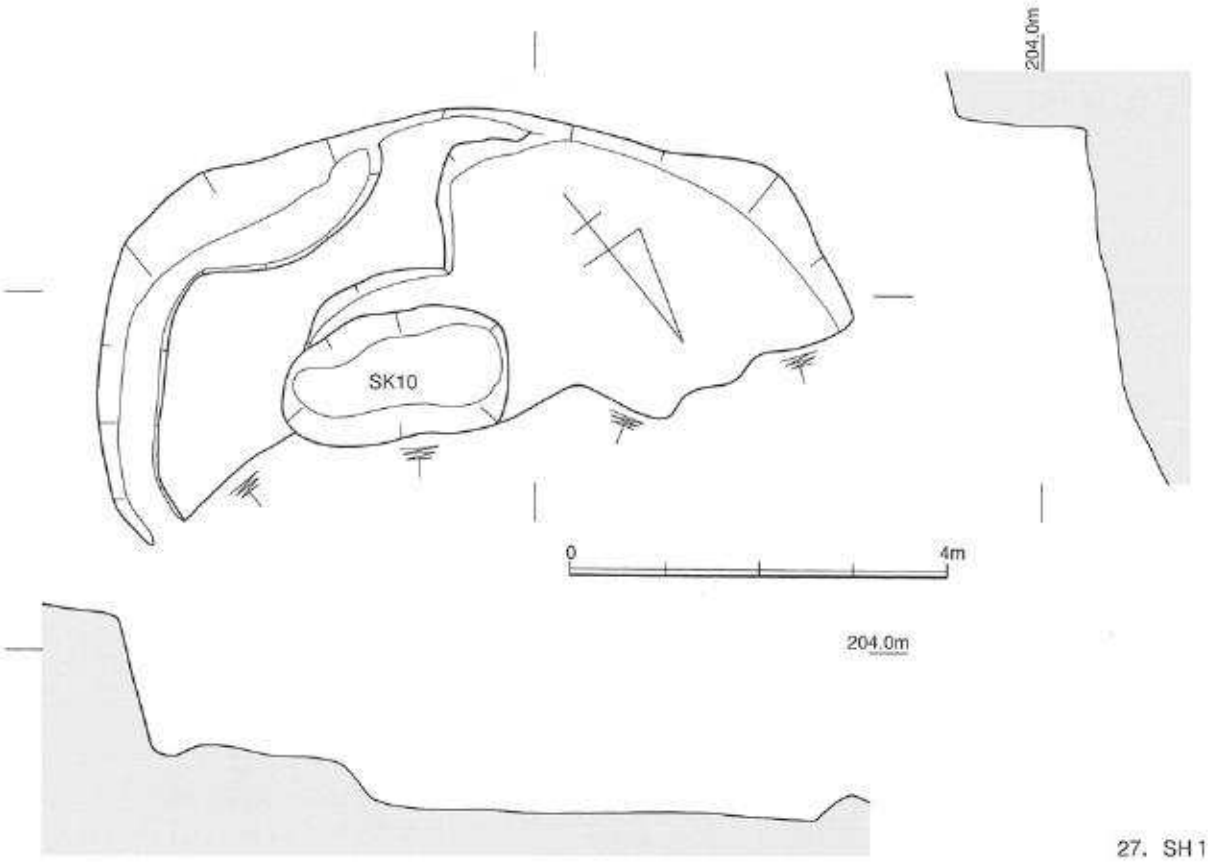


0 4m

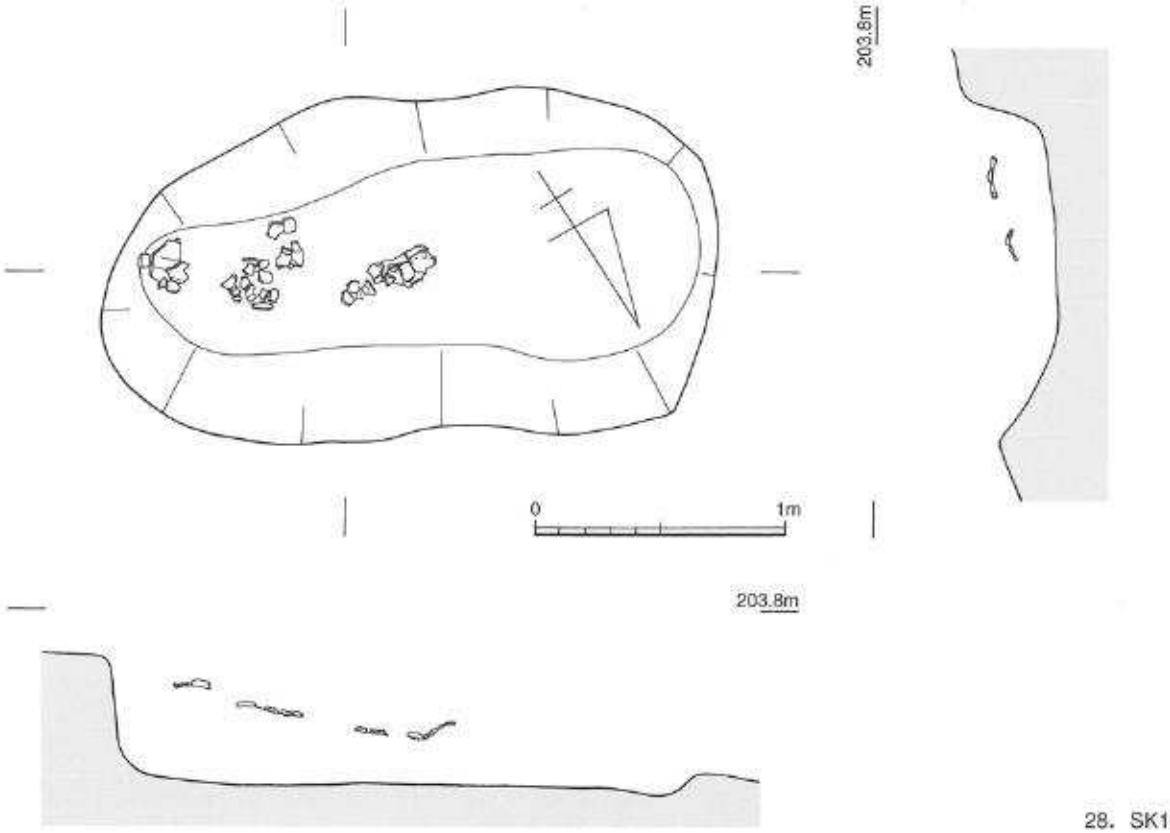
26. SK 9



24. 斜面③遺構配置（1/200）
25. SK 1 平面・土層断面（1/80）
26. SK 9 平面・断面（1/80）



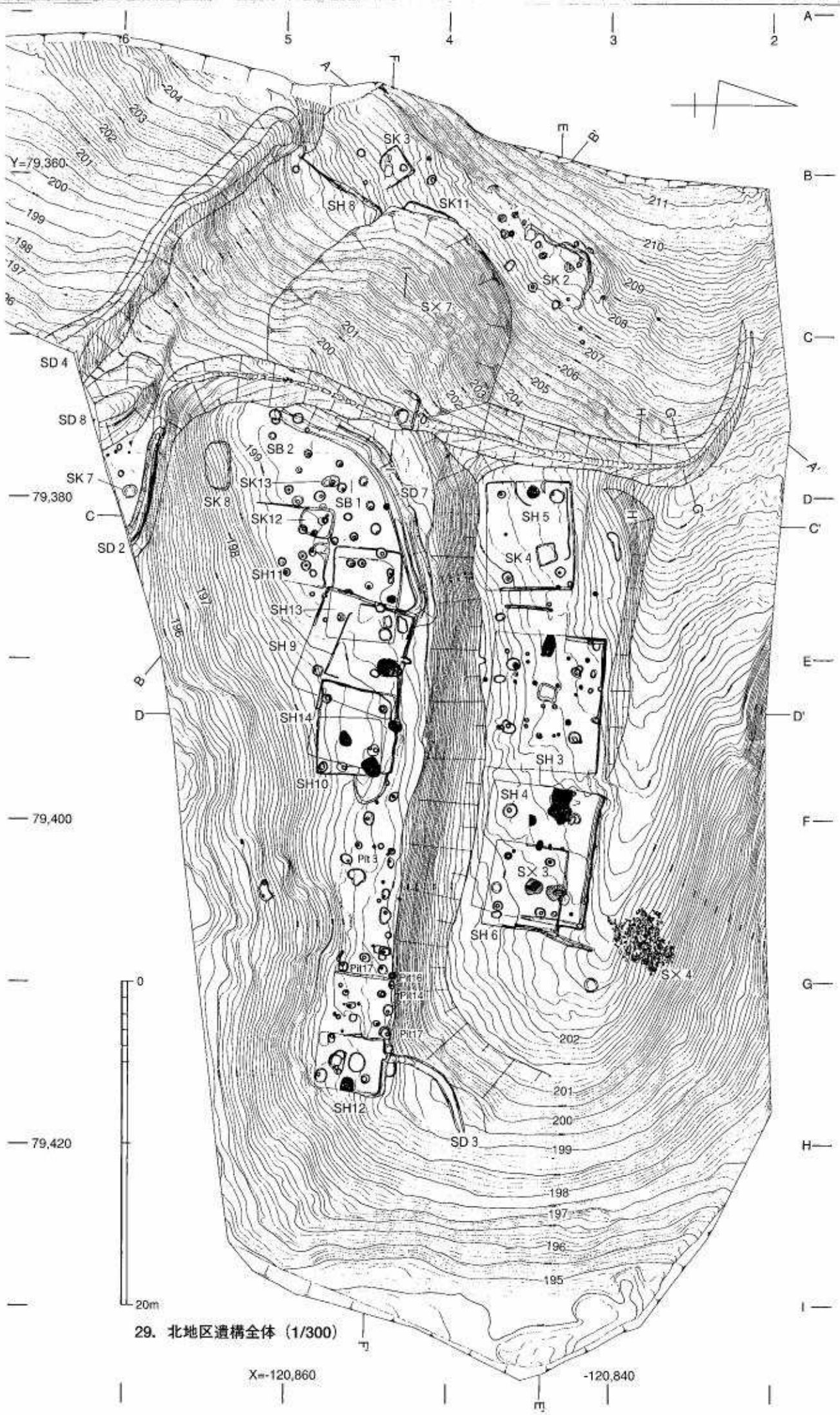
27. SH1



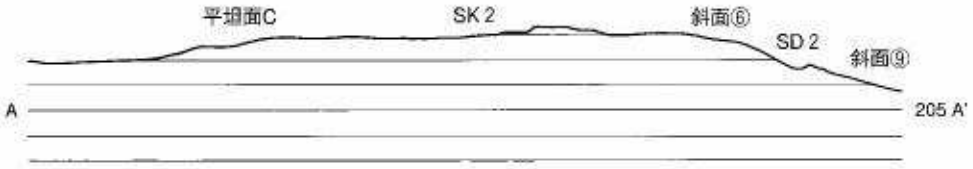
28. SK10

27. SH1平面・断面（1/80）
28. SK10平面・断面（1/30）

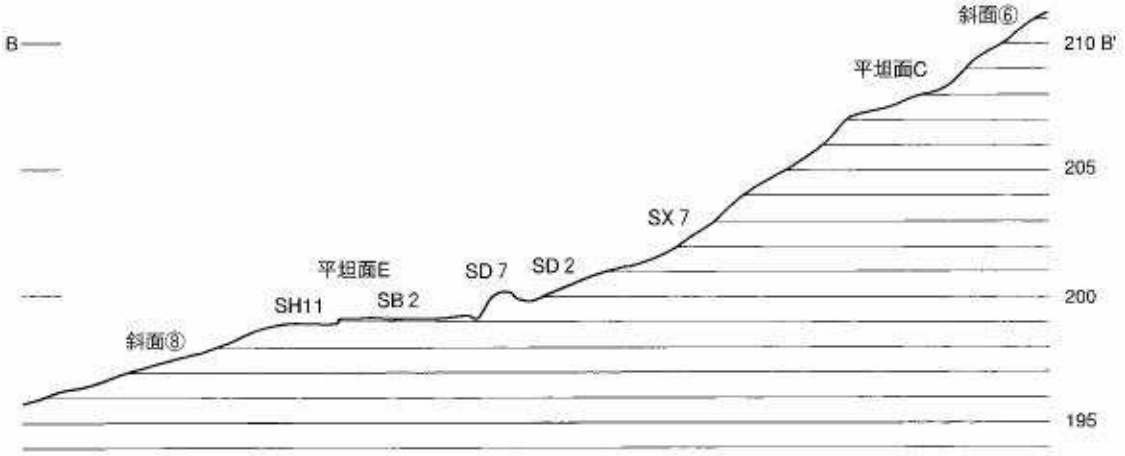
図版16 北地区



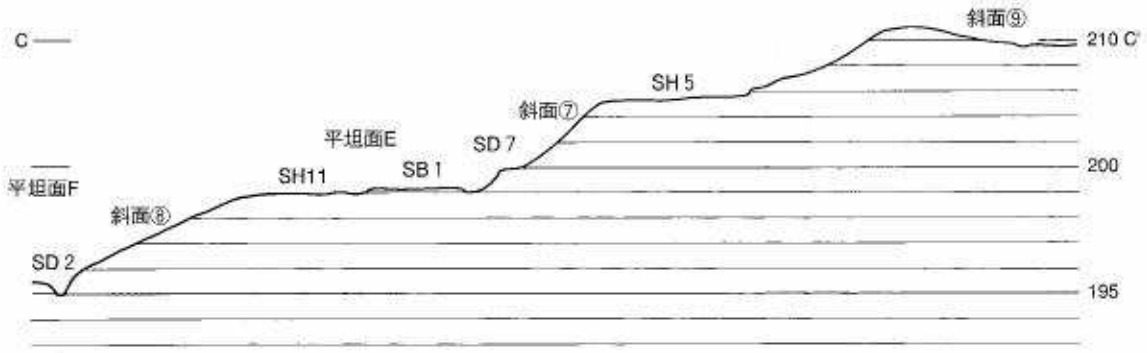
29. 北地区遺構全体（1/300）



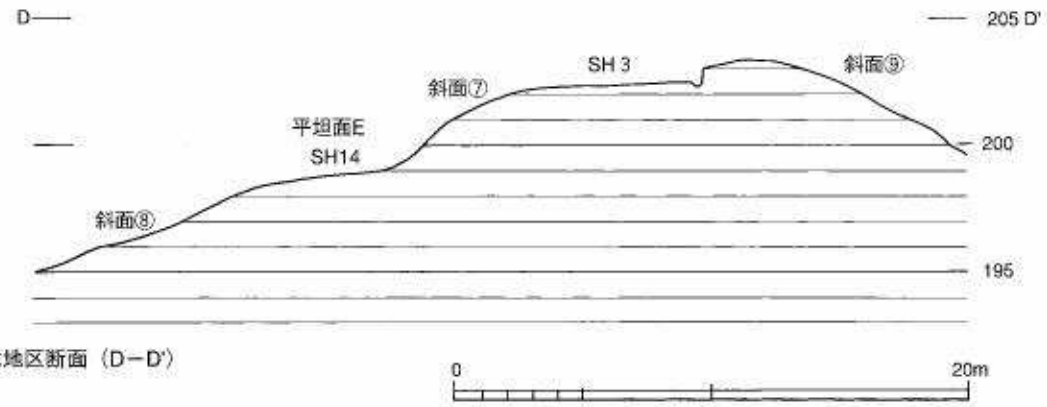
30. 北地区断面（A－A'）



31. 北地区断面（B－B'）

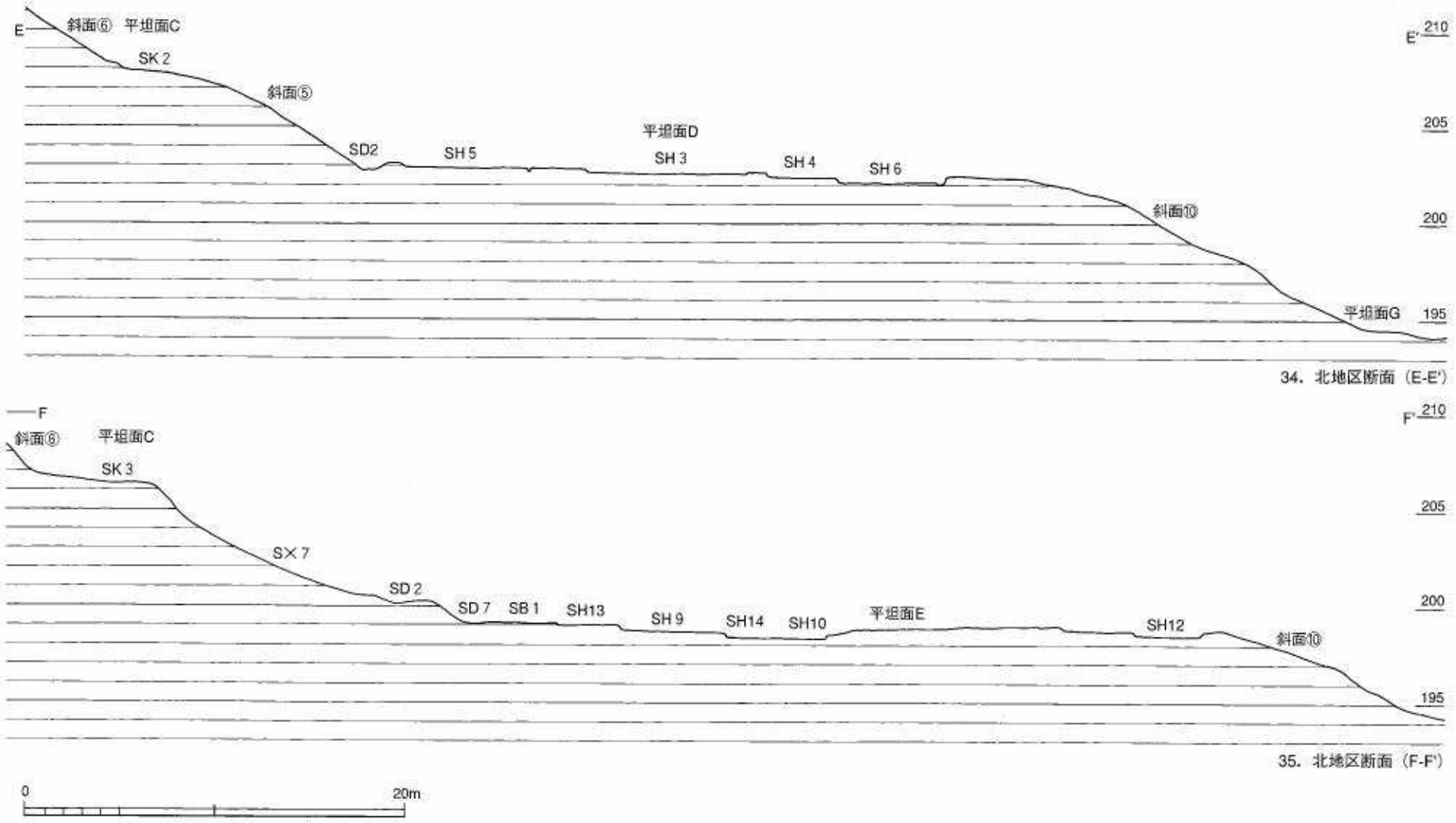


32. 北地区断面（C－C'）



33. 北地区断面（D－D'）

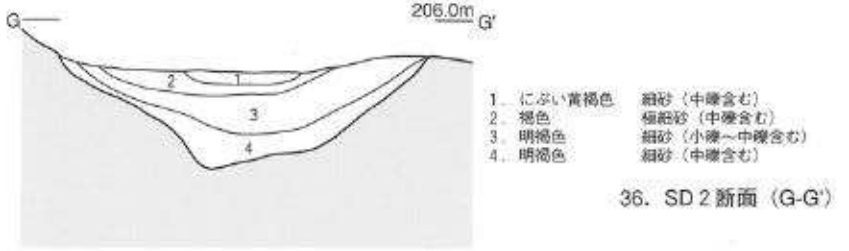
30. 31. 32. 33. 北地区断面（1/300）



34. 北地区断面（E-E'）

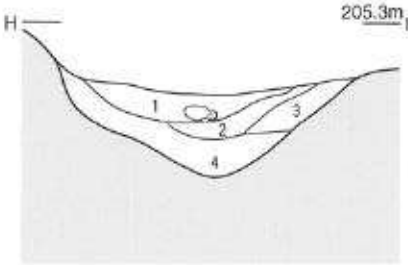
35. 北地区断面（F-F'）

34. 35. 北地区断面（1/300）



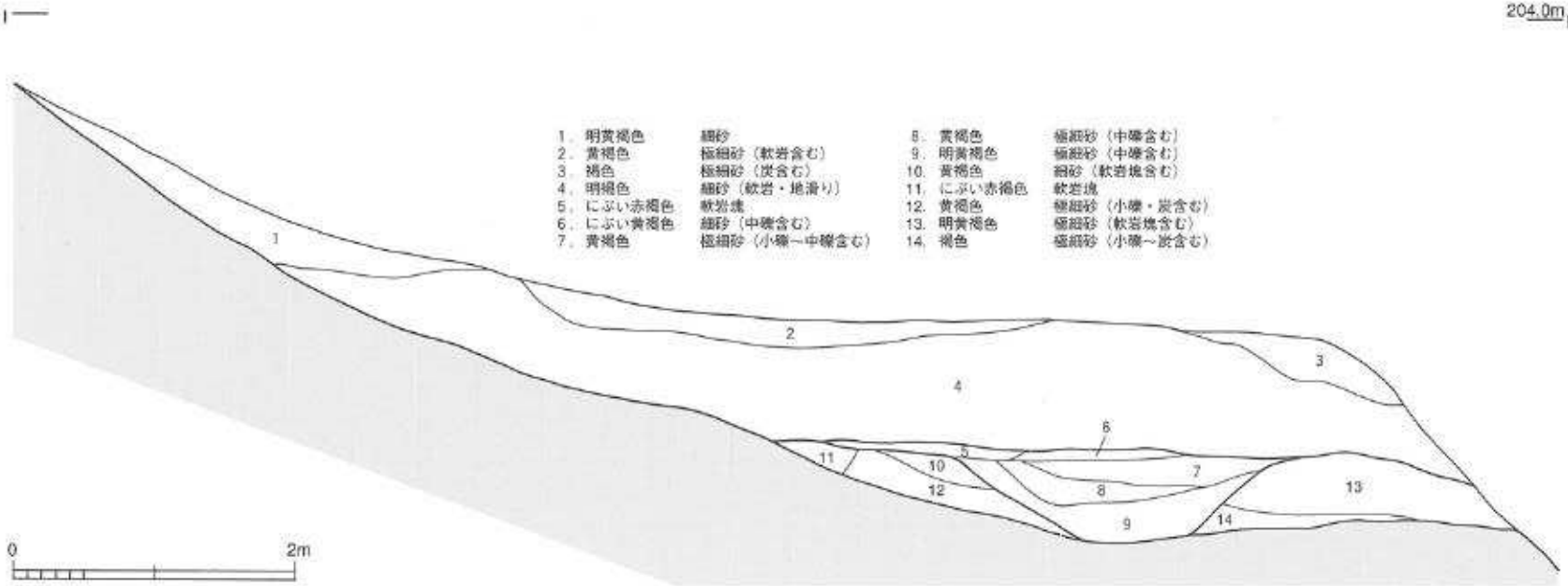
1．にぶい黄褐色　細砂（中礫含む）
2．褐色　極細砂（中礫含む）
3．明褐色　細砂（小礫～中礫含む）
4．明褐色　細砂（中礫含む）

36．SD 2 断面（G-G'）



1．褐色　極細砂（小礫～中礫含む）
2．明褐色　細砂（小礫含む）
3．明褐色　極細砂
4．明褐色　極細砂（小礫～中礫含む）

37．SD 2 断面（H-H'）

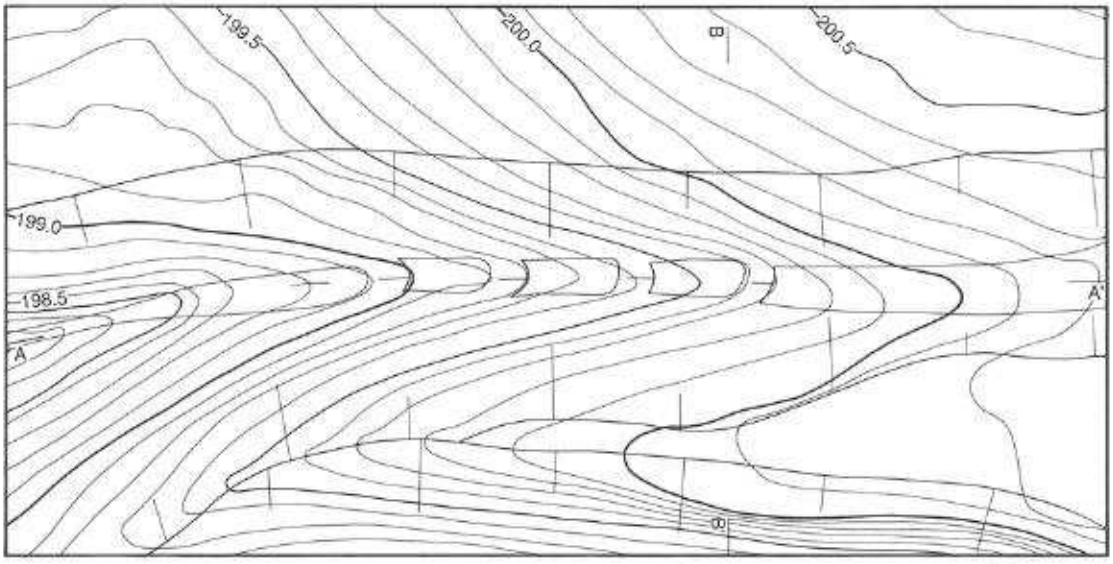


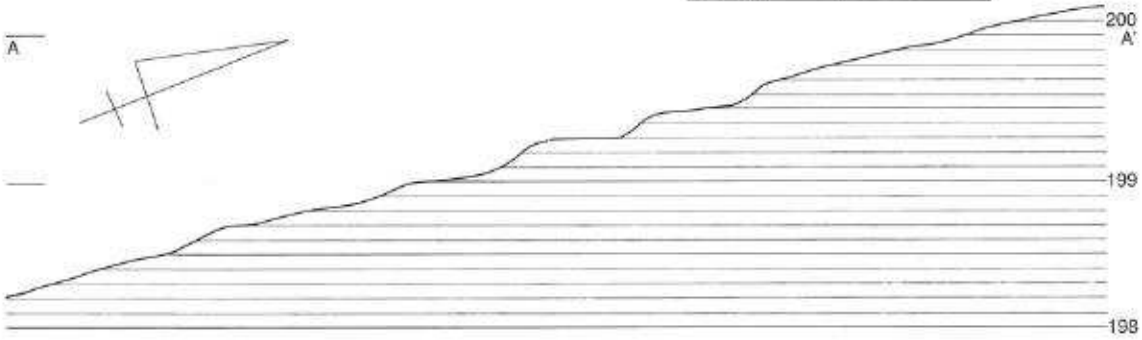
1．明黄褐色　細砂
2．黄褐色　極細砂（軟岩含む）
3．褐色　極細砂（炭含む）
4．明褐色　細砂（軟岩・地滑り）
5．にぶい赤褐色　軟岩塊
6．にぶい黄褐色　細砂（中礫含む）
7．黄褐色　極細砂（小礫～中礫含む）
8．黄褐色　極細砂（中礫含む）
9．明黄褐色　極細砂（中礫含む）
10．黄褐色　細砂（軟岩塊含む）
11．にぶい赤褐色　軟岩塊
12．黄褐色　極細砂（小礫・炭含む）
13．明黄褐色　極細砂（軟岩塊含む）
14．褐色　極細砂（小礫～炭含む）

38．SD 2 ・SX 7 断面（I - I'）

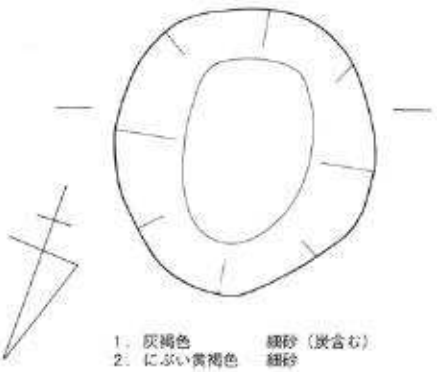
図版19
北端図

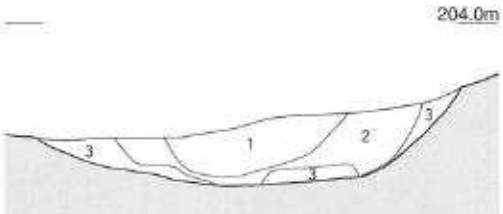
36．37．SD 2 土層断面（1/50）
38．SD 2 ・SX 7 土層断面（1/50）





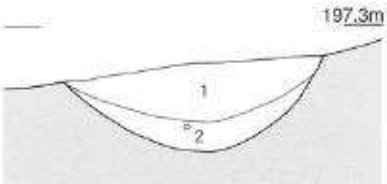
39. SD 2





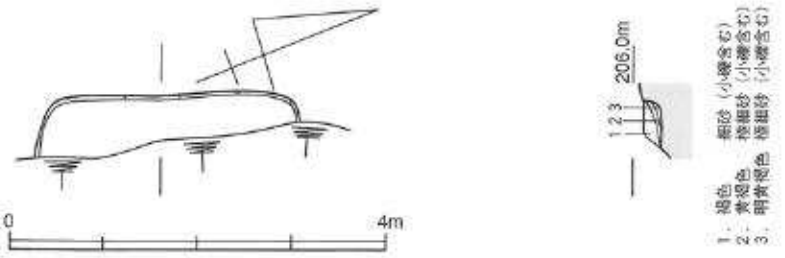
1. 暗褐色　極細砂（中礫含む）
2. にぶい黄褐色　極細砂
3. 明褐色　極細砂

40. SD 4

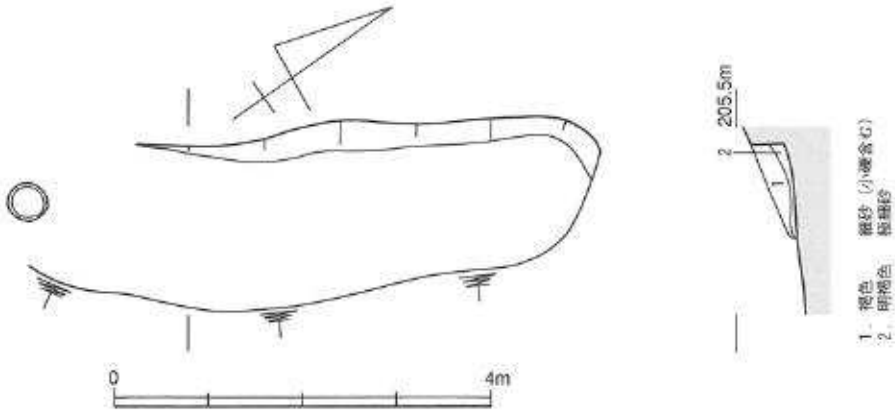


41. SK 7

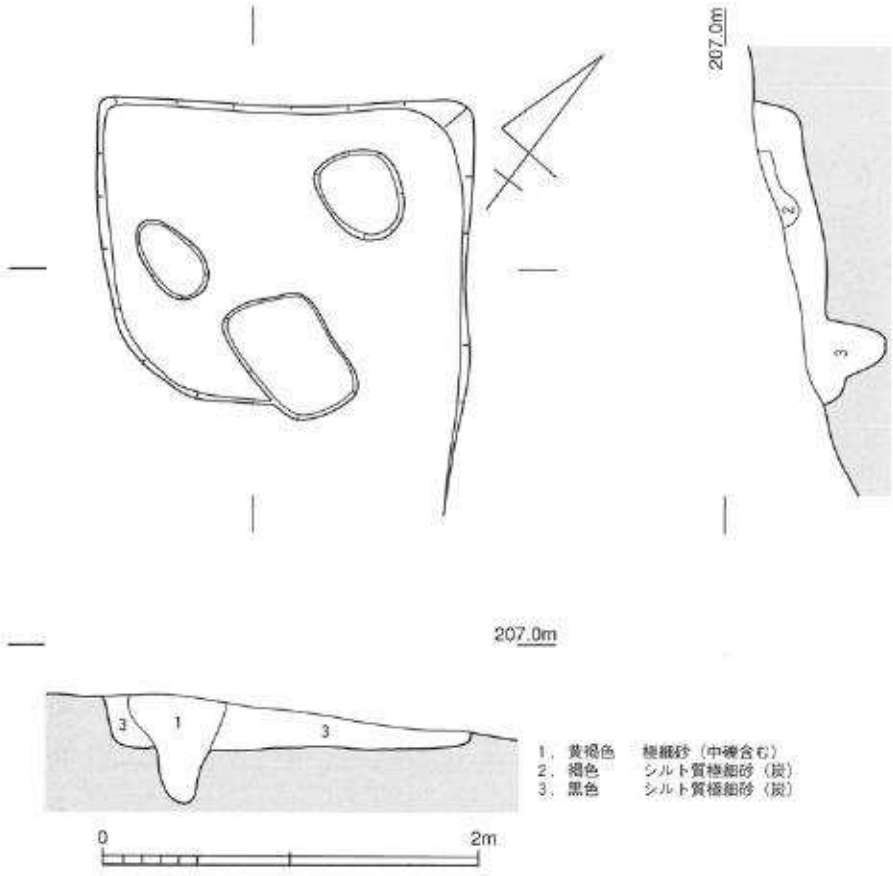
39. SD 2 平面・断面（1/50）
40. SD 4 土層断面（1/40）
41. SK 7 平面・土層断面（1/20）



42. SK11

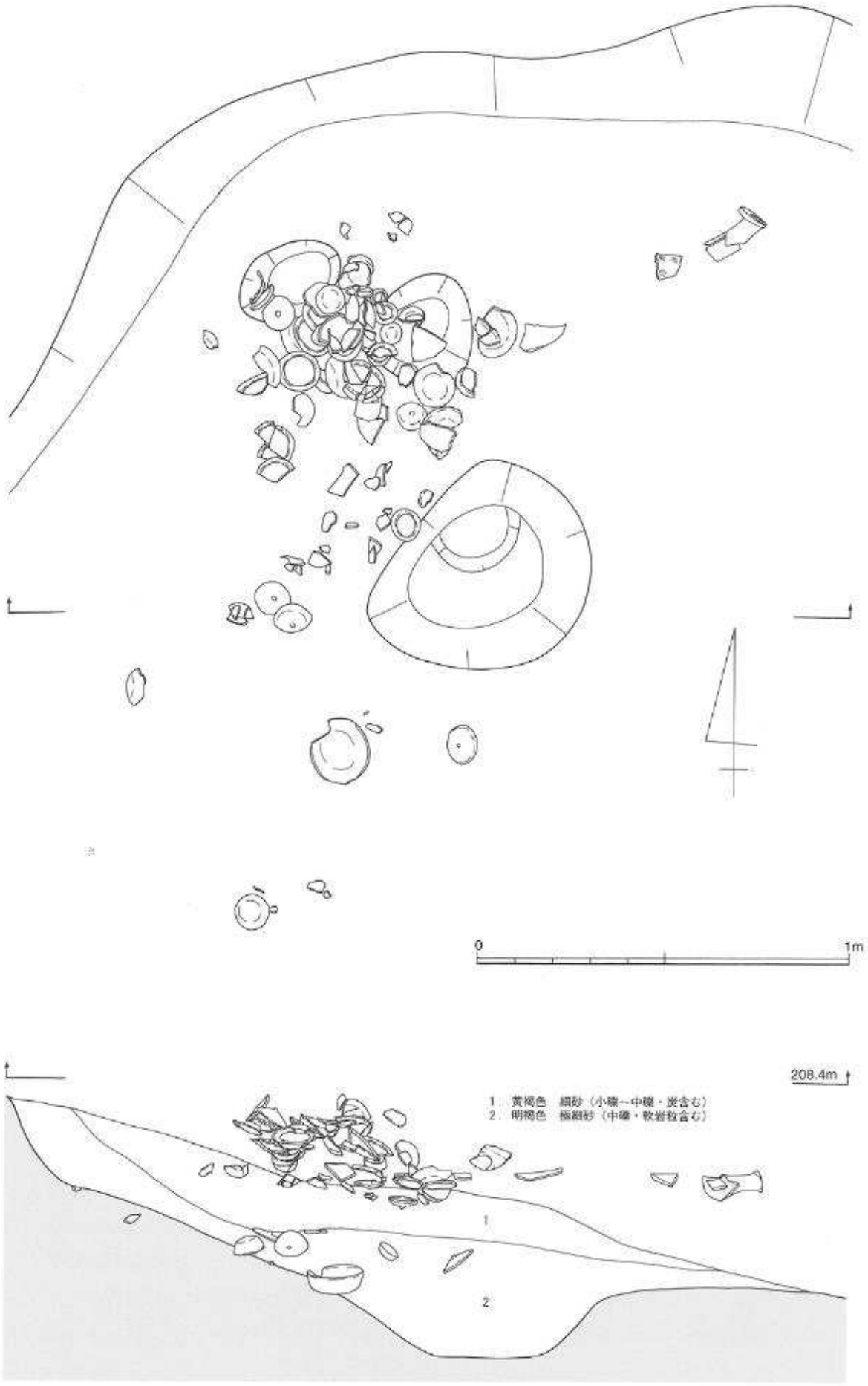


43. SH 8

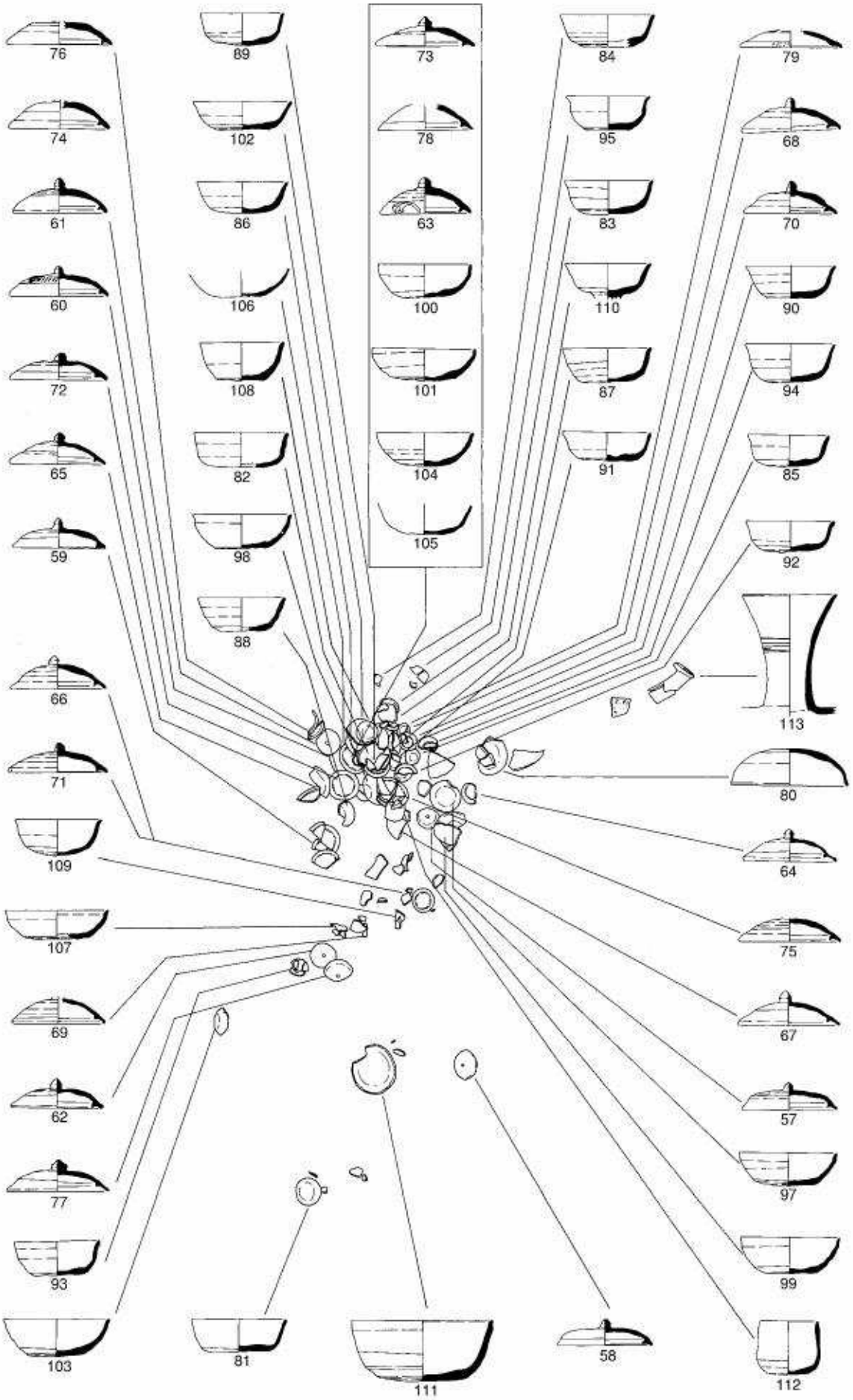


44. SK 3

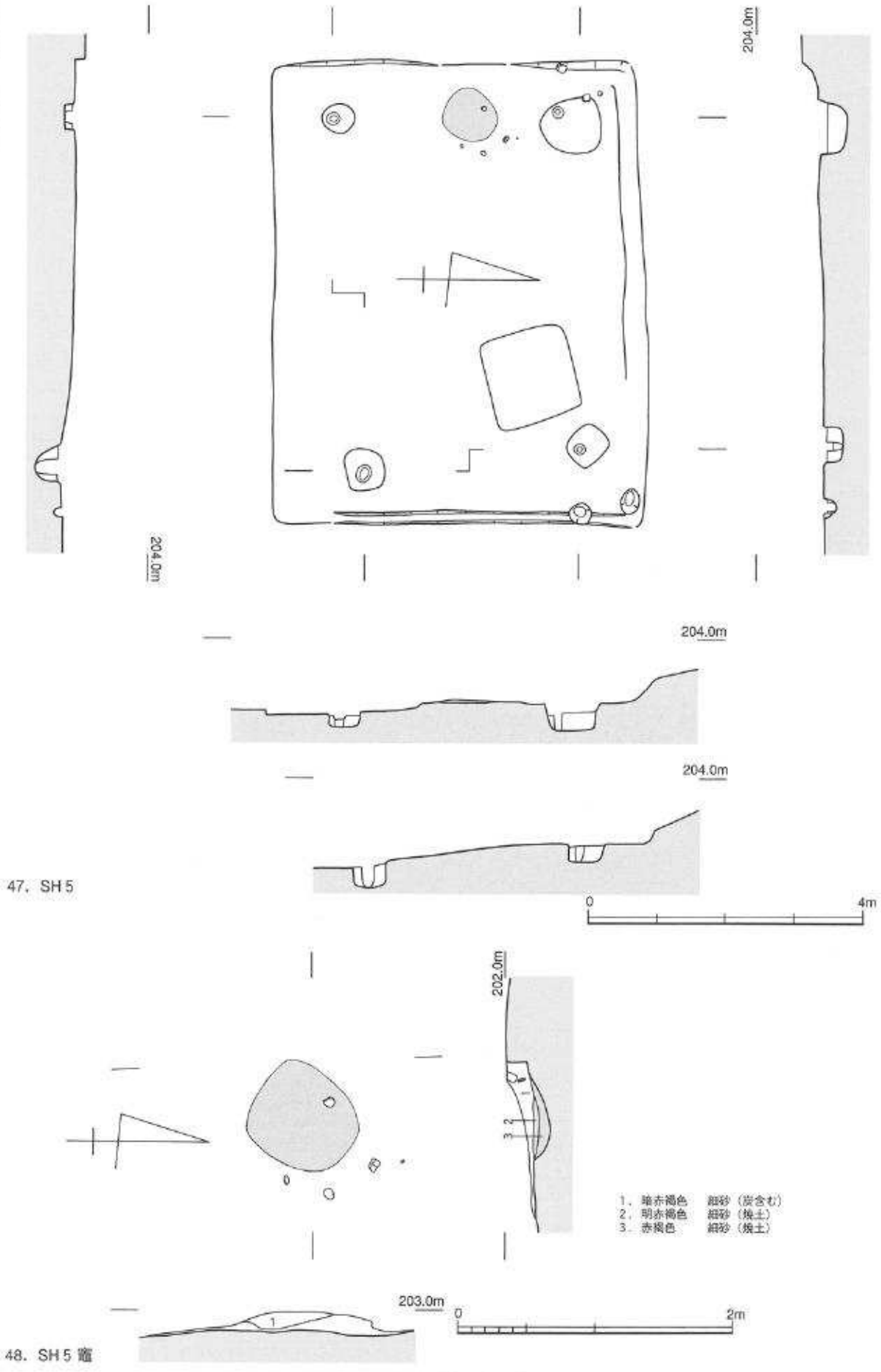
42. SK11平面・土層断面（1/80）
43. SH 8 平面・土層断面（1/80）
44. SK 3 平面・土層断面（1/40）



45. SK 2 土器出土状況（1/15）



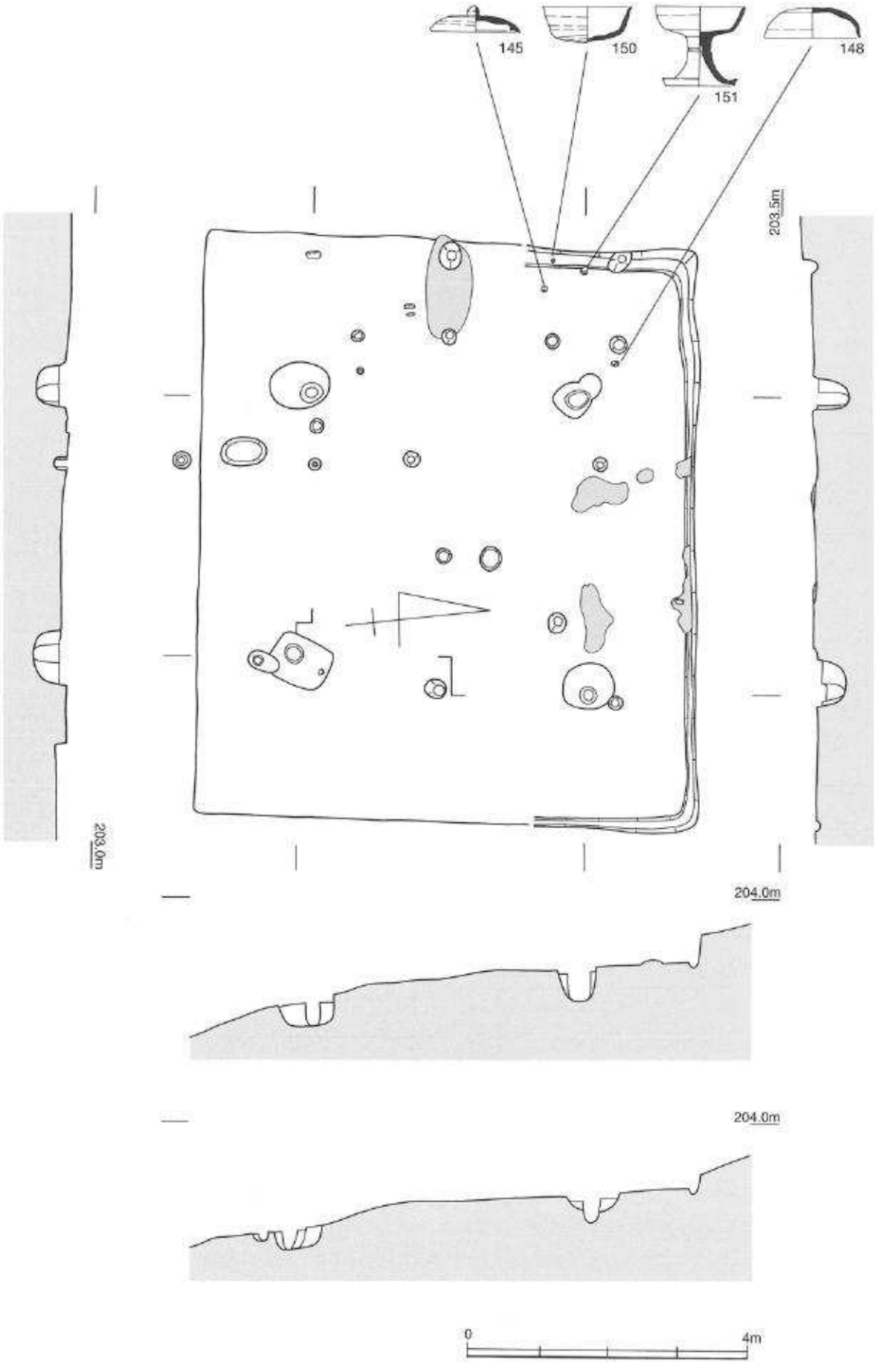
46. SK 2 土器出土位置



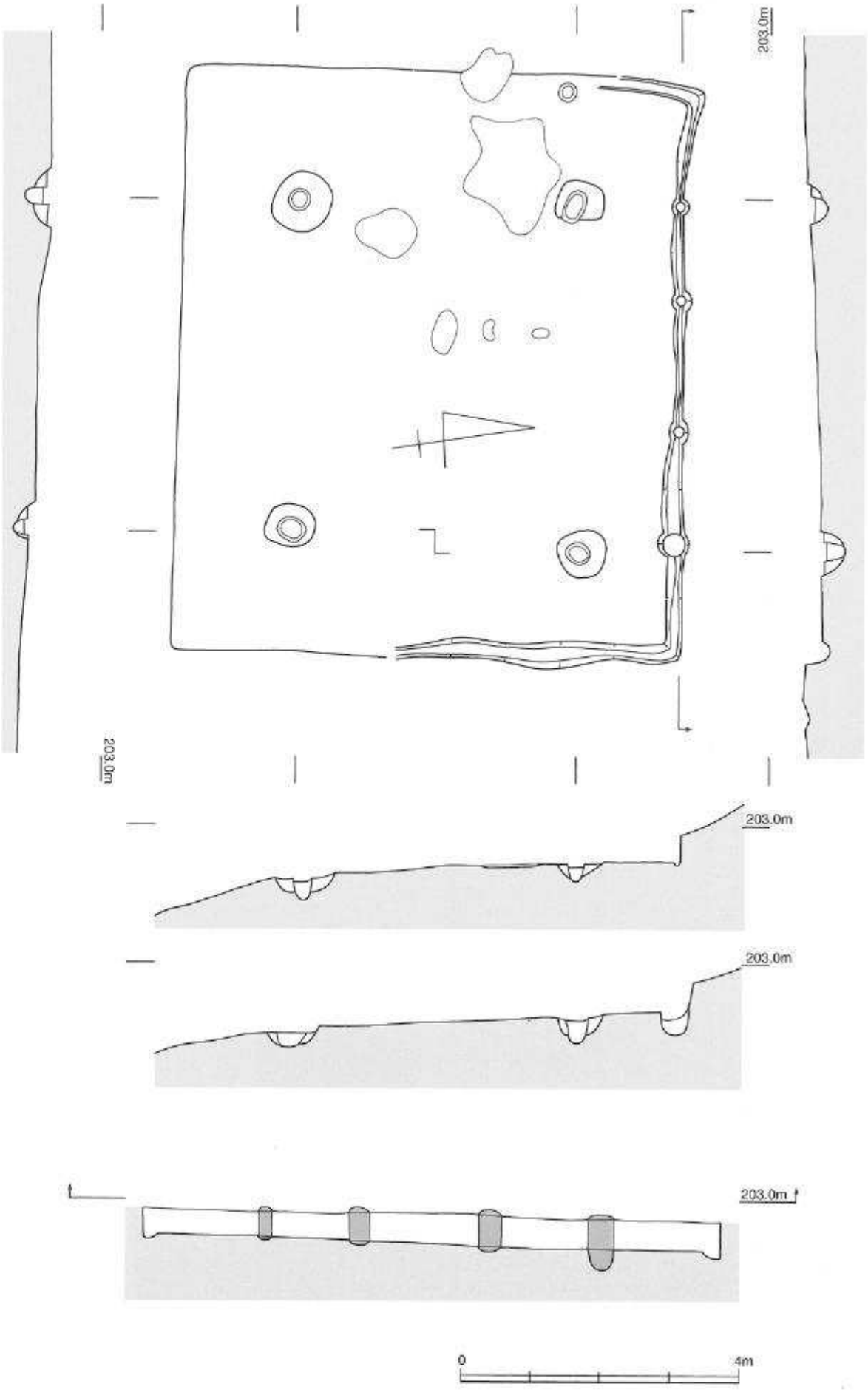
47．SH 5

48．SH 5 竈

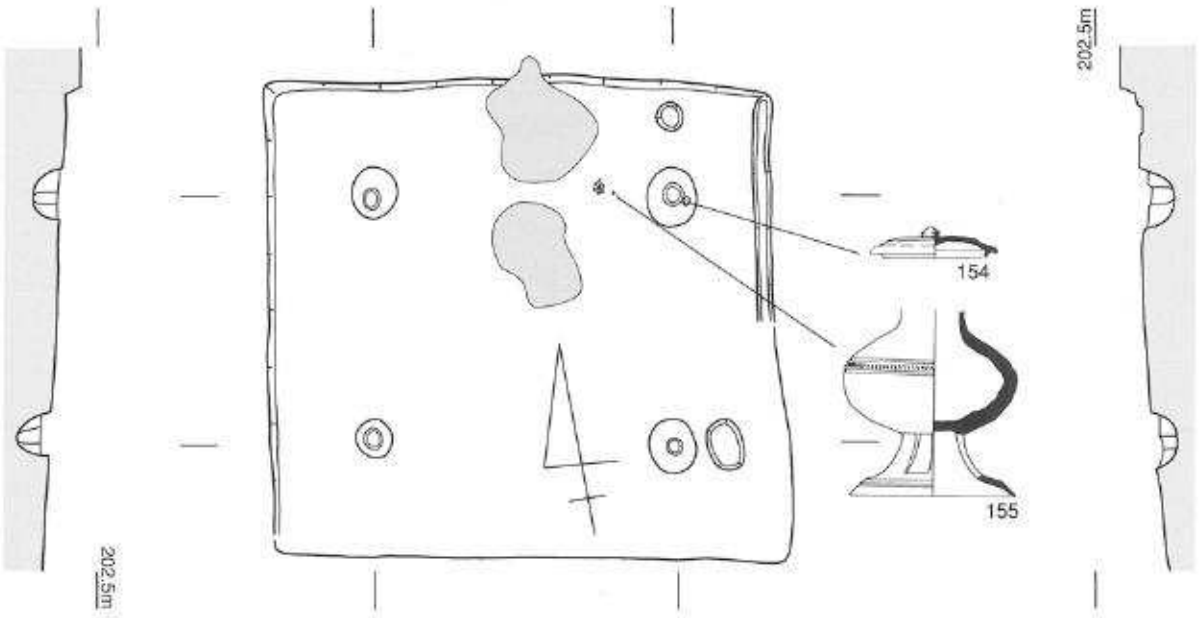
47．SH 5 平面・断面（1/80）
48．SH 5 竈平面・土層断面（1/40）



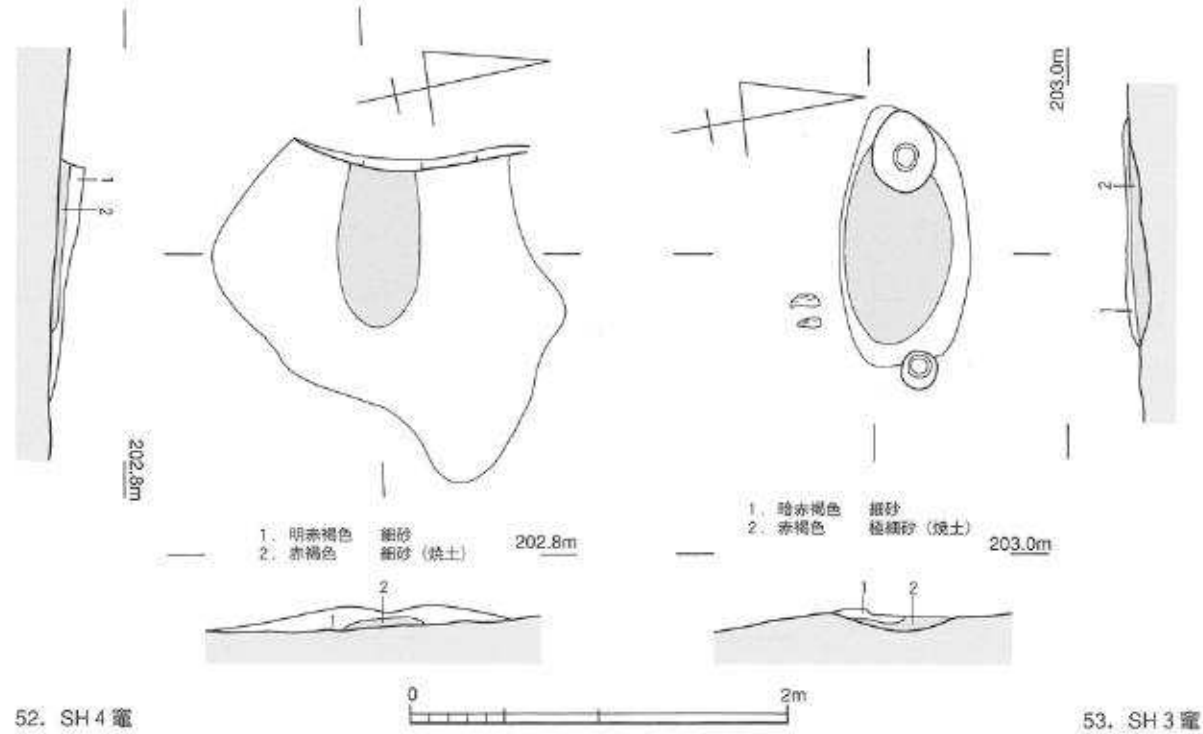
49. SH 3 平面・断面（1/80）



50. SH 4 平面・断面（1/80）



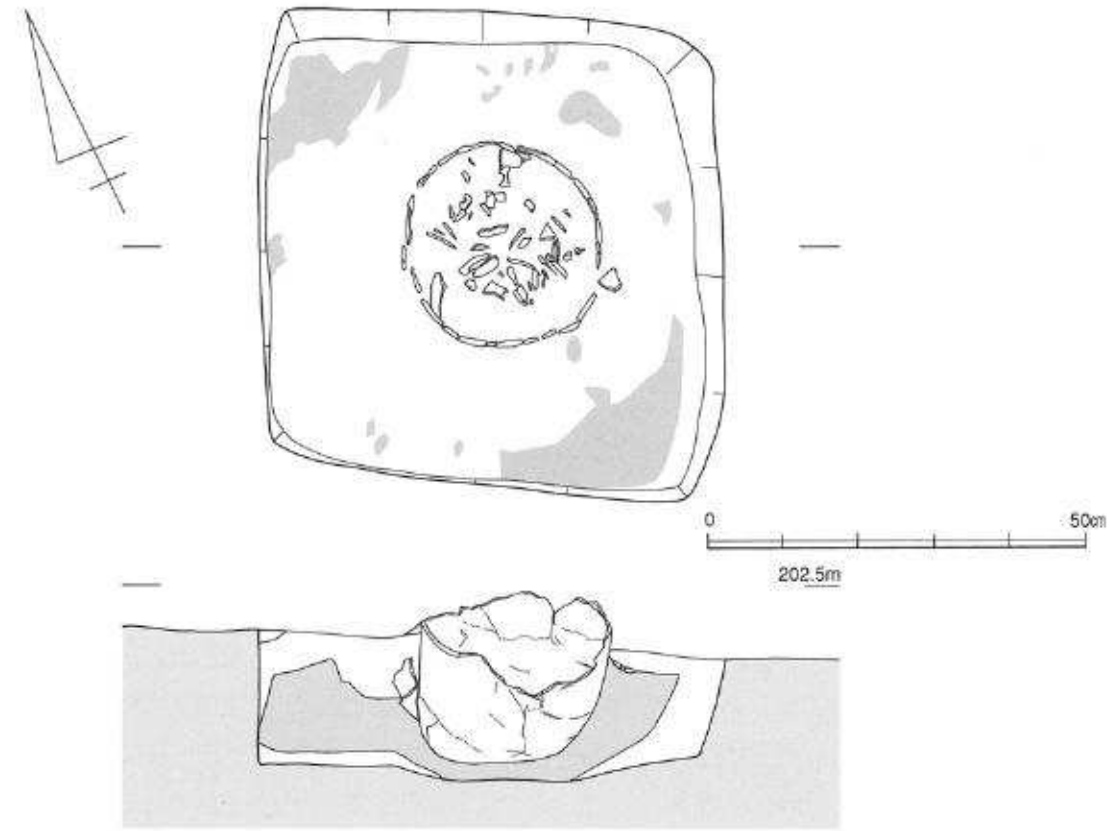
51. SH 6



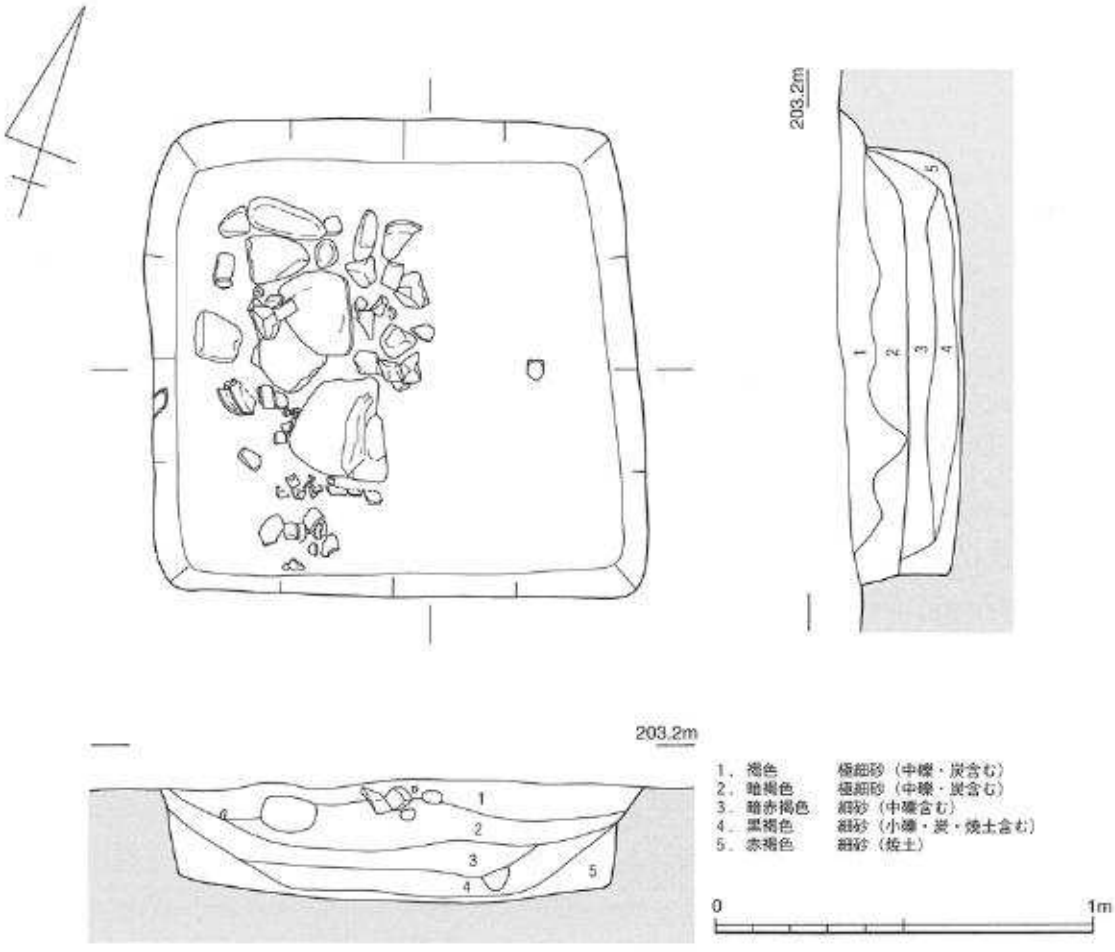
52. SH 4 竈

53. SH 3 竈

51. SH 6 平面・断面（1/80）
52. SH 4 竈平面・土層断面（1/40）
53. SH 3 竈平面・土層断面（1/40）

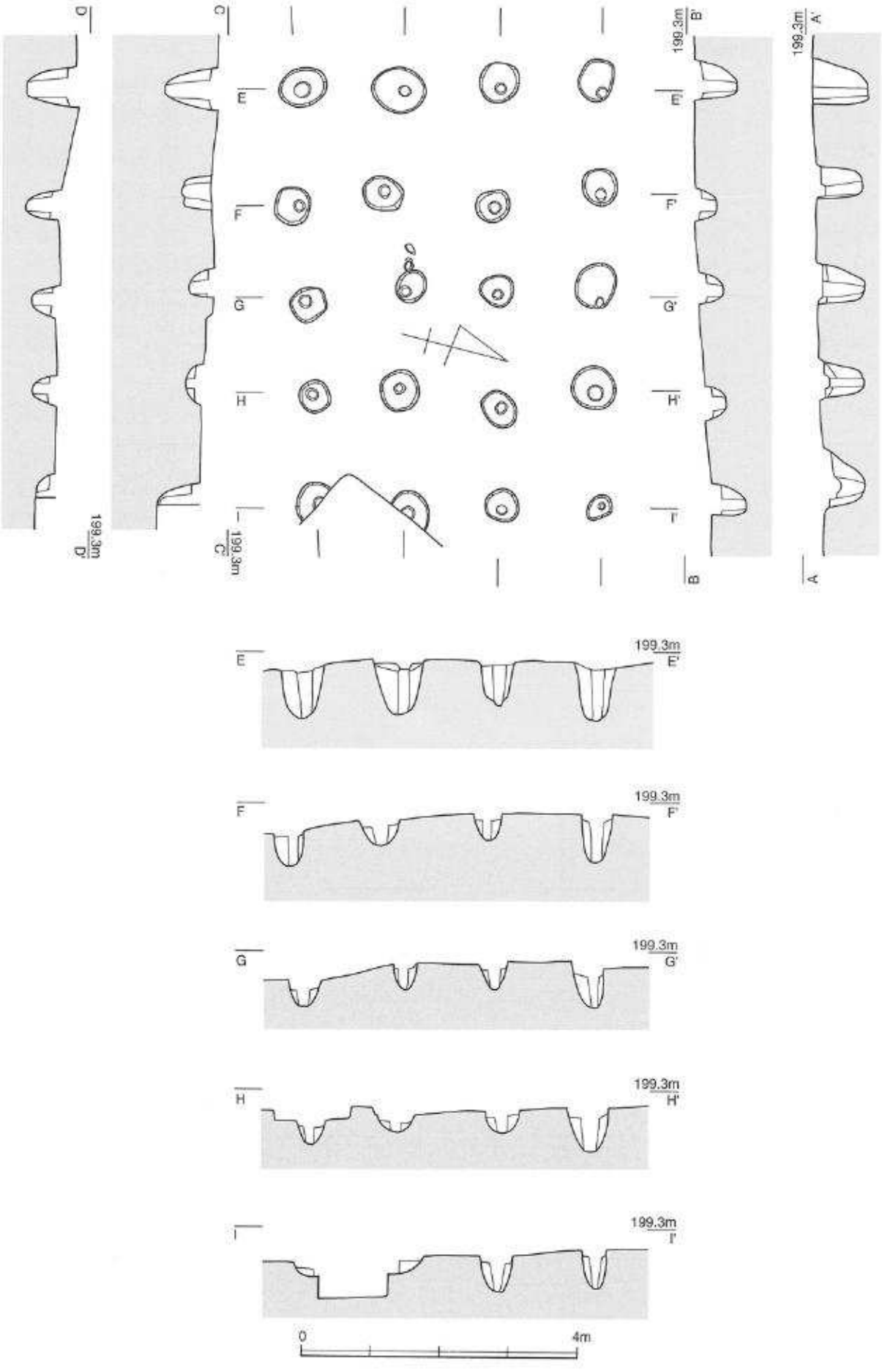


54. SX 3

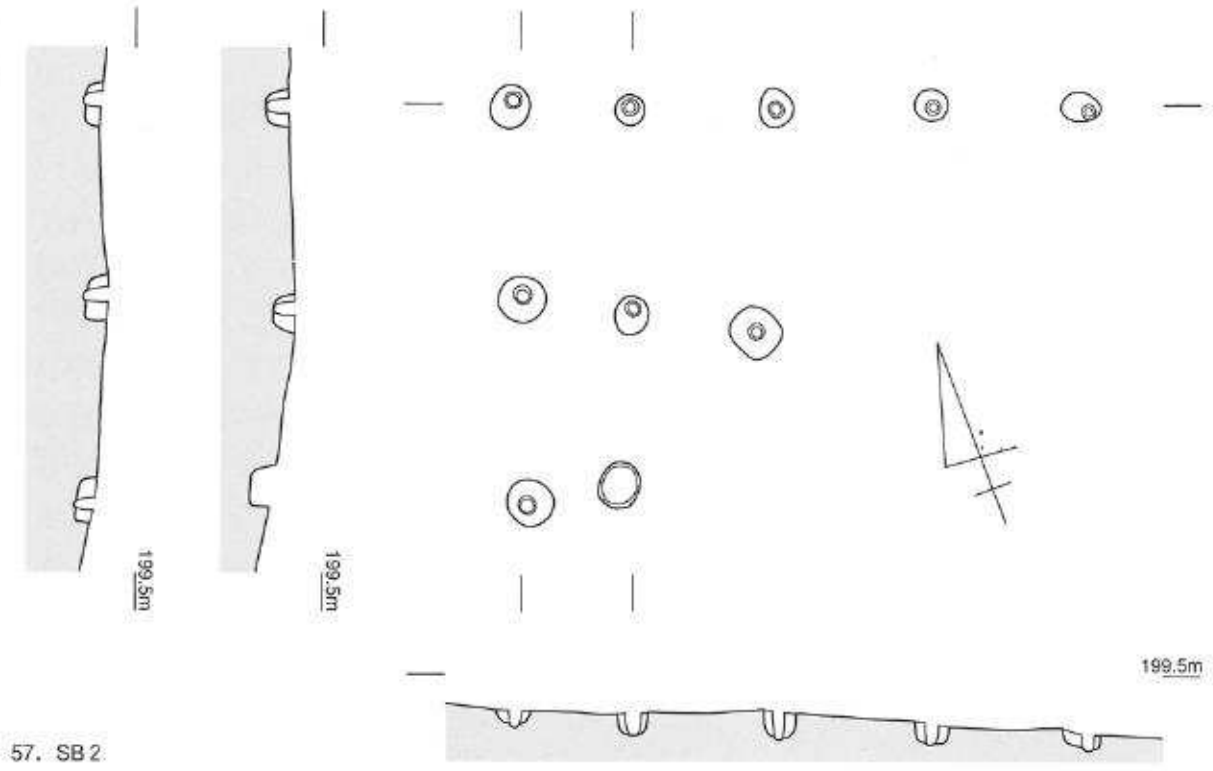


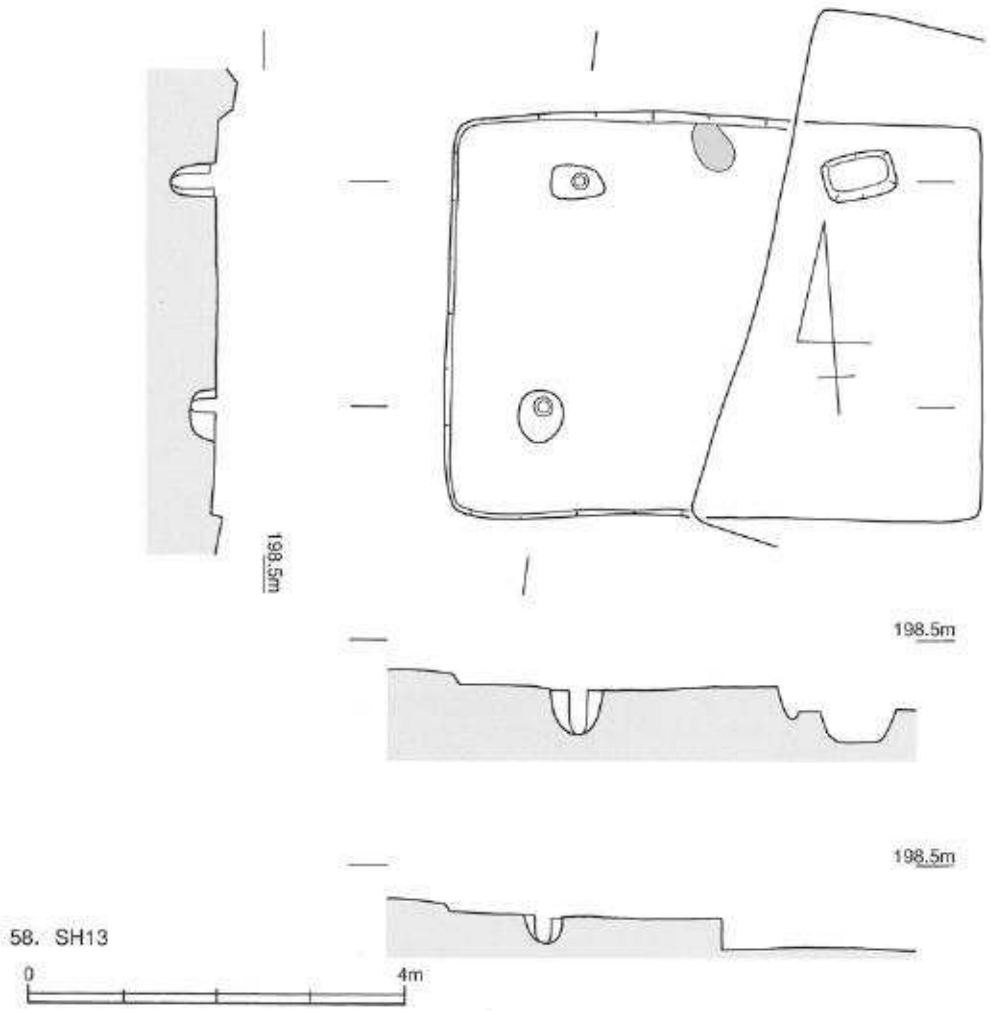
55. SK 4

54. SX 3 平面・断面（1/10）
55. SK 4 平面・土層断面（1/20）

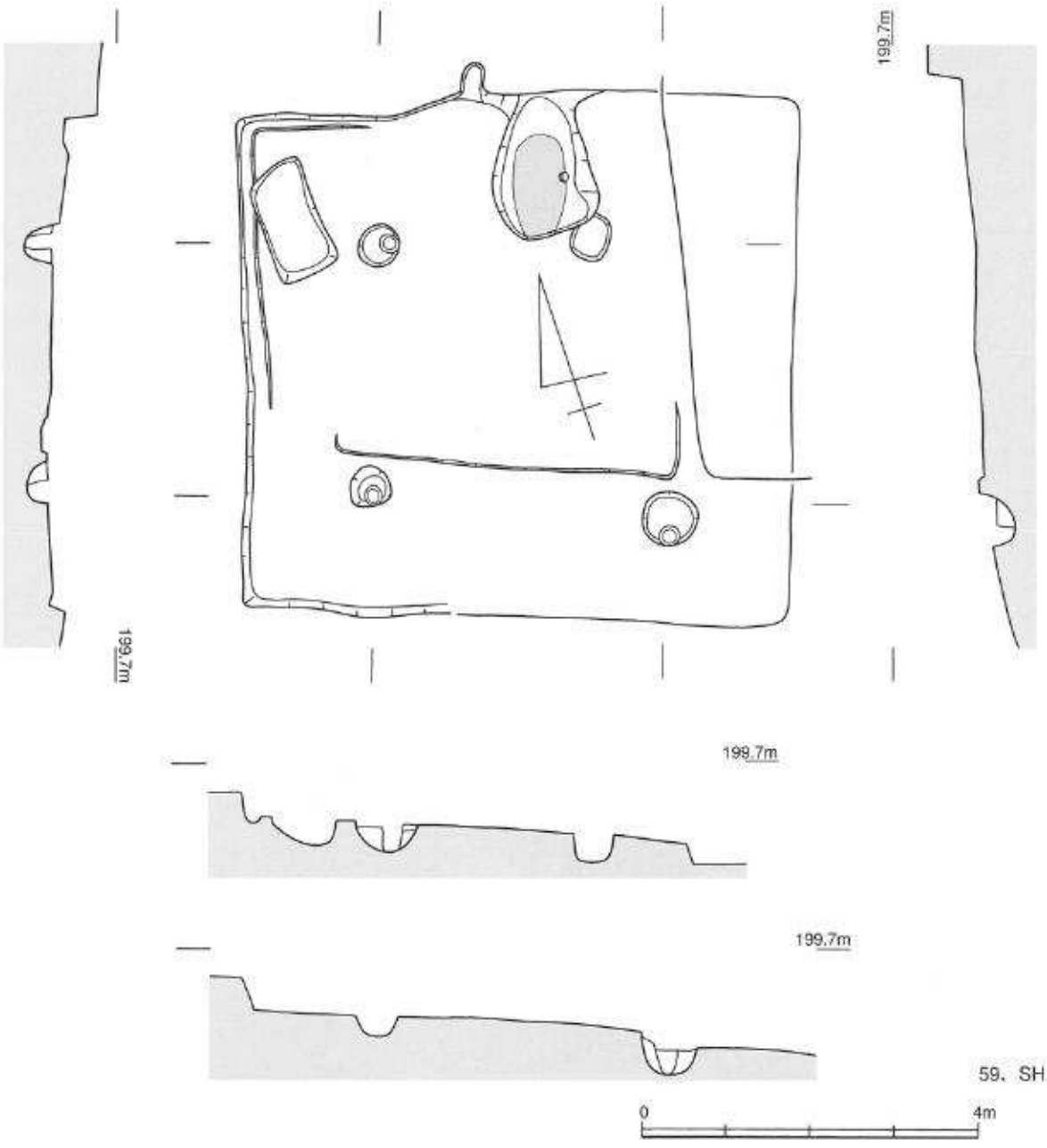


56. SB 1 平面・断面（1/80）

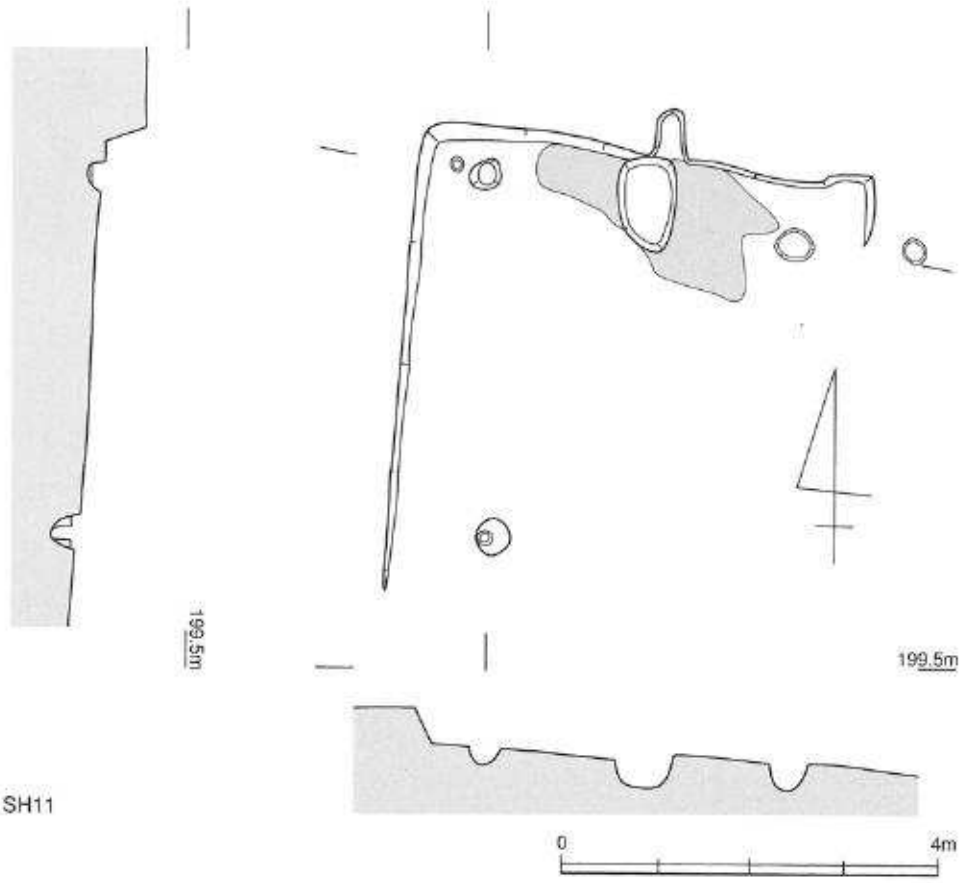




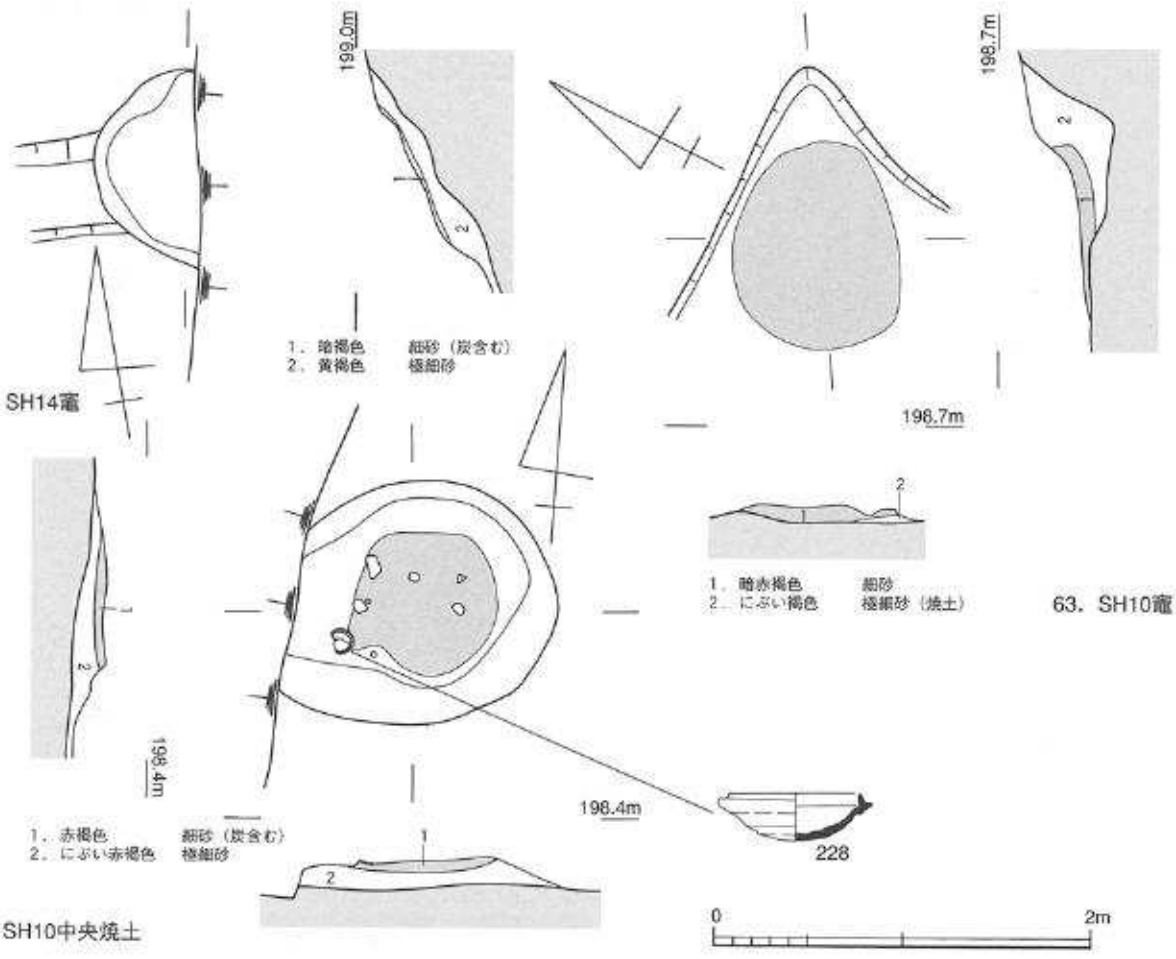
57. SB 2 平面・断面（1/80）
58. SH13平面・断面（1/80）



59. SH 9 平面・断面（1/80）
60. SH 9 竈平面・土層断面（1/40）



61. SH11

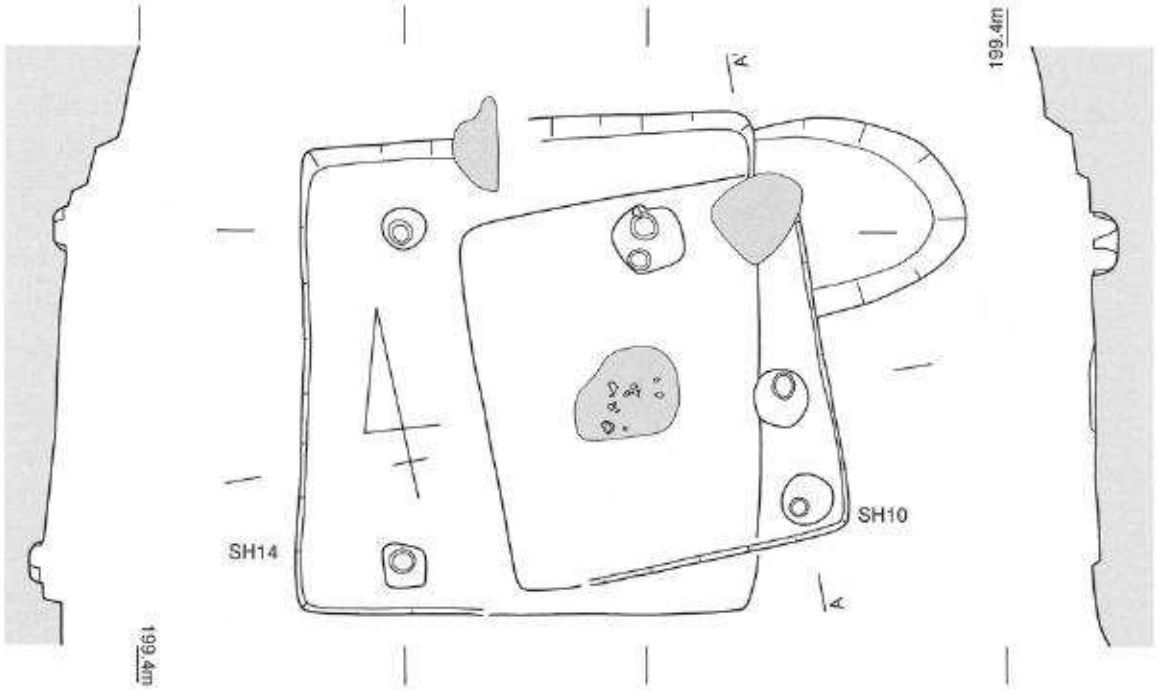


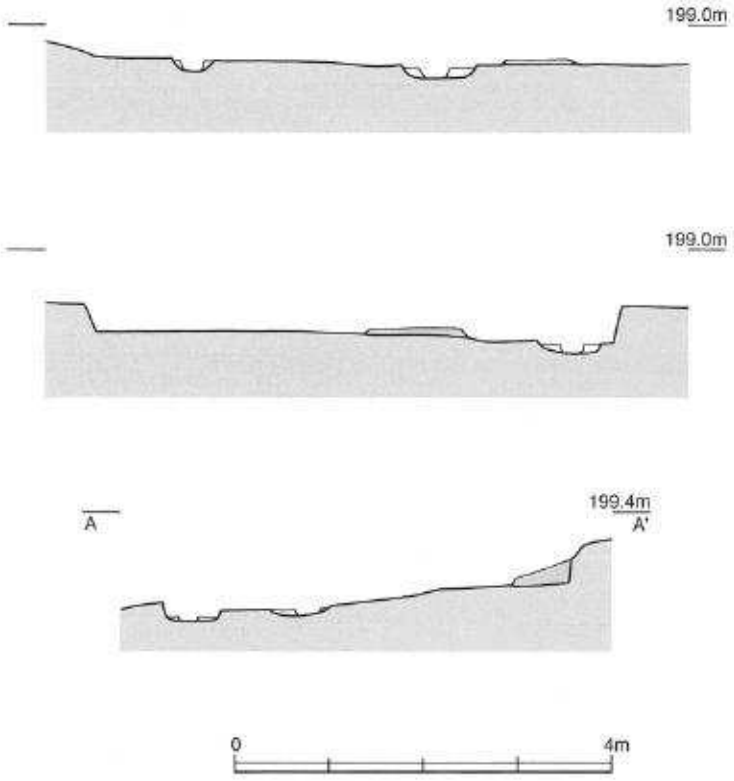
62. SH14竈

63. SH10竈

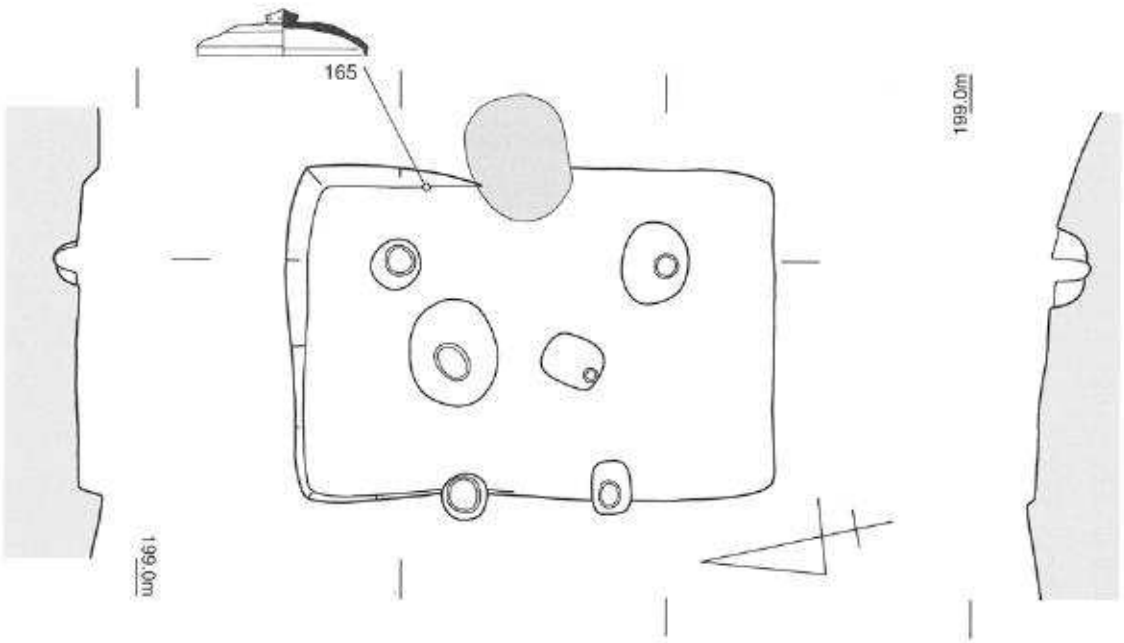
64. SH10中央焼土

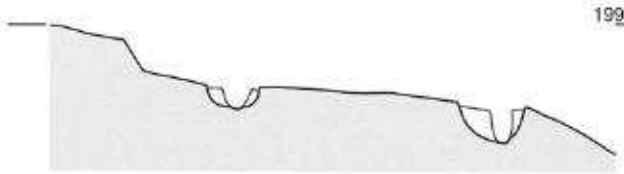
61. SH11平面・断面（1/80）
62. SH14竈平面・土層断面（1/40）
63. SH10竈平面・土層断面（1/40）
64. SH10中央焼土平面・土層断面（1/40）



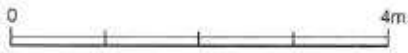


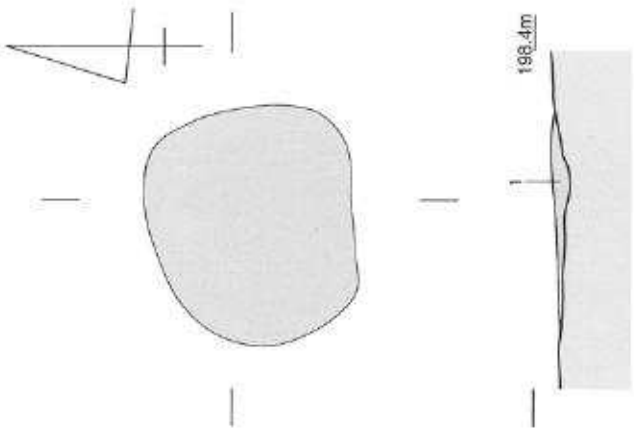
65. SH14・SH10平面・断面（1/80）

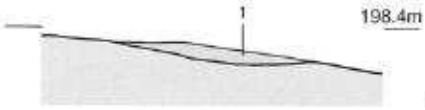




66. SH12



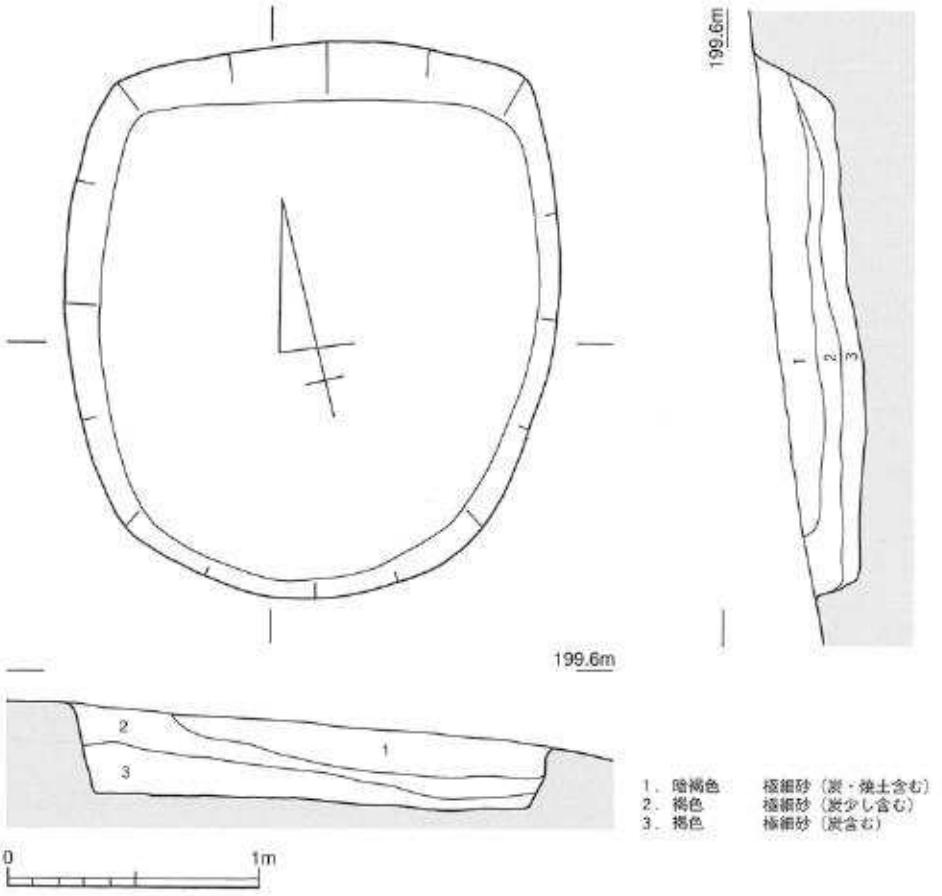




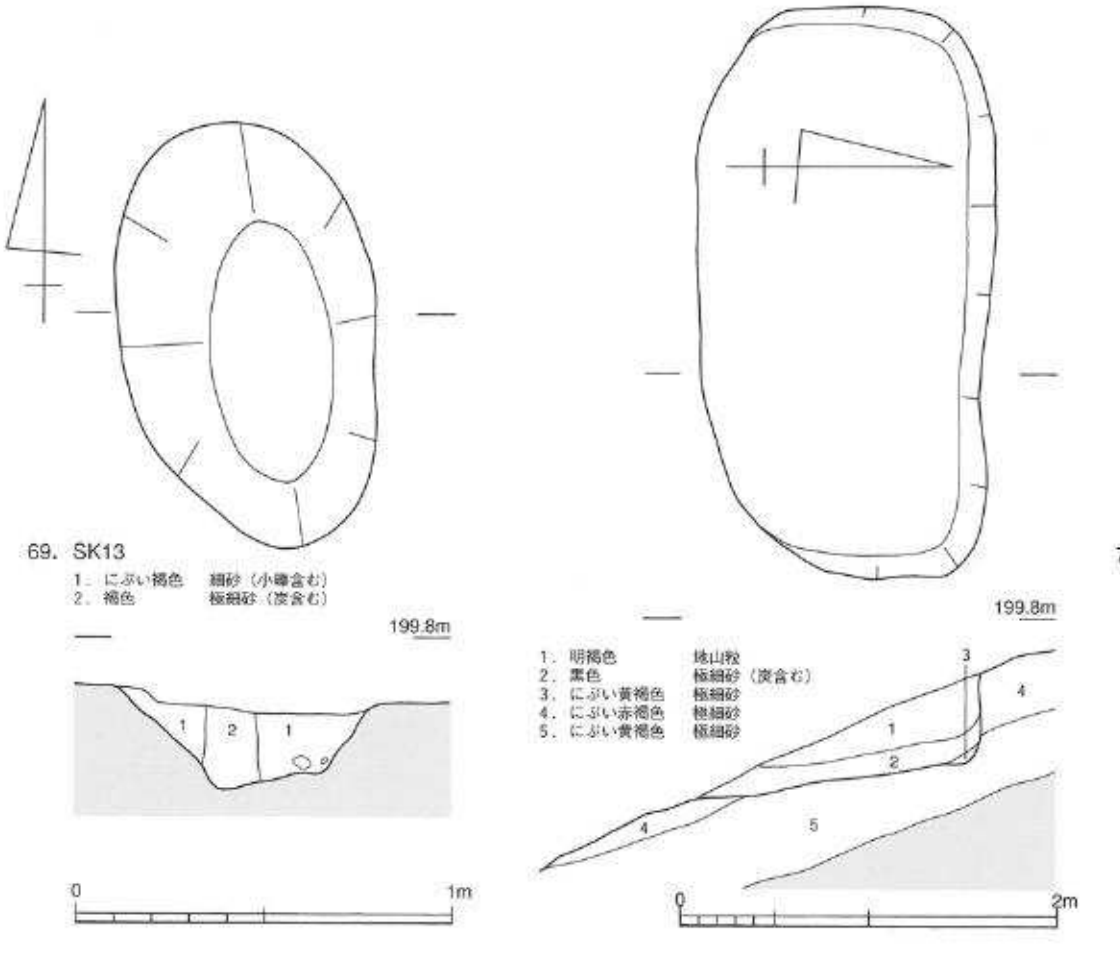
67. SH12竈

1．明褐色　極細砂（焼土）

66. SH12平面・断面（1/80）
67. SH12竈平面・土層断面（1/40）

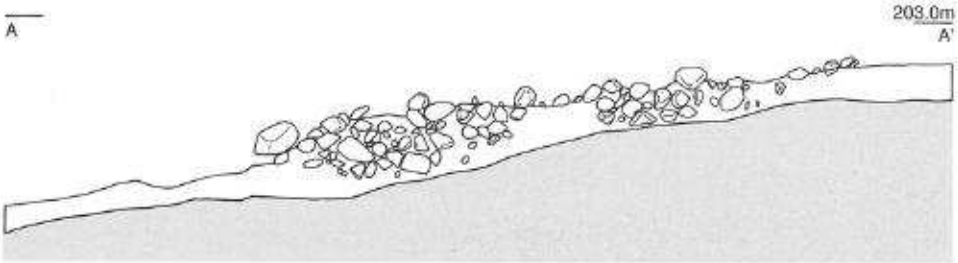


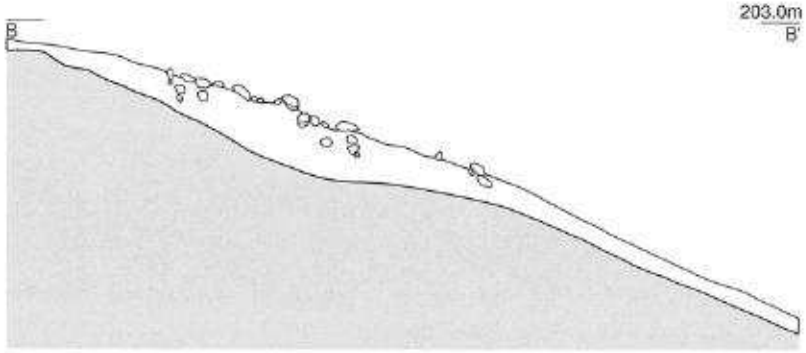
68. SK12



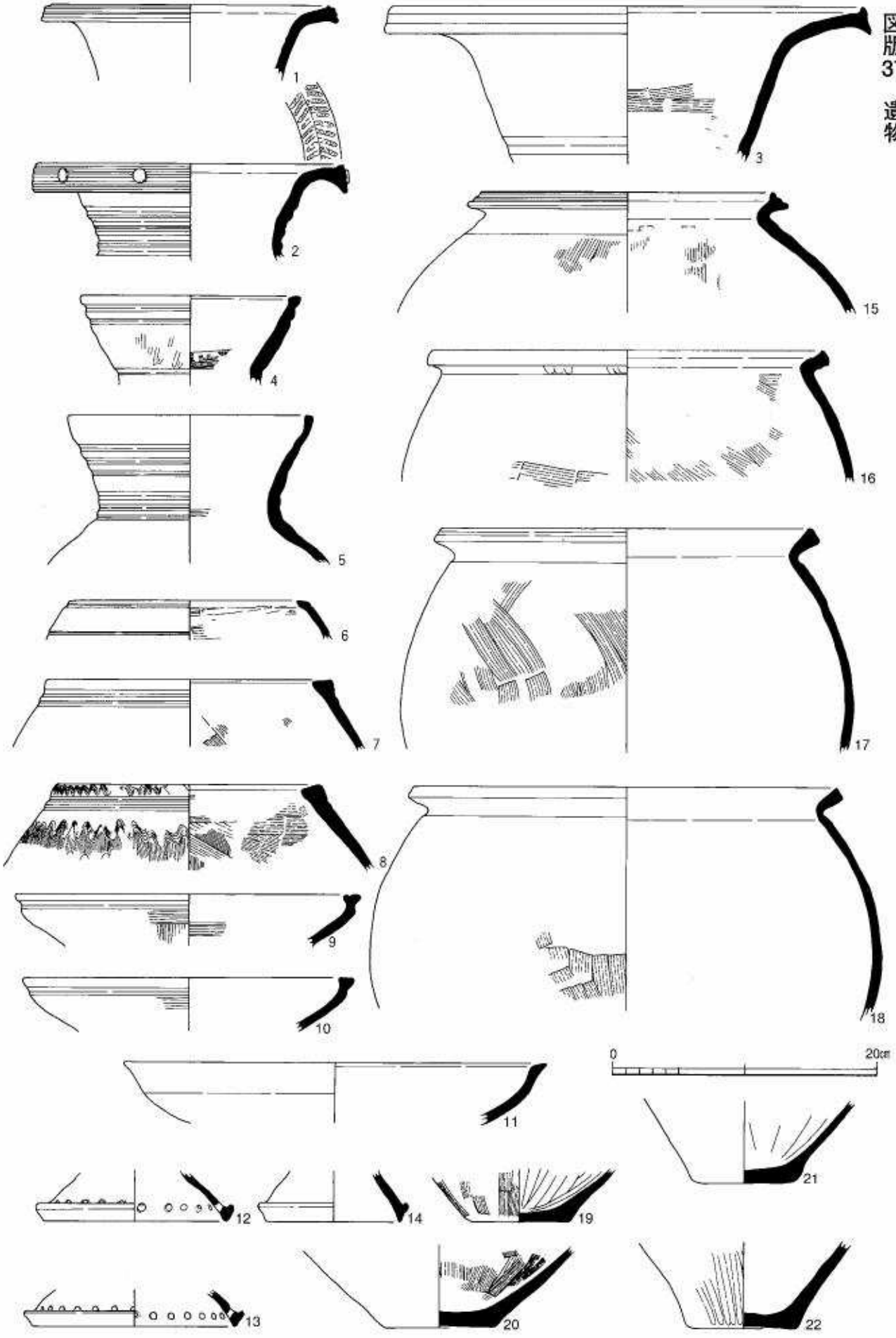
70. SK8

68. SK12平面・土層断面（1/30）
69. SK13平面・土層断面（1/20）
70. SK8平面・土層断面（1/40）

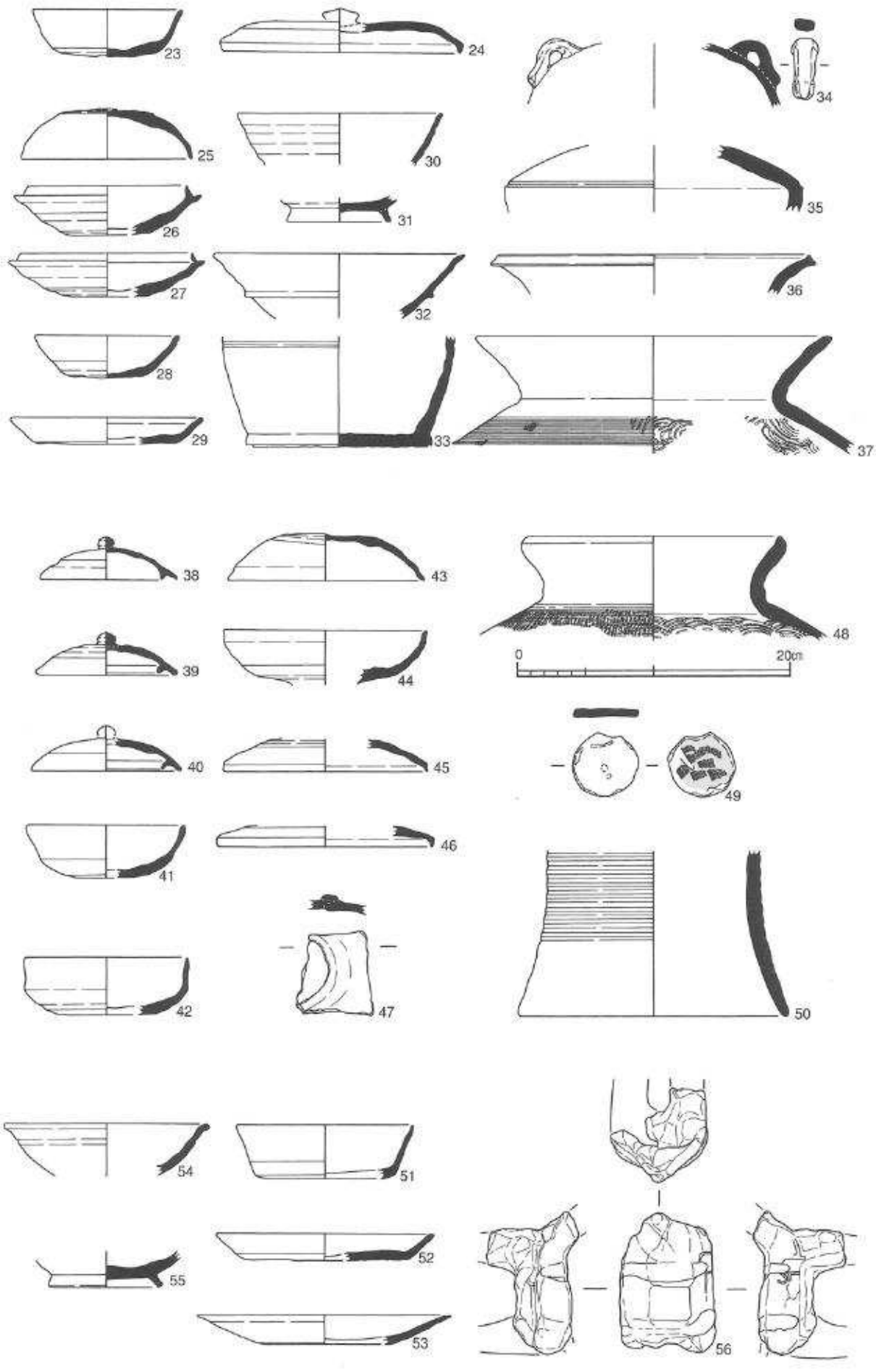




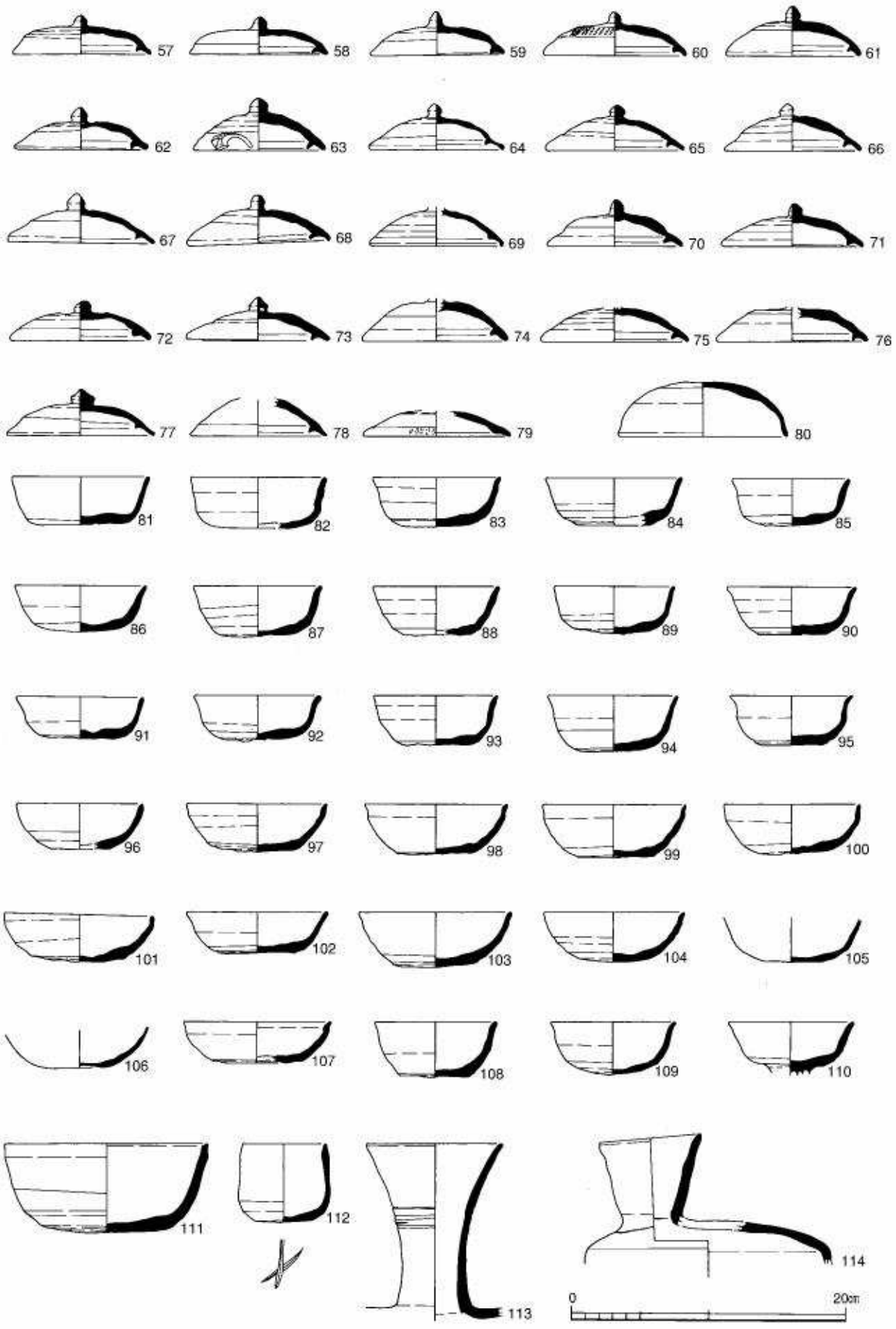
71. SX 4 平面・断面（1/40）



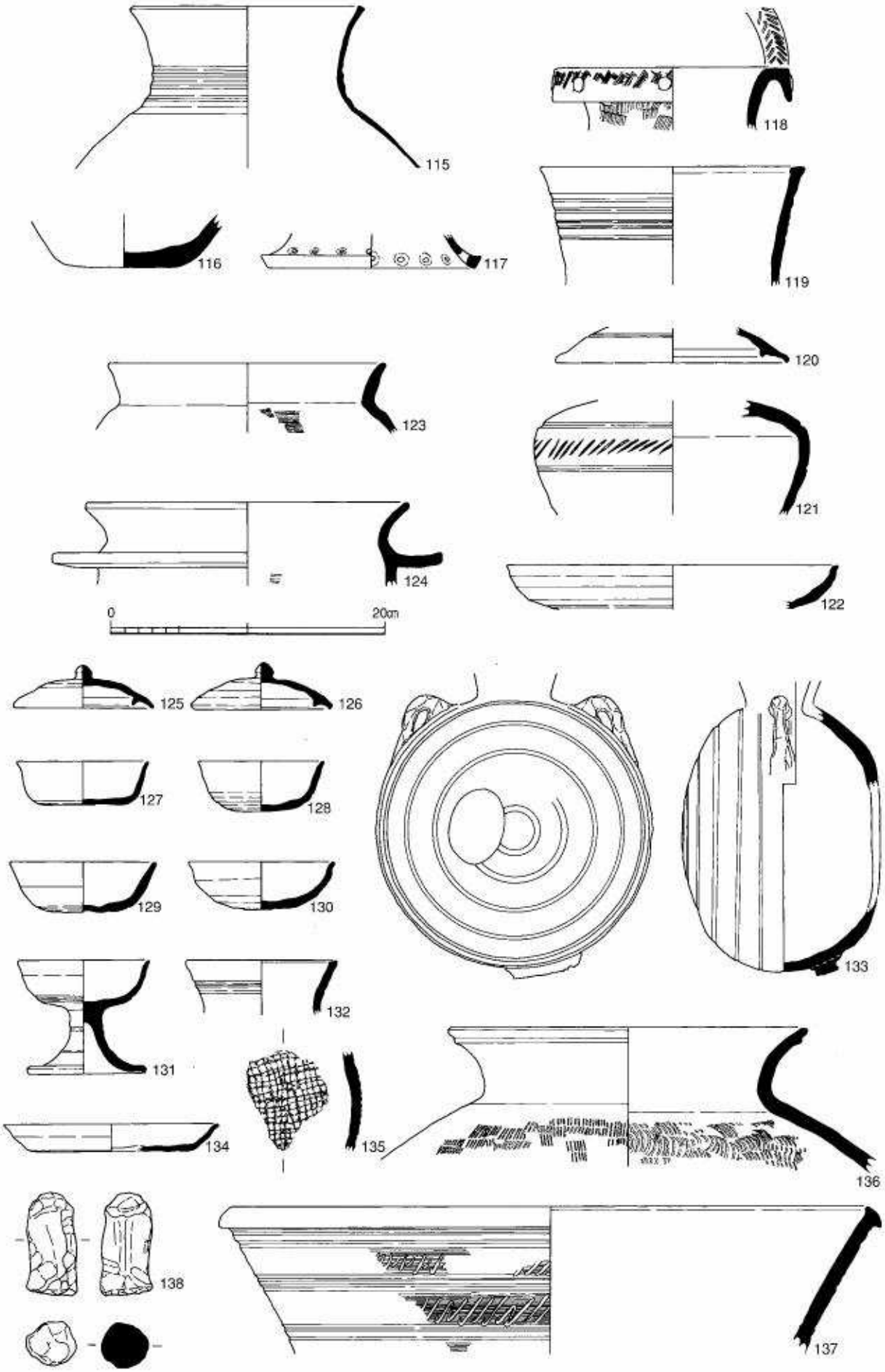
斜面③出土土器（1～22）



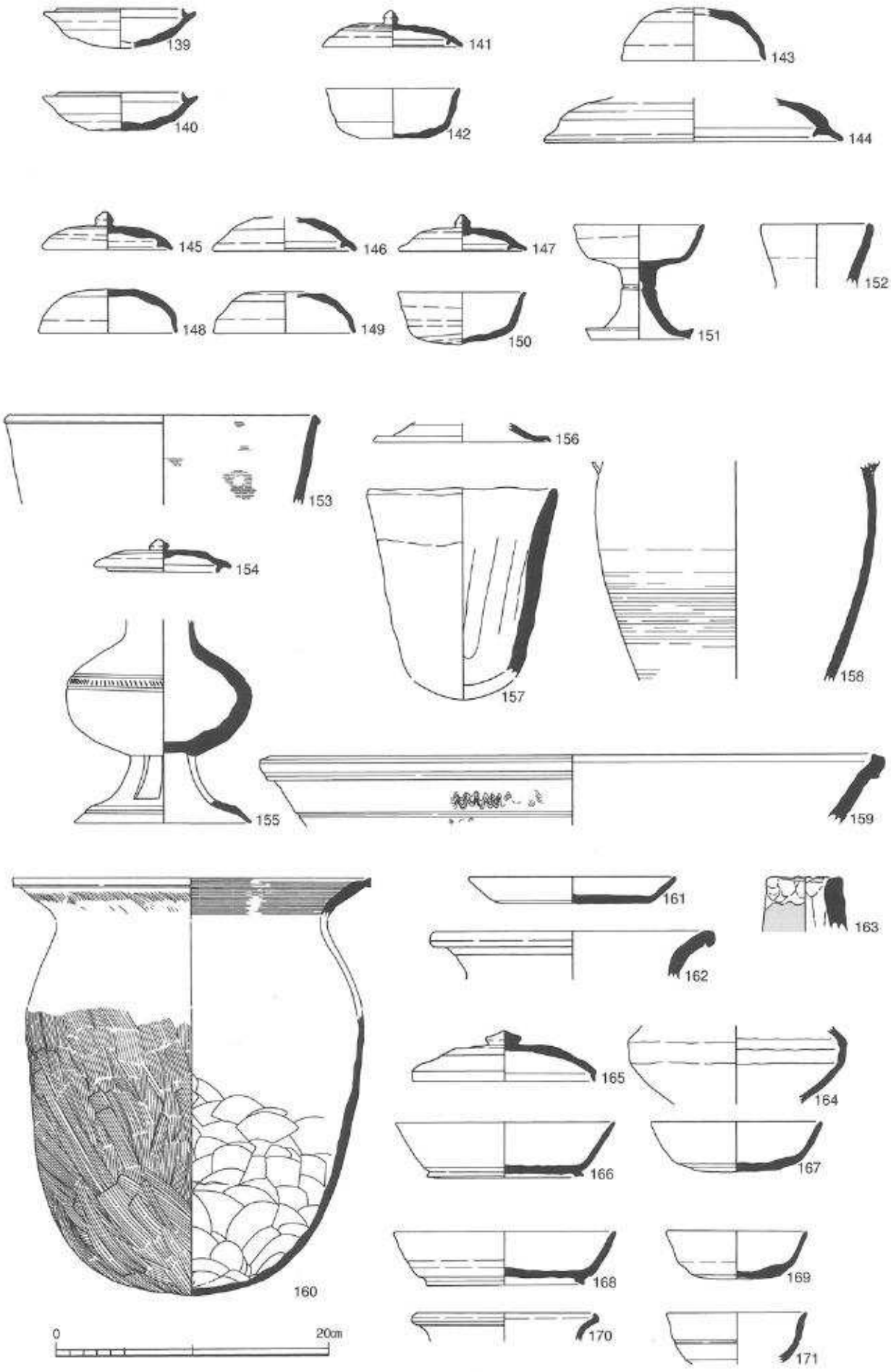
SD 1 ・ 5 ・ 2 ・ 4 出土土器（23～56）



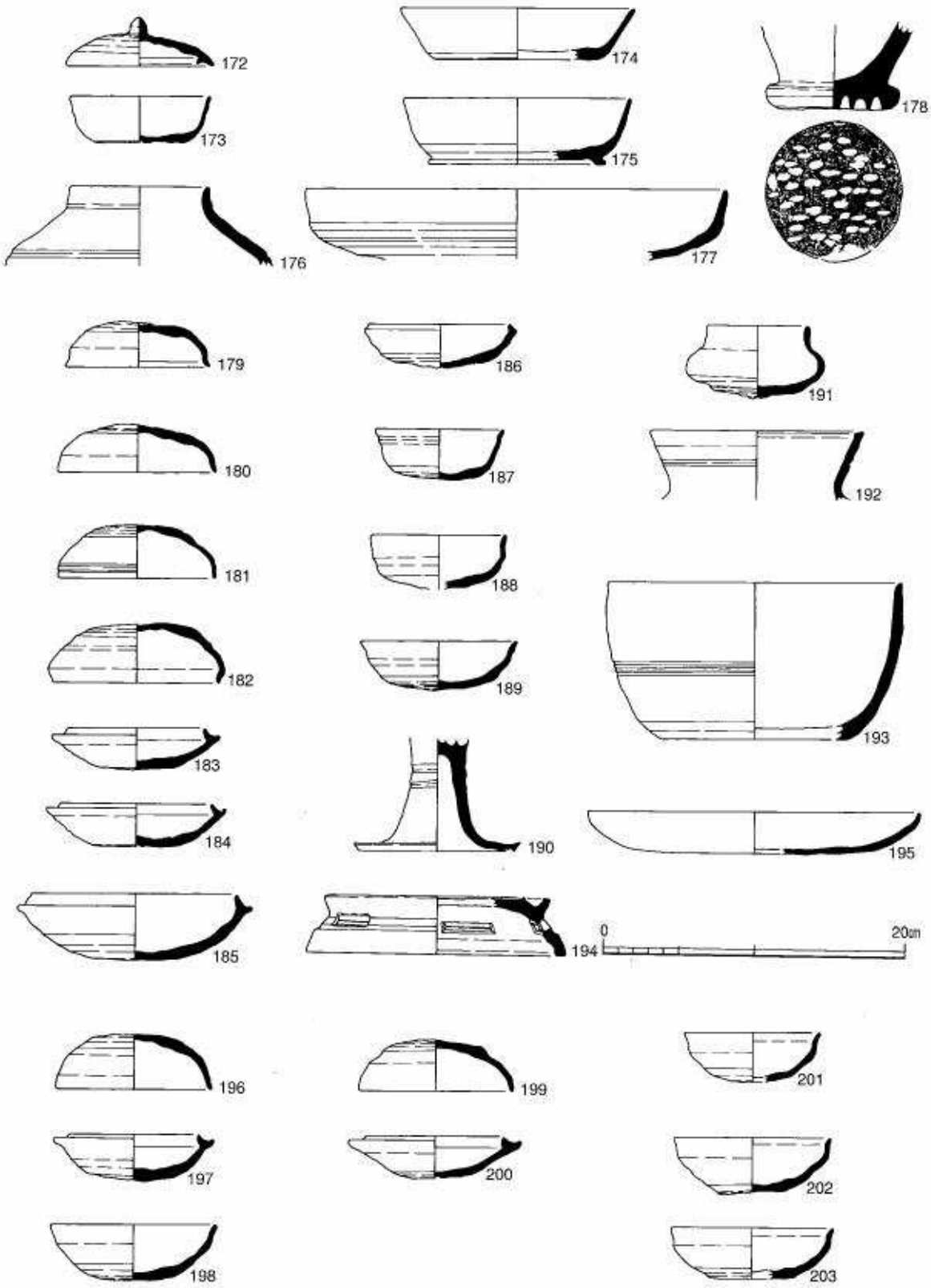
SK 2 出土土器（57～114）



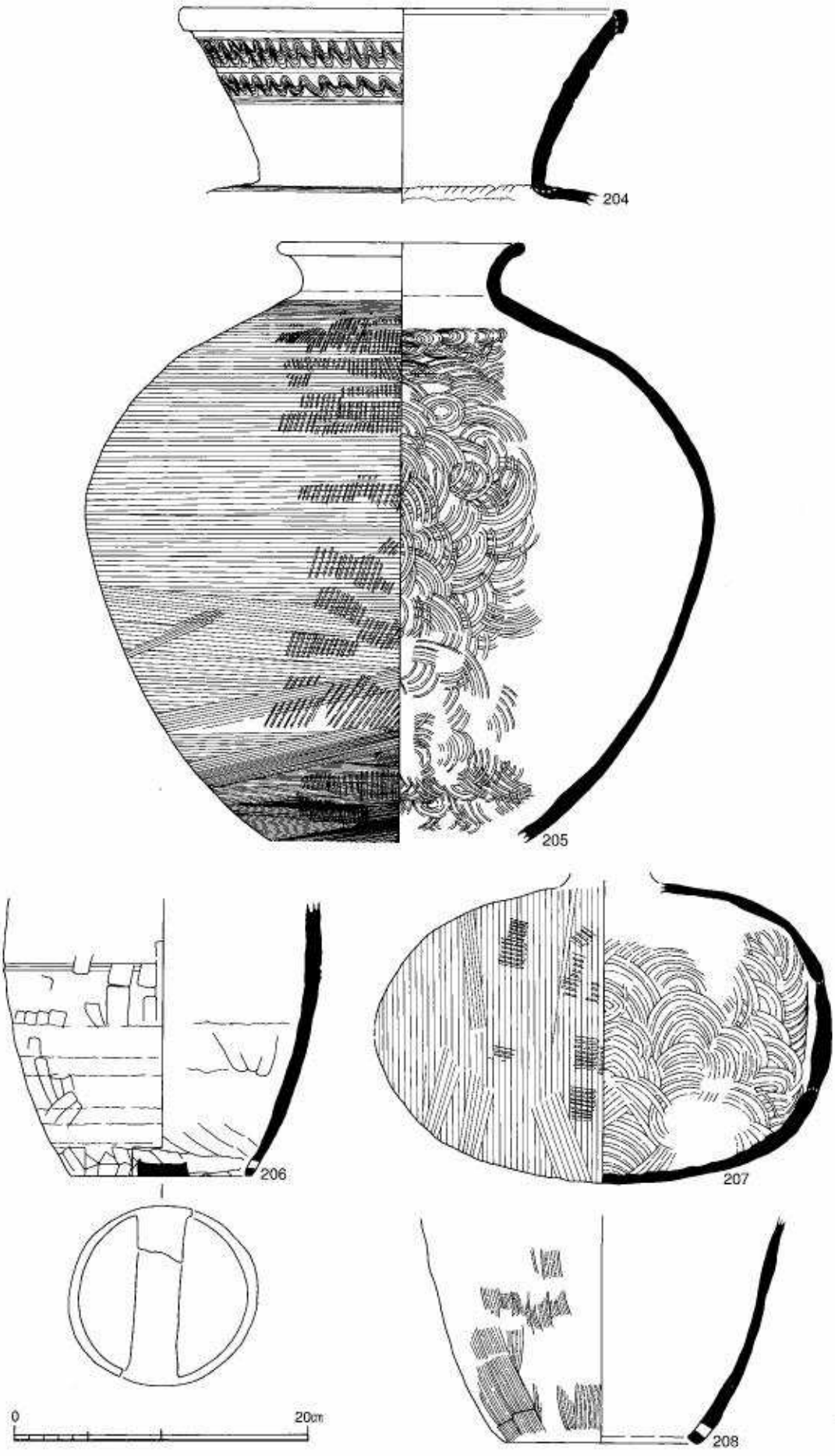
平坦面C・斜面④出土土器（115～138）



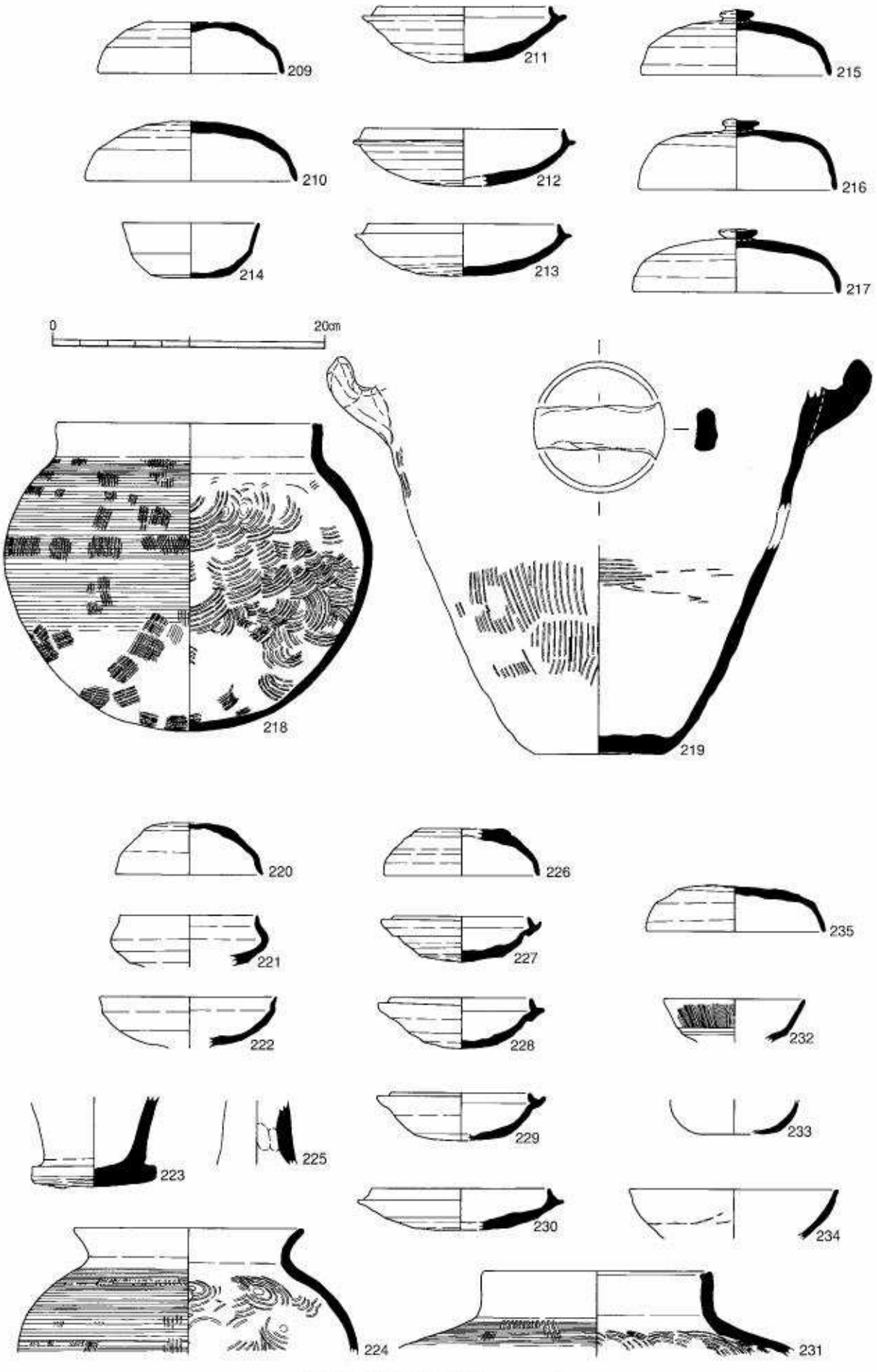
平坦面D地区・SH12出土土器（139～171）



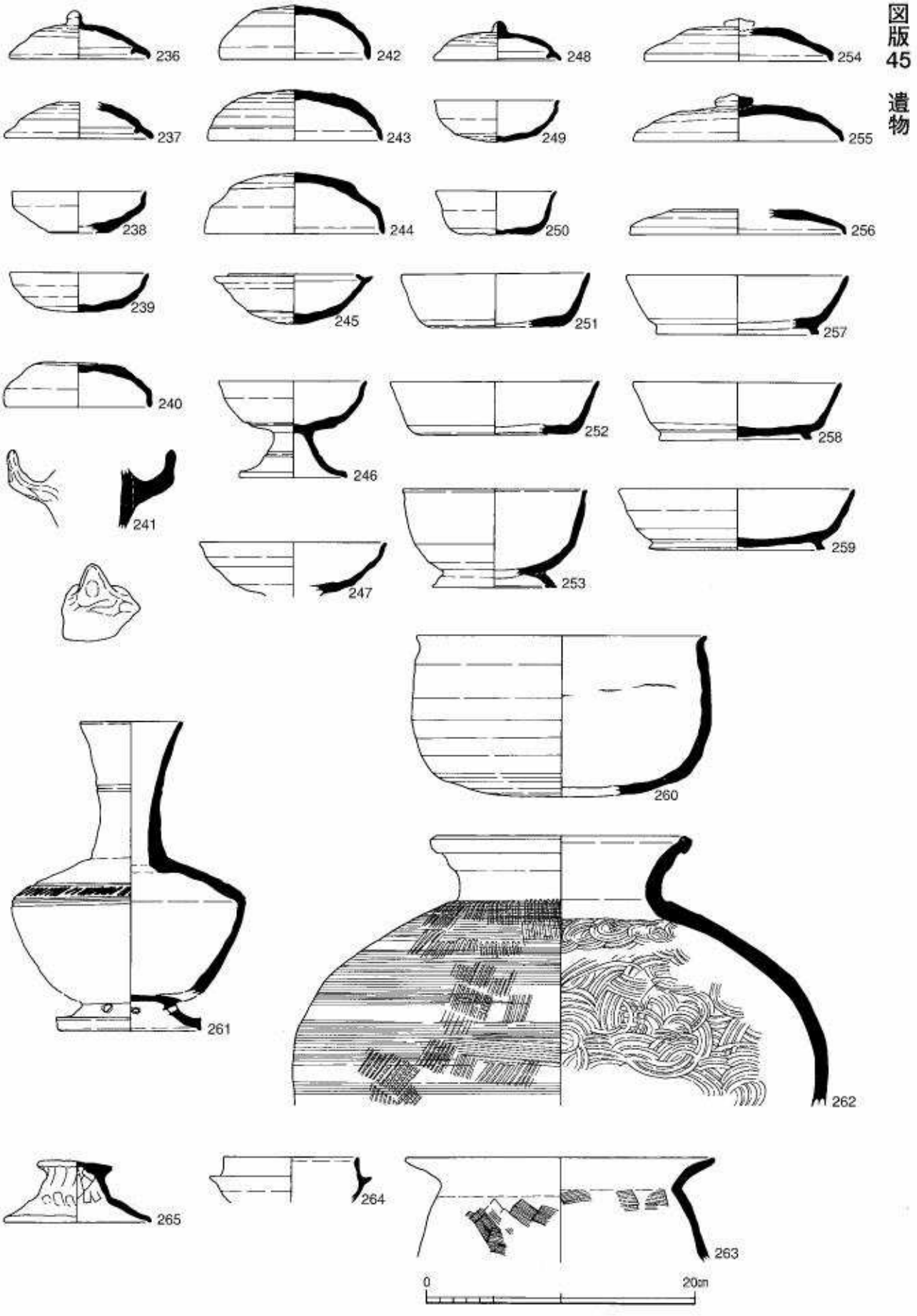
平坦面D出土土器（172～203）



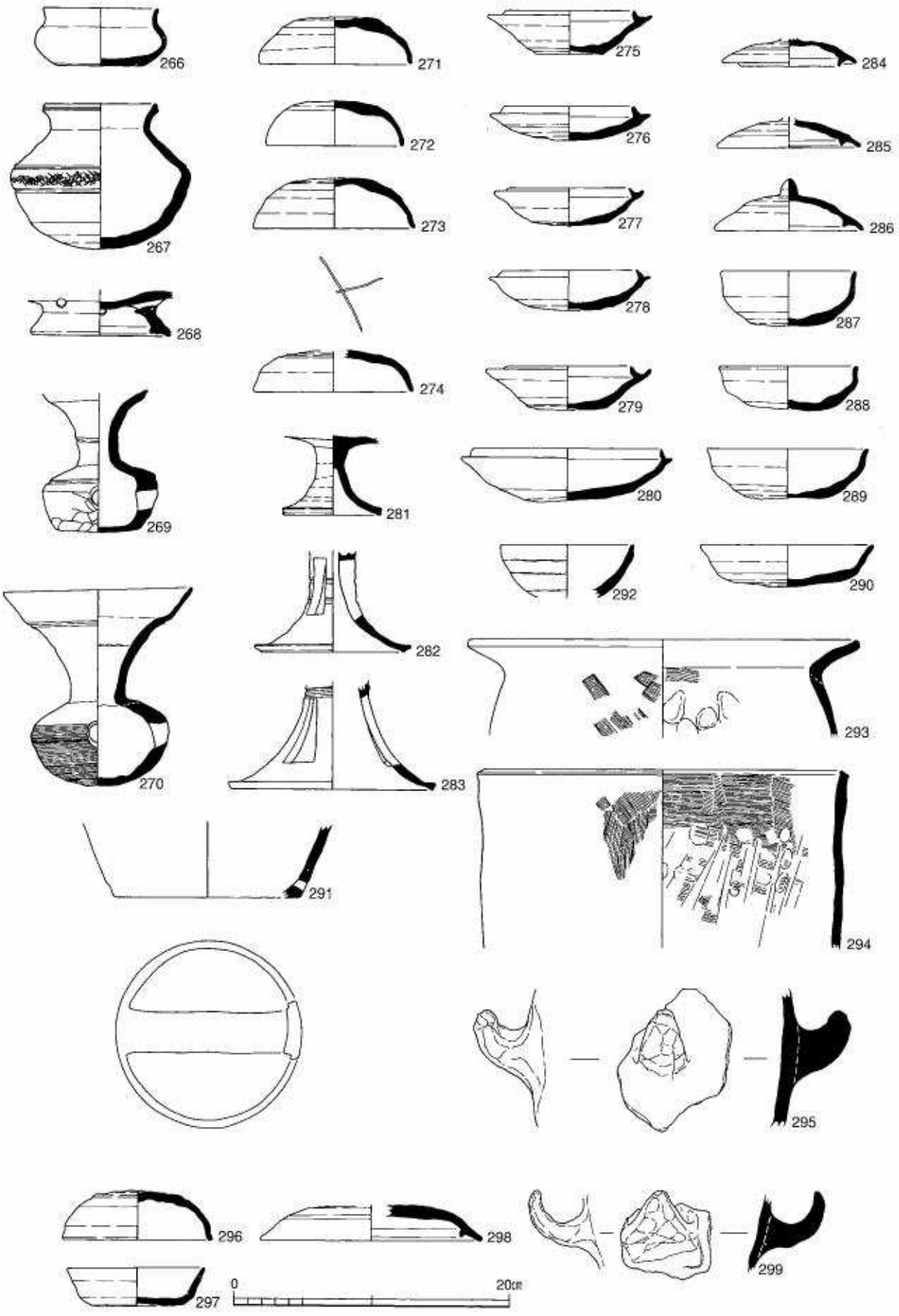
平坦面D・E、斜面⑦出土土器（204～208）



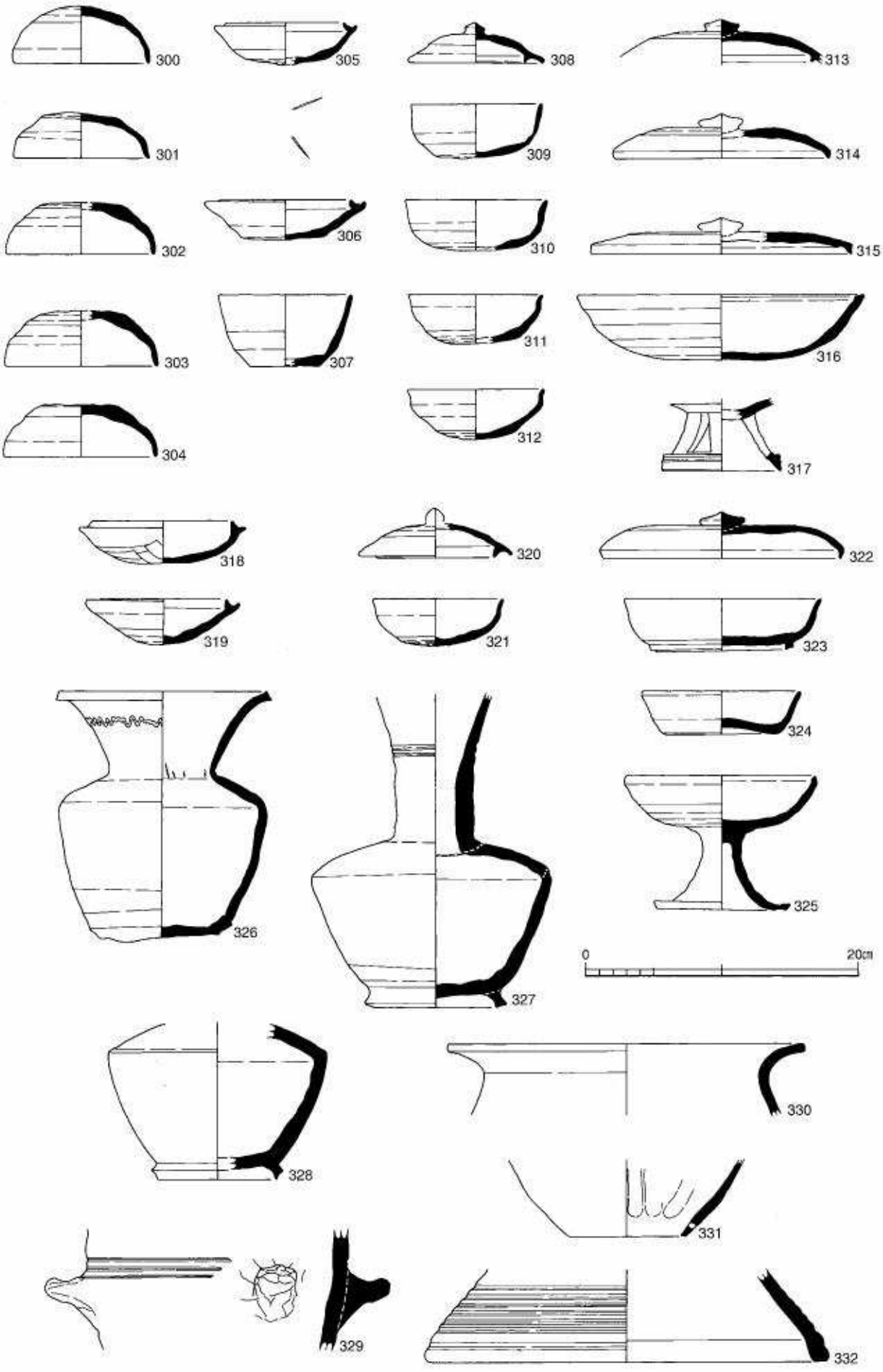
平坦面E地区出土土器（209～235）



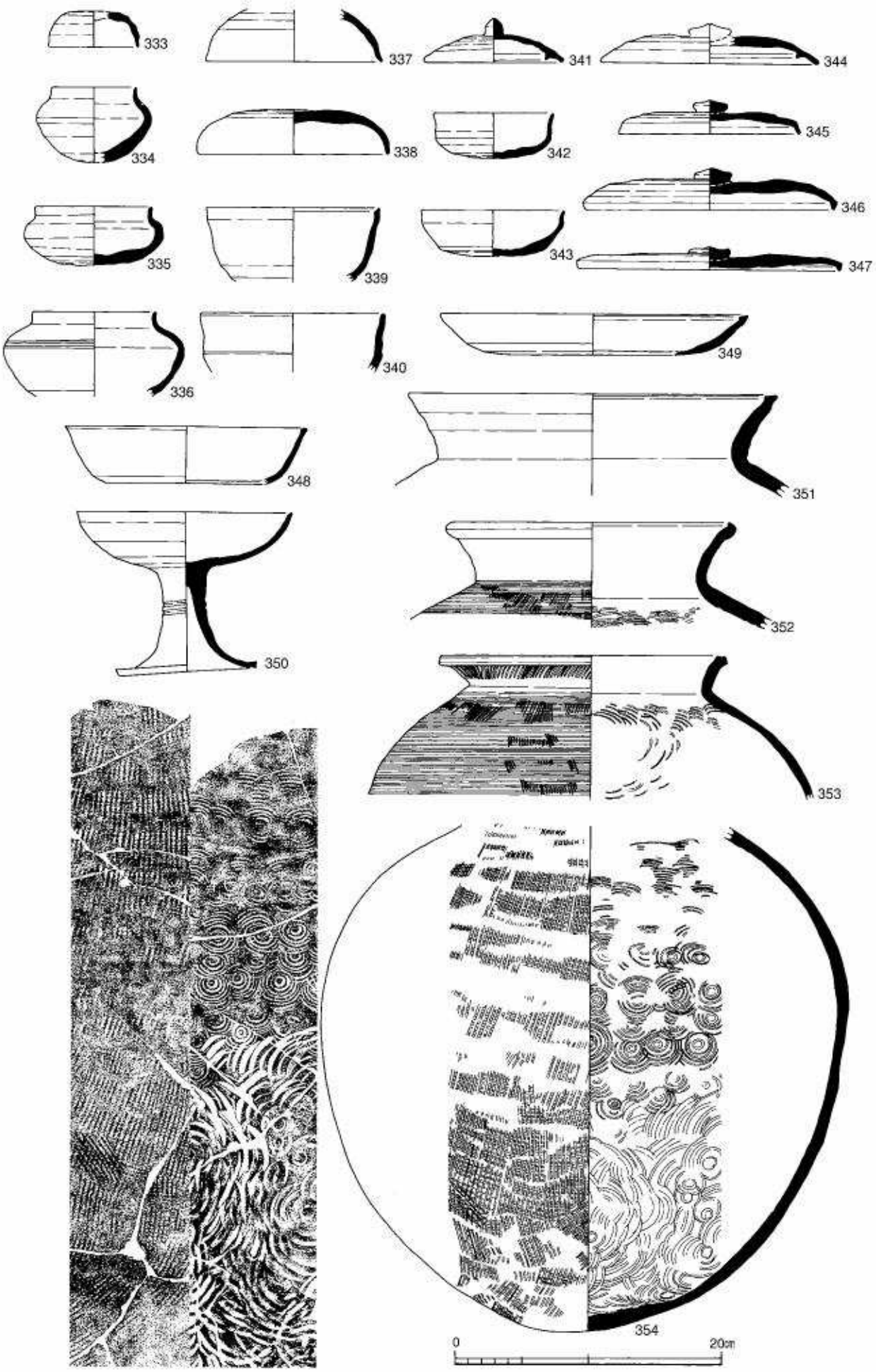
平坦面E出土土器（236～265）



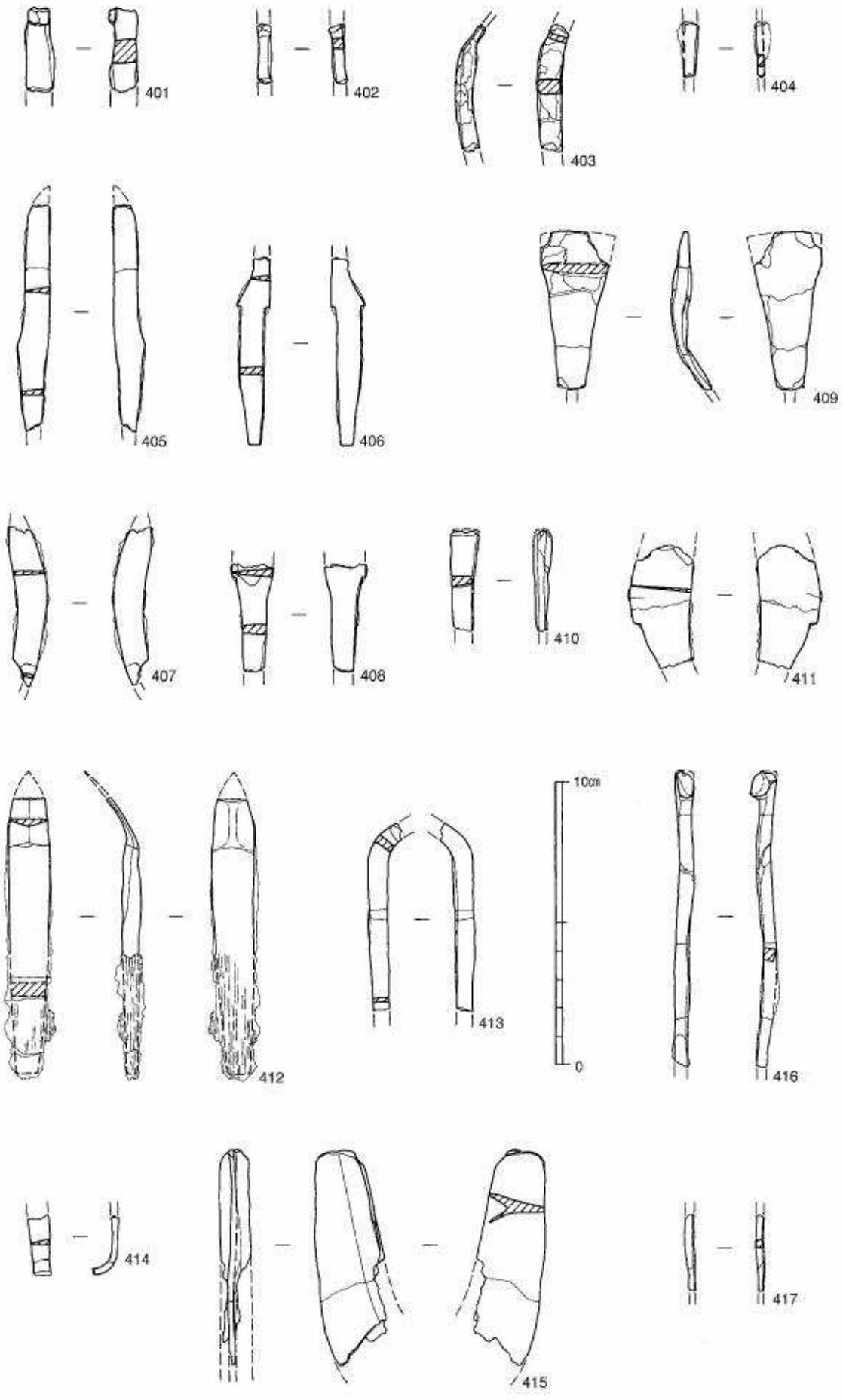
平坦面E出土土器（266～299）



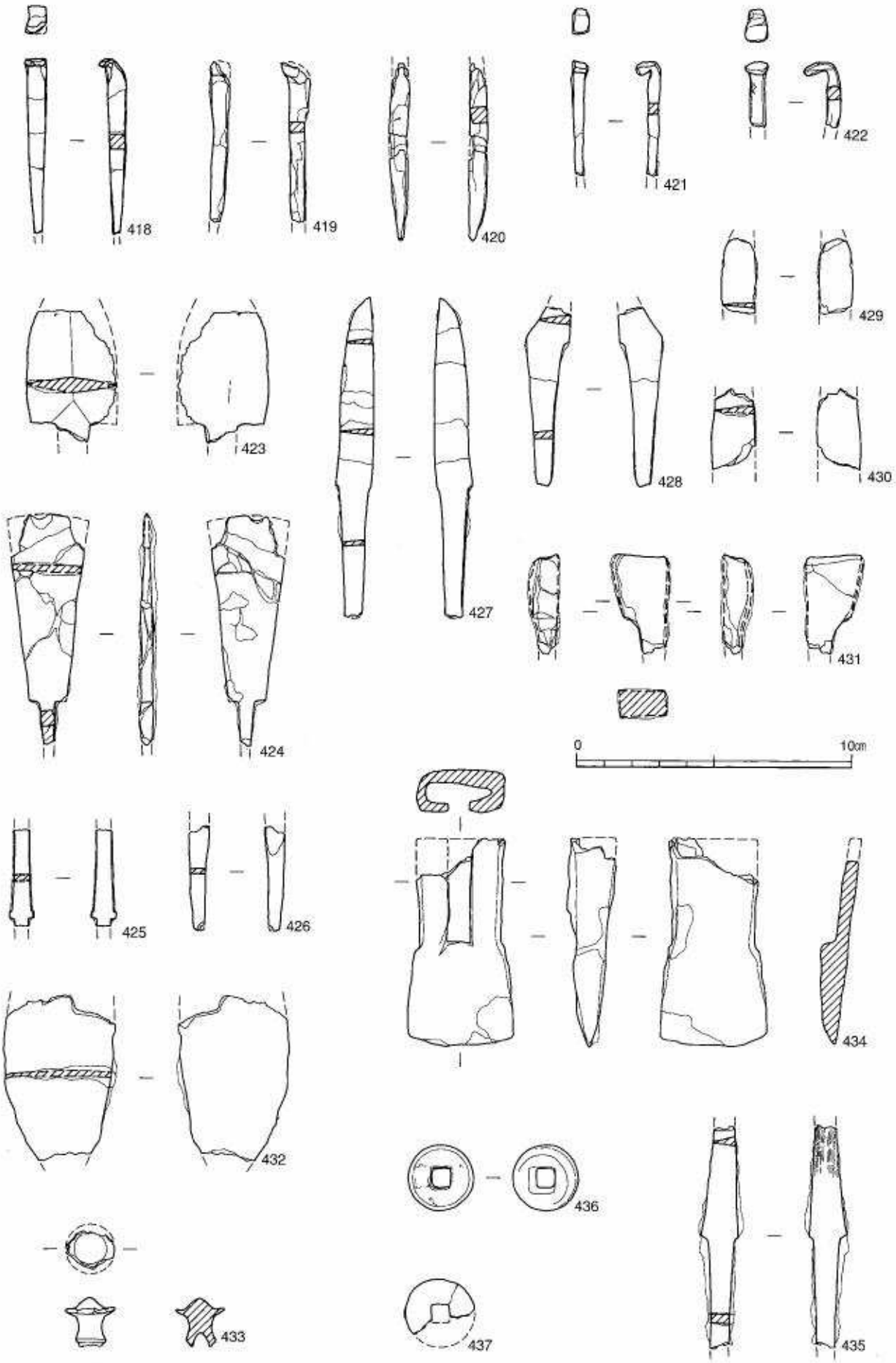
平坦面E・斜面⑧出土土器（300～332）



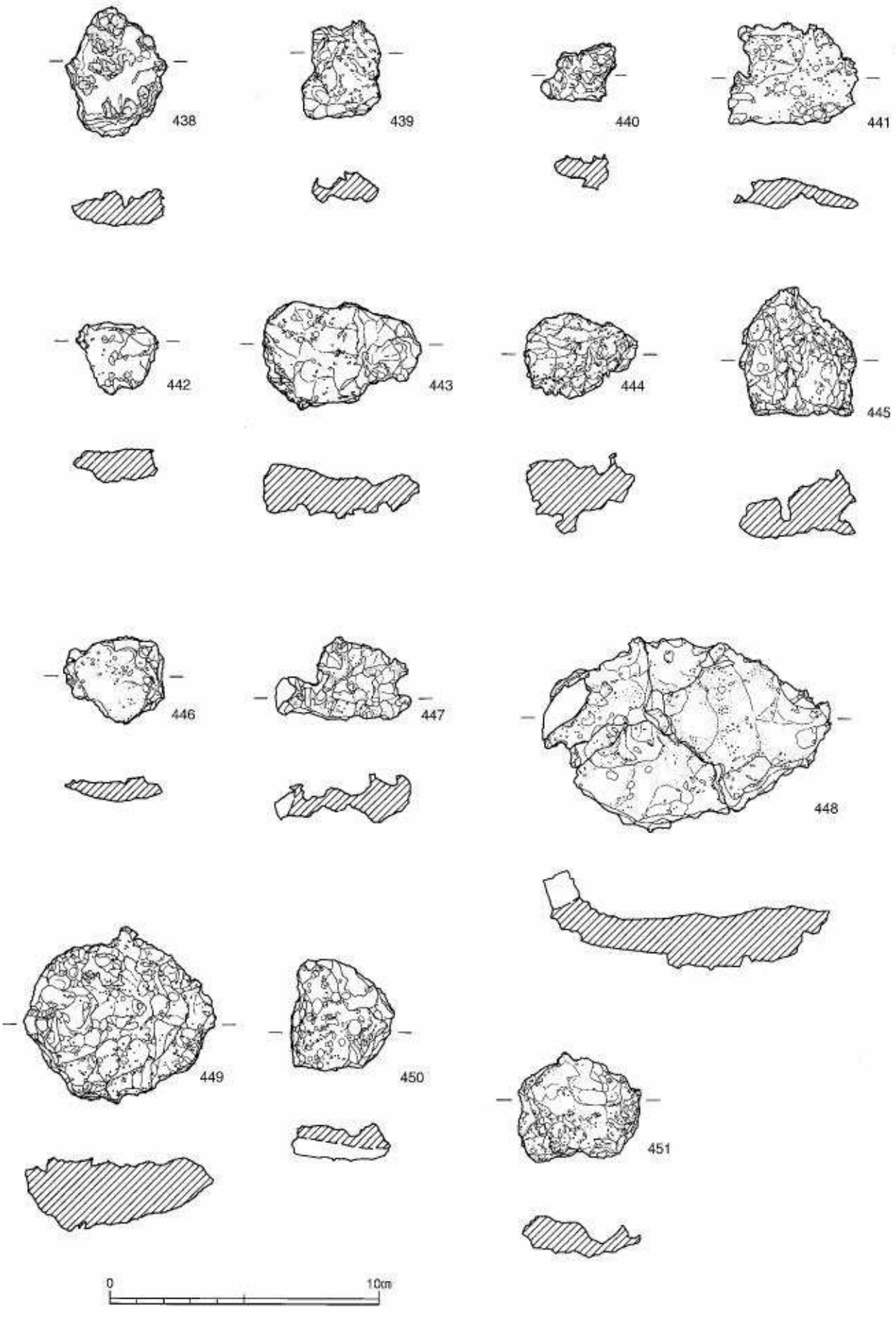
斜面⑧出土土器（333～354）


401
402
403
404
405
406
409
407
408
410
411
412
413
10cm
0
416
414
415
417

金属器1 (401~417)

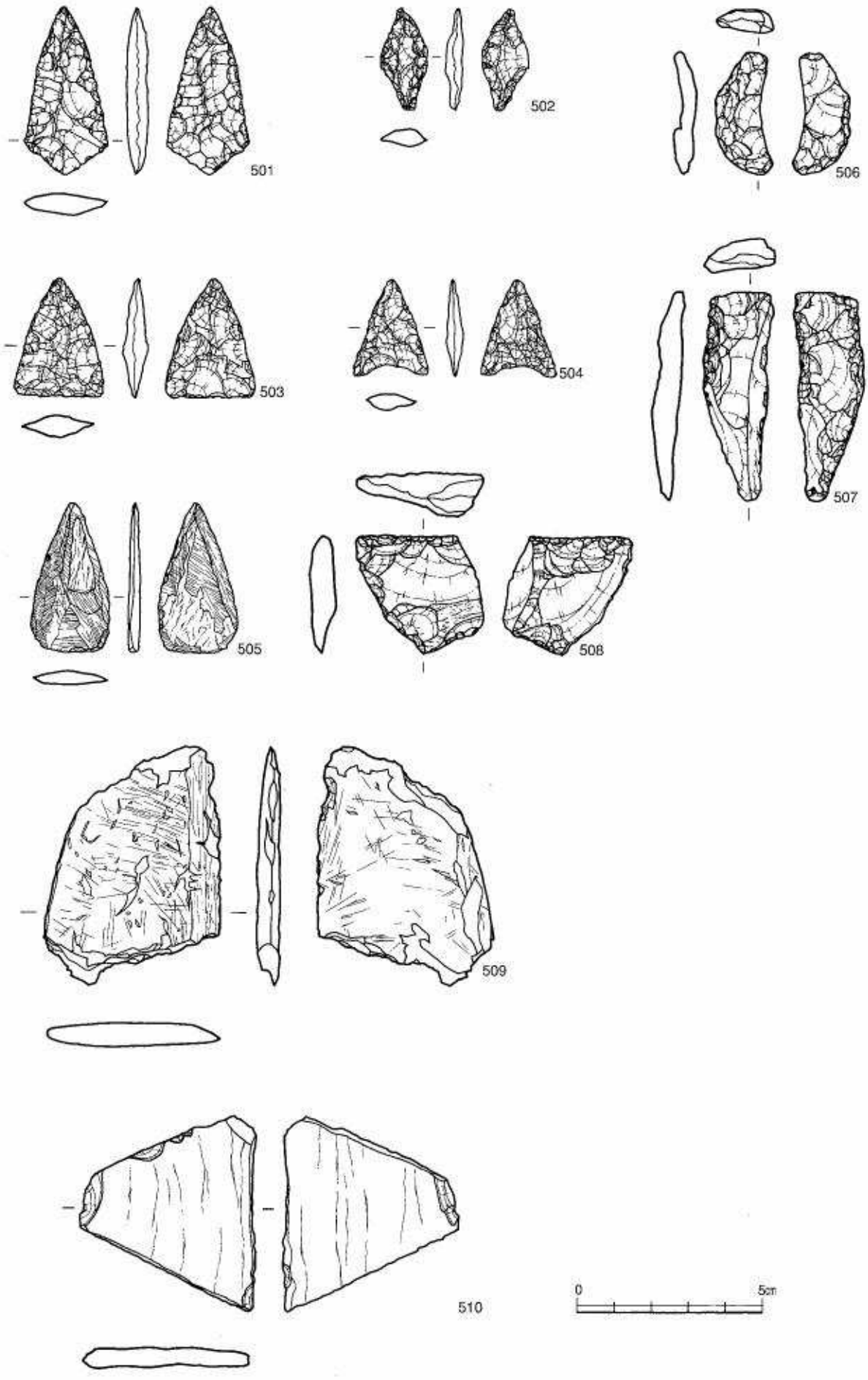

418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
0
10cm

金属器2 (418~437)

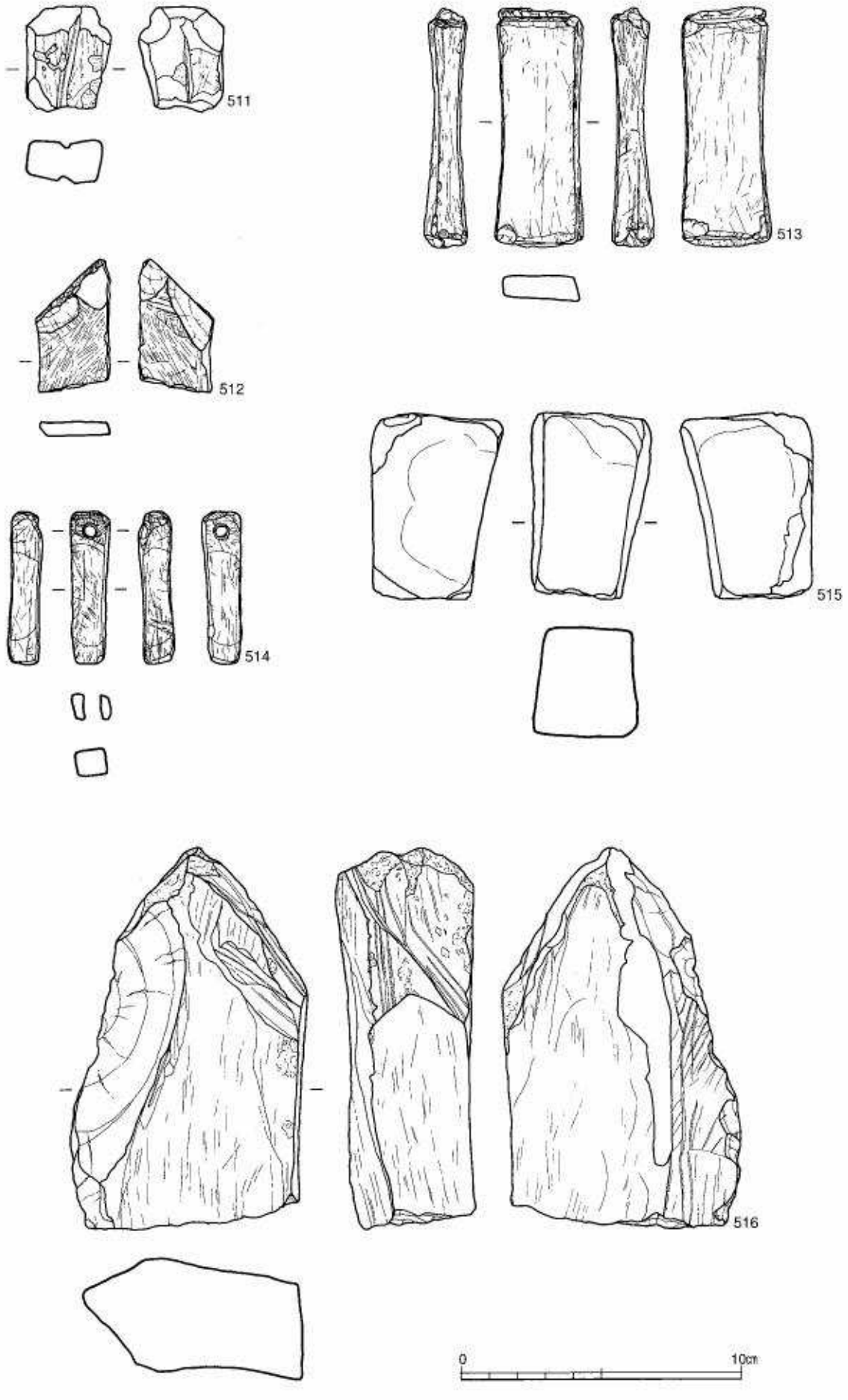


鉄滓（438～451）

図版52 遺物

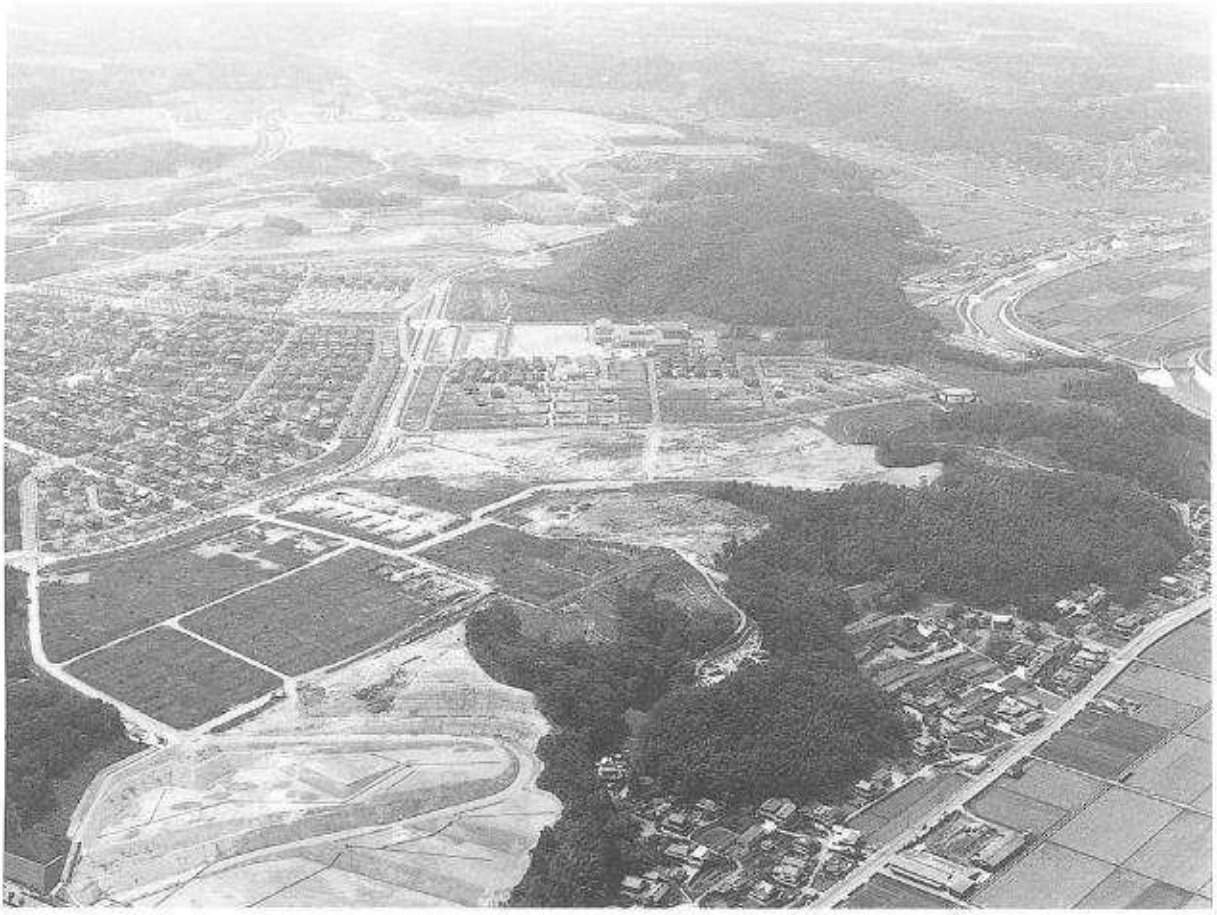


石器1（501～510）

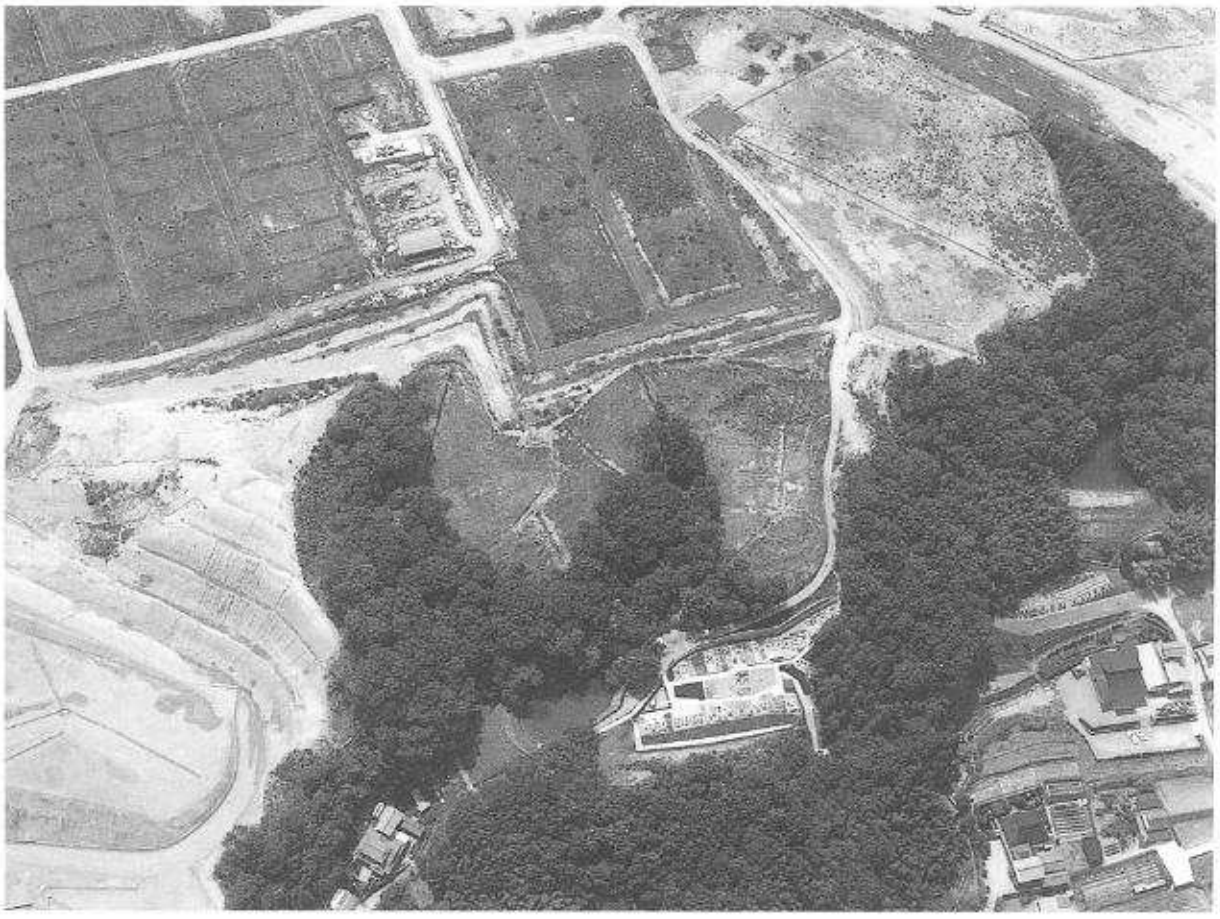


石器2（511～516）

写真図版



1．遠景（南東上から）



2．調査前全景（東上から）

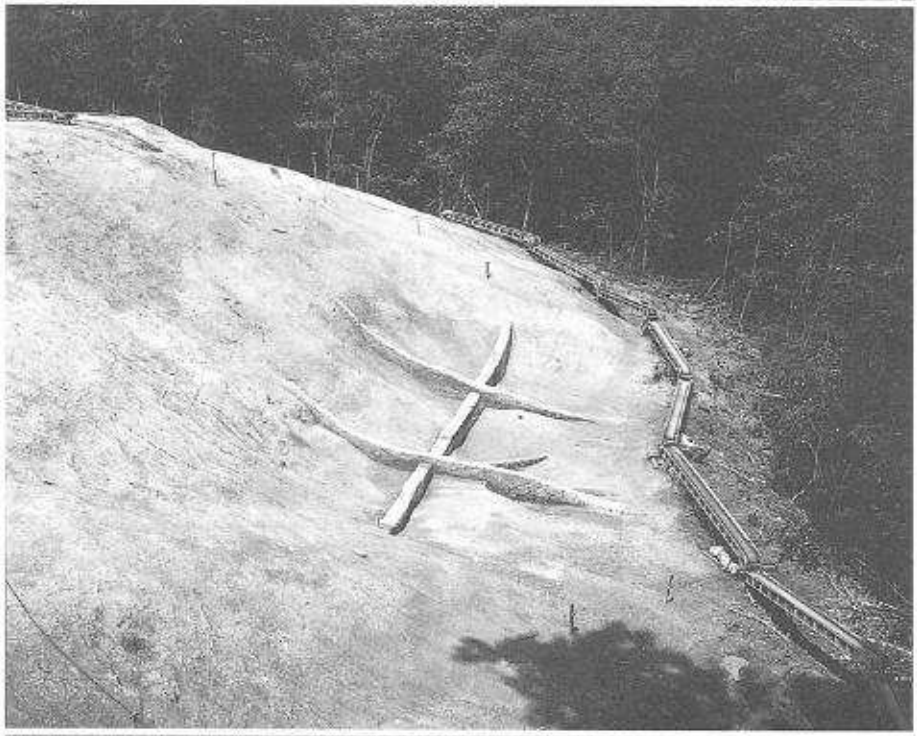
3．調査地全景（東上から）

4．調査地全景（西上から）

5．全景（東上から）

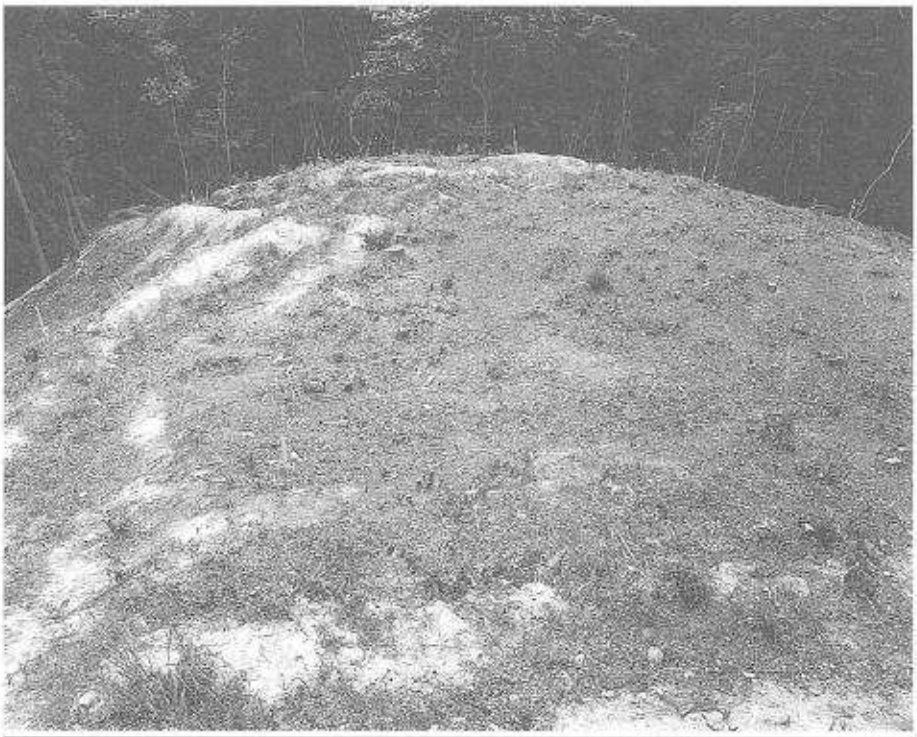
6．斜面③全景（北東上から）

7．平坦面A調査前（東から）

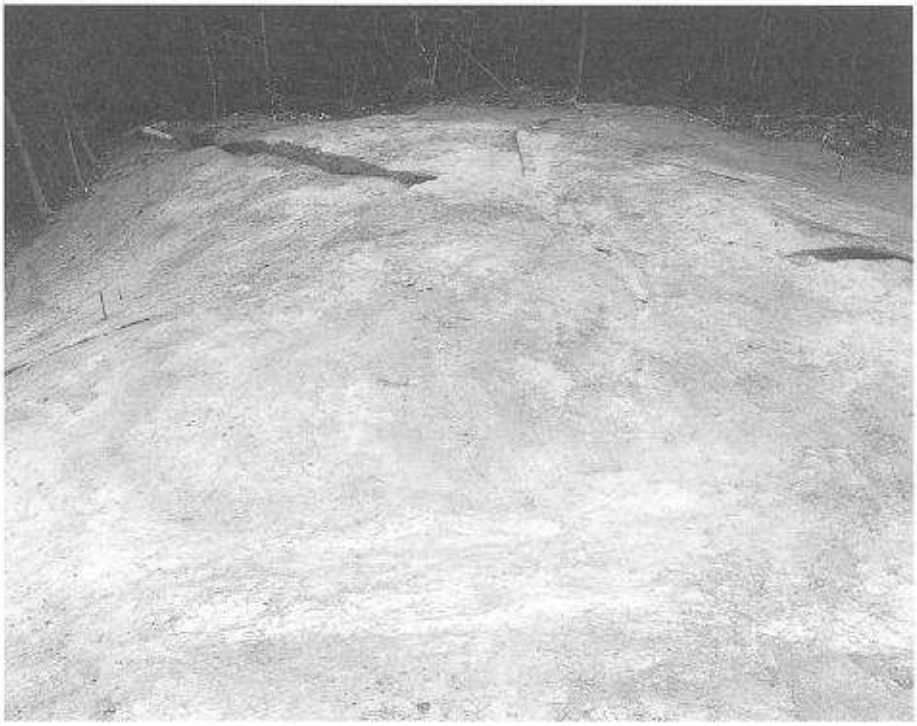


8．平坦面A（西から）

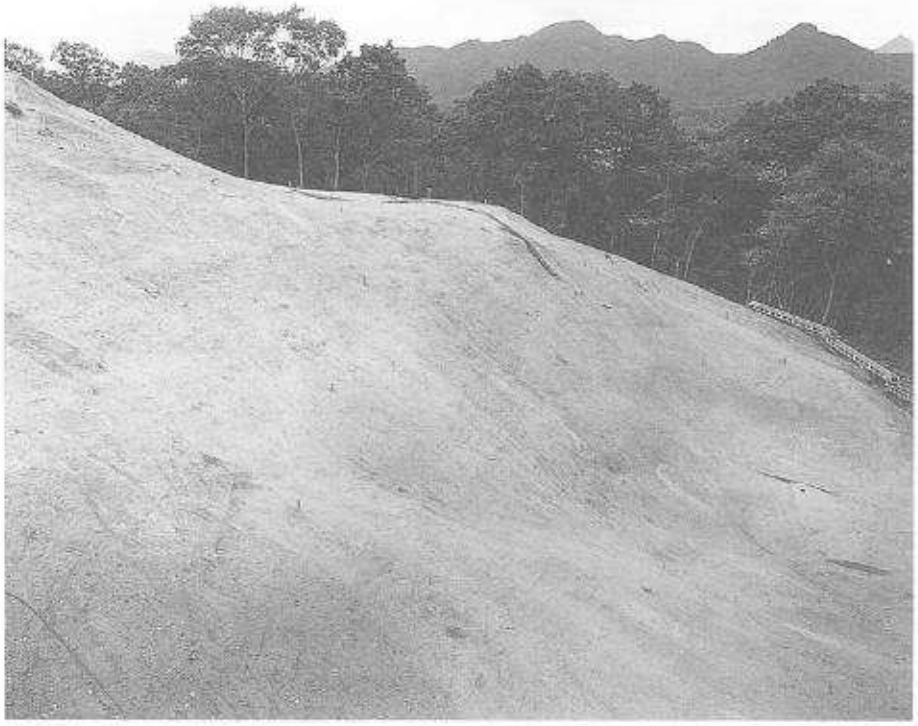
9．平坦面A（西から）



10. 平坦面B調査前（西から）



11. 平坦面B（西から）



12. 平坦面B（南西から）

13. 斜面③（南西から）

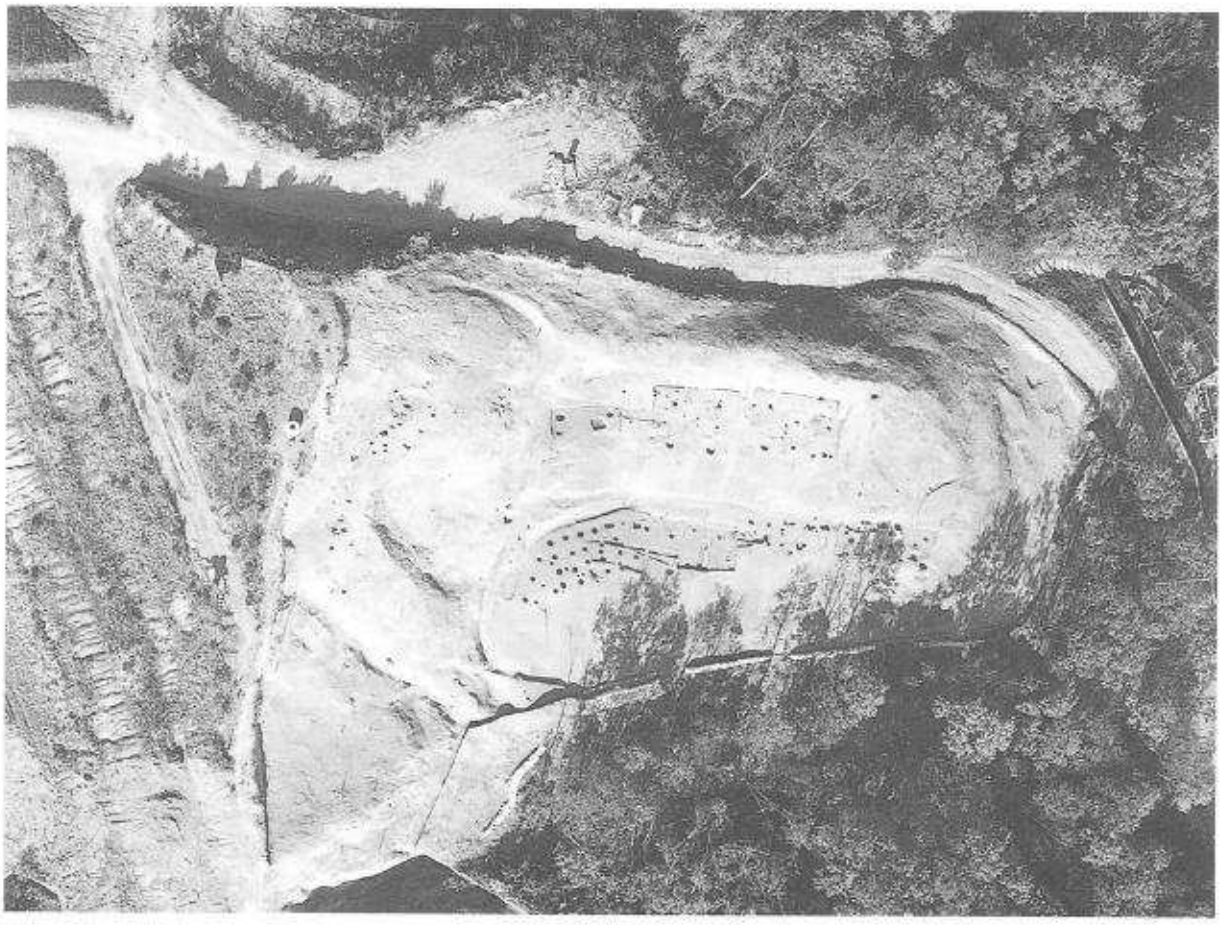
14. 斜面③（北から）

15. 斜面③（北東から）

16. 全景（南東上から）

17. 全景（東上から）

18. 下層全景（南上から）

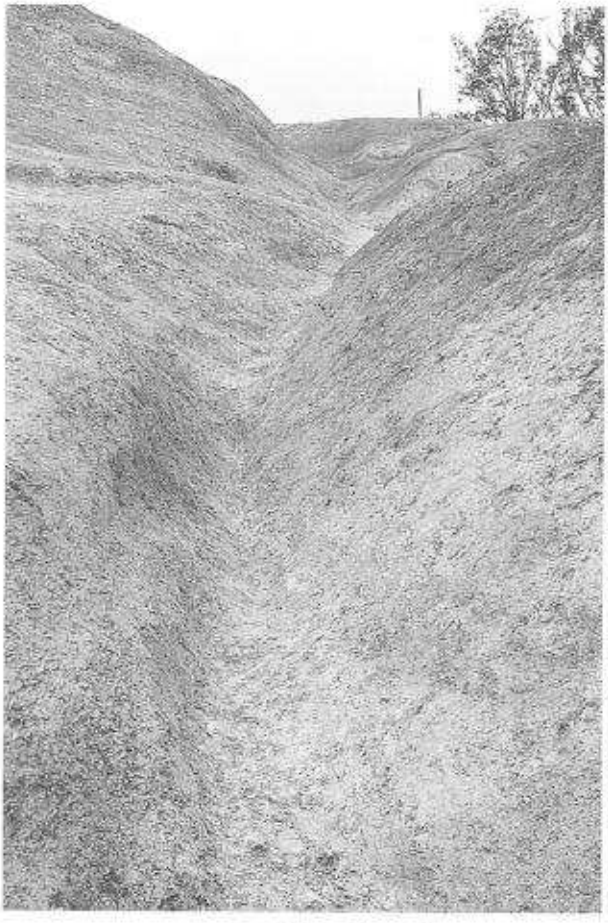


19. 下層全景（上から）

20. SD2（南から）

21. SD2・SX7土層断面（南から）

22．SD２（南から）



23．SD２細部（南から）

24．SD２細部（南から）

25. SD5（東から）

26. SD4（南東から）

27. SD4土層断面
（南東から）

28. 平坦面C（南から）

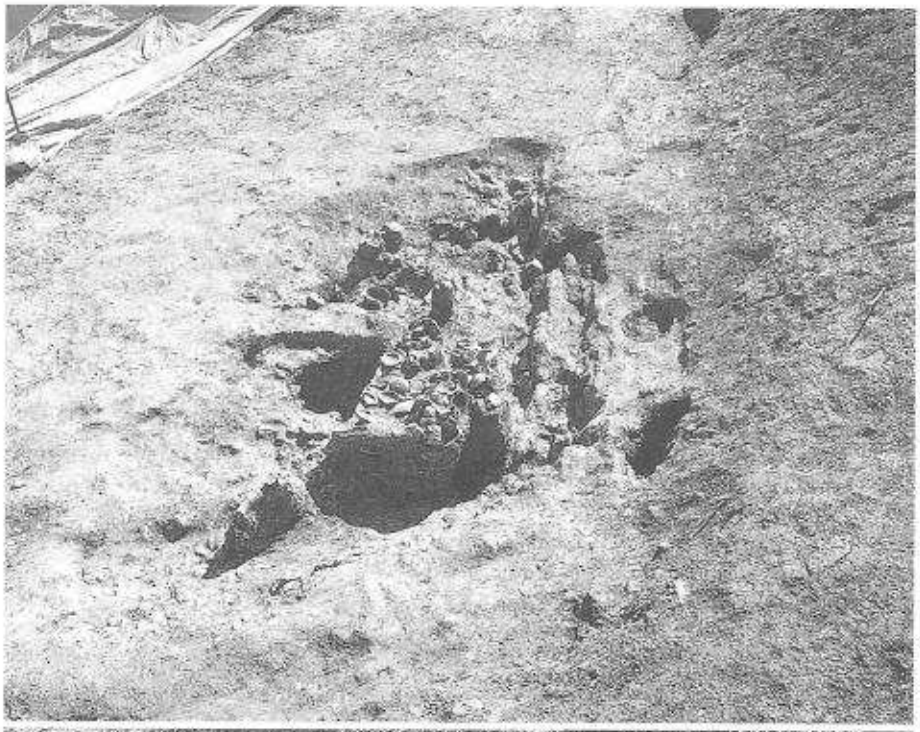
29. 平坦面C・斜面⑤（南東から）

30. SX7（南東から）

31．SK11（南から）

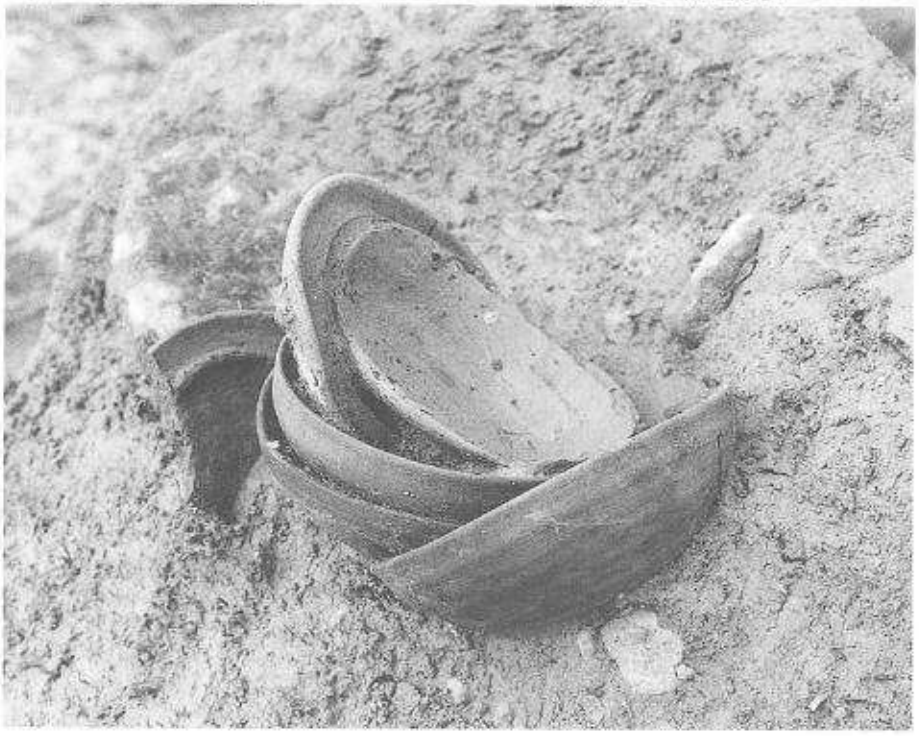
32．SK３（南西から）

33．SK７土層断面（南から）

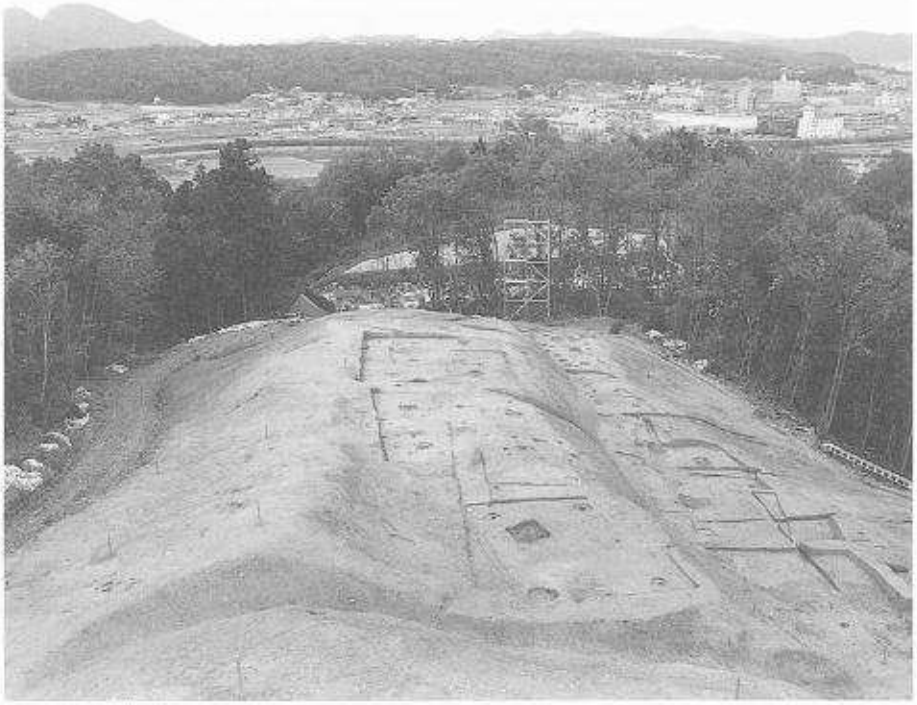


34. SK 2（北から）

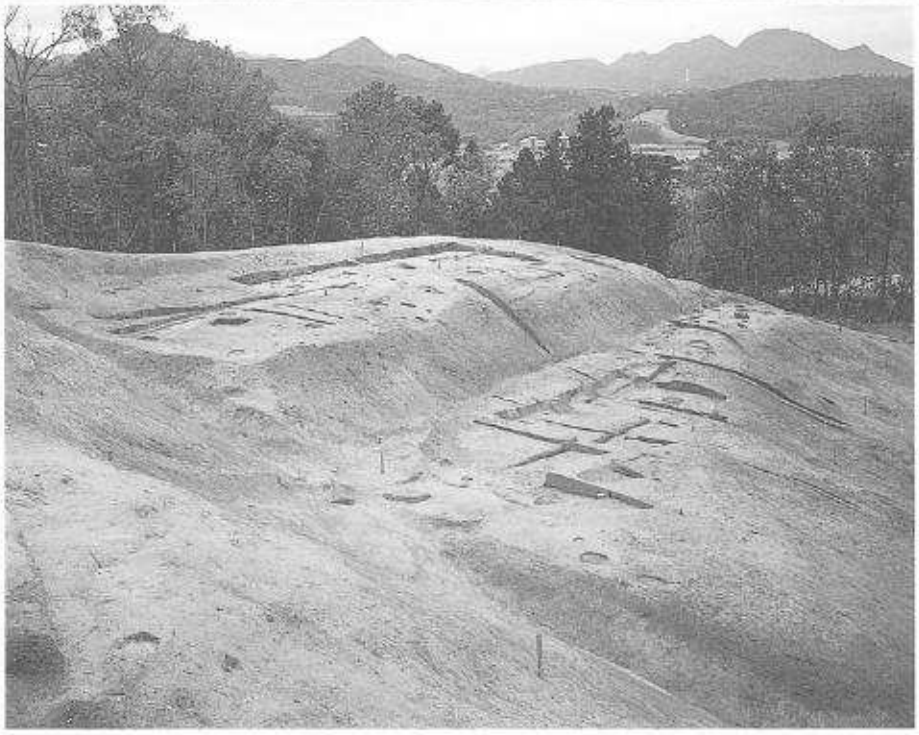
35. SK 2 土器出土状況（東から）



36. SK 2 土器出土状況（北から）

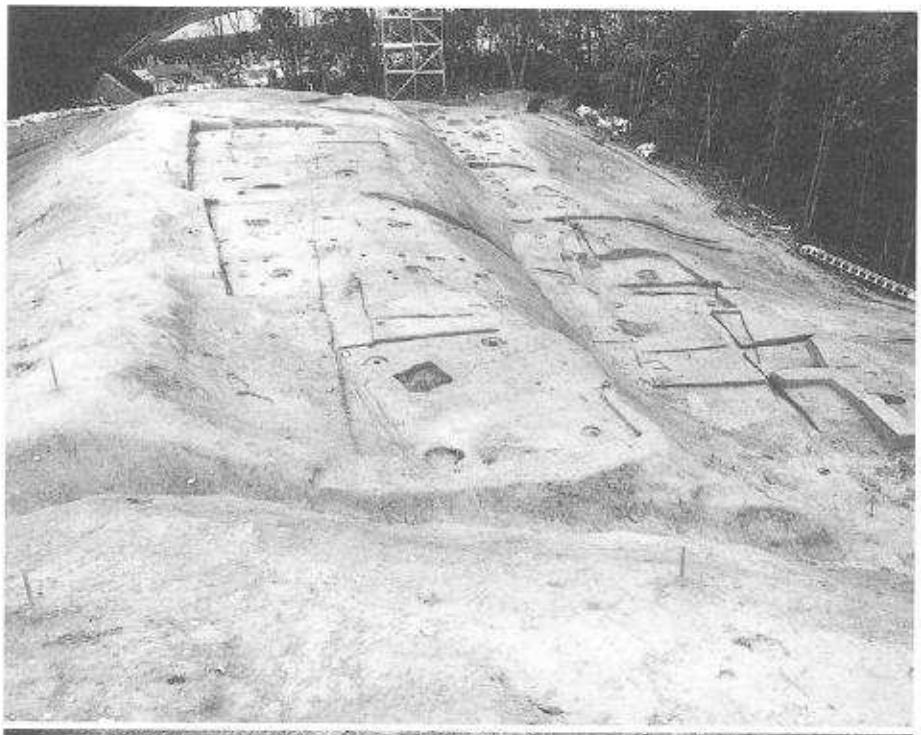


37．平坦面D・E（西から）

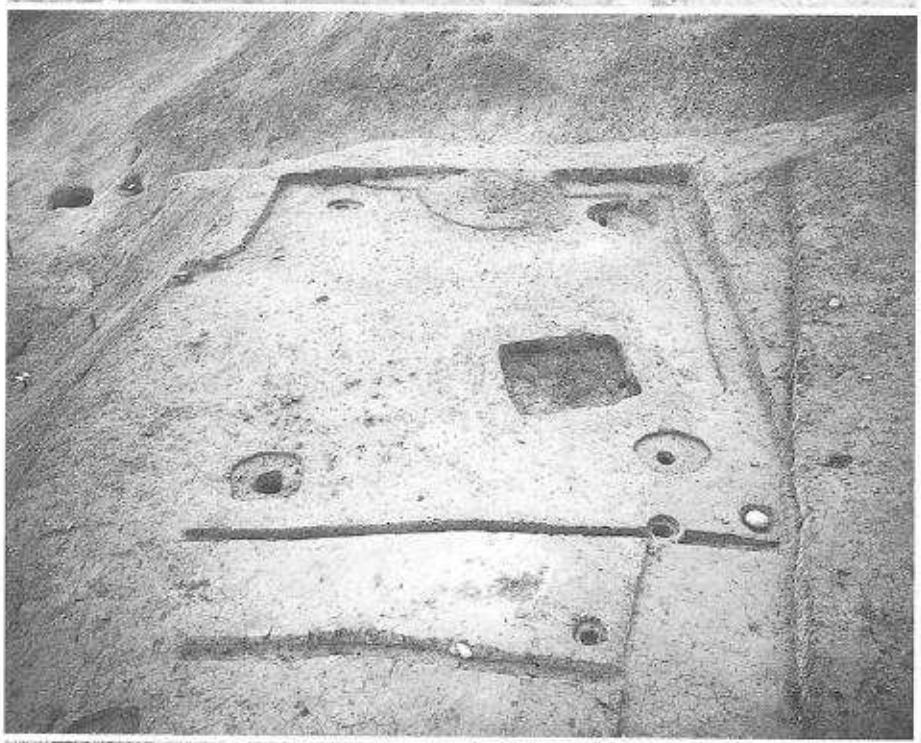


38．平坦面D・E（南西から）

39．平坦面C・D・E（東から）



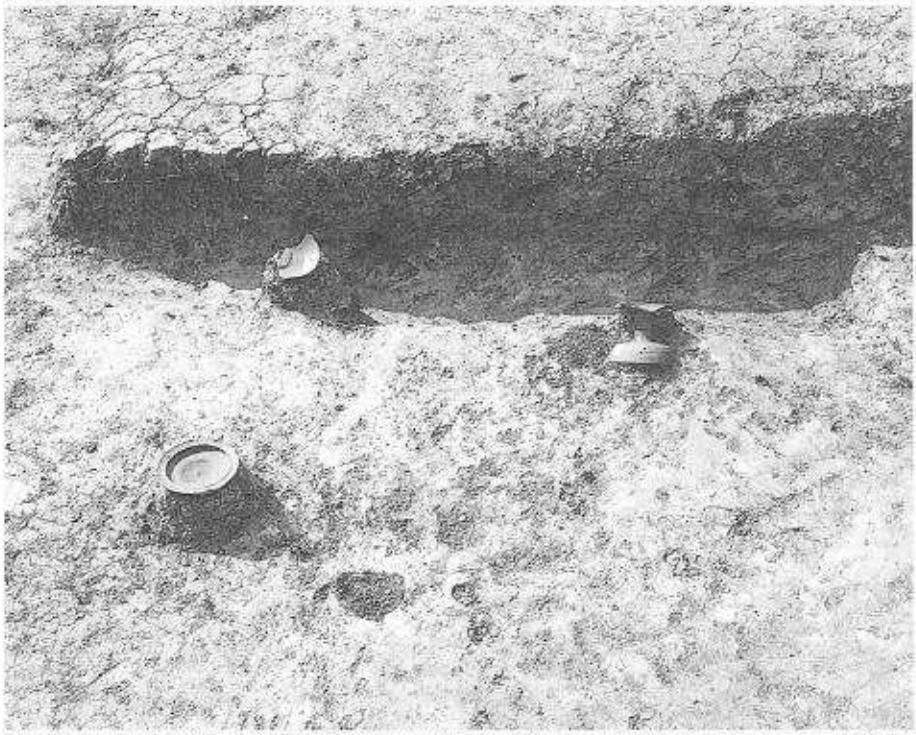
40. 平坦面D（西から）



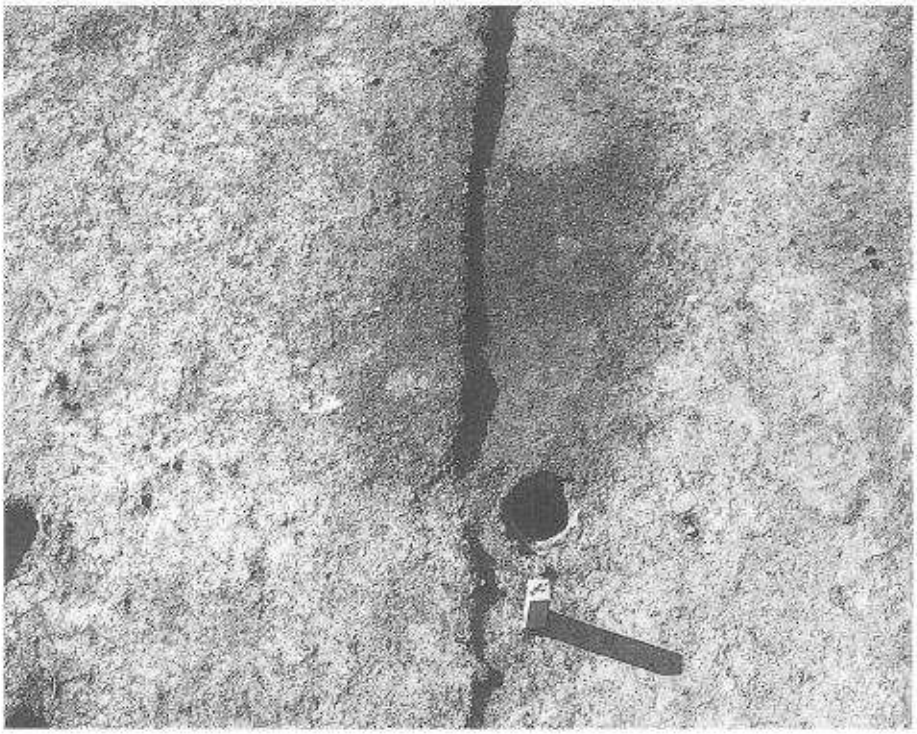
41. SH5（東から）

42. SH5竈（東から）

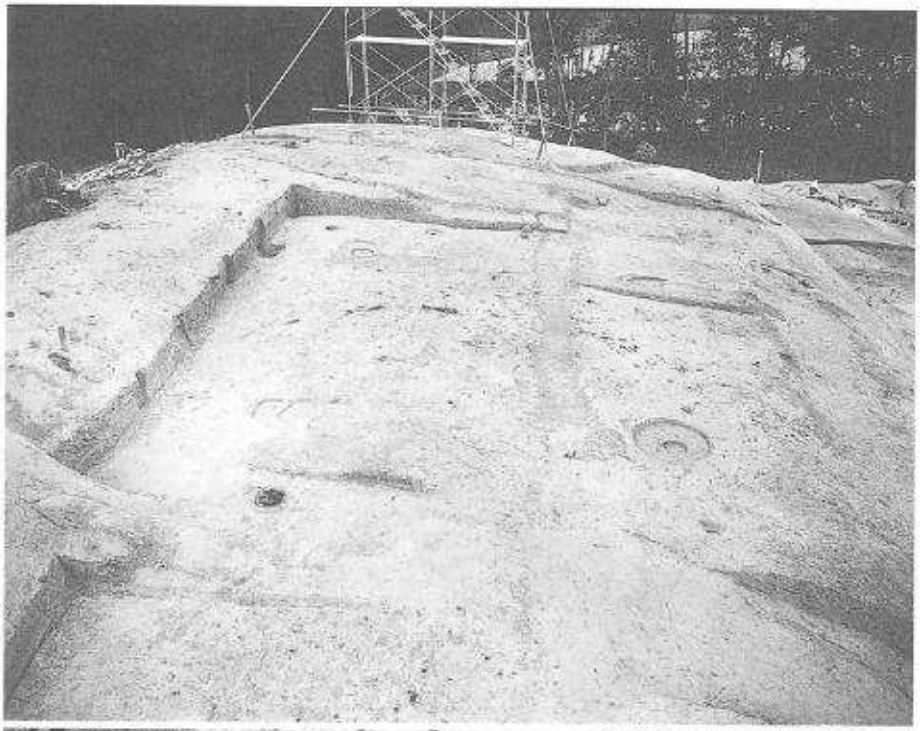
43. SH３（東から）



44. SH３遺物出土状況（東から）

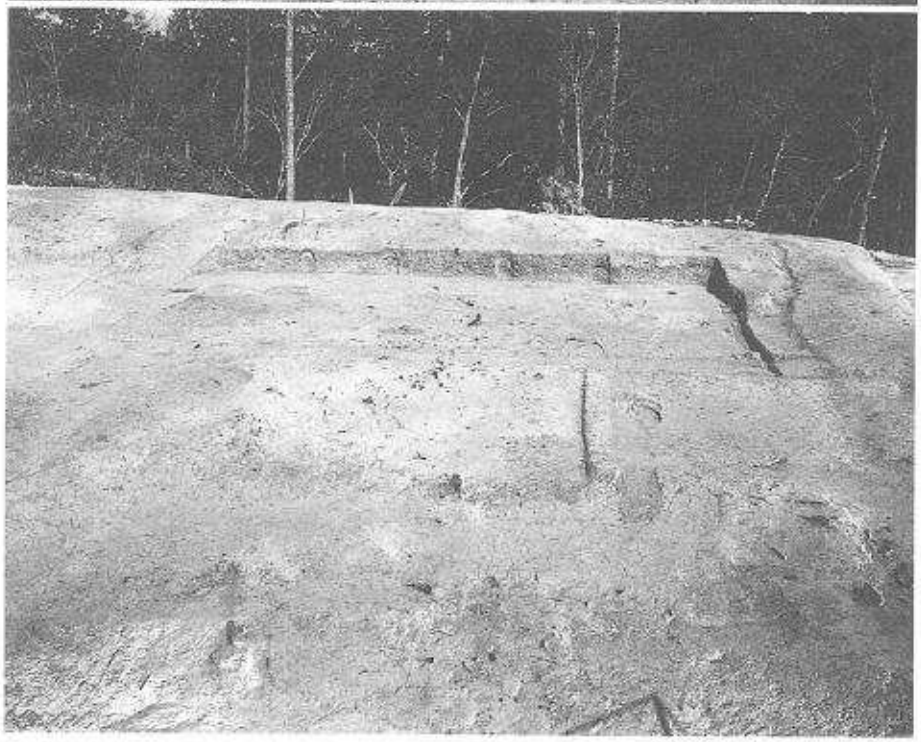


45. SH３竈（東から）



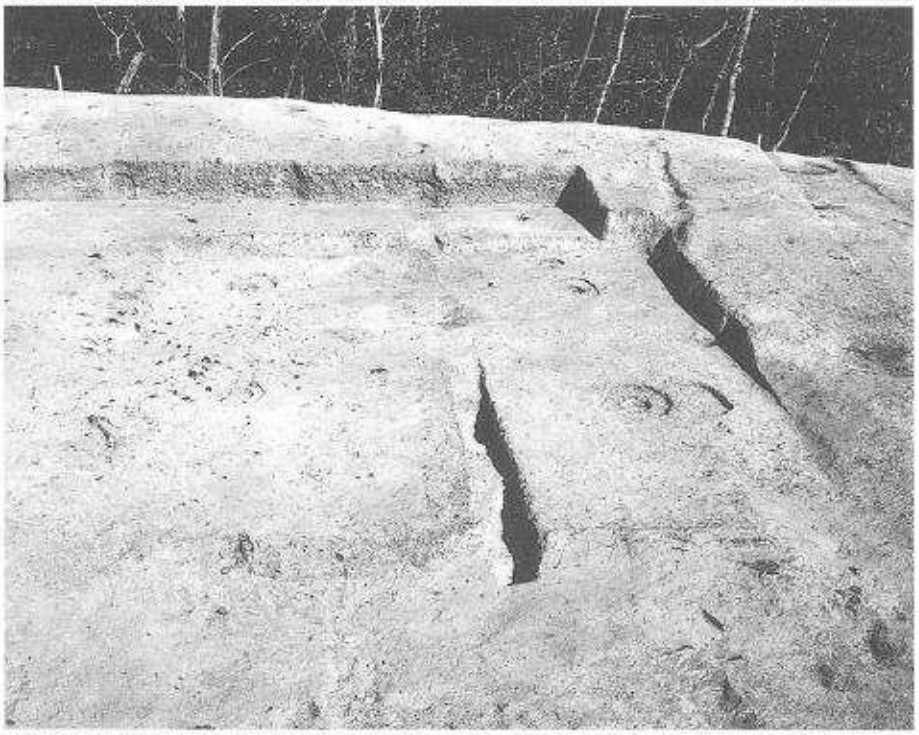
46. SH 4（西から）

47. SH 4（東から）

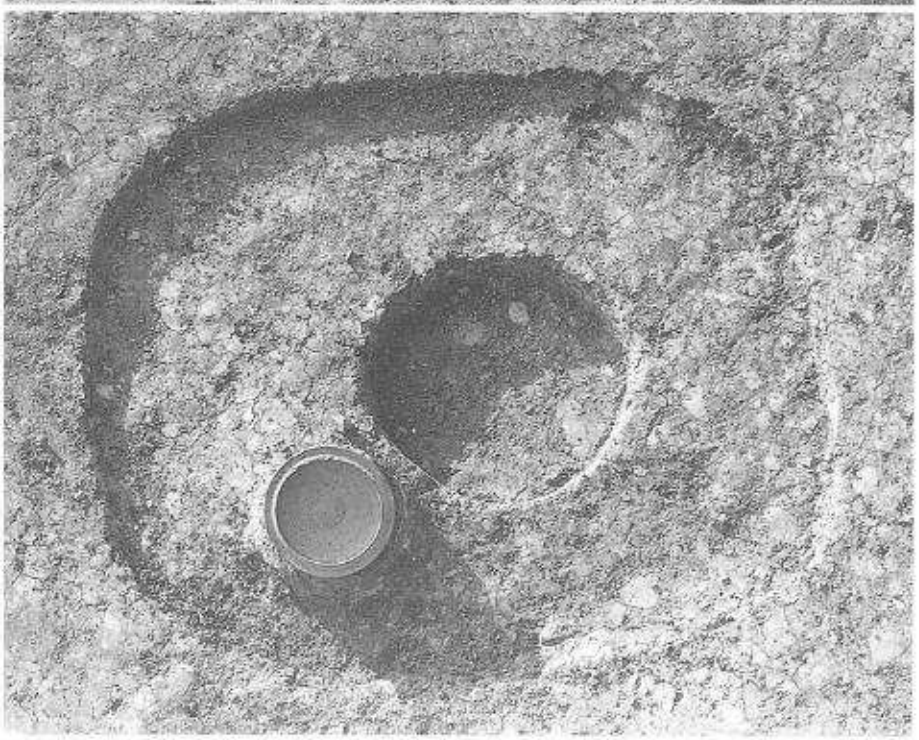


48. SH 4（南から）

49. SH6（東から）

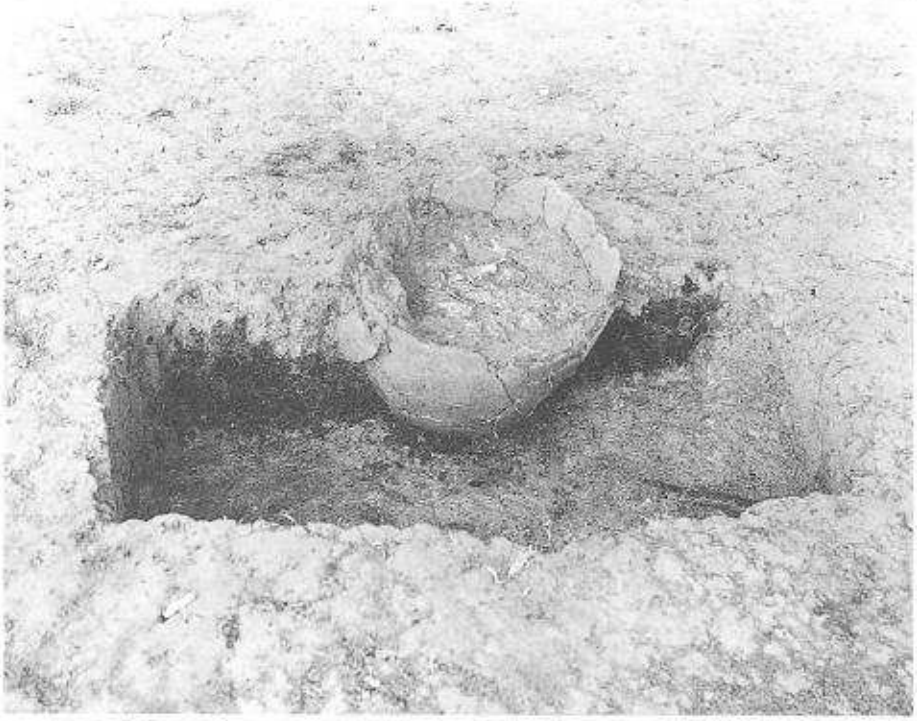


50. SH6（南から）

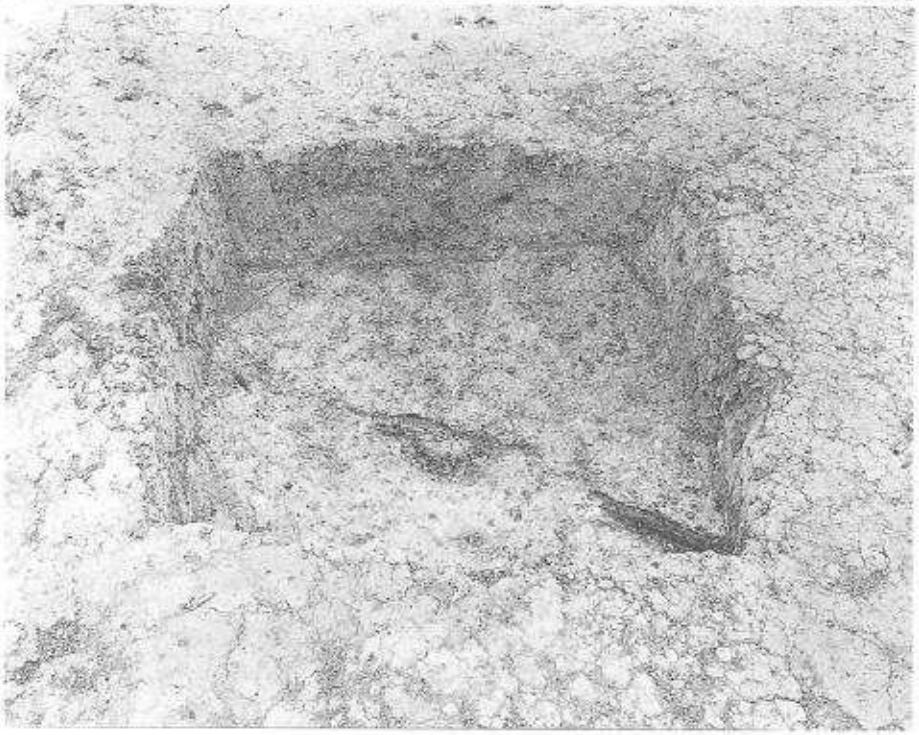


51. SH6北東主柱穴（東から）

52. SX 3 検出状況（南から）

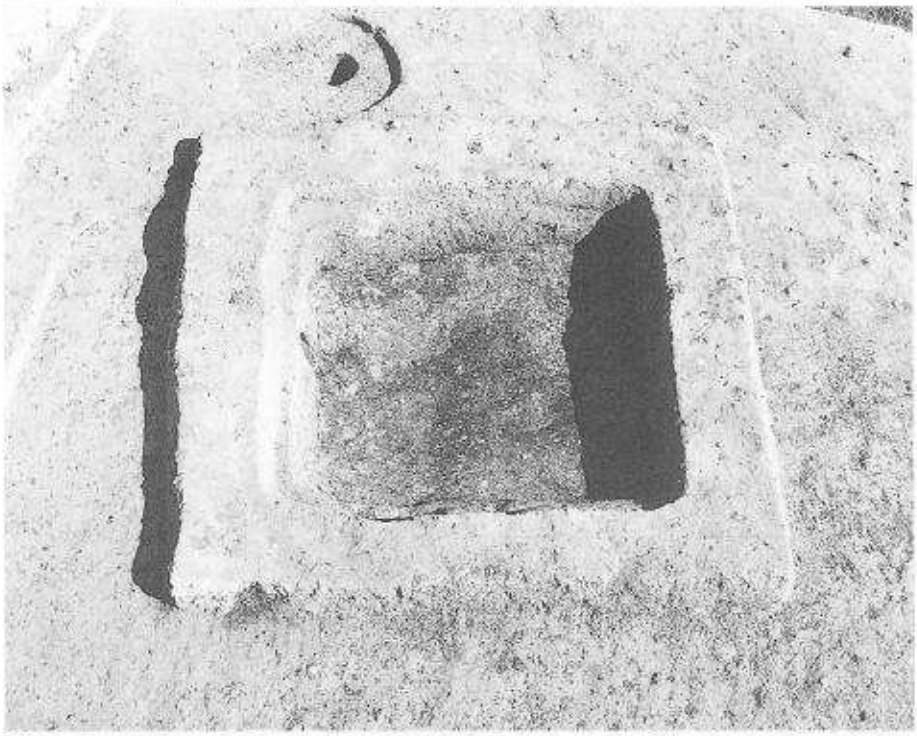


53. SX 3 断面（南から）

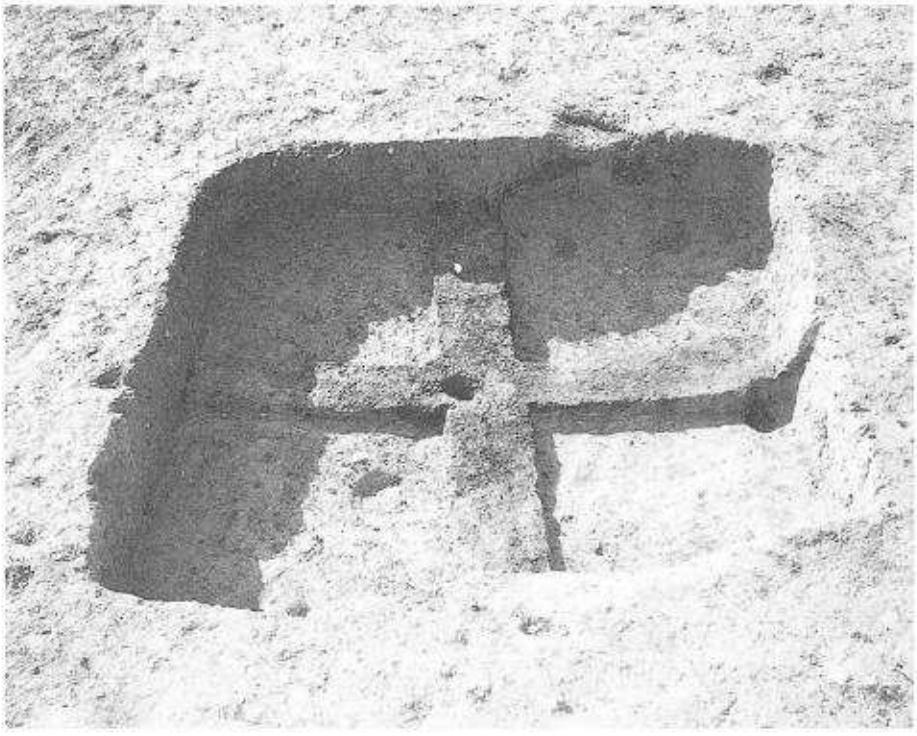


54. SX 3 完掘（南から）

55. SK4 上層（北西から）

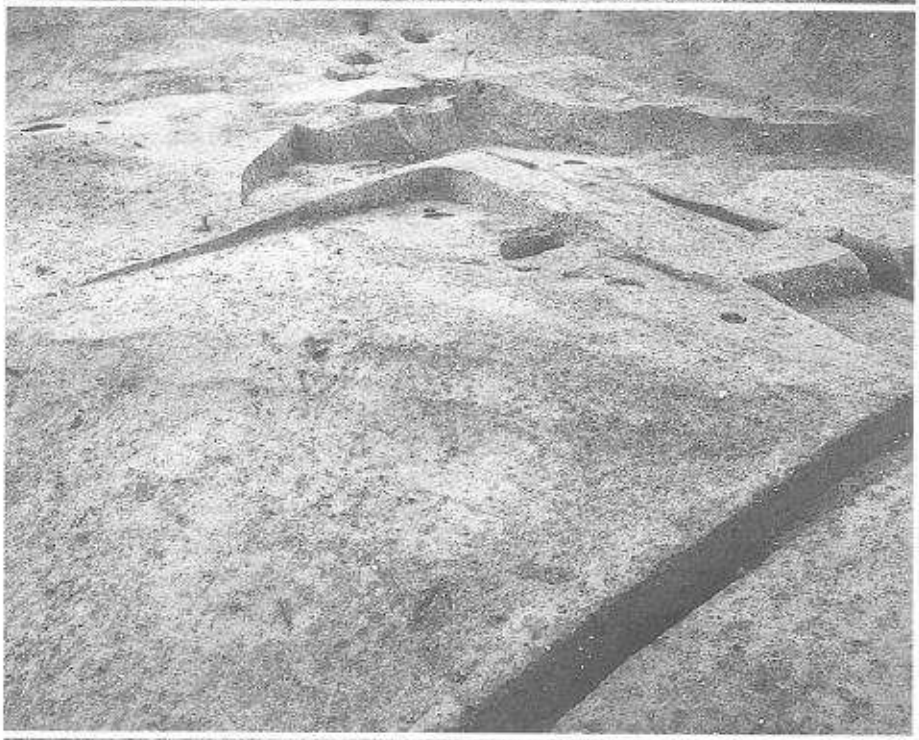


56. SK4 中層（西から）



57. SK4 下層（東から）

58. SH9・10・14（南西から）



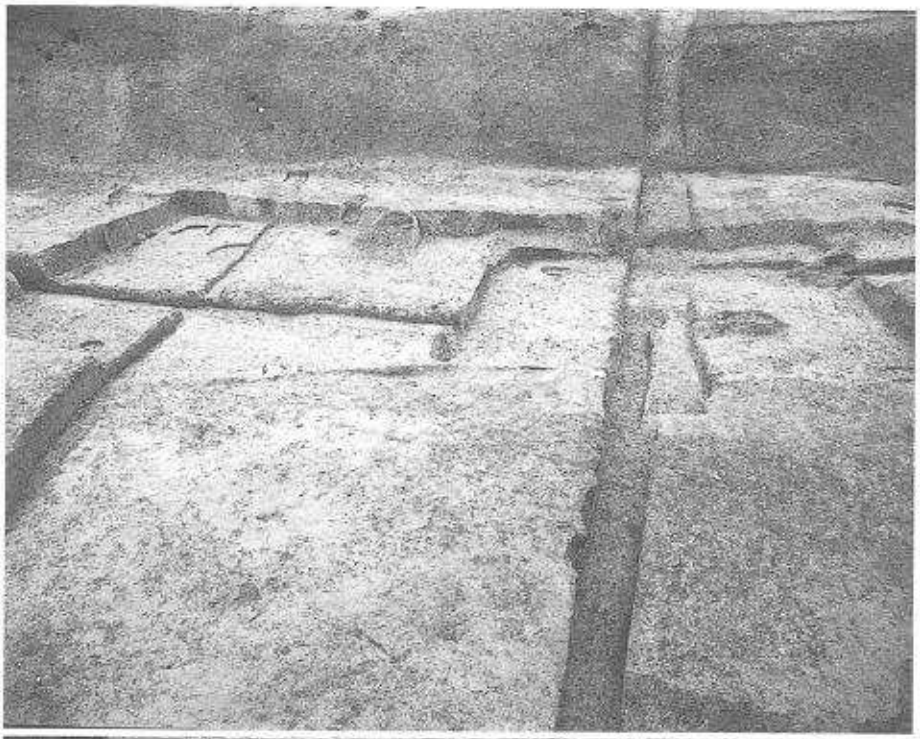
59. SH11（南東から）

60. SH11竈（南から）

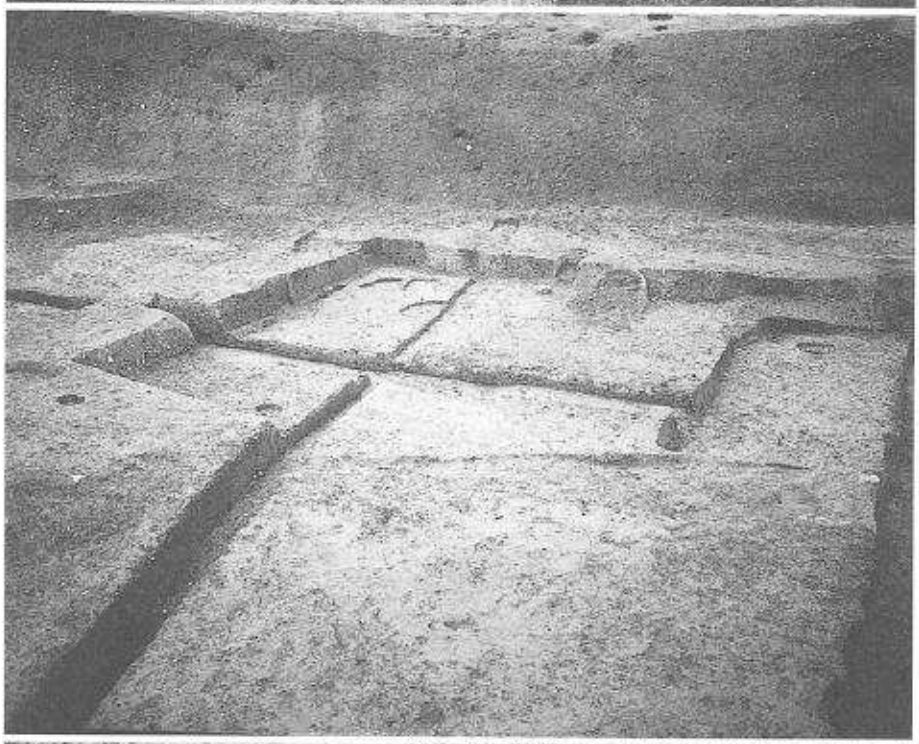
61．SH10・14（南から）

62．SH10竈（南西から）

63．SH10中央焼土（西から）

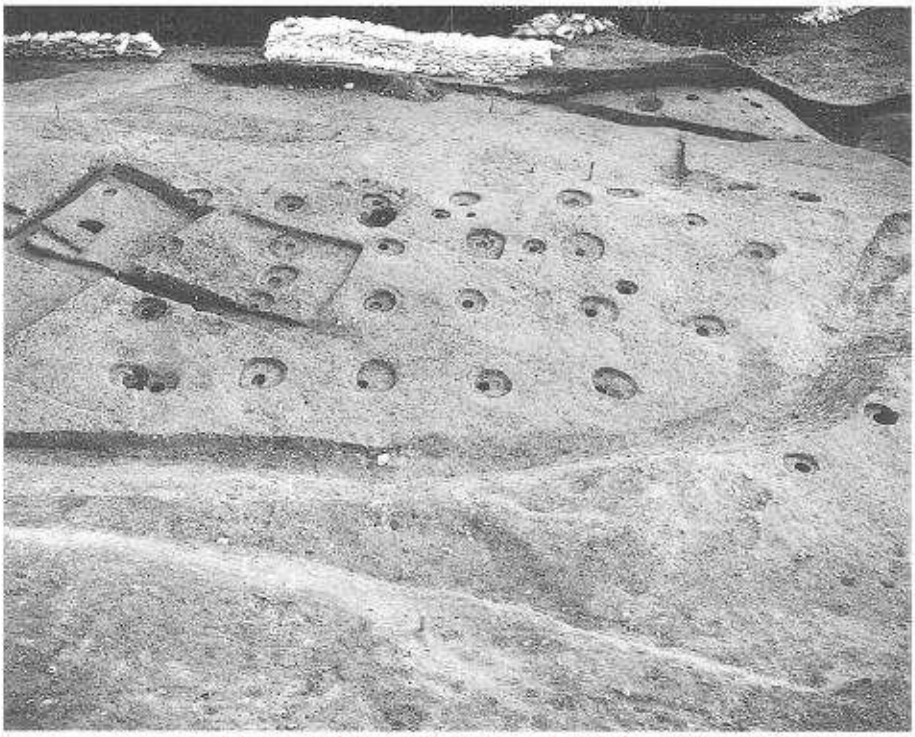


64. SH9・10・14（南から）

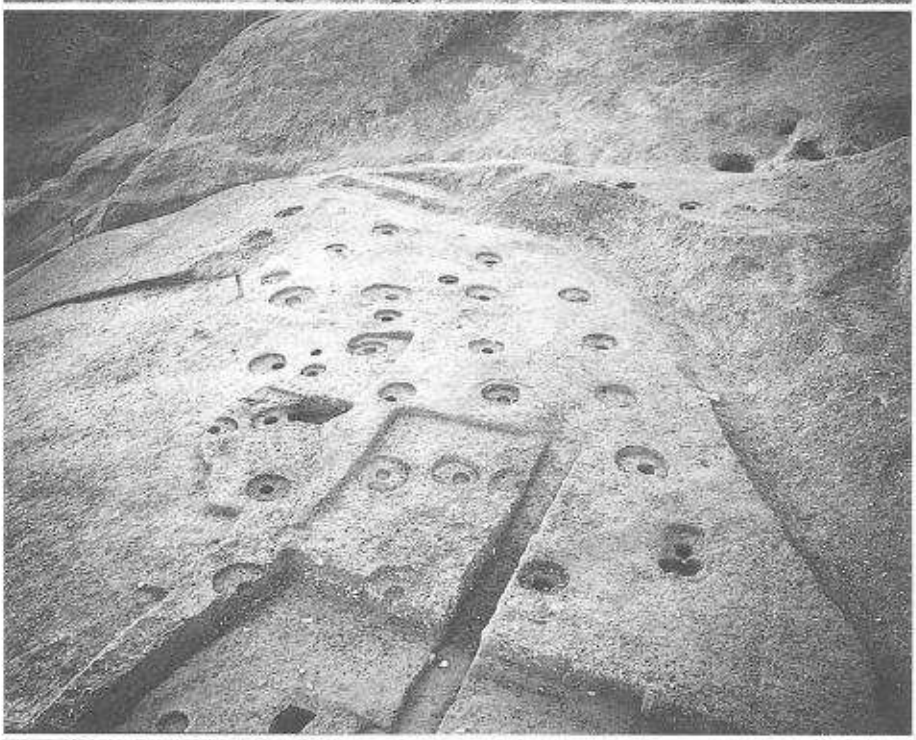


65. SH9（南から）

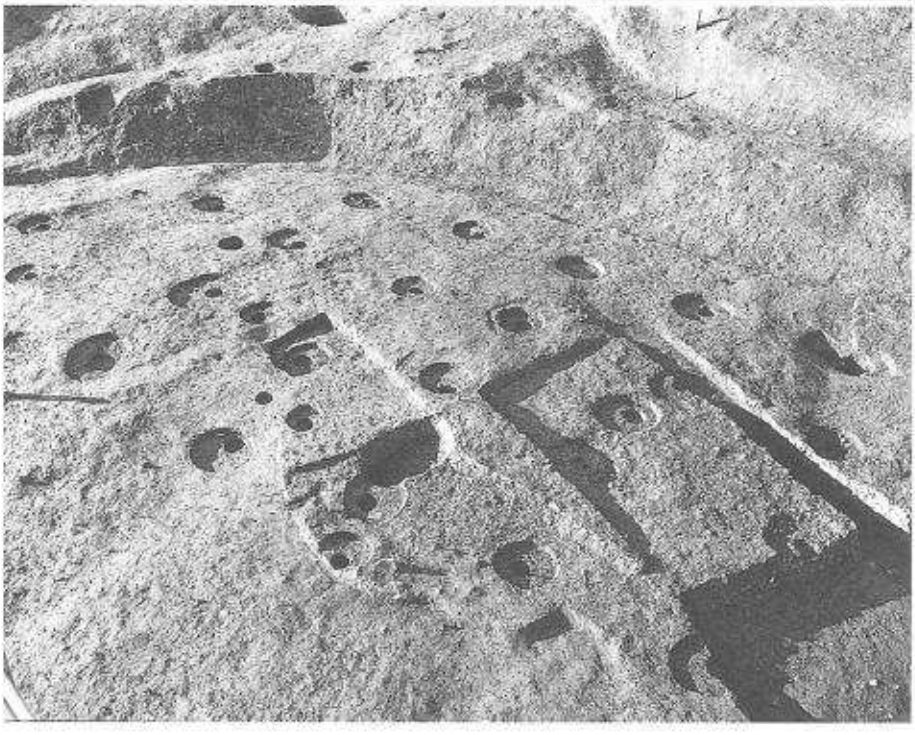
66. SH9竈（南から）



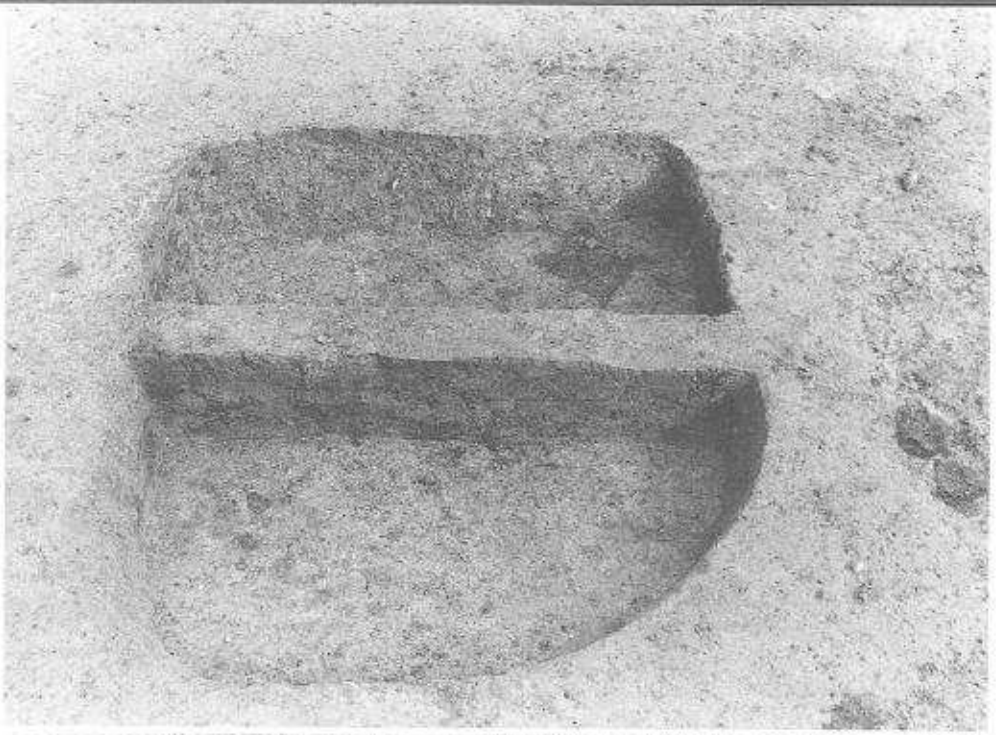
67. SB1・2（北から）



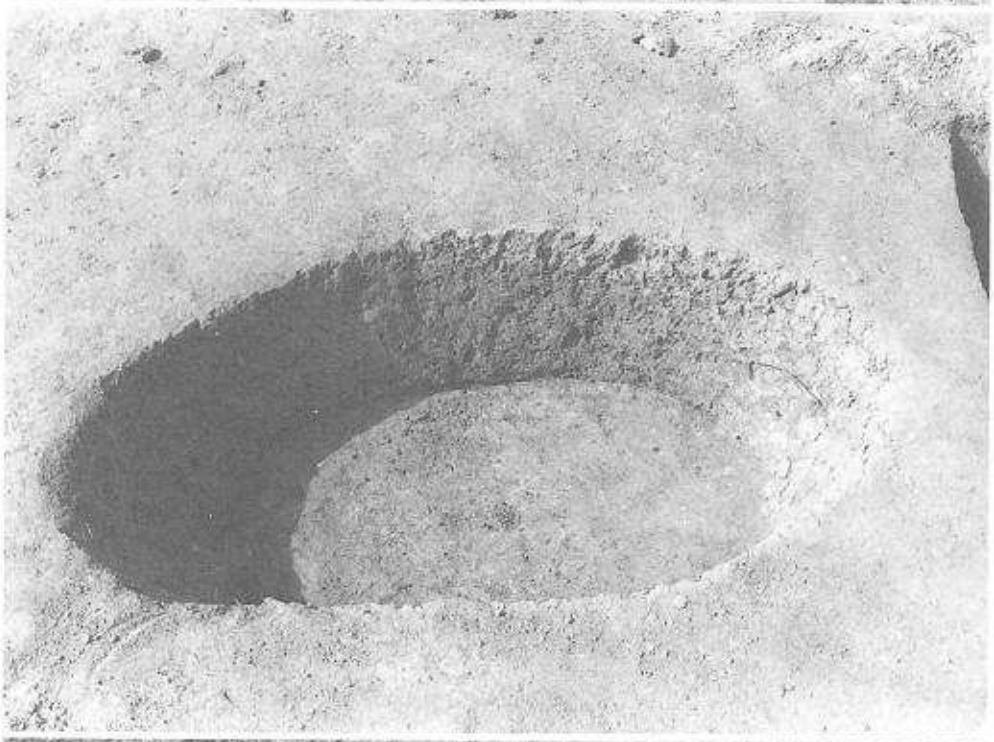
68. SB1・2（東から）



69. SB1（南東から）

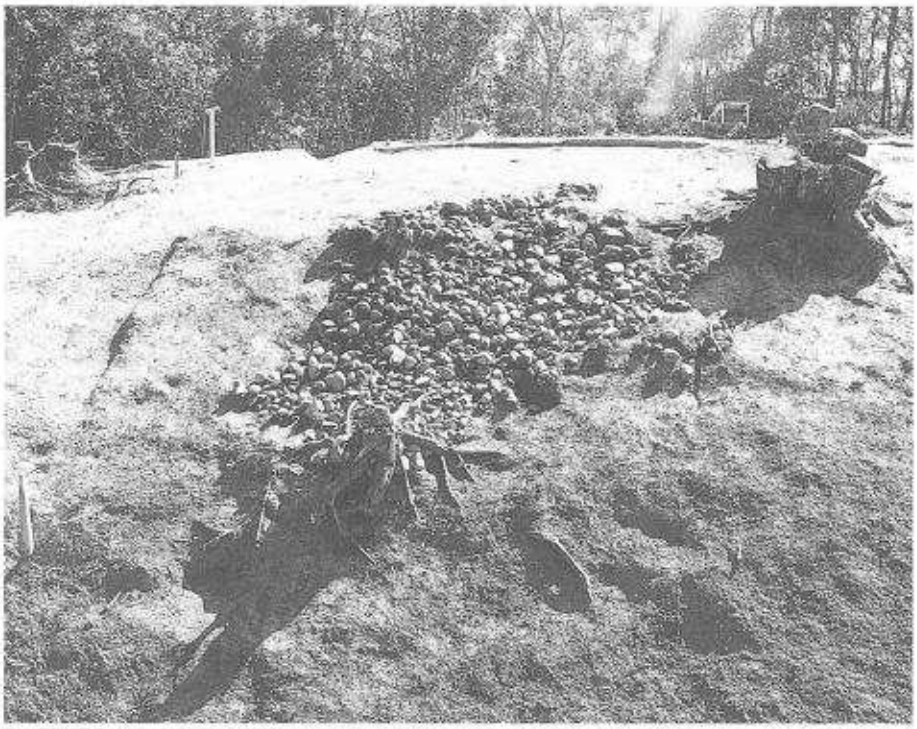


70. SK12（南から）



71. SK13（東から）

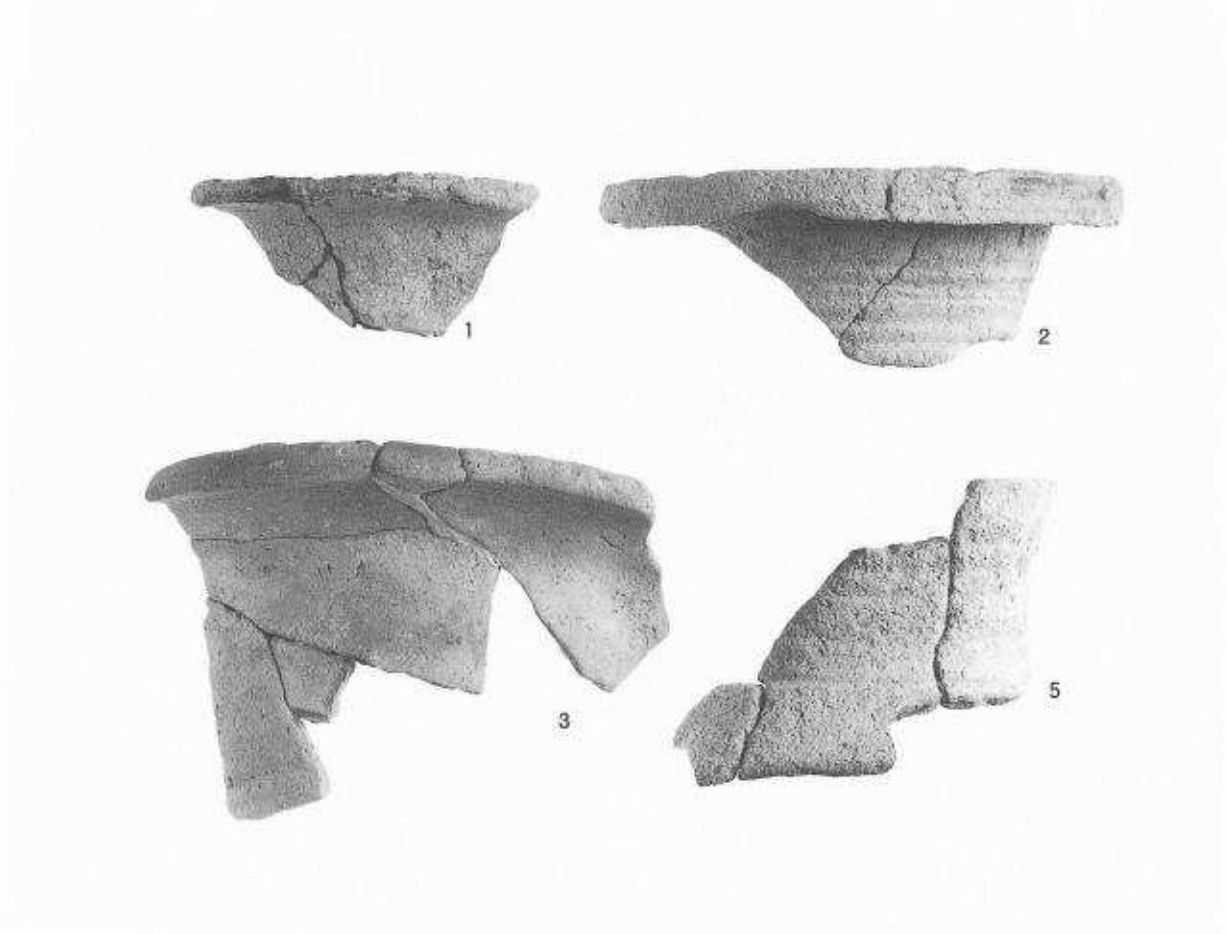
72. SK8断面（東から）

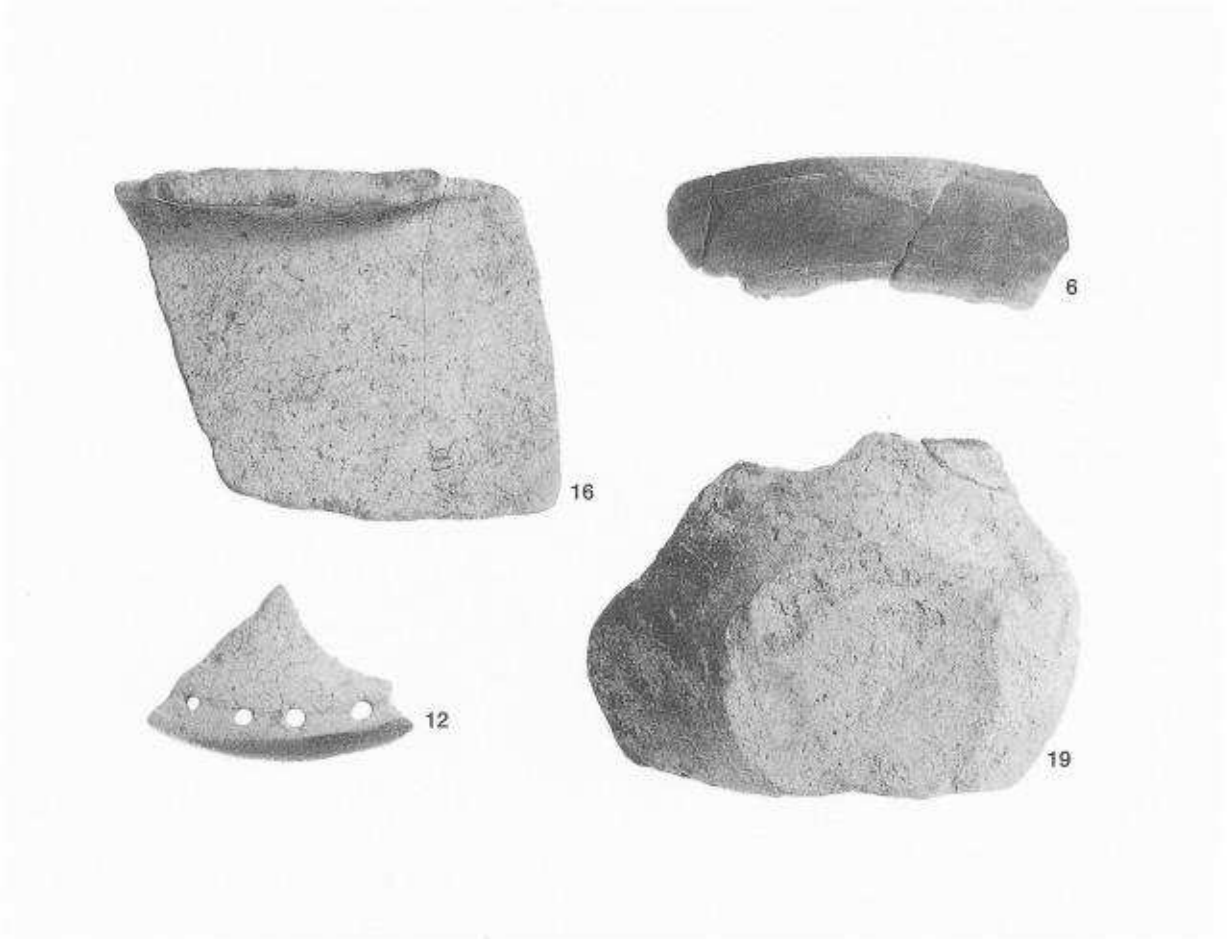


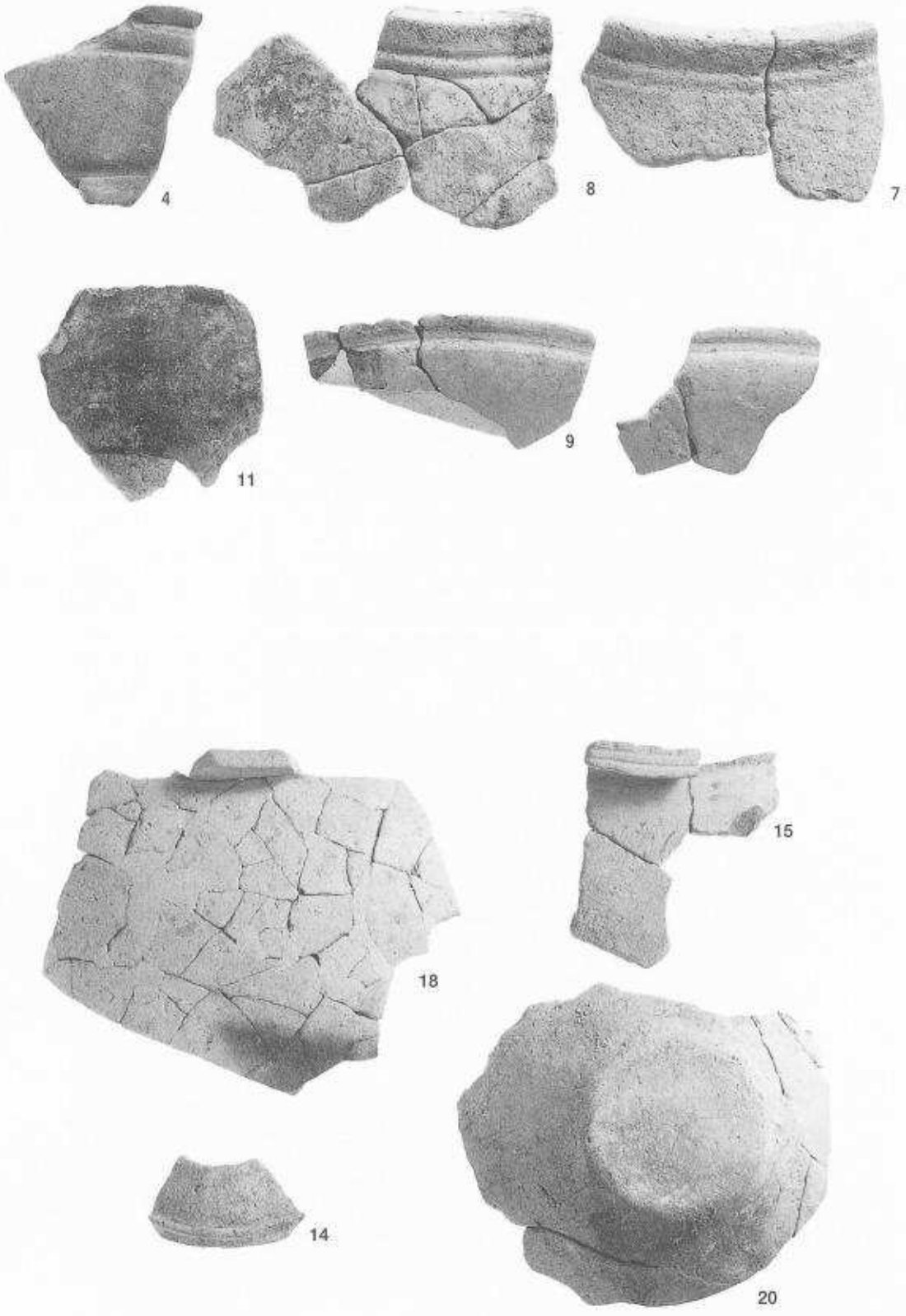
73. SX4（北から）

74. SX4（西から）

75. SX4断面（北から）


1
2
3
5


6
16
12
19

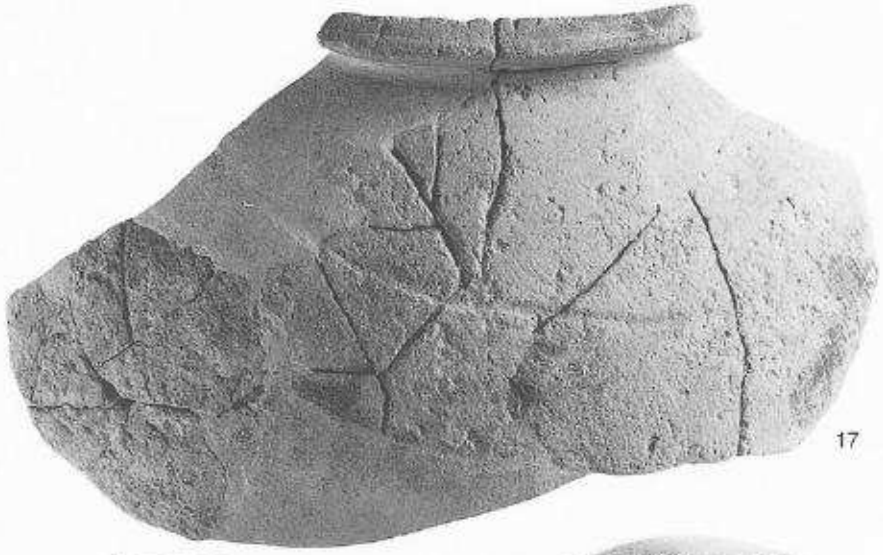

4
8
7
11
9
18
15
14
20

23

29

24

32

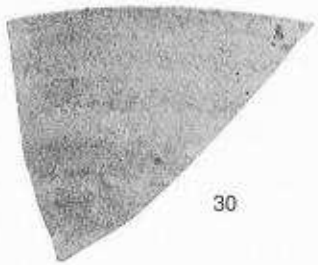


17

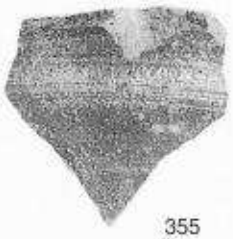
22

21

SD 1・5、斜面②・③



30



355

31

34

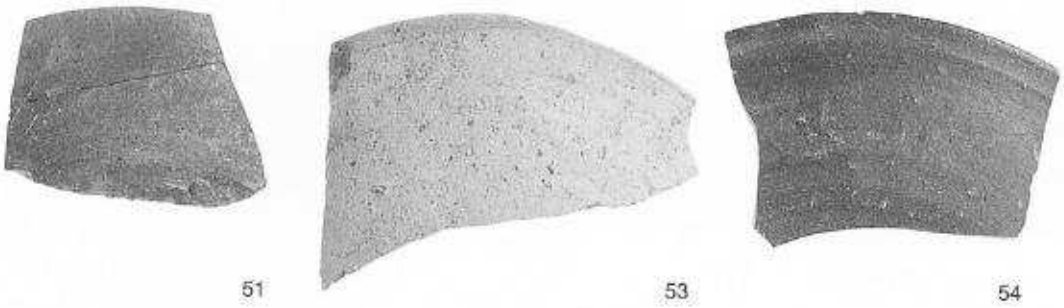
25

27

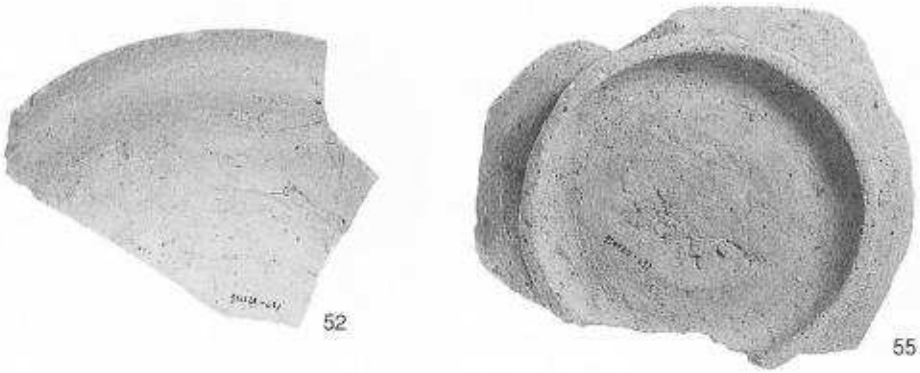
33

28

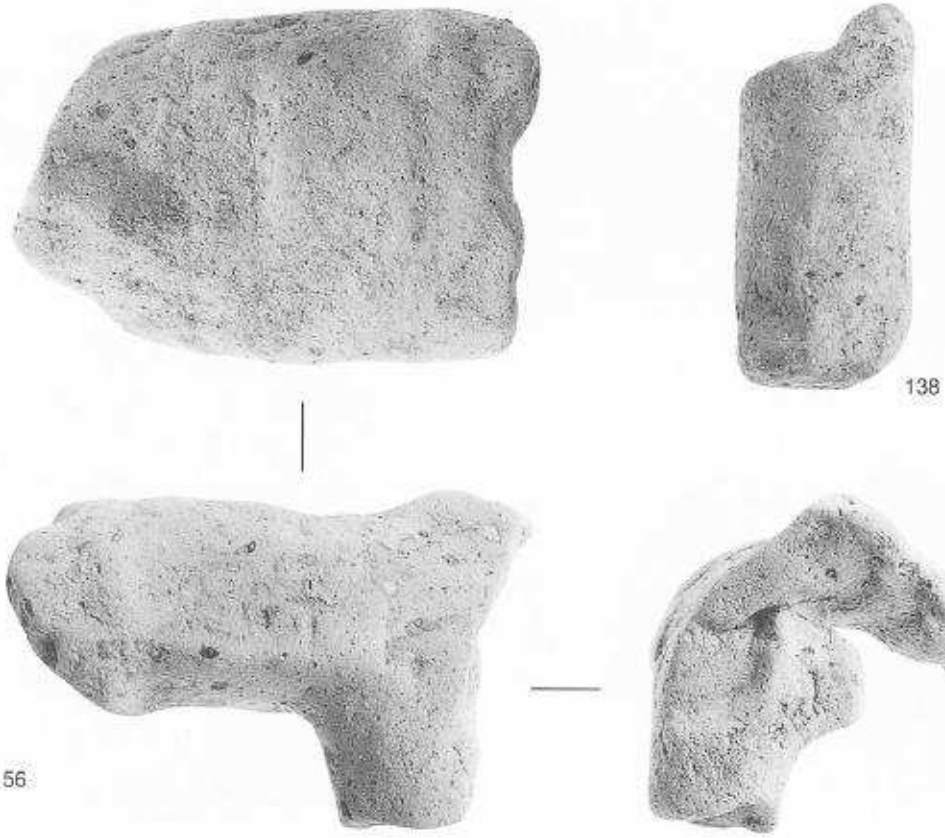
SD 5



51　53　54

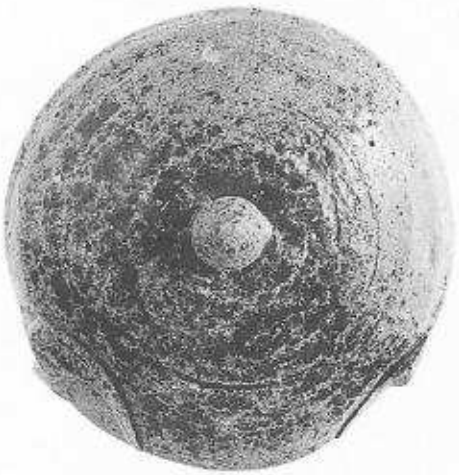


52　55



138　56

SD 4 、斜面⑥

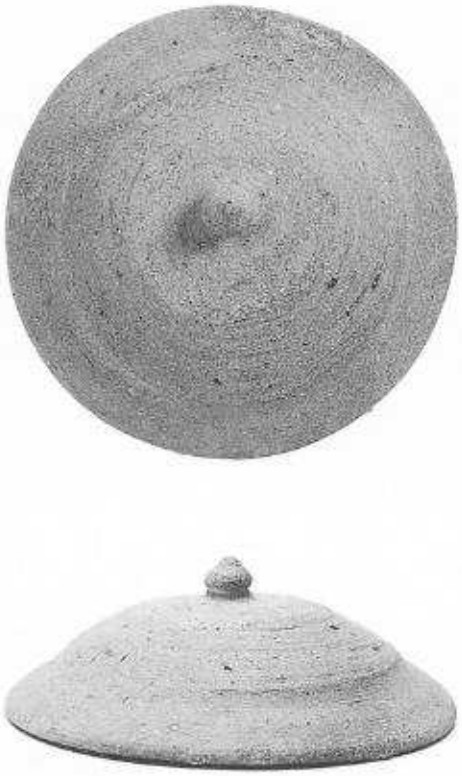


63　　73

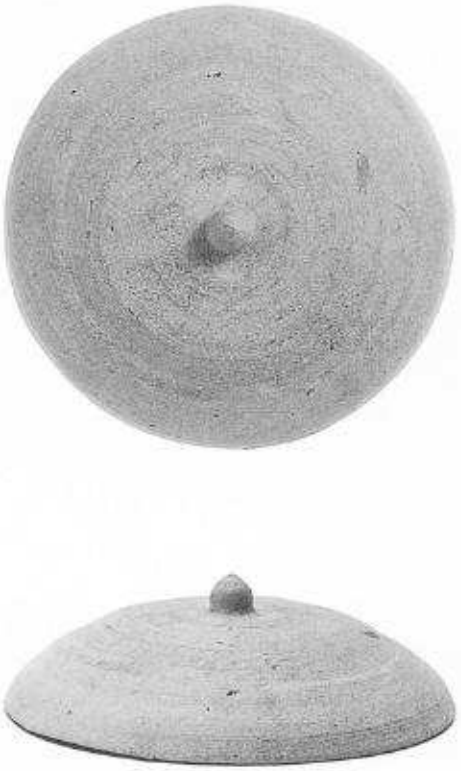
68　　62

SK 2 坏G蓋

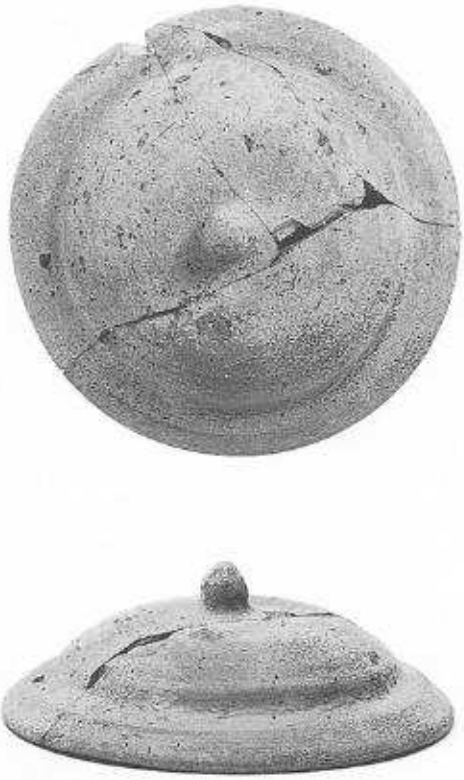
57



66



60



70

SK 2 坏G蓋

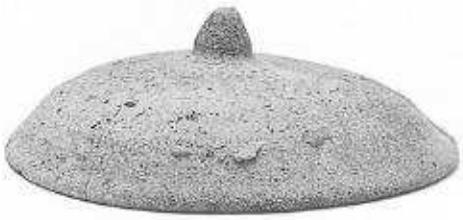
64

58

77

71

61



59

72

65

SK 2 坏G蓋

57　58

62　74　59

60　61　67　68

75　76　63　69

64　65　71　72

77　66　73　70

SK 2 坏G蓋内面

80

110

81

108

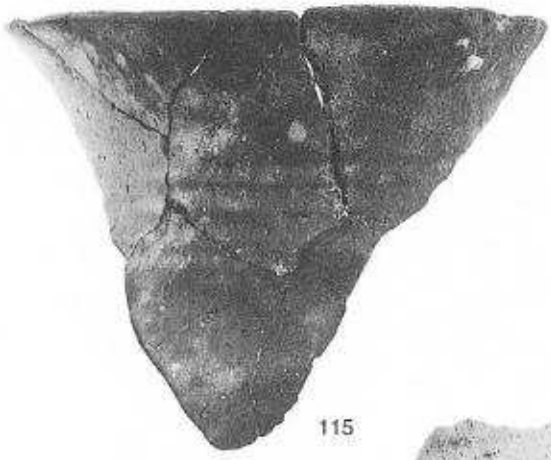
112

109

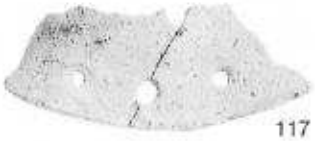
111

113

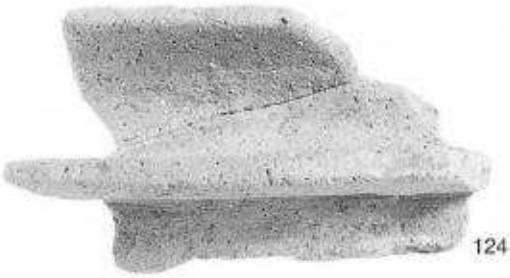
SK 2


115

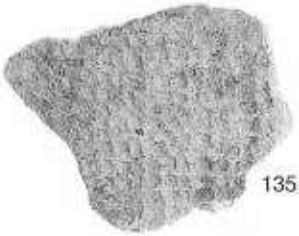
118

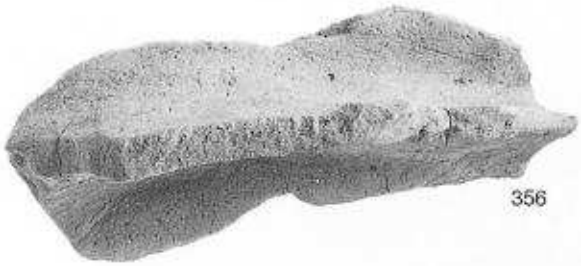

117

119


124

123

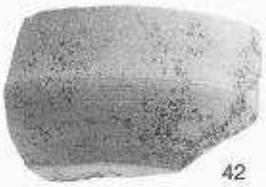

135


356

平坦面C、斜面④

38

48



42

45

47

44

43

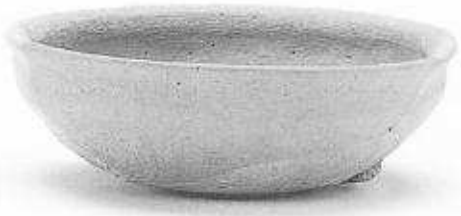
49

357

136

207

SD 2 、平坦面C



130

125

128

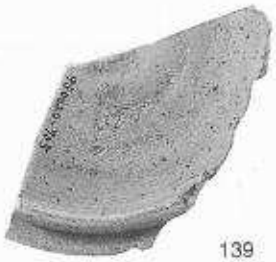
131

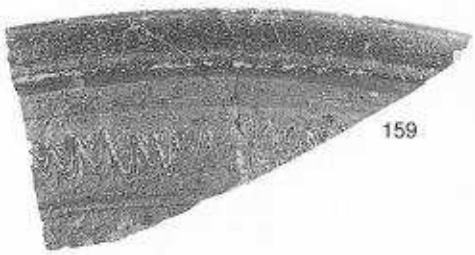
127

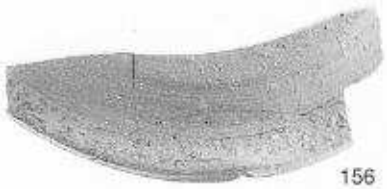
133

平坦面C

140

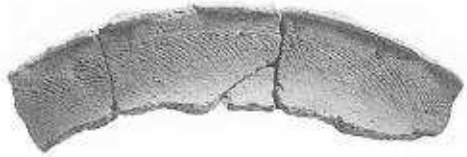

139


159


156

157

154



160

160

SH 5 ・ 6 、 SK 4 、 SX 3

145

147

141

151

150

180

148

184

190

187

SH 4 ・ 3 、平坦面D

196

172

199

173

182

202

200

198

197

189

194

186

平坦面D、斜面⑦

191

204

178

208

206

平坦面D、斜面⑦

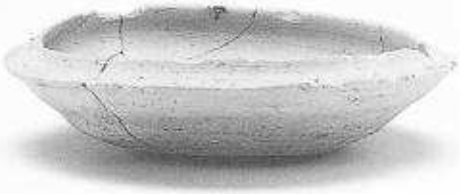
216

217

215

209

210



211

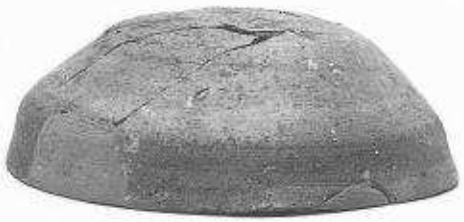
212

213

218

214

235

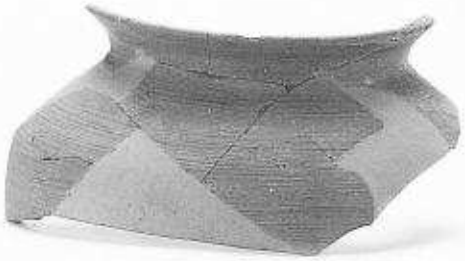


220

226

228

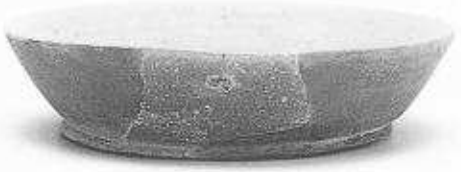
227



224

165

223



166

167

163

161

SH 9・10・12、SK 5

244

273

304

300

338

301

318

319

279

306

245

277

平坦面E、斜面⑧

286

308

236

341

288

309

321

311

238

289

SX 7 、平坦面D・E、斜面⑧

345

322

346

255

258

259

253

260

276

316

平坦面E、斜面⑧

335

334

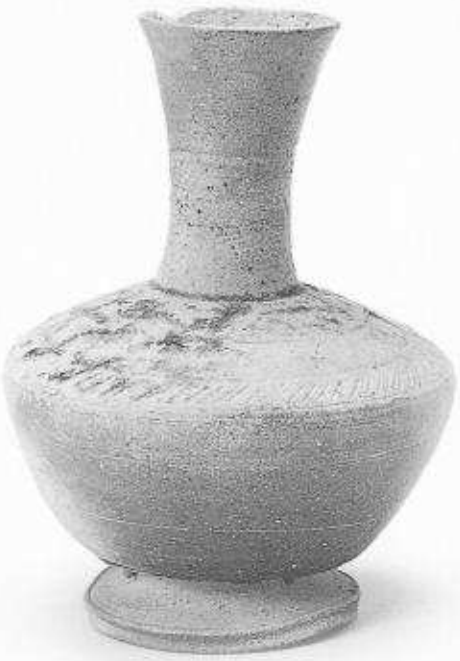
267

328

354

326

平坦面E、斜面⑧



261

327

270

269

平坦面E、斜面⑦・⑧

292

263

295

329

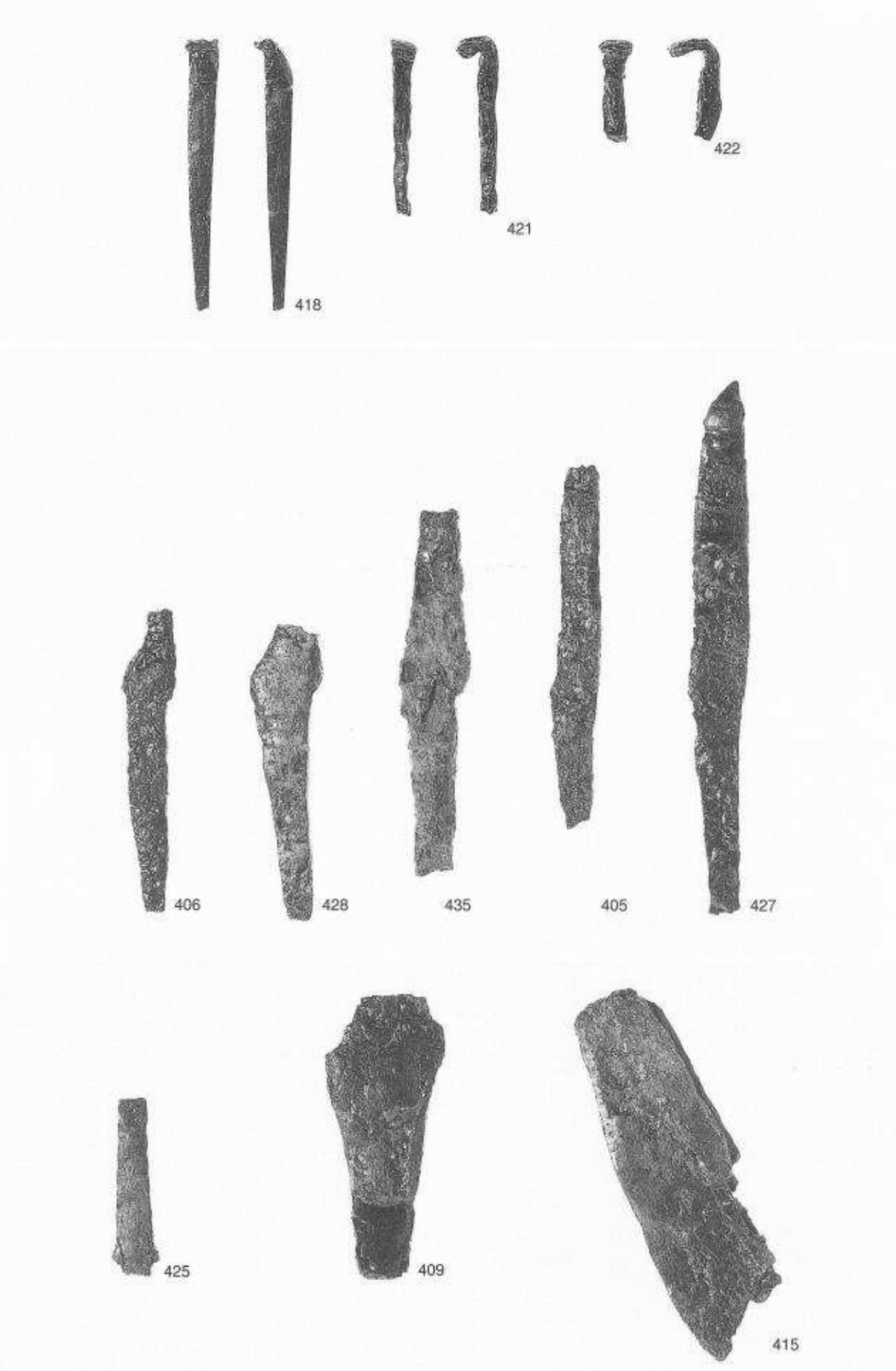
294

246

350

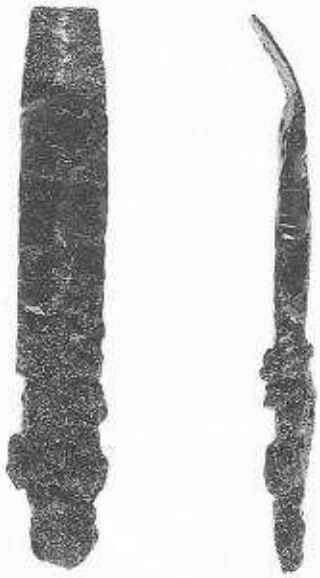
325

平坦面E、斜面⑦・⑧


418
421
422
406
428
435
405
427
425
409
415

424

434



412

431

433

436

438

441

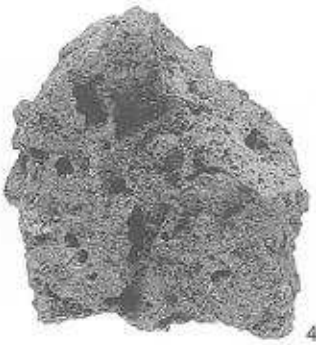
439

440

442

443

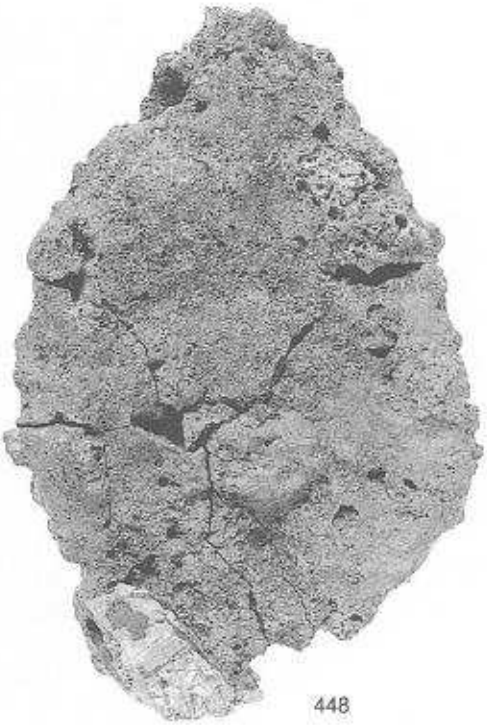
444

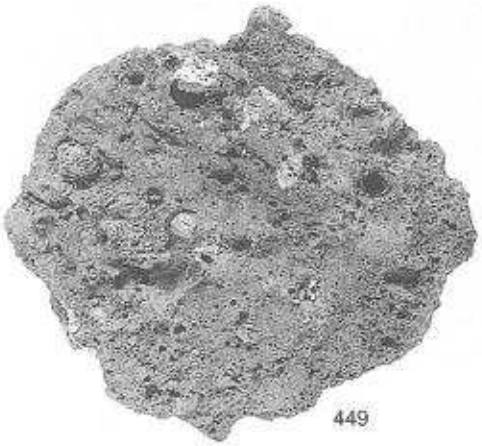

445

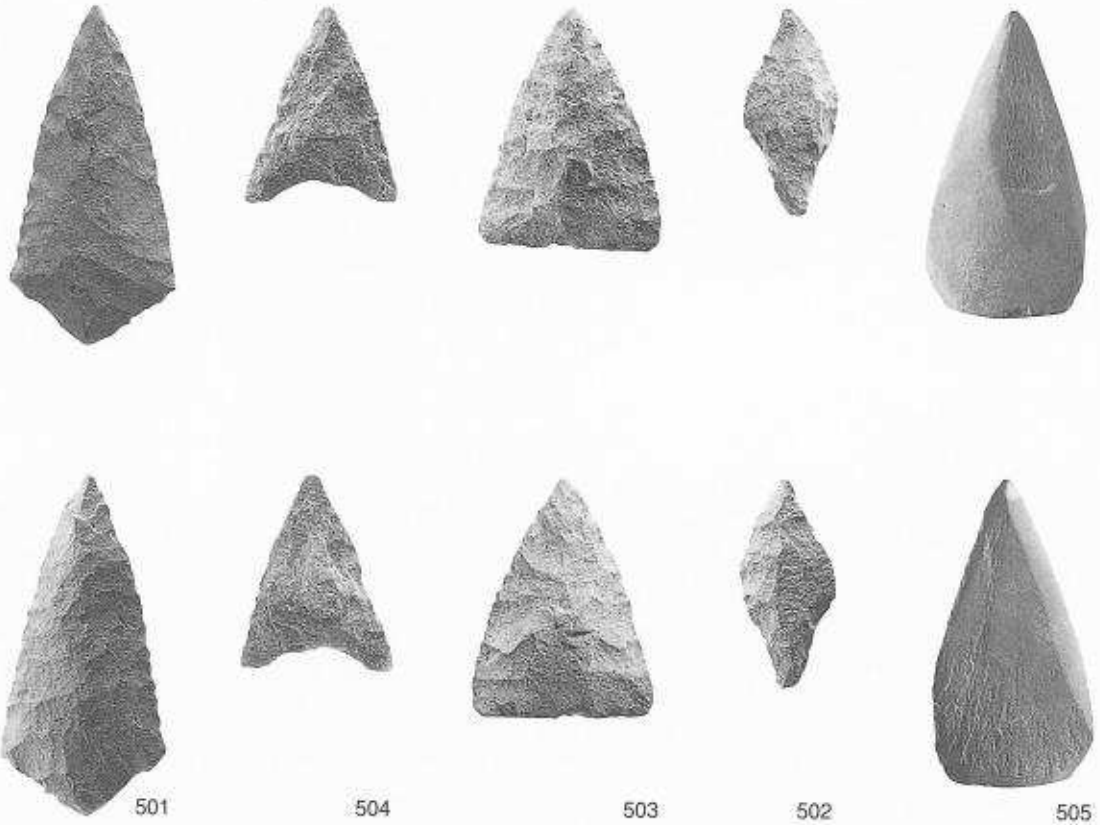
446

447

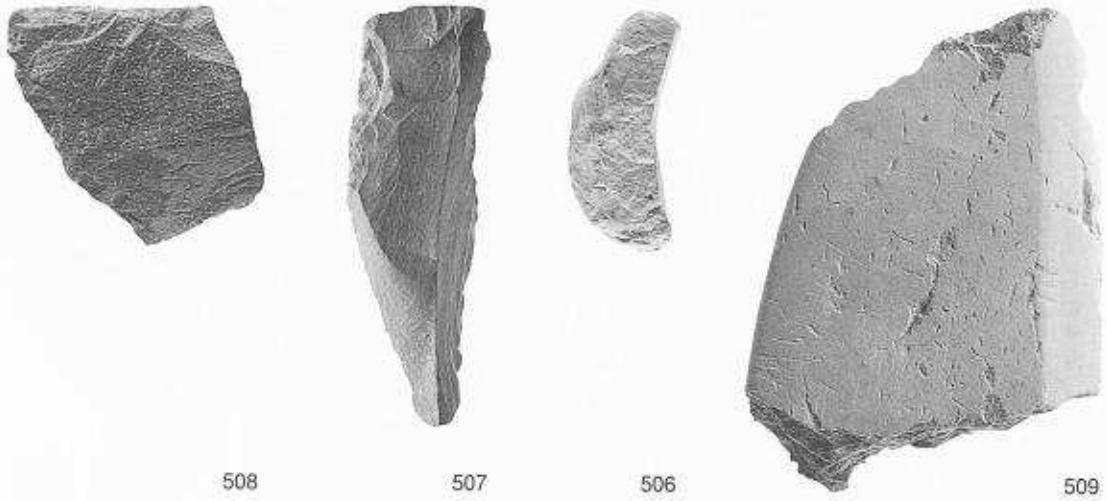
451


448


449



501　504　503　502　505



508　507　506　509

510

515

516

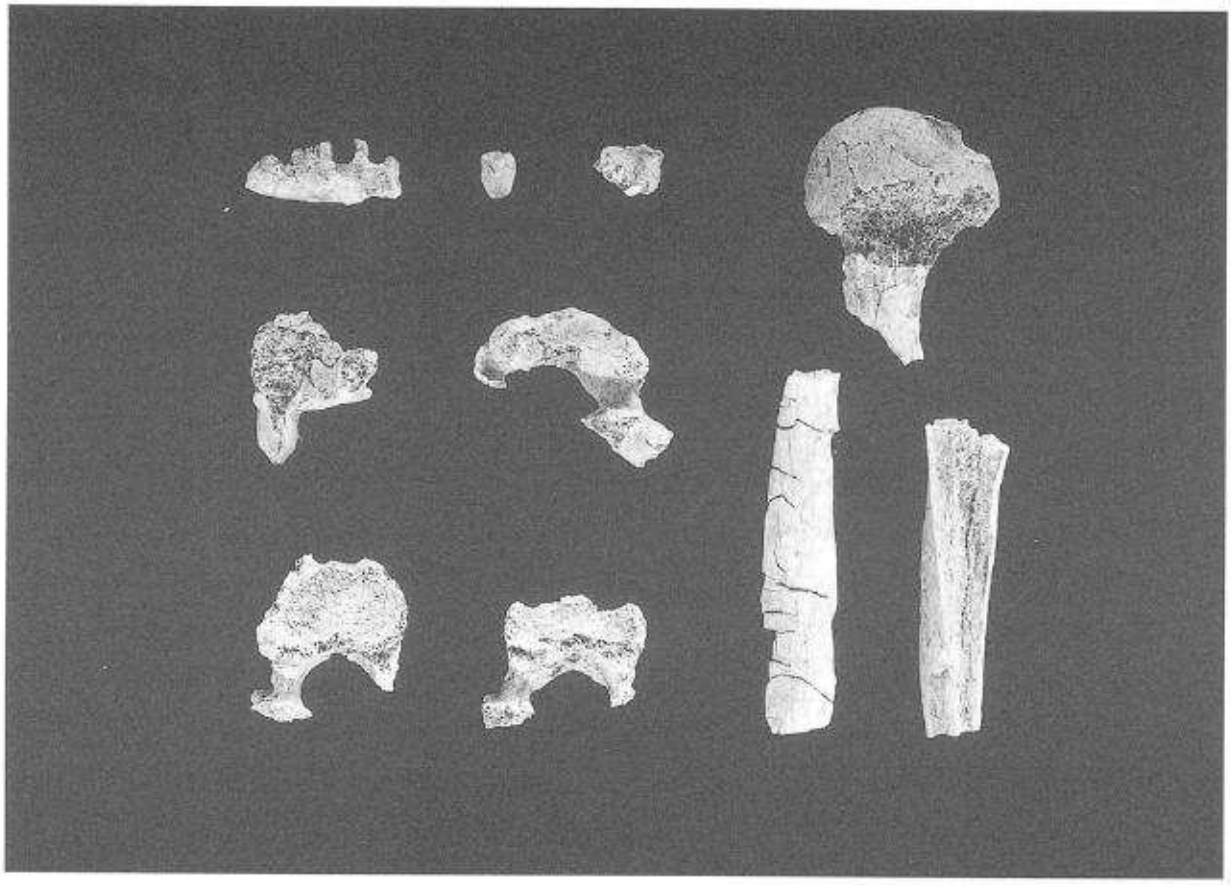
511

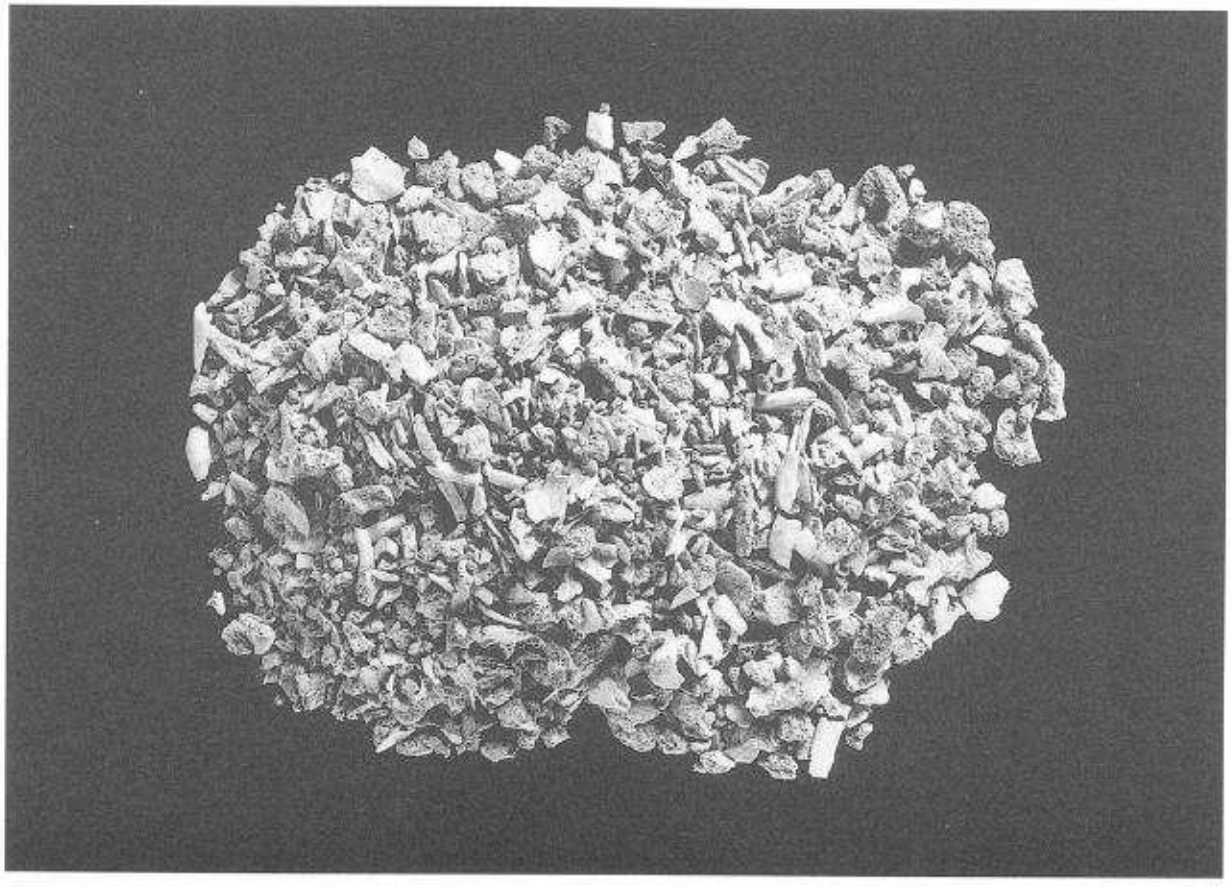
512

513

514

写真図版58　人骨





兵庫県文化財調査報告　第200冊

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書 Ⅶ

下 西 山 遺 跡

平成12年３月31日　発行

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
TEL 078-531-7011

発行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印刷　株式会社 七　旺　社
〒653-0013　神戸市長田区一番町２丁目１番地